

愛知学院大学

## 教養部紀要

第62巻 第1・2合併号

## 論文

- 堀田 敏 幸：ベケット、放浪の魂…………… ( 1 )
- 清水 義 和：俳人・馬場駿吉の迷路  
——松尾芭蕉とサミュエル・ベケット——  
瀧口修造に見る短詩形と「余白」の謎…………… ( 21 )
- 清水 義 和：アメリカとロシアとに於けるアヴァンギャルド  
——村上春樹と亀山郁夫の迷路——…………… ( 51 )
- 尾崎 孝 之：「アンチ=プラトン」解釈の試み…………… ( 75 )
- Daniel DUNKLEY：Thirty Years of Task-Based Language Teaching …… (101)
- 小村 賢 二：Global Warming 2014…………… (111)

## 資料

- 川口 高 風：曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について…………… (194)
- 川口 高 風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(Ⅷ)  
——明治三十三年一月～明治三十三年四月——…………… (158)

2014

愛知学院大学教養部

# ベケット、放浪の魂

堀 田 敏 幸

## 一、探偵モラン

旅に出ることは、それまでの日常世界から切り離された世界へとおもむくことである。しかし、その旅の目的が定まっていないとき、人は自分の住居から最初の一步を踏み出した途端に停止を求められる。道路に立った瞬間、右へ行くべきか左へ行くべきか、判断を下さなければならない。目的地がないのだから、どちらの方角でも同じことだと考えるものの、しかしながら、どこかへ行く以上、一方を選択する必要に迫られる。ベケットの小説の主人公ワットなら、このように行動する。彼はノット氏のもとで召使いとしてしばらくの期間働いたあと、その職を辞して、最寄りの駅から汽車に乗ることになった。彼はノット邸では住み込みで雇われていたので、そこを離れるとなると帰るべき住居はない。しかも、これから住もうと思う場所も決めていない。そうした彼が駅にやって来て、彼の乗るべき汽車はどちらの方角へ行くものにすべきか、決定に困惑を覚える。彼は降車駅を駅員に聞かれて、まず最初に「この線の終点までです」と答えたものの、どちら行きの線なのか更に問われて、「近い方の終点」と返事したが、すぐに「遠い方の終点<sup>1)</sup>」へと変更した。

ワットにとって近い終点であろうと遠い終点であろうと、どちらでも構わないことになる。なぜなら、彼は職を辞したあと、次にやるべき仕事の当てがある訳でもなく、帰るべき家がある訳でもないのだから、彼が向かう先は汽車に乗っている間に、これらの生活上のことをゆっくり考えられる所であれば良いのである。またこう言うことも許されよう、汽車に乗っている間、生活のことを何も考えないで過ごせる時間が多く取れる所へ向かうべきであると。それだから、彼は「遠い方の終点」を選んだのだし、汽車の中は恐らくワットが他人に邪魔されるこ

となく、一人でくつろぐことの出来る座席を提供してくれることであろう。実のところ、ワットはもともと浮浪者であって、ノット邸で働く以前にも自分の住居を持たなかった。彼がノット邸の仕事に向かうために汽車に乗ろうとした時には、彼の姿を見かけた通行人がうわさ話の中で、彼の夜に泊まる場所は「どこかのベンチ」であって、公園やサッカー競技場、テニスコートといった所ではないかと言いつけていたのである。

浮浪者は労働を軽蔑し、人間関係を嫌い、自由気ままな一人暮らしに憧れるために放浪の旅を選ぶのか、それとも仕事に失敗し、人間関係に疲れ、定住するだけの資産を持たないために放浪の生活に甘んじるのか。それはどちらの場合も有り得るであろうが、ベケットが小説に描いた主要人物であるマーフィーやワットの場合は前者に属する。マーフィーは労働について、恋人のセリアに言う。

次の週のためのお金も、ごまかせるような家計簿もなくなったとき、セリアは次の二つのうちのどちらかしかないと言った。すなわち、マーフィーが仕事を見つけるか、彼女が自分の仕事に戻るか。マーフィーは働くことが二人共にとって、致命的になるだろうと答えた。<sup>2)</sup>

マーフィーは、働くことが恋人との愛情を破壊すると主張する。なぜ労働が愛情にとって障害となるのか、マーフィーはセリアに正しく説明することが出来ない。彼は愛情が無償の行為であって、労働という金銭目当ての世俗行為に相応しくないと考えている。しかしながら、男と女が共同生活を送る以上、衣、食、住の最低限の物資が必要となることは、セリアならずとも誰もが疑うことのない条件である。それをマーフィーは拒絶し、愛情生活を無収入の上に作り上げようとする。彼がどうやって糊口をしのぐかと言えば、慈善のお金に頼ることしか他に方法は見つからない。この少額にしかならないであろう収入でもって、二人が共同生活することは不可能に近い。マーフィー一人であれば、どんなぼろ服を着、どんな粗食に甘んじ、どんな野外に寝泊まりしようと、平然と生活することが出来る。しかし、二人でとなると、生活の侘しさが人の意志を打ちのめすであろう。一人であれば自分の意志で赤貧に耐えられたものが、二人となるとその強かったはずの意志にも隔たりが生じ、愛情のひび割れが生まれることになる。マーフィーは結局セリアと別れ、精神病院の雑役係として住み込みで働くことを選ぶのだった。

マーフィーは労働を忌避し、一人暮らしの自由を信条とする人物であった。一人であるならば、住居を持たない放浪の生活も成り立つであろう。ところが、二人の生活となり愛情が係わってくるとなると、放浪生活はうまく機能しない。これが愛情関係のない二人連れであるな

ら、それも可能であろう。ベケットの戯曲作品『ゴドーを待ちながら』では、エストラゴンとウラジミールの男性二人組が、何十年来の仲間として放浪生活を送っている。彼らは行動を共にしているが、全面的な共同生活という程ではなくて、昼間に会って会話を楽しむけれども、夜になって就寝となると別々の場所に宿泊を取ろうとする。彼らにとって同じ場所で二人して過ごすという状態は絶対的な約束ではなくして、二人の気の向いた時に会えば良いという程度の軽い結びつきを前提としている。だから、一方が毎晩、宿泊場所を変えようと、また何日間か会えることがなかりと、二人の関係に不和が生じることはない。また片方が食事にも事欠くような窮乏生活であろうと、もう一人はそれに対し援助を行うというような義務感を持つ必要はない。二人は気の向いた時に会い、気詰まりになった時に一人の生活に戻る。この鉄則が二人の放浪生活を、一人暮らしと変わらない程度に支えている。

放浪生活、これは現代人なら誰もが憧憬を持ちながら、容易には実行できないものとして存在している。勿論、現実に放浪生活がない訳ではないことは明らかだ。多大な負債を背負ってホームレスの生活に入るというのは、よく聞く話である。ただし、こういう自宅を失った生活者も何らかの仕事を見つけ、多くは一定の場所に住み着いているので、放浪者と言えるかどうか疑問符は付くが、一応その部類には入るであろう。経済的な事情がある人は兎も角として、本来的に仕事を嫌い、人間関係を負担に思い、一人暮らしの気ままさを良しとして実行できる人は少なからう。

ベケットの小説『モロイ』（一九五一年）は、奇妙な放浪の旅を描いている。これは『マーフィー』、『ワット』に続く作品として書かれたものであり、『ゴドーを待ちながら』の前年の創作に当たることから、テーマ的にも同じ放浪生活が取り上げられている。『モロイ』の内容は、探偵のジャック・モランが調査機関からモロイという人物の捜査をするように要請されると、彼は十代前半の息子を連れて出張に出る。しかし、途中で息子に自転車を買ってやると、彼は父親から離反してどこかへ去ってしまう。その後モランは一人徒歩でモロイの居るという町まで捜査に行くが、うまくモロイを見つけ出すことは出来ず、冬の聞き迷ったあげくにやっと自宅に帰り着くという話で、これは後半の第二部に語られる。そして第一部では、両足を痛め松葉杖に頼らないと歩けず、自分の名前も忘れてしまう程の健忘症に陥ったモロイが、年輩いた彼の母親に会いに来て、その家で何か物語を書こうとする話が展開される。物語の順序として、モロイを捜査するモランの行動があって、その後に見つからなかったモロイの生活が来るわけだから、一部のモロイが後で、二部のモランが先に描かれるべきではあろう。

物語の第二部に描かれるモランは、探偵らしく几帳面な性格である。「私は体系的な精神の持ち主で、外へ出る最良の方法を十分に考えないでは、任務を始めることは決してなかった<sup>3)</sup>」と彼は言う。探偵たる者は事件の捜査に当たって、その時々の場合当たりの方法でやっていた

のでは、迅速に解決へ持っていくことは出来ない。前もって見当を付け、証拠を集めるのである。だから、モランの思考方法が「体系的」であることは、探偵として当然の資質であると言えよう。「前もってどこへ行くかを、また少なくとも如何なる目的に向かって進むかを知らないでは、どういう方法で出発するか、どうして決められようか<sup>3)</sup>」。モランが出張方法を検討することに対し、二十一世紀に生きる者には分かりにくいかもしれない。現代では交通網は発達しているし、また電車やバスのない所ならタクシーで行けるし、車も誰もが運転できる。しかし、ベケットの小説の舞台背景となっている一九四〇年代、五〇年代というのは、まだ四輪の自動車が一般的でなく、汽車、モーターバイク、自転車、そして徒歩での交通手段となる。モランはモーターバイクで捜査に行くのが好みだと言うが、しかしこの二輪車であっても他人に容易に気付かれてしまうために、注意する必要があると言う。

結局のところ、モランはどの手段で捜査に出かけたのか。驚くなかれ。それは徒歩によってである。歩いて数分の距離であるなら、徒歩も考えられる。しかし、何日も歩き続けるような遠方に行くのに、この手段ではとても迅速な捜査は不可能であろうと、現代人なら思う。多少エンジン音が大きすぎようと、どうしてモーターバイクを使用しないのか。最低限、自転車は必要と考えられる。それなのに、モロイが取った手段は徒歩である。時代錯誤の感がしないでもないが、一九〇六年生まれの小説家ベケットが選んだ交通手段は、自分の足によって移動する方法であった。

徒歩での行程、これは放浪の精神を持つ者には絶対的に必要となるものであろう。なぜなら、ある目的地が存在するとして、そこへ一日で着いてしまうとしたら、どこに余裕のある思索の時間が生まれるであろうか。車を高速で飛ばしていく時に人が考えることは、まず規定の時間通りに目的地に到着できるかであり、道路を間違えずに行けるかである。こうした時間に拘束された精神であれば、目的の任務を遂行することは出来る。しかしそれだけでは、収入のための仕事を果たしたに過ぎない。仕事の成果を上げることは、労働する者にとっては確かに第一に要求される条件である。しかしながら、労働によって失われるものがある。それは人間の生きる喜びであり、生きることの意義であり、そしてマーフィーが述べたような愛情である。労働は生活するための金銭をもたらすが、人間の欲望は人を富の奴隷へと変える。人は管理され、自由の精神を失うであろう。それだから、車に象徴される時間の拘束性を、人間世界から排除しなければならない。ベケットは小説の中で、モーターバイクを使用することも十分に可能であったろう。しかし、彼は車の持つ時間の迅速性と管理体制を放棄して、人間に原始の自由な生き方を要求した。

モランがモーターバイクや車を使用しなかったのは、勿論、歩行の自由を重んじたのではないことは確かである。その方法がモロイ捜査には適していると、彼が判断したことによる。こ

の捜査にはどうも可成りの秘密性があるらしい。その証拠として、この捜査になぜモランの十三、四歳の息子ジャックまでもが動員されたのだろうか。ジャックの動員はこの捜査命令を出した調査機関によって発令されたもので、モラン親子の考えから起こったものではない。なぜある人物の身元捜査をするのに、探偵の他にその息子まで同伴させるのだろうか。それは対象のモロイに、これが捜査であることを気付かれないようにする為であろう。親子の二人連れであれば、相手はこれがピクニックか、または町の知人でも訪ねてきたのだろうと判断するから、捜査目的をカムフラージュできる訳である。それにしても、なぜそれ程にまで慎重にする必要があるのかは、小説『モロイ』を読む限り分からないし、しかも少年ジャックは途中で逃げ出して居なくなってしまう。とにかく、この捜査は秘密を要求するものではあるらしい。「我々は秘密の道を通って、何日間か歩き続けた。私は大通りに姿を現したくなかった<sup>4)</sup>」と言う。歩行は秘密の存在モロイを捜査するのに、まるで江戸時代の忍者であるかのような忍びの術なのであろう。

探偵モランは歩行による原始的な方法で、モロイを探し出せたのであろうか。それは困難であったと言う他ない。彼はかつてモロイを見かけたと言うが、それも捜査以前のことで、今となっては曖昧であり、調査機関からも詳しい情報を得ていないのである。ついに彼は、こんな風にも思うようになる。

私には仕事仲間がいなかったから、どんな事情で彼の存在を知ったのか分からなかった。もしかしたら、私が作り出したのかもしれない、つまり私の頭の中ですっかり作り上げられたものを、見つけたということなのかもしれない。<sup>5)</sup>

モランはモロイという存在に対して、自分の空想で作りに出したのではないかと思う。何しろモロイの写真を持っている訳でもなければ、彼の詳しい身体的特徴を知らされている訳でもなかった。明らかなのは、モロイの住んでいる所がバリーという村だということだけだった。このわずかな情報を元に、モランはモロイを探し当てなければならない。一体モロイなる人物は、探偵モランが誰か他人に一切知られることなく、秘密のうちに近づかなければならない程の存在であるのか。このことはモラン自身にもよく分からない。「私ははっきり言って、何を探していたのだろうか<sup>6)</sup>」。目的のモロイが見つからぬ以上、しかもその外見さえよく知らぬ以上、モランが捜査しようとする対象は疑心暗鬼に陥っていく他あるまい。

モランは何の為にモロイを探し続けるのか。勿論、それは彼が探偵であって、依頼された業務を遂行する為である。しかし、捜査対象が見つからないとなれば、彼は追跡を断念して、依頼主に現状を報告するまでであろう。ところが、彼の任務は途中で放棄されることなく、予定

よりも大幅に延期されることとなった。

私は八月に戻るように命令を受けていた、遅くとも九月には。家に帰り着いたのは春だった。これ以上、正確には言えない。だから、冬の間中、歩いていただけだ。<sup>7)</sup>

モランは雪の中を歩いていた。その間に食べたものと言えば、家から持参した缶詰などは無くなっていたし、レストランでテーブルに着くこともなかったのだから、野原の木の実や苔、川の魚ということになる。それ程にまでして、彼はなぜモロイの捜査を続けたのか。徒歩での行動であったので彼は膝を痛め、容易に帰路に着くことが出来なかったのか。モランはとにかく冬の間中、飢えをしのぎ、厳寒に耐え、肉体の苦痛に鞭打って歩き続けたのである。

## 二、放浪者モロイ

モランはもはや探偵ではなく、一人の放浪者である。彼が連絡係のガベルと出会い捜査中止の命令を受け取ったとき、なぜ彼はガベルと一緒に帰ることが出来なかったのか。捜査という目的を失ってしまった以上、彼の帰路は放浪の旅路以外のもではなくなる。所持金も持たず、従って食料も宿もなく、そして向かうべき方角も定かでないモランは、彼が息子に教えようとした言葉、つまり「なしで済ませろ<sup>8)</sup>」を自ら実践する羽目に陥ったのだ。なしで済ませる、これは放浪者が絶えず自分に言い聞かせなければならない教訓であろう。彼は何ものも所有せず、我が身一つで現世に生きていかねばならない。なぜ、そのような苦難を受けるのか。それは止むを得ず彼に降りかかってきた境遇であるのか、それとも自ら望むところがあったの行為なのか。その両方が入り混じっているのであろうが、一旦始まってしまった放浪の道は、そう安易に逃げ出せるものではない。この道に入った以上、自らの意志と放浪の精神をうまく寄り添わせていくしかない。モランはなしで済ますことの出来ない食物を何とか原野の中に見つけ出しては、命をつないで生き延びる。

モランがモロイを見つけ、実際にこの人物を捜査することは叶わなかった。しかし、そのモロイはベケットの小説の中では、モランよりも先に登場することになる。モロイは両足を痛めて、松葉杖に頼らないと歩行もままならぬ状態で、母親に会いに行く。自分の名前も忘れる程の記憶喪失に陥っているが、それでも自分の生き様を物語に書こうと願っている。彼は一体、どんな人生を送ったというのであろうか。その中では探偵モランが捜査する必要があるような悪事が、暴露されるのであろうか。恐らくモロイが語りうることは、自分が誰であるのかを忘れてしまったように、取り留めもない放浪の記憶であるのだろう。彼は、「自分が何であるか

も、存在していることさえも忘れることがあった<sup>9)</sup>」と言う。自分の存在を忘れるとは何かの拍子に安心して、意識を失ってしまうような状態を指しているのだろうか。そういう場合もあるかもしれないが、モロイにおいて病的な理由からそういった事態が発生したとは、むしろ考えづらい。なぜなら、彼が名前を忘れ、何者であるかを忘れ、どこに居るのかも忘れるとしても、彼の思考能力はむしろ健全であると判断すべきだろう。

それに、私はそこへ何をしにやって来たのだろうか？ 知ろうとしているのは、そのことなんだ。もっとも、こうした事はあまりまともに考えないようにしよう。恐らく自然の中にはあらゆるものがあるし、神の戯れも多いだろうから。それに多分、私はいろいろな違った状況や時間を、根底においては混同しているのだろう。この根底こそ、私の生息地なのだ、[…]<sup>10)</sup>

モロイは明言する、「状況や時間を混同している」と。彼がどのようにして母親のいる部屋へとやって来たのか、その目的は何であったのか、それは明確には明かされない。彼は探偵モランが探していたバリーの村に住んでいたのだろうか。それはいつの時期だったのだろうか。すべてが混乱していて、彼にそれらを確実に思い出すだけの判断力はない。しかし、モロイはそうした混同に対して自分の精神を疑ってはいないし、むしろそれらを肯定的に捉えようとしている。すなわち、状況や時間を混同させるような彼の精神的基盤こそが、彼にとっては望ましい「生息地」になり得ると確信している。なぜ彼は一般的人間が抛り所にしていく過去の行動事実や時間軸を破壊して、平然としておられるのだろうか。彼は人間社会において、他者との共同生活を行う必要はないのだろうか。彼が住むためには、部屋を借りなければならない。食物を得るためには、それを買い取るだけの金銭を用意しなければならない。つまりは、人間誰もがしているように労働に身を捧げて、社会の規範に従わなければならないのである。そうしたことを無視して、彼の生存が成り立つであろうか。

モロイは生命体にとって一番重要な食物の摂取に対して、人間の常識を苦もなくくつがえしてしまうだろう。彼の食欲は小鳥ほどの分量を食べれば十分であるし、飲み物もビールを五、六本一気に飲み込んだあと、一週間は何も飲まないでも平気であった。彼は人間の食べるものは極力控えて、何の栄養にもならない小石を好むと言う。「丸くてつるつるした小石を口にすると、気持ちがなごみ、すっきりして、飢えをおさえ、乾きを忘れさせるのだ<sup>11)</sup>」。何と放浪者に向いている嗜好だろうか。彼は人間の慣習から逸脱した状況においても、十分に生存していけるのである。食べないこと、少なくとも空腹には耐えられること、これは放浪者にとって必要不可欠な要素であろう。なぜなら、大地をさ迷う者は、単にこの地上をうろついているだ



けではない。彼は働くことを拒否しているのだ。働かざる者に収入はなく、食べる資格はない。どのようにして食料を得るのか。それはマーフィーが行ったように他人からの喜捨<sup>きしよ</sup>を仰ぐか、自然界に自生している木の実などの植物や川魚を手に入れることになる。モロイは飲食を生活の不可欠な要素と考えていないのである。

「状況や時間を混同している」、これは時に誰しもが経験するに違いない。しかし、それは何かの異常事態が生じて、精神が動揺している時の一時的な現象に終わるであろう。モロイの場合はどうか。一時的な作用どころか、彼はこの事態を思考基盤の「根底」と捉え、彼が物事を判断する際の「生息地」と見なしている。つまり、モロイにとっては、状況や時間が普通の人間とは違う原理によって作動している。彼は何の目的で母親の所へやって来たのか分からないと言うし、どのようにして移動してきたのかも定かでない。自分の名前さえ記憶から容易に呼び起こすことが出来ない。彼はもう何年もの間、名前を他人から呼ばれたことがないのか。それ以上に、そもそも他人と深く接触したことがないのか。行きずり程度になら、人と出会うこともあったであろう。しかし、相手の心情を察するような会話を、交わした経験がないのかもしれない。彼は人間であることの社会性を忘却している。社会性を喪失した人間に、一般的人間が規範としているような生活慣習や時間通りの行動を順守させることは、困難を要する。しかし、モロイは敢然と言い放つだろう、社会慣習から遠ざかった思考基盤こそが、彼の「根底」であり「生息地」であると。

放浪者は社会的規則や時間を放棄した世界に生きている。その典型はモロイの歩行方法である。彼は両足が悪くて、松葉杖を用いないと歩くことも自由にならない。彼の足の障害は恐らく、探偵モランがモロイ捜査を断念して帰路にあるとき、長期間歩きすぎた酷使に起因しているのである。モランが自宅へ帰ることと、モロイが母親の所へ戻ることは、どこかで重なる部分があるように見える。そうすると、モロイは母親の所へ向かう途中どのように歩いたのか。

しかし、<sup>はこう</sup>爬行の姿勢では止まることは直ちに休むことであり、しかもその姿勢自体が、他の姿勢と比べて、つまりひどく疲れさせる姿勢を言っているのだが、一種の休息なのである。そして、この方法で私はゆっくりと、だがかかなり規則的に森の中を進んだ。それほどへたばることもなく、一日に十五歩分は前進したのだ。<sup>12)</sup>

「一日に十五歩分は前進した」、これを聞いた者なら、話し手は冗談を言っているのではないかと半信半疑に陥るであろう。<sup>あり</sup>蟻でもこれくらいの距離なら、十分に踏破すると思える道のである。しかし、モロイにとっては決して冗談ではないだろうし、作者のベケットにとっても

戯画として読者の憐憫<sup>れんびん</sup>を誘ったのではあるまい。一日に十五歩進むことは、健全な人間にとつてならあまりに容易な行動であろうが、足の不自由な人間にはこれだけの距離を進むのが精一杯の人もある。モロイがその人物であることは確かだ。彼は赤ん坊のように這って歩く。一般常識人なら、このけが人のそばには救助する人がいなくて、その時だけそうせざるを得なかったと判断するだろう。ところが、モロイはその日一日だけでなく、何日もその姿勢で前進を企てた。これをどう理解すればよいのか。常識外れの気まぐれと断じるのか。

モロイは放浪の精神を持っている。放浪者は彼が歩くのに目的地を定めない。彼が歩くのは、大地をさ迷うことによって彼の生きる価値を発見しようと努めているのである。何の為に生きているのか。生きることは人の役に立つ為にあるのか。生存は労働を代償としなければならないのか。生きるとは他人との調和のために、自己を犠牲にすることなのか。放浪者はこうしたことを明確な根拠もなく漠然と考えて、大地を歩き回る。彼が歩くのはどこかに行く為ではない。彼には自分の身を置く相応しい場所が見つからないのである。だから、彼は一箇所に留まるのではなく、場所を変えては、そのあるべき所にうまく達することを願う。彼は彷徨することを信条とするだろう。彷徨によって彼の精神が安らぐ地を見つけるまで、歩みを止めることはない。モロイは一日に十五歩分、歩いた。それで十分なのである。なぜなら、この十五歩分が彼にとっては思考の根底を支えているからだ。他人から見て、十五歩分が偉大であるか卑小であるかの問題ではない。モロイはこの十五歩において十分な「生息地」を得ているのであり、この歩行距離の中に放浪の魂が込められている。

人間が一日に蟻の進むほどにしか前進しないことに満足するとしても、それは狂気の故ではない。人間が亀のように這いつくばって歩くとしても、それは幼児の姿勢を思い出しているためではない。爬行の姿勢を取るのは勿論足に障害があるからに他ならないが、そこには放浪者が目指すところの原始の息吹<sup>いぶき</sup>が漂っているのだ。それは人間がかつて持っていたであろう能力、四本の手足で自力により大地をしっかりとつかみ取りながら進むという能力を鼓舞するのである。彼は生命体として、大地に生きる意味を実感するであろう。爬行、それは目的地を必要としない放浪の魂の持ち主<sup>きずな</sup>には決して無意味とは思えない、大地との絆となるべき行動なのである。モロイは自分の物語を書こうとして、過去の現象をこう断じる。

しかし、この私というか俺というか、この私の生存の断片的な物語をいくら続けても無駄である。というのも私の考えでは、それには意味がないからだ。<sup>13)</sup>

自分の名前を忘れてしまったモロイは、その忘却の代償として何か本質的なものを求めている。彼は探偵モランが捜査しようとして、ついに発見できなかった人物でもある。なぜ、モラ

ンはモロイを発見できなかったのか。モロイなら、ベケットの小説の第一部に最初から姿を現しているではないか。一体、母親に会いに来る前のモロイはどこに居たのか。モランはモロイを追跡する。しかし、発見できないのは、モロイの真の自己を追求しているからではないのか。真の自己は外見だけからでは見分けが付かない。モロイ自身が真の自己を見出そうとしている時に、他者がその人物を追いかけたところで、まるで影を捉えるようなものであろう。真の自己は本人にも隠蔽いんぺいされているのだから、他人から見て容易に発見することは不可能に近い。モロイ自身が自分の本質を探究しているとすれば、彼は現実世界に起こる現象の仮面をばぎ取って、その奥に潜む真実を問うばかりであろう。

モロイは自分の過去に起こった出来事を捉えて、「生存の断片」*cette tranche de mon existence*と認識する。一般的な人物なら恐らく過去の事実を一連の経験と見なして、そこに何らかの意味形成を行うであろう。それらの経験は今の自分にとっては有意義であったし、少なくとも人生の意味合いを強めてくれていると判断するであろう。ところが、自己の本質を求める人物にとってはどうか。過去の出来事は単なる現象に過ぎず、それは個々に分断された「断片」にしか過ぎない。それをどう結びつけたところで、本質的な意味付けは形成されない。せいぜい人間の社会組織に従った表面的な価値付けが、作り上げられるだけである。自己の本質は、そうした社会性の中には存在しない。では、どこに本質なるものは見出されるのか。それは容易に発見されるものでは有り得ない。なぜなら、人間の本質とはその追求の困難さ、求めて求めきれぬ試練の中こそ姿を垣間見せるものだからである。モロイにとって、それは精神的な放浪として現れるのであろう、恐らく中世の騎士が行ったような、修行としての放浪の旅とは別の形として。

### 三、デュラス、『ラホールの副領事』

探偵モランは、かつて一度見かけたことのあるモロイという人物を追跡する。しかし、モロイを発見するどころか、モラン自身の方が森の中に迷い込んでしまい、冬の間、雪の中を放浪することになる。彼はあまりに長期間歩き続けたために、足を悪くして満足に歩行ができない。旅費も食料も尽きた状態で、彼は自然の中に自生する植物を動物のように口にす。一体なぜそれ程にまで、彼は困窮の身に陥ってしまうのか。彼は職業として探偵の仕事に就いているのに、前もって十分な調査費を支給されなかったのか。森の中で迷ったとはいえ、高山に登った訳ではないのだから、途中で誰かに出会い救助を求めることは出来なかったのか。そもそも彼がモロイを発見できず、事務所の連絡係であるガベルと直接出会って帰宅命令を受けたとき、なぜ一緒に帰ることが出来なかったのか。不可解な点はこの小説の中で幾つも見つか

る。モロイなら「状況や時間を混同」して平然としているであろうが、用意周到であるはずの探偵モランがこのような失態に及ぶとは、釈然としないところである。恐らく探偵モランがモロイを追求するうちに、空想の中で幻のモロイと自分が重なってしまったと考えるべきなのであろう。

ベケットの主人公は、マーフィーにしろ、ワットにしろ、マロウンにしろ、またエストラゴンとウラジミールにしろ、そしてベラックワにしろ、皆が放浪の魂を心に宿している。放浪は人間が人生の有り様を根本から考え直すのに、相応しい知恵をもたらすのである。人間の生き方を社会性をはぎ取ったところから捉えようとする作家がベケットであるとすれば、彼の同時代人で、同じく放浪を描いた作家にマルグリット・デュラスがいる。その作品は小説『ラホールの副領事』で、一九六五年の出版である。これはカルカッタに駐在する英国大使夫人のアンヌ＝マリー・ストレットルが、インドのレプラ（ハンセン病）患者や飢餓に苦しむ者の多さに驚きを覚え、その苦悩を心の奥深くに抱えるという話である。彼女はピアノもうまく弾きこなし、回りの男たちからも好意を持たれている。その男の一人にラホールという町に赴任している副領事のジャン・マルク・ド・Hがいるのだが、彼は内向的でインドの悲惨さに耐えられず、レプラ患者に向かって発砲するだけでなく、鏡の中の自分にもピストルを向けた。アンヌ＝マリーは彼の愛情を受け入れることはしない。彼女の悲しみは、インドの苦悩によって深く染められているのである。こうした時、一人の乞食女が彼女の前に現れる。この女は何者なのであろうか。レプラ患者に混じって生活しているというのに、彼女はその病気に感染しない。

乞食女の話は、小説中の人物であるピーター・モーガンという保険業をしている男が書いた小説の中で語られる。この女性は貧しいカンボジアの家庭に生まれた。彼女は妊娠すると、母親から追放されてしまい、二度と家へ戻ることを許されない。母親は娘に、「もし戻ってきたら、お前のご飯に毒を入れて、殺してやるからね<sup>14)</sup>」と宣告する。彼女は母親の言葉に従うしかなく、身ごもったままを出発する。最初のうちは故郷の村の近くをさまざまに迷っていただけであったが、程なく彼女は故郷を遠く離れることを決意する。なぜ妊娠したまま、食べる物もなく故郷を去らねばならないのか。子供の父親の分からないことが、それ程にも彼女の母親の怒りを買うのか。彼女は生まれ育った土地から遠ざかるしかない、彼女の<sup>うわさ</sup>噂さえも伝わらないような遠くまで。彼女は放浪の旅に出る。生まれた子供は白人の女性に与えて、その後も独り身でさすらう。

彼女の追放は、モーガンの書いた小説の中で何を意味するのか。父親のいない子供を身ごもった罰を、単に表すためだけではあるまい。このカンボジアの女は乞食となって放浪の旅を続ける。普通の者であるなら、母親からある程度離れた自国の中で生活するだろう。しかも、生きてゆくためには、そこで仕事を見つけて新しい家庭を築くかもしれない。女性が放浪者と

して生きてゆくことは、男に比べはるかに困難を要する。何ゆえに彼女は、乞食の境遇に甘んじて生きるのか。モーガンは語るだろう、「彼女はもう決して働かないだろう。彼女の仕事は未知の何かだ<sup>15)</sup>」。未知の何かとは何か。それは実際に働くことになる仕事が、何かという意味ではない。仕事ではなく、何か別の目的があることを訴えている。

乞食女は十年掛かってカルカッタにたどり着いた。何のためにカンボジアからインドまでの遠距離を、放浪する必要があるのか。カンボジアもインドと同様、暖かい国である。気候のために十年間を歩き続ける必要はない。しかも、仕事をするよりも重要な何かがあると言う。一体、カルカッタには何があるというのだろうか。英国大使夫人のアンヌ＝マリーとその仲間の男たちは、カルカッタの近くにある島へ遊びに来ている。そこでマイケル・リチャードという彼女の恋人だった男が、女性の歌声を耳にする。それはどこかで聞いたことのある歌であり声であった。彼は思い出す、「あれはサバナケットの女だ。その通りだ、彼女はアンヌ＝マリーの後を付けてるみたいだ<sup>16)</sup>」。サバナケットとはカンボジアからインドへの途中にある町の名であり、そこで彼は乞食女の歌声を聞いていたのだ。なぜそこに居た女が今カルカッタに居るのだと不思議に思うのも束の間、彼はこの乞食女が、大使夫人のアンヌ＝マリーの後に付いて来ていることに思い至る。

アンヌ＝マリーはインドの惨状を憂いている。彼女はこの国人の苦悩を何とか和らげようとして、食事を分け与えたりしている。しかし、それだけの善意では、彼女の悲しみは消えない。彼女はこの国の苦しみを、自分が償う必要があると感じとっている。しかし、涙が湧き起こるだけで有効な手段は思いつかない。彼女自身が、インドの苦難を体験する必要があるのだ。自殺を企ててみたこともあるが、未遂に終わった。彼女の思いの中では、インドの人と同じ苦悩を味わうことが必要なのである。その思いの実像がサバナケットの女、つまりカンボジアの乞食女となって現れたのに違いない。最初モーガンの小説に語られていただけの乞食女が、まだ完結していないその小説から抜け出して、ついにカルカッタで現実の人間となった。それは悲しみの女アンヌ＝マリーの罪の意識が、化身となって現れたものである。その化身とは故郷を捨て、飢えに耐え、遠い距離を十年もかけて歩き通した乞食姿の放浪者であった。

放浪者、それは何を表しているのか。人間の罪の償いなのであろうか。裕福に暮らしている人間のかたわらには、食べる物もなく飢えに苦しみ、治らぬ病気の苦痛に耐え、雨露をしのぐだけの家をも持たない人がいる。こうした人々を間近に見た者は、どのように対処したら良いのか。一人か二人なら、自分の私財で助けてやることも出来る。しかし、何百、何千人といる苦難に見舞われた人々を、どうやって一個人が援助できるのか。アンヌ＝マリーはこうしたインドの惨状に心を痛めている。彼女の思いは、一人の見捨てられた放浪者を自分の中に見出すであろう、故郷を捨て、当てもなくさ迷い、食物もなく飢え、時に自然の草木や川魚を生食

し、着る服もなく、他人に物乞いをしてひざまずく哀れな放浪者を。この身代わりの人物はアンヌ＝マリーの苦悩と罪を、果たして償うことが出来るのであろうか。乞食女の姿は、単に彼女の悲しみを和らげただけの存在なのだろうか。

ベケットの小説『モロイ』においても、探偵モランがモロイなる人物を捜査のために追いかけている。モランは移動の手段としてモーターバイクがあるにも係わらず、人に気付かれないために徒歩で行動する。そして、余りに歩きすぎて足を痛め歩行困難となる。山小屋で火をたいて暖まっていたとき、一人の見知らぬ男が入ってきたために、彼は不審に思い殺害に及ぶ。モランが思い出すには、この男は自分と顔のよく似た男だった。一方、追われる身のモロイも一人の男を殺害する。彼も足を悪くして歩くのに不自由している。山小屋で休んでいたとき、炭焼きだという一人の男が入ってきて口論となったことから、松葉杖で頭を殴ってしまった。モランもモロイも、殺害の意志があって実行したのではない。それは人気のない山小屋のことであり、恐らく正当防衛であったのだろう。二人はそれぞれに殺人を犯した。しかし、小説作品の中では、この事件は両方とも単にその場限りの出来事として、その後の二人の行動に何ら影響を与えていないし、二人がこの件で悩むことも起こらない。

そうすると、モランとモロイ、歩行のままならぬ体で放浪する二人にとって、この放浪が彼らの殺人という罪を償うものであるとは考えにくい。彼らの足の障害は事件の前から起こっていたもので、殺人の罰として与えられた苦行ではない。しかも、特にモロイは自分の名前さえ忘れるほどに自己の固有性を失い、自分とは何者か、真の自己とは何かを追求する人物である。彼らにとって放浪とは、人間社会から離れ真実の自分を探し求める旅であった。一方、デュラスの『ラホールの副領事』において、乞食女の放浪がアンヌ＝マリーの無力感を償うことであるとすれば、この放浪もモロイと同様に、アンヌ＝マリーの真の自己を発見することであったと考えられる。彼女はインドの苦難を悲しみ、自分に出来る援助の手段はないかと日々憂いている。彼女は男たちに囲まれて愛の戯れに生きている自分を、表面的な仮の存在だと感じている。彼女の本当の姿はどこにあるのか。飢えやレプラの病に苦しむ人々と同様の苦悩を味わってこそ、真の人物になれると思うのであろう。そうした時、放浪する女性の姿が、身近にいる仲間によって小説の中に描き出された。そして、この小説が中断した後の乞食女は、アンヌ＝マリーのいるカルカタまで飢えに耐えてやって来ていた。アンヌ＝マリーにとってこの放浪する女性の姿こそ、彼女の無為を償う真実の人物となったのである。

#### 四、放浪とアイデンティティ

放浪は人の自己形成に指針を与える。なぜなら、それは人が現在生きているところの社会性

を脱ぎ捨てて、原始の野生に戻る事だからである。野生においては人は社会の慣習や規則に拘束されなくて、自分の自由意志に従って行動を起こす。これによって人に何か不都合な事が起ころうが、それは本人の責任において問われる。日々の食料も自分で確保することになる。盗賊やどう猛な動物に襲われないよう、自らの住居を見張る必要がある。放浪者は恐らく、自分が誰であるかなどということは考えないであろう。他の人間が回りに居ないのだから、自分が誰であろうと気にかけることはない。だから、放浪者が自己形成を行うとはいうものの、完全な野生状態の中ではその必要性は生じない。確たる自己が必要なのは、すでに人間社会の中で生存し、これに不遇を感じている者である。人間社会においてこそ野生の意味が問われるのであり、放浪の有り様もただ単に群れを離れた一匹狼というだけでは不十分であろう。

自己の起源、それは放浪の中にある。放浪は既存の社会によってすでに規定された自己を破壊し、新たな無垢の自己を形成しようとする時に大いに手助けとなる。ところが、自己というもの、社会的自己であろうが野性的自己であろうが、自己というものをそもそも必要としない人間がいる。他に誰も人のいない野生の状態であれば、人間は人間であることを意識する必要がなく、馬であろうが猿であろうが、他の動物と共存することに満足しているであろう。人は自分というものを規定する必要があるだろうか。多数の人間に囲まれて生活している時にこそ、人は自分が他人とどう違うか考えてみなければならない。自分がどのような人間であるかという問題は、自分が人生において何を行いたいかという職業選択と結びついている。収入と結びついた職業でなくとも、人間は何か人生に目的の持てるようなことをしないと無気力に陥り、憂鬱<sup>おり</sup>の檻に閉じ込められる。何か自分の気質に合ったことを行うためには、自分の性格を知り、能力を確かめ、気力の充実を図らねばならない。己とは何者であるか、それは人の行う職業や行為、ものの考え方によって計られるであろう。そして、放浪することは、これらの行動の原点に立ち返ることである。放浪は真に人が成りたいと思うことを示唆する。しかし、人生において何もしたくなく、何にも成りたくない人がいたとしたら、どう対処すべきか。

真のベラックワというものは存在しないし、またそのような人物など実際にはいないことが望ましい。確実に言えることは、彼自身の判断によると、無関心と怠惰と無私無欲のぬかるみの中で、彼自身と隣人のアイデンティティから解放されることの方が、他の唯一の選択肢である放浪という哀れな大失敗よりも、彼の呪われた気質には相応しいということだけである。<sup>17)</sup>

ベラックワとは、『並には勝る女たちの夢』というベケットの初期の作品に登場する主人公である。この小説は一九三二年に書かれたのだが、物語の飛躍が大胆すぎるために出版社は見

つからず、一九九二年になってようやく刊行されることとなった。しかし、この作品にはベケットの原型となるものが豊富に盛り込まれていて、この小説家の魅力を発散し続けている。その魅力の原動力となっているものが、主人公ベラックワなる存在である。この人物はダンテの『神曲』の「煉獄篇」に登場するが、余りに怠け者であり、その改悛<sup>かいしゆん</sup>を拒んだため、煉獄前域で生前と同じだけの期間、待ち続けなければならない罰を与えられる。この怠惰を本領とする人物を、ベケットは同名のまま彼の小説に描いた。

「真のベラックワというものは存在しない」。この人物はまるで天の邪鬼<sup>じやく</sup>ではないかと、この文を読んだ者なら思うであろう。ここまで見てきたように人間であるなら、真の自己を追求することに情熱を燃やす。モロイは真実の自己を探し求めて、悪い足を引きずりながら放浪を続けた。マーフィーもワットもマロウンも、彼らが放浪へと駆り立てられるのは、自分が真実と思える世界で生きるためであった。ところが、ベラックワは真の自己を敢然と否定してみせる。なぜ彼は真の自己を必要としないのか。それは彼自身が言うように、「無関心と怠惰と無私無欲」の中で生きる為であるのか。他人や社会の出来事に無関心である人間は、自分のことに関しても執着心を持つとしない。それはちょうど自分の近辺に人間が居住せず、動物ばかりの原始社会に生きる者が、人間としての自我意識など問題とすることも無いのと同様であろう。周りの人間に無頓着であれば、彼は原始社会に生存しているのと同じ環境に居ることになる。自分の思った通りに行動を起こすだけで、それに対し法に違反するとか、慣習から逸脱するというように非難されることはない。彼は思い通りに生活するだろうし、この自由が何の支障も来さないのなら、彼の自由は自由であることを問題にするまでもなく守られている。だから、社会に無関心である人間は真の自己を問う必要などなく、必要なのはただ一つ、現実自分が生きていけるかどうかだけである。

社会の慣習に従わないで生存が可能かどうか。社会生活の中で一番重要なのは、働いて収入を得ることである。働かずして生きていける資産家もいるだろうが、例えば土地をすでに所有している者であるなら、農耕により自給自足が可能であるかもしれない。しかしながら、この自給自足に金銭取引が介入しないとしても、自分の労力を費やして働いていることに変わりがない。まして他人に雇用されている者であれば、時間に拘束され労働規則に従わねばならない。個人経営であるとしても良質品を要求され、商業であれば売上げの確保を迫られる。だから、社会に対し無関心を装うとしても、労働により収入を得ようとする以上、人の自我意識は社会の中に組み込まれている。社会を無視するためには、人は働いてはならない、または自分の好む時だけ気ままに働けばよい。

労働を拒否すること、人の役に立つことを嫌うこと、これは怠惰な人間にとっての条件である。怠惰な人間は、何か有意義なことをすることに耐えられない。しかし、怠惰であることを



信条とする人間は、何のために怠惰であろうとするのか。もし怠惰によって何か有意義なことがもたらされるなら、それは怠惰では有り得ないことになる。ベラックワは怠惰であることが、「彼自身と隣人のアイデンティティから解放されること」であると言う。自分のアイデンティティから自由になることが、有意義なことであるかどうかの判断は難しい。大半の人間が、確固とした自己を所有することを渴望している。ベケットの主人公モロイも、真の自己を求めて森を放浪した。そうした時、自分のアイデンティティから解放されることは、価値あることなのかどうか。恐らく自己からの解放はそれを願う人間にとっては有意義なことであろうし、自己の喪失は人間の条件を多少なりとも超越するのであろう。なぜなら、自己を失うことによって彼は何のために生きているのか、その意味さえも失うであろうから。自己意識から解放された者は、人生を考える能力も失うことになる。思考を放棄すれば、その者は動物と同程度の精神力しか持たないことになる。彼は生きる目的を忘失して、野の草を食べ餌食えじきとなる動物を追いかけるのみであろう。

自分のアイデンティティから解放される、それは一時の願望としては成立する。ベラックワ自身もこれが想像上の理想であると考えている。一時的なことであれば、人は自分自身を失っても良いとは思うであろう。なぜなら、一時的に自己を失うことは仮定上のことであって、時間がたてばまた元の自己に復帰できるからである。苦悩する自己があるとき、この自己を解放してやれば、それに付随していた苦悩も消失すると考えるのが人間というものであろう。これなら、自己からの解放を誰もが願うことになる。ところが、長期に渡り自己を失うことは、自分の存在がなくなることに等しい。まるでダンテの『神曲』のベラックワが両手で膝を抱え、そこに顔をうつむけていたように、未来が見つからないのである。アイデンティティから解放されることを希求する人間は、もしこれが実現したとして、その後は何をするというのであろうか。働くことを極度に嫌ったマーフィーは、精神の暗黒世界に置かれた状態を「原子」に例える。

ここでは、彼は自由ではなかった。絶対的自由の暗黒の中の一原子にすぎなかった。

ここでは動けなかった。彼はさまざまな行き交いの、絶え間ない無秩序な発生と崩壊の中での一点にすぎなかった。<sup>18)</sup>

マーフィーは、彼の想像で描く暗黒層が「絶対的自由」の世界だと言う。しかし、その暗黒の世界に置かれた彼は、なぜか「自由ではなかった」と打ち明ける。なぜ自由世界にいながら、自由であることが拒絶されるのか。それは、彼が生命体として保持しなければならない自己の魂を失っているからである。余りに自由でありすぎる世界においては「無秩序」が支配し

ていて、そこに人間のアイデンティティを確立することは難しい。そこでは人間は肉体と精神を持った生命体である前に、物質の基礎となる無機質の「原子」の状態に還元されてしまうのであろう。原子となった人間に、もはや自由を望むことは不可能である。原子とは単なる物質であって、人間の意志も魂も持ち得ない砂のような粒子に他ならない。だから、マーフィーは彼が世界の第三の層と呼ぶこの暗黒界に彼の至福を求めることは出来ず、彼の精神的平和を第二の層である「薄闇」の世界において実感することになるのである。自分の「アイデンティティから解放される」ことは、時に生命体以前の「原子」になることを意味する。精神界で原子になってしまった人間は自由どころか、何ものも必要とせず、また何者でもない存在として、そこに放置されているに過ぎないのであろう。

自分のアイデンティティから解放される、これが一時的な瞑想の中でのことなら有意義であろう。社会の抑圧の中にあって、苦悩する自己から逃避したいとは誰もが念ずるところであり、想像の世界でこれを実現することは、その者に新生の喜びをもたらす。ところが、この想像上の解放は長続きしない。ベケットの小説『名づけえぬもの』（一九五三年）の語り手は、自分が一体誰であるのか突き詰めようとする。自分の名前をバジル、マフード、ワームというように別名で呼んで真の自己を捉えようとするが、どれも核心に迫るほどの真実性を持たない。更にベケットが書いた小説の主人公マーフィー、モロイ、マロウンの名を挙げて自己の本質に近づこうとするが、どれもこの語り手を満足させるに至らない。自己からの解放がなぜ叶わないのか。ベラックワのように空想の世界で、一時的な逃避を小説の語り手は試みている。彼は確かに精神的に自分のアイデンティティを崩壊させて、他者に変身しようとしている。ところが、この変身が一つの自己に集約しないのである。一時的な気休めに自己の変容を行うのであれば、彼にも開放感が生まれるであろうが、彼は自己追求を完全に納得のいくまで止めようとししない。

肝心なことは俺がどこにも到着しないということ、俺が決してどこにも居ないということ、マフードのところにも、ワームのところにも、俺自身のところにも居ないということだ、いかなる神の思し召しかは知ったことじゃない。<sup>19)</sup>

語り手は自身の変容を試みるが、他者の中に真実の自己を発見することは出来ないし、自分自身にも見出すことは叶わない。では、どうしたら良いのか。自分のアイデンティティを放棄するのみで、それに代わる自己を追求しなければ良いわけだが、それも実行できない。なぜなら、アイデンティティを放棄したと思っても、肉体の方が残っている。アイデンティティのない肉体、これが長期間にわたって存続可能だろうか。まるで人形のような、精神を持たない物

体に変容するのみである。短期間であるならベラックワが考えたように、空想の世界でアイデンティティから解放されることも可能だろう。しかし、空想の時間は終わりを迎える。アイデンティティを持たない肉体は原子と同様、精神を欠いた操り人形にしか過ぎない。肉体を失って死の世界に入ってしまったら、どうだろう。それも可能かもしれない、多くの宗教家が死の世界の永遠性を説くように。しかし、『名づけえぬもの』の語り手が、今さら死の世界を信じるのが可能なのか。『ゴドーを待ちながら』の死を待ちわびているエストラゴンは、「俺は一生、自分をキリストとおなじように考えてきたき<sup>20)</sup>」と言うけれど。

『名づけえぬもの』の語り手は、自分のアイデンティティから解放されることを切望している。それは単に他人に変身することでもなければ、死の世界を選ぶことでもない。彼はどのようにしたら自己を捨象できるのか。語り手はついにこのような考えに到達する。「俺のいる場所には俺しかいないんだ、存在しない俺しか<sup>21)</sup>」。アイデンティティからの解放を願っている人物は、彼の精神性を放棄しようとしているのだから、もはや実在しないも同様である。それは人間としての魂を見捨てているのだから、物体としての人形にしか過ぎない。だから、精神性を欠いた人間はこの世に存在し得ないことになる。しかし、肉体だけはこの「俺」という形で残されている。肉体だけあって精神性のない生き物、これが「存在しない俺」 moi qui ne suis pas という形態であるのだろう。この有り様において、『名づけえぬもの』の語り手は自己の超越に到ったのだろうか。精神をどこかへ放出してしまった以上、その人物はその場所には居ない。しかし、その精神性の放棄が真の人格を生み出していないのであれば、「存在しない俺」とは単に抜け殻としての存在でしかないだろう。ベケットにおいて、自己の昇華は困難な結末へと向かう。

ジャン＝ポール・サルトルは一九四三年に刊行された哲学書『存在と無』の中で、自己の有り様について述べている。

意識は、それが出現するやいなや、反省の単なる無化的運動によって人格的となる。なぜなら、一つの存在に人格的な存在を付与するのは、一つの「自我」……これは人格の記号でしかない……の所有ではなくて、自己への現前として、対自的に存在するという事実であるからだ。<sup>22)</sup>

人間に人格を与えるのは、サルトルによれば、「自己への現前として対自的に存在する」ことだと言う。人間は生まれながらに持っている資質だけで留まっていたら、その人格は向上しない。人間が世界の中で新しい価値を創造できるとすれば、それは回りの状況に対して積極的に関与していくという意識の働きかけこそが重要であって、このことをサルトルは「対自存

在」と呼んでいる。現在の自己に対し超克を企てようとする人間の意識の働きは、たとえ世界の有り様を否定するものであるとしても、人間の自由の保証として欠かせないものとなる。ところがベケットの場合、自分のアイデンティティを解放しようとする試みは、彼の意識によってなされている訳であるが、この試みは『名づけえぬもの』の語り手にかえて苦渋を強いている。自己からの解放は新しい真の自己を生み出すことが出来ず、否定された現在の自己はますますゼロの存在へ、無の状況へと追い込まれていくばかりである。新しいアイデンティティが確保されないと人間意志が芽生えない以上、その者は怠惰であることの希望を打ち消されて、無気力の憂鬱へと墜落していくであろう。「存在しない俺しかない」と言うとき、彼のアイデンティティは解放どころか、新しい自己を迎えることが出来なくて、精神的な空白の中に置かれることになる。人間の形骸だけがあって、アイデンティティを形成する精神的自己は、消滅の危機に立たされているのである。

人間は自分のアイデンティティを必要とする。しかしながら、既存の社会の中で育成された自己は、その者に生きる喜びをもたらさない。彼は自分を新しい自己に作りかえようと念願するであろう。どのようにしたら真の自己は生み出せるのか。現在の自己を放棄して新しいアイデンティティを獲得すること、恐らく空想の中でなら、自由に人格を入れ替えることが可能であろう。そこでは人は王子になることも可能だし、乞食になることも自由自在である。昼間は善良の士で、暗くなれば夜盗となる。空想の中でなら、アイデンティティを入れ替えることは容易そのものである。しかし、空想は一時の戯れに終わるし、また場合によっては際限なく付きま<sup>おんりよう</sup>とて怨霊と化す。真の自己を生み出すには、どうすれば良いのか。モロイは、「自分が誰であるか忘れ、他人みたいに自分の前を歩き回することは、私にはよく起こることだ<sup>23)</sup>」と言う。彼は真の自分が誰であるかを知るために、足を悪くして這いずり回りながらも放浪の旅を敢行する。放浪によって、過去の偽善に満ちた自己は再生されるであろうか。それはベケットの主人公にも知り得ぬ人生の謎である。真の自己とは過去に生きていた人間社会に再度復帰することにあるのではなく、放浪の予見を許さぬ混沌と不安の中に秘められているものであろう。

## 注

- 1) サミュエル・ベケット、『ワット』、Samuel Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, pp. 254-255
- 2) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 27
- 3) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 152
- 4) 前掲書、p. 209
- 5) 前掲書、pp. 172-173

- 6) 前掲書、p. 211
- 7) 前掲書、p. 256
- 8) 前掲書、p. 170
- 9) 前掲書、p. 73
- 10) 前掲書、pp. 18-19
- 11) 前掲書、p. 37
- 12) 前掲書、p. 138
- 13) 前掲書、p. 84
- 14) マルグリット・デュラス、『ラホールの副領事』、Marguerite Duras, *Le Vice-consul*, *Œuvres complètes II*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2011, p. 545
- 15) 前掲書、p. 569
- 16) 前掲書、p. 651
- 17) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p. 121
- 18) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 100
- 19) 『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, Les Éditions de Minuit, 1953, p. 87
- 20) 『ゴドーを待ちながら』、Beckett, *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit, 1952, p. 73
- 21) 『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, p. 114
- 22) ジャン=ポール=サルトル、『存在と無』、Jean-Paul Sartre, *L'Être et le néant, Essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard, 1948, p. 148
- 23) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, p. 62

# 俳人・馬場駿吉の迷路

——松尾芭蕉とサミュエル・ベケット——  
瀧口修造に見る短詩形と「余白」の謎

清水 義和

## 01. はじめに

松尾芭蕉が著わした発句、連句、俳文、書簡、紀行文は、国文学だけでなく、世界中の前衛芸術活動にも広範囲にわたって影響を与えている。その影響を概観しただけでも、加藤楸邨、瀧口修造、加藤郁乎、サミュエル・ベケット、マブソン・ローラン、ドゥーグル・J. リンズィー、アーサー・ピナードらの芸術活動全般に反映している。芭蕉の発句集、連句『冬の日』『去来抄』『曠野』『猿蓑』他、紀行文『甲子吟行』『鹿島詣』『笈の小文』『更科紀行』『奥の細道』、俳文『貝おほい』他、『嵯峨日記』、『書簡集』は、既に当時から極めて斬新であったがゆえに、いつの時代でも古くならないで、今日もなお様々な文化を刺激し脈々と浸透し続けている。

馬場俊吉氏は、「俳句の復権」（『星形の言葉を求めて』所収）の中で、高橋睦郎氏が『現代詩手帳』で批評した一文を引用して「アンソロジーとして「現代詩」ではなくて、伝統詩型である俳句や連句作品を推薦していた」を例にとり、「短詩型文学の現代における存在理由の証言を得た」と述べている。そして馬場氏は次のように俳句の意義を論ずる。

私たちの俳句雑誌『青』にかつて三島由紀夫が「俳句と孤絶」と題するエッセーを寄せてくれたことを思い出す。その中でも「人間の追いつめられた限界状況と俳句のような短い形式的な制約がみごとに符合するときそこに魂の火花が飛び、孤絶の目のみが見得る世界がひらけるのであろう」と俳句の現代における可能性が示唆されていた。<sup>1)</sup>

芭蕉の先行研究は、『芭蕉追善』（寛文2年（1662）～元禄17年（1704.2.24）、『丈草集』「丈草・内藤，別天楼・野田」（雁来紅社，1924）などがあり、それらの業績を具に辿ることができる。「芭蕉行脚図一許六筆」は、芭蕉が「おくのほそ道」を執筆した元禄6年（1693年）の春に門弟許六が描いた画である。芭蕉存命中の作品であることから、「おくのほそ道」の旅姿が忠実に描かれ、芭蕉の晩年の顔立ちもこれに近いものと推測される。

西洋に於ける俳句研究はめざましく、ベケットをはじめ、多くのアーティストたちに影響を与えてきた。特に、ベケットの作品は後期になるに従い短くなる特徴があり、また、ベケットが故国アイルランドを出奔し、フランス、ドイツ、ロシア、スペインに旅して絶えず自らのアートを更新し続けたが、その絶え間ない努力は、芭蕉が俳句の新機軸を求めて日本各地を旅して革新的な俳句の刷新を図った精神と一脈通じるものがある。

本稿では、瀧口修造、駒井哲郎、馬場駿吉氏の業績を辿りながら、殊に、馬場氏が俳人、名古屋ボストン美術館館長、耳鼻咽喉科のドクターであり、その複眼的な眼差しを通して、芭蕉、瀧口修造、ベケットに共通してみられる短詩形の意味を探求し続けた業績を辿る。そして、馬場氏が探求する俳句と短詩形との関係を浮き彫りにする。

## 02. 馬場駿吉

馬場駿吉氏は1932年名古屋市に出生し、1957年名古屋市立大学医学部卒業後、1976年から1998年まで、同大学医学部教授（耳鼻咽喉科）、その間、1991年から1995年まで同大学病院長を4年に亘り兼任した。専攻は耳鼻咽喉科学で、殊に感染症・アレルギーの治療、耳介形成術改良研究に尽くした。他に日本耳鼻咽喉科学会会長、名古屋市美術館参与、そこで初めて馬場氏は美術館の運営や学芸員の仕事を知った。また名古屋市の文化振興事業団の副理事長、愛知県芸術文化選奨選考委員長、豊田市美術館運営協議会会長、更に名古屋南ロータリークラブ第48代会長などを歴任した。2006年、名古屋ボストン美術館館長、名古屋市立大学名誉教授、名古屋造形大学客員教授、名古屋演劇ペンクラブ理事長、芸術批評誌「REAR」編集同人、現代俳句協会会員を務める。馬場氏は多方面にわたる貢献により2006年名古屋市芸術賞特賞、2007年愛知県知事表彰、2008年文部科学大臣賞表彰を受賞している。

馬場氏の父は名古屋・大須で耳鼻咽喉科の開業医であった。馬場氏は「大須観音界限の雰囲気幼少の頃の記憶と深く繋がっている」と語った。馬場氏は開業医の長男として名古屋に生まれたが、小学校5年生の頃、戦争が激しくなり、父の出身地、愛知県の本曾川近辺の北方村（現在一宮市）に、家族で引っ越し、以来成長期は田園のなかで過ごした。馬場氏は名古屋市立大学医学部教授に就任した時に、父を亡くしそれを機に名古屋の千種区に家建て、移住した。馬場

氏が中学校に入学して4カ月で終戦になった。軍事教練のある授業から一転して、墨で黒塗りされた教科書を使った勉強となり、混乱を極めた時代だった。だが、幼少の頃、馬場氏が世の中の変転を子供心ながら体験したことは、後年になって振り返ると掛替えのない体験となった。馬場氏が中学生の頃、課外活動が変わり、新しく文芸部ができた。馬場氏は文学に関心を懐いていたから、文芸部に入部し、新しい雑誌を創刊して、二代目の編集長を務め熱心に活動した。当時、文系の志望が強かったが、馬場氏は、家が開業医だったので、苦悩の末、結局医学部に進学した。

馬場氏は中学生の頃、父が叔父たちと組織して、家で俳句会を開き、馬場氏も見様見真似で俳句を始めた。馬場氏が、俳句に興味をもったのは、父の影響で高浜虚子の弟子の一人、橋本鶏二に師事して句作を続けたからである。馬場氏は「交友のビックバン前夜―俳壇の諸先達・句友たち」の中で次のように回顧している。

私が今も創作活動の源泉にしているのは俳句である。句作に熱中し始めたのはたしか中学三年生ころ。戦後まだ二年ほどで娯楽にも乏しく、親戚の者たちが集まって句会でも、ということになったのである。<sup>2)</sup>

終戦当時、食糧事情が良くない時代だったが、馬場氏は一家が田舎在住だったから、句会が終わると、集会者一同と夕御飯を食べたと回想している。

馬場氏は小学校4年生の頃、肋膜炎でおよそ1学期間休学した。そのときに、病床で、氏は、相馬御風著『一茶さん』を与えられ読み耽った。『一茶さん』は子ども向けに俳句の心を書いた本で、馬場氏が俳句を志す原点になった。馬場氏は『時の晶相』の中で当時を以下のように回想する。

大人たちに混じって句座に連なろうという気になったのは、小学四年生の時に読んだ相馬御風著『一茶さん』という児童向け伝記の残像が濃かったからかもしれない。当時、『雀の子そこのけそこのけお馬が通る』をもじった俳句らしきものを書きとめた記憶がうっすらとある。(20-21)

馬場氏は、名市大学医学部に入学後も、熱心に句会に参加した。当時、京都大学のフランス文学者の桑原武夫が論じた「俳句第二芸術論」が流布していた。そのせいか、馬場氏は「俳句は日本語圏でしか通じない、仲間うちでしか理解されないのではないか」という悩みを抱えた。けれども、桑原は「俳句第二芸術論」で芭蕉以降の俳句全体の歴史を指して批判したので



はなく、戦後の現代俳句が非常に難解で抽象的な言葉を使っていたので論断したのであった。馬場氏は「俳句第二芸術論の逆説的解釈」（『星形の言葉を求めて』）の中で次のように回想する。

そのころ、すでに俳句に身を染めていた私は、この著者（桑原武夫）の俳句第二芸術論に、大きな反発を感じながらも、氏の俳句批判の基本に何があるかを、はっきり見極めたいという気持ちがつよく働いていたように思う。（186）

馬場氏は、桑原に批判的だったが、部分的には納得する箇所もあった。その頃、馬場氏は、桑原武夫著の岩波新書『文学入門』を読んだ。桑原はその本の巻末に「世界近代小説五十選」を挙げて、それらの書物を読者に推薦していた。馬場氏は、広大な世界文学を知ることは大切と考え、医学部の学生であったが、多忙な授業の合間を総べて「世界近代小説五十選」に当て殆ど読破した。馬場氏は続けて以下のように回顧する。

わけても巻末の「世界近代小説五十選」としてあげられていたボッカッチョの『デカメロン』にはじまる西洋文学のリストは、その後の学生生活を通じての読書に大きな道しるべとなった。そして、このような世界文学の広野を読み進んで行っても、一粒の水滴のような東洋の短詩・俳句の輝きは、私の目から消え去ることはなかった。（187）

馬場氏は、近代小説では、トーマス・マンの『魔の山』、ロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』から、古典ではジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン』まで読了した。桑原の挙げた小説は長編小説が多かったので、馬場氏は夏休みを殆ど読書に費やした。医学の世界は日進月歩で次々に発表される新しい知識を学ばなければならなかった。けれども馬場氏は、専門の医師になってから、時間をかけて長編小説を読むことは不可能になった。馬場氏は学生時代だったからこそ長編小説を読破できたと回想し「若いときに、読書によって人間としての基礎をつくる体験ができて良かった」と回顧する。馬場氏は大学進学後『ホトトギス』に投稿したり、橋本鶏二が組織した「青雲会」に参加して研鑽したりして、1959年『ホトトギス』（七五〇号）の雑詠選で自作が巻頭に掲載された。1957年には年輪賞、1959年に四誌連合会賞を受賞した。句集は『断面』（1964）『薔薇色地獄』（1976）『夢中夢』（1984）『海馬の夢 ヴェネツィア』（1999）『耳海岸』（2006）を刊行した。評論は『液晶の虹彩』（1984）『サイクロマの木霊』 名古屋発・芸術時評一九九四―七〇年代の芸術家たちの私的交友』（1998）『星形の言葉を求めて』（2010）を上梓した。

馬場氏は耳鼻咽喉科の専門医で俳人であるが、医学と芸術を結ぶものは何かと絶えず考えてきた。つまり、馬場氏によると、芸術領域は人間を対象としていて、人間とは何かを追求するものであるけれども、医学も人間を対象をしているという信念があった。馬場氏の考えでは、専門医は患者も病気だけを診るのではなく、人間を観察しなければならないと述べている。馬場氏は「医学と芸術との間で」の中で次のように論じた。

医学の現役中にはさまざまな芸術領域から、新しい研究へと向かうヒントや力をもたらした。(16)

馬場氏はこれまでずっと医学を専門にしながら、美術・音楽を同時に考えることが一貫して続いたと断言して、「医学と芸術とは、アプローチの方法が違ったとしても、人間の精神と身体を深く見つめることにより未開の分野を切り拓くという点では、多くの共通基盤がある」と述べた。馬場氏にとって、医学も芸術も、人の心を癒すとともに、未知なものに好奇心を刺激した。だから芸術は、真理をさぐる医学への活力を奮い立たせてくれる促進剤であった。

或いは、馬場氏は海外へ旅行したとき、俳句は携帯に便利で、手元に手帳がありさえすれば、訪れた土地の風景、色彩、感動を俳句にして書き留めることができると考えた。

馬場氏は「俳句は四季の変化をもとにした季語をひとつ必ず入れるのが原則である」と考えた。海外を旅行した時、日本人としての感性で風景や感動を詠んだ。ヴェネツィアを最初に訪問したのは1970年代であった。水の都ヴェネツィアの旧市街には車や自転車はなく、俳句を作りながらぶらぶら歩くには安全で快適であった。馬場氏はヴェネツィアの四季の変化と、ワインのような香気に誘惑され、その後10回ほど訪問し、その度毎にオマージュとして捧げた句を纏め句集『海馬の夢 ～ヴェネツィア百句』を上梓した。氏の友人で愛知県美術館の学芸員拝戸雅彦氏はイタリアの詩人や翻訳家たちとのネットワークがあった。そこで、拝戸氏の仲立ちで、詩人のルイジ・チェラントラ氏が『海馬の夢 ～ヴェネツィア百句』をイタリア語に翻訳したが、その結果として、それは史上初の日伊対訳個人句集となった。装丁は版画家の北川健次氏に依頼したものであった。また、北川健次氏はオブジェも手掛けていたので、句集『海馬の夢 ～ヴェネツィア百句』に因んだ箱型のオブジェの一部に、イタリア語に翻訳した句を刷り込むという希望を提案した。馬場氏が句集『海馬の夢 ～ヴェネツィア百句』を刊行しておよそ半年後、ヴェネツィアの著名な作曲家・指揮者のマリーノ・バラテッロ氏が、馬場氏の句集を題材に新作の声楽曲を作曲し、更にサンタ・マリア・デッラ・ビエタ教会聖堂で初演する計画があると提案した。歌はヴェネツィアに在住の日本人ソプラノ歌手、松島理恵氏が担当する予定になった。馬場氏は「俳句の国際化」で次のように述べた。

その時、俳句に関するシンポジウムも開かれたが、最後に聴衆から、俳句の日本語としての響きを楽しみたいので音読して欲しいという要請があった。詩は朗読されるものだ、というヨーロッパの伝統の確かさが、その時の熱い拍手からも身に伝わって来た一日本の詩歌も本来そうなのだが。ともかく俳句の国際化は急ピッチだ。(55)

馬場氏の『海馬の夢』に基づいた新作の声楽曲が2001年にイタリアのピエタ教会聖堂で初演され、次いで2005年には名古屋の電気文化会館内のザ・コンサートホールで『海馬の夢』の上演があり、更に2007年『RENKU 水都孤遊』と題した演奏会が宗次ホールであったが、少しずつ形を変えながら『海馬の夢』に因んだ新作の声楽曲が公演された。

馬場氏の句集『海馬の夢』では、俳人と耳鼻咽喉科医との二つの視点が濃厚に伺われる。村松喬著「基礎医学」によれば、「海馬」は人間の記憶の中樞を占めているという。

間脳は視床と視床下部に分かれます。大脳と視床下部の境界には海馬があります。海馬は学習と長期記憶を保つために重要です。<sup>3)</sup>

馬場氏は句集『耳海岸』の解説で、長期にわたり、俳人で同時に耳鼻咽喉科学にも携わってきたことにより、その事が句集に強い影響を与えてきたと暗示的に語っている。また、馬場氏は『原点への距離』に収録された対談で次のように語った。

耳を作る手術を改良し約五〇〇人の子供さんにさせてもらいました。<sup>4)</sup>

馬場氏は三木富雄の彫刻『耳』に触発され、今度は自ら耳鼻咽喉科医として人口耳作成に専念することになった。だが、期せずして、馬場氏は駒井哲郎の舌がんととの壮絶な戦いに遭遇し、「耳」と「海馬」(記憶)と「口」の繋がりを、あたかも駒井の舌を害した腐食剤が付着する『東の間の幻影』のオマージュであるかの如く、句集『海馬の夢 ～ヴェネツィア百句』から『耳海岸』へ通低する迷宮界を顕してみせた。その迷宮はまるでオルフェウスが亡き妻を追い耳から海馬へ入り口腔へと下った冥界のようであった。

この頃、馬場氏は不思議な繋がり、若い頃とは俳句のイメージががらりと変わってきたと実感した。俳句は今や世界に広がっているが、馬場氏も俳句が狭い国文学にとどまるのではなくて、俳句の国際化に関与出来るようになってきたと考えるようになった。

その後、馬場氏は、版画家の駒井哲郎や加納光於氏と知り合いになったが、若い頃から美術に関心があったから、いろいろな美術展を観にいった。殊に、馬場氏が美術展を本当に身近に

感じたのは、1961年、愛知県美術館の1階の貸ギャラリーで『駒井哲郎作品展』を観たときであった。こうして馬場氏は駒井哲郎の銅版画と運命的な遭遇を遂げたが、銅版画を纏めて観た経験は初めてであった。当時、俳句は“第二芸術”と言われ、馬場氏は句作をやめてしまおうかと悩んでいた頃だった。だが、銅版画という小さな画面に、宇宙の核心を描いていることに驚き、勇気を与えられたのであった。その後、馬場氏は名古屋のギャラリーで、また駒井の銅版画作品を観た折り、駒井の銅版画『束の間の幻影』を是非入手したいという強い欲望が沸き起こって購入した。駒井の銅版画『束の間の幻影』は、当時馬場氏が勤めていた医学部助手の初任給の1万2千円に近い価格1点1万円近く前後だったけれども、分割払いを申し込んで遂に購入したのであった。こうして、駒井の銅版画『束の間の幻影』は馬場氏の最初のコレクションとなった。馬場氏は、「銅版画『束の間の幻影』を鑑賞する時には、身近に置いて、細かいところを詳細にきちんと鑑賞するのがよい」と語っている。

馬場氏は、一枚の絵画に比べると如何にも小振りな銅版画『束の間の幻影』と出会った頃、実は世界で一番短い詩の俳句をやめようと考えていた。けれども、小さな銅版画を観ていた時、特に銅版画『束の間の幻影』を見た時、その版画が何か訴えてくる気がして、ふと我に帰り気を取り直し俳句もきちんと細密描写しなければいけないと考えることになった。馬場氏は、最初の句集『断面』を駒井哲郎に装丁してもらおうと決意し、画廊の主人に紹介してもらい、俳句の原稿を持って東京の駒井のところに出掛けた。当時馬場氏が30歳頃だったので、駒井が銅版画を描いてくれるか心配だった。だが、駒井は馬場氏の依頼を引き受け、「フランスでは詩集にオリジナルの銅版画を入れることが多いけれど、そういうことをしないの？」とアドバイスしたり、神田にある昭森社を紹介してくれたりした。ところが、その1カ月後、駒井は交通事故に遭って、丸1年くらい入退院を繰り返し、その結果再起第一作は馬場氏の句集のための作品となったのである。馬場氏は句集『断面』の中の「無名 昭和三十四年」で以下の句を詠んだ。

九月二十六日夜伊勢湾台風東海地方を襲う  
一家に餉あれば灯なくも颱風過<sup>5)</sup>

馬場氏は伊勢湾台風の時手術中で停電し無停電装置（非常用バッテリー）に接続されていて非常用自家発電気で手術を終えたと回想している。

駒井は56歳という若さで亡くなったが、詩人の中村稔が駒井の伝記を執筆して、馬場氏の装丁を早くやらなければと、日記に書いていたことを馬場氏は後に聞くことになった。中村稔が綴った駒井の伝記は『束の間の幻影』という銅版画そのままのタイトルで、読売文学賞（評

論部門)を受賞した。駒井は、シュルレアリスムの詩人・瀧口修造を支えにした新進気鋭の芸術家たちが切磋琢磨したグループ「実験工房」に加わっていた。作曲家の武満徹や詩人で音楽評論家の秋山邦晴もいた。馬場氏は駒井を知ることによって、色々な芸術家たちと交流できることになったのであるが、俳句は古い体質的なものを抱えていたことを熟知していたので、前衛芸術家の前で「俳句をやっています」と言うのが恥ずかしいときがあった。だが、馬場氏は俳句をオープンにしたほうが良いと考え、1965年俳句同人誌『点』を創刊した。創刊号には、現代芸術最前線の人に批評を書いてもらいたいと考え、武満徹や大岡信氏にも批評してもらった。

その後馬場氏は加納光於氏に出会った。氏は銅版画家として最先端の仕事をしていた。馬場氏が、駒井の展覧会を観た後の1963年、同じギャラリーで加納光於展が開催された。そのとき馬場氏は加納氏と親しかった歌人の春日井建に会い、交際が始まった。春日井は早くから新しい美術領域に目をつけた詩人であった。春日井が20歳頃に出した歌集『未青年』の序文に三島由紀夫は「現代はいろんな点で新古今集の時代に似てをり、われわれは一人の若い定家を持ったのである」と賛辞を記し、デビューを飾った詩人であった。だが、春日井は2004年65歳で逝去した。

加納氏は銅版画家として出発したが、いまは油彩が多く、馬場氏の本や前述の同人誌『点』の装画やカットを描いた。馬場氏は、その1960～70年頃、領域を越えた様々な芸術家たちとの付き合いが始まったが、なかでも駒井は特に大恩人となった。

馬場氏は、プロコフィエフ作曲の『東の間の幻影』という音楽があることを後で知ったが、これは駒井の銅版画と同じタイトルであるが、駒井自身は銅版画『東の間の幻影』には「音楽的な感覚がこの絵にもある」と語った。その後、馬場氏は駒井の銅版画をコレクションしている人から、多くの作品を一括して購入し、現在50点ほどのコレクションを所蔵するに至った。

### 03. 松尾芭蕉とサミュエル・ベケット

馬場駿吉氏は、名古屋市博物館で2013年10月14日に「現代に生きる芭蕉」と題し、松尾芭蕉作『冬の日』についてDVDをプロジェクターでスクリーンに映写しながら講演を行った。因みに、瀧口修造は、アニメーションには独特の特殊性があり、その効能は計り知れないものがあると述べた。特に『冬の日』のDVDに収められているアニメーションは世界一流のアニメーター：ユーリ・ノルシュテイン、大井文雄、野村辰寿、鈴木伸一、福島治、石田卓也、ラウル・セルヴェ、守田法子、島村達雄、奥山玲子、小田部羊一、アレキサンドル・ペトロフ、米正万也、久里洋二、うるまでるび、林静一、一色あづる、ブシェスラフ・ポヤール、保田

克史、片山雅博、マーク・ペイカー、伊藤有壺、黒坂圭太、横須賀令子、浅野優子、IKIF、王柏栄、高畑勲、ひこねのりお、森まさあき、古川タク、コ・ホードマン、ジャック・ドゥルーアンが、独自の想像力によって解釈して造形した動画である。DVDで『冬の日』の鑑賞が終わった後で、再び、紙媒体の『冬の日』に眼を通すと、それまで気がつかなかったアニメーションと朗読とが『冬の日』の文字の行間から浮かんだ。所謂、瀧口修造がいうアニメーション効果は忽ち現れて現実のものとなったのである。馬場氏は「連句の現代性」の中で、アニメーションの効用を次のように紹介した。

松尾芭蕉の作風が確立したのは、名古屋の連衆と巻いた歌仙（連句）「冬の日」であるとされている一川本監督はその一句一句を国内外の有力な作家に分担してもらいアニメーション化するという壮大な構想が立ち上げられ、ゆかりの地名名古屋に取材かたがた来られたのである。その折、蕉風発祥碑などを案内する機会に恵まれた。(42)

芭蕉は紀行文を『冬の日』の他に『春の日』『曠野』『ひさご』『猿蓑』『炭俵』『続猿蓑』に書き綴った。芭蕉は病弱でありながら不治の病と闘い旅をして俳句を詠み、紀行文を認めたが、その人生は後世俳句が著しく興隆する源流となった。芭蕉は西行法師を手本としており、芭蕉の旅姿は出家した修行僧の趣があった。因みに能の『江口』では西行と江口の君（遊女）が舞台上に登場する。芭蕉は『奥の細道』で遊女と話をする場面を挿入しているが、芭蕉に同行した弟子の河合曾良が表した『曾良日記』によると、芭蕉が遊女と話をした記述はない。芭蕉の『奥の細道』は『曾良日記』と異なり、旅の後で回想しながら纏めた紀行文である。ハロルド・ピンターが『昔の日々』でアンに語らせている台詞に「起こらなかったことも覚えていることがある」があるが、芭蕉の生み出した俳句はイマジネーションを喚起させる業があり、芭蕉が夢見た宇宙観であった。

ANNA There are some things one remembers even though they may never have happened. There are things I remember which may never have happened but as I recall them so they take place.<sup>6)</sup>

名古屋の劇団トライフルが片山雄一作演出で『江口君と私』を2013年12月5日ナンジャールで公演した。トライフルの『江口君と私』は、能の『江口』の時代の空気を2010年代の劇空間にタイムスリップして上演して見せた。トライフルの『江口君と私』は、現実では起こりそうもない事件が、舞台では実しやかに進行しているといった特権的な違和感があった。特に、女性の方が江口君と同居したいと申し出る場面はありそうもない話だと思わせた。これ

は、『奥の細道』で娼婦が芭蕉の旅に同行したいと申し出る場面を彷彿とさせた。だが、能の『江口』では、西行が遊女に一夜宿を借りたいと申し出て断られる。

視点を日本からアイルランドに移して、サミュエル・ベケットを見ていく事にする。ベケットは故国アイルランドを出てヨーロッパを遍歴した。同じアイルランド出身のオスカー・ワイルドやバーナード・ショーやジェイムズ・ジョイスも祖国を捨てた。殊に、ベケットが異質なのは、作風やスタイルは詩も劇も言葉が次第に短くなる傾向が顕著だったことだ。

馬場氏はベケットを30年以上にわたり研究してきた。さて、2013年8月から10月にかけて、愛知県で2回目となる国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2013」が開催されたが、馬場氏が委員を務め、ベケットの『しあわせな日々』、『クラブ最後のテープ』が企画上演された。

田辺剛氏（京都 下鴨車窓主宰・アトリエ劇研ディレクター）はベケット作『クラブ最後のテープ』を七ツ寺共同スタジオで2013年10月1日上演した。ベケットのドラマは台詞の言葉が曖昧になる偏りがある。たとえば、ベケットの『しあわせな日々』では、女優の声はあたかも子宮のなかで胎児が母親の声がぼんやりと聞こえてくるという特質があった。ただでさえ、ベケットの芝居は、声が曖昧になる傾向があるのに、それに加え言葉が短くなる偏向があり、しかも、後期になると、台詞がますます短くなった。

芭蕉も紀行文から短い詩形五七五の俳句を詠んだ。この点から見ていくと、詩人、瀧口修造の場合も短詩形に趣向があり短いフレーズを探求していたことに気がつく。

芭蕉は、和歌に斬新な新機軸を見いだそうとして、苦悩し悩み抜いた末、俳句を生み出すことになった。最初、芭蕉は、貞門・談林風を打ち立て、和歌から、鋭角的で滑稽な表現を引出した。更に、芭蕉は、短歌の始めの分の五七五を発句とした様式を切り拓いた。或いは、俳人が二人して詩を交互に読む連句を切り拓いたり、字余りにしたり、発句や連句を作りだしたあげく、遂に俳句を創成することになった。やがて、芭蕉は『奥の細道』で俳句に“不易流行”や“かるみ”の境地を拓くことになった。また、芭蕉の俳句は、“かるみ”に、“わび”“さび”“しおり”“ほそみ”が付带的に伴う文芸思潮が基調となった。こうして芭蕉は『冬の日』で連句を創成し蕉風俳諧を確立した。芭蕉は、和歌から更に短い詩形の俳句を産み出した。芭蕉の俳句は禅の不立文字にも通じ、ミクロの宇宙空間であると考えられる。また、芭蕉の俳句はブラックホールのような重力を感じるが、同時に、それとは逆方向に向けられたビッグバンのような強力な光エネルギーに溢れている。

#### 04. サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』と『しあわせな日々』

ロンドン大学演劇学部で、1994年、筆者は『ゴドーを待ちながら』を独演した際に写実劇、

パントマイム、シュルレアリスティック、歌舞伎風と様々なジャンルで演じる課題があった。ベケットといえば不条理劇だという思い込みがあった。その後、筆者が日本へ帰ってから、様々な演劇人が『ゴドーを待ちながら』を上演するのを見た。民芸の宇野重吉や新国劇出身の緒方拳は極度に衰弱した軀に鞭打ちながらウラジミールを演じた。

VLADIMIR: [Hurt, coldly.] May one inquire where His Highness spent the night?

ESTRAGON: In a ditch.

VLADIMIR: [Admiringly.] A ditch! Where?

ESTRAGON: [Without gesture.] Over there.

VLADIMIR: And they didn't beat me.

ESTRAGON: Beat me? Certainly they beat mw.<sup>7)</sup>

エストラゴン役の宇野重吉や緒方拳の一挙手一投足、そして一語一語が鬼気迫るものがあり戦慄を惹起させた。また、緒方拳のエストラゴンと串田和美のウラジミールは、『奥の細道』の道中で芭蕉と曾良の会話を彷彿とさせた。ロンドン大学ロイヤル・ホロエイ校のデヴィッド・ブラッドビー教授の演劇のセミナーで筆者は、ベケットの『しあわせな日々』でウィリーを筆者は演じた。他のグループは英語でしかも小道具を使ってリアルな日常表現をした。

WINNIE: Begin, Winnie. [Pause] Begin your day, Winnie. [Pause. She turns to bag, rummages in it without moving it from its place, brings out toothbrush, rummages again, brings out flat tube of toothpaste, turns back front, unscrews cap of tube, lays cap on ground, squeezes with difficulty small blob of paste on brush, holds tube in one hand and brushes teeth with other.] (138-139)  
“HAPPY DAYS”

さて、筆者のドラマ・グループのみがフランス語で演技した。パリ大学大学院の女子大学院生ステファニーはヒロインのウィニーを実演した。だが、ステファニーの演技は所作ではなくまるで詩の朗読のようであった。けれども、ブラッドビー教授は「ステファニーのフランス語の発話は詩的で、ベケットの考えをはっきりと表していた」と評価した。ピーター・ブルック・カンパニーが、1997年に愛知芸術文化センター小ホールで『しあわせな日々』を公演した。舞台では塚のようなオブジェをすっぽりとかぶったヒロインのウィニーをナターシャ・パリー＝ブルック夫人が演じた。舞台上に飾ったオブジェは何か子宮のようなものを象徴していた。かつてブラッドビー教授が語ったが、ベケットはサンボリズムの詩が重要なので、リアリ



ズム劇ではないから小道具はそれほど大切でないのだった。

1994年6月、ロンドンのフリンジシアターで、ベケット作『わたしじゃない』の上演があった。舞台には、女性の口元だけが照明が当てられ、全体が黒い覆いで隠されて、ただ女優のモノローグだけが延々と続いた。

MOUTH: .... Out... into this world ... this world... tiny little thing... before its time... in a godfor-...what? ... girl? ... yes... tiny little girl... into this...out into this... before her time ... godforsaken hole called ... called... no matter... parents unknown... unheard of ...he having vanished... thin air... (376) “Not I”

言葉以上に、女優が発する肉声が観客に強く訴えかけた。それは、女性の根源的な情念を吐露したもので、女性自身の命が一塊の魂になって訴えかけてくる迫力があつた。1994年8月ダブリンのシテイ大学に奉職していたダデイ氏がパリのポンピドーセンターに案内してくださり、ベケットが亡くなった後、ポンピドーセンターで追悼イベントがあつたが、そのときの模様を詳しく物語ってくれた。

堀真理子著の演劇論『ベケットの巡礼』によると、ベケットは俳句を英語訳しているという。<sup>8)</sup>ところで『ゴドーを待ちながら』のヴラジーミルとエストラゴンの台詞の応酬を見ると、芭蕉とその弟子の曲斎の連句を想起させる。堀氏は連句のうち、発句が独立して残り、俳句となったと論じている。つまり、和歌が俳句に変わる過程で、和歌の抒情性が消えて俳句の滑稽さとなって生まれ変わった。このところから、堀氏はベケットと芭蕉との関係を読み解く鍵だと主張している。ひとつは、ベケットを全体として見ると、ドラマの詩が次第に短くなる傾向がある。もう一つは、その短い詩形に滑稽さが宿っていることだ。更に、ベケットの場合、自然界にある生の言葉から新しい意味を発見するまでに要する時間が存在する。何れにしても、ベケットも芭蕉も新しい言葉を見つけるのに相当時間を費やした。ベケットは『プルースト』論を書いている。実は、ベケットはジョイスの手伝いをした。ベケットが、プルーストやジョイスが長編小説を書いたのとは正反対に、ベケットの言葉は反比例して短くなった。プルーストやジョイスが関係した大ロマンはビッグバンのようなエネルギーがある。一方、ベケットの短詩形は何もかも吸いこんでしまうブラックホールのような重力がある。堀氏は『ベケットの巡礼』の中で、ベケットとハロルド・ピンターとの関係を詳細に論じている。先に触れたように、ピンターは『昔の日々』で「起こらなかったことも起こったことのひとつ」とアンに語らせ空虚な虚無を構築した。

ベケットはエイゼンシュティンの映画に関心があり、エイゼンシュティンのモンタージュ理

論は歌舞伎や俳句と関係があると指摘している。そもそも演劇と違って映画は異空間を自在に飛び回る。エイゼンシュティンのモンタージュ論はその仕組みを浮き彫りにしている。つまりモンタージュは現実にはありえないワンシーンを別のワンシーンでランダムに繋いでしまう。しかも、生の現実以上にモンタージュは映像効果を発揮するのである。

## 05. 松尾芭蕉の『奥の細道』

堀真理子氏は『ベケットの巡礼』の中で、芭蕉は『奥の細道』で相反するものをくっつけて現実にはないモンタージュによってシュールな効果を生みだしたと述べている。(170) エイゼンシュティンのモンタージュ理論は美術の世界でもフランシス・ベーコンが描くあの世とこの世を繋いだ絵の表現にも見られる。また、ベーコンは「ブルーストの『失われた時を求めて』には厚みのある膨大な宇宙が詰まっている」と述べた。ベケットも芭蕉も短い句に凝縮してはち切れんばかりの広大な異空間を漲らせたことに変わりはない。

芭蕉は、先ず、俳諧を貞門・談林風に変えた。それから、発句、連句、かるみを発展して俳句へと昇華させた。芭蕉の紀行文『野ざらし紀行』(1684-1685)や、『冬の日』は「芭蕉開眼の書」で、同年10月25日から、伊勢へ向かう『笈の小文』や、『更科紀行』『猿蓑』、『奥の細道』が次々と書き綴られた。馬場氏は「芭蕉と名古屋」(『星形の言葉を求めて』)の中で、『野ざらし紀行』や『冬の日』と名古屋の関係を次のように述べている。

芭蕉は名古屋とその周辺で多くの名句を残したが、とりわけ重要な文学的遺産となったのは、歌仙(三十六韻の俳諧の形式)『冬の日』である。『野ざらし紀行』は母の墓参りを主目的とする旅でもあったが、その後半に芭蕉にとっても大きな収穫となるこの連句を、名古屋で巻くことになった。(略)

狂句 木枯の身は竹斎に似たるかな 芭蕉

は、京の都を追われて名古屋にやって来たときされる物語上のやぶ医者竹斎に、自分自身を重ねて風狂宣言をした句ともとれる。

これを受けた連衆と芭蕉の丁々発止の三十六句が劇的な展開を見せ、そこに通俗を脱した新しい風雅の世界を出現させることになった。いわゆる蕉風の確立である。(76-77)

芭蕉を客観的に見つめた著述作品に、奥の細道行脚『曾良日記』、服部土芳の『三冊子』や向井去来の『去来抄』がある。寺山修司は『家出のすすめ』を書いて、家出を奨励し、その後、欧米公演にも旅公演を敢行した。寺山の時代は芭蕉の時代と異なって交通手段が飛躍的に

進歩した。とはいえ、芭蕉も寺山も身体が弱かった。また、両者とも生涯仮住まいであった。

## 06. 瀧口修造の「余白に書く」

瀧口修造は前衛詩から短詩形に触手を伸ばし、瀧口の語る俳句的表現は『余白に』1・2から透けて見えてくる。瀧口が著わした詩は、表現が次第に短くなる傾向があった。しかしながら、瀧口の言葉が短くなったのは、発句の様式とは異なるが、発句は元来短い表現であったのだから、瀧口の短い表現は俳句と傾向が似ている。馬場駿吉氏は「夢」（『星形の言葉を求めて』）の中で、瀧口が芭蕉になった夢を見た一文を紹介している。

『三夢三話』の第二話では、パリの古びたアパルとマンの一室で芭蕉になってしまった瀧口さんが、フランスの詩人たちに俳諧の〈さび〉について『去来抄』の〈さびは句の色なり。閑寂なるをいふにあらず〉という言葉を思い出しながら一生懸命説明しているところが出てくる。(略) 裏を返せば、フランスの詩人たちと芭蕉が思いがけなく出会うということ自体、はなはだ超現実的な現象だといえるわけだ。(略) このような夢と夢想の相互作用は、芭蕉の有名な句  
夏草や兵どもが夢の跡  
旅に病んで夢は枯野をかけ廻る  
にもみられるわけであるから、瀧口さんの夢に芭蕉が登場して来ても決して不思議はないということなのだろう。(144-145)

馬場氏は、瀧口と芭蕉の関係ばかりでなく、瀧口が懐いた俳句に対する態度に関しても、具に見つめ続けた。瀧口が懐いた俳句に対する考えを以下のように表わした。

寸秒夢、あとさき 眠っている死人の夢をみる。  
他は覚えず。<sup>9)</sup> 〈瀧口修造コレクション3〉

或いは、瀧口は、表現が次第に短くなるいっぽうで、短詩形を模索しながら新しい詩の形を作っていた。

土方巽に  
日付は絶えず

失われる  
余白の可愛い  
使者よ<sup>10)</sup> 〈瀧口修造コレクション4〉

更に、瀧口は「百の眼の物語」の冒頭で、超感覚によって捉えることが出来る表現を駆使し、次第に短くなる短詩形を用い可能な限りの表現を言葉で様々に創意工夫してみせた。

私の心臓は時を刻む (131) 〈瀧口修造コレクション4〉

また、瀧口は、ひとつの短いフレーズのなかで、言葉と言葉が真逆になる短い詩を短詩形で表現しようと試みた。

血と風は熄まぬ。(347) 〈瀧口修造コレクション4〉

このように、瀧口は、極少なフレーズに反発しあう言葉と言葉が生み出す効果を、予め狙ったかの如く、短詩形を使い生みだした。大岡信は瀧口のスタイルを次のように述べた。

瀧口修造もしこの世に在りせば、『余白に書く』2は全く違った形の、これよりずっと薄い、時に謎々めいた短文から成るであろう本として出版されたであろう。(369) 〈瀧口修造コレクション4〉

ところが、瀧口修造の短詩形「余白に書く」2は、瀧口自身の突然の死によって永遠に中断されてしまった。

短歌に因む私見  
いまの私は、不幸にして、愛誦する短歌というものを持たない。  
たとえば、俳句もまた同じ。<sup>11)</sup> 〈瀧口修造コレクション8〉

瀧口は、「余白に書く」で、濃密な時間を費やして、短詩形に拘り続けた。なかでも、瀧口は短歌や俳句に次のように言及している。

短歌はうたう、うたいあげる、時には訴える、という原型を持ち、俳句は俗に、ひねると

か吐くなどに、はしもなく表されてきたような、語の出会いに重点を置く、という発想の二つの原型を両者に考えることができようか。(86) 〈瀧口修造コレクション8〉

瀧口は、絶えず短歌や俳句や詩に新機軸を求めて、古い様式を脱皮しようと常に試みた。

短歌であれ、俳句であれ、「詩」であれ、披いて、ふと、ことばに出会い、触れ合うことは自然に起こりうるし、またそれを願ってもいる。(87) 〈瀧口修造コレクション8〉

瀧口は、新しい短詩形に、言葉や空間だけではなくて音楽の導入を考えている。駒井哲郎の銅版画『束の間の幻影』はプロコフィエフの『束の間の幻影』曲と響き合っているが、そのようなイメージが念頭にあったのだろうか。

余白に 武満徹の音楽<sup>12)</sup> 〈瀧口修造コレクション5〉

武満徹は、自著『音楽の余白から』(新潮社、1980)の中で「瀧口修造の死」<sup>13)</sup>を書いている。瀧口修造は武満徹の音楽にジョン・ケージの『4分33秒』を思わせる従来の西洋音楽と異なった音の反響を聴きとった。『ノヴェンバー・ステップス』は琵琶と尺八とオーケストラのための音楽である。『4分33秒』にしても『ノヴェンバー・ステップス』にしても「音楽の余白」を埋め、新機軸を拓いて創作された楽曲で、現代音楽になくはならないクラシック音楽となった。瀧口は「余白に」(『コレクション瀧口修造』5)で以下のように「余白」を纏め封印している。

閉じよ、手を引け、纜を解け。

以下余白 (63) 〈瀧口修造コレクション5〉

芭蕉が、かつて短歌から発句や連句を経て俳句を生みだした間に永い苦節があった。そのように、瀧口は、未だ何も書かれていない余白から新しい詩歌や音楽が生れてくると予感を感じていた。瀧口は、「短句戒 オリーヴ樹下吟」の中で、「短句戒」と表象して、短歌と俳句を、足して二で割った短詩形をイメージして見せた。

俳句癡句

見分かぬわれに

季の疾き (81) 〈瀧口修造コレクション5〉

瀧口が「短句戒」の中で「俳句癡句」と詠っているのは、「短詩形」の未知の世界に向って新しい地平を切り拓こうとしていた表われであろう。

「短句戒」また時折りつくられる俳句のようなエピグラム風な詩である (329) 〈瀧口修造コレクション5〉

瀧口は、「短句戒」の中に、あるいは「俳句のようなエピグラム風な詩」をイメージしていたのであろうか。慶應大学法学部教授の鍵谷幸信氏は『余白に書く2』の書評を『三田評論』1982年12月号で以下のように書いている。(330) 〈瀧口修造コレクション5〉

生前『余白に書く』と題して発刊されたのだが、今回それ以後に書かれた文章を集成し、『余白に書く2』としてまとめられた。ここには詩、オマージュから言葉の断片的記述、メモまでの混沌とした思考をよぎり、感性を震わせた作家、詩人、美術家、批評家、舞踏家、写真家、音楽家などへ送った秘密文書ともいえるアンチームな言語表出がなされている。<sup>14)</sup> 〈瀧口修造コレクション5〉

瀧口は『余白に書く2』を纏める前に他界してしまった。それ故に、瀧口の意図は永遠に謎となってしまった。芭蕉の場合も、辞世の句を推敲中に亡くなってしまった。またドストエフスキーの場合も、『カラマーゾフ兄弟』は未完に終わった。或いは、アンディ・ウォーホルは『日記』が完結する前に他界してしまった。それで、ウォーホルが何を目的に『日記』を綴ったのか未だに分からないままである。それらの関係と瀧口の『余白に書く2』はどこか似ている。何れにしても、瀧口の「短詩形」は芭蕉の俳句を想起させる。さて、馬場氏は「橄欖忌」(『星形の言葉を求めて』)で、瀧口が「余白」ばかりでなく、無名の芸術家に関心を寄せたことに注目している。

つねに未開の状態にある〈言葉〉ばかりでなく、〈若い芸術家たち〉の発見も、瀧口さんにとってはおおきな詩的創造行為だった。(193)

馬場氏は、瀧口が、俳句ばかりでなく詩の新機軸を拓く地平を見据えようとしていたと考えた。瀧口は馬場氏にとり独特な視点を生み出す先人となった。馬場氏が論評する現代美術批評

には科学者と俳人の眼がある。馬場氏は『液晶の虹彩』で次のように述べている。

ものを見るという行為に当って、その対象の放つ光量に敏感に反応し、それをどのように受容し、見とどけるかを決定するのは虹彩である。<sup>15)</sup>

また、馬場氏が科学者の眼差して俳句を創作していることを、塚本邦雄が『薔薇色地獄』の解説で書いている。

駿吉は作家であると同時に、否在るより前に科学者、傑れた医師であった。「若き胃の薔薇色」と一口に言ひはするが、ここには解剖を経験した専門家の醒めた眼がある。<sup>16)</sup>

馬場氏の俳句は科学者と美学者の視点が絶妙に融合している。馬場氏は敬愛する瀧口修造著の『点』を自身の誌名にいただいた雑誌で、「俳句は俳句に学べない」(『点』2号)を著し、現代俳句について科学者と美学者の観点に立って論じている。

現代俳句の前衛には、日本人の新しい美意識を創造する強靱な精神と、これを短詩型に血晶せしめる魔力に満ちた錬金の才能の出現こそが望まれるのではなかろうか。<sup>17)</sup>

馬場氏の視点には、医師でもあったチェーホフ、医師の家系にあったフロベール、プルーストの科学者的な美意識が、氏の俳句の中で通奏低音のように響き合っている。

## 07. 駒井哲郎の「束の間の幻影」

駒井哲郎が制作した銅版画「束の間の幻影」を、中村稔が書いた駒井の伝記にタイトルに使った。また、詩人の大岡信が詩歌『記憶と現在』を書き、駒井がメゾチントの銅版画を描いて詩画集を刊行している。馬場駿吉氏は、自らの俳句と駒井の銅版画を掲載して句画集『断面』を出版した。

駒井哲郎の「束の間の幻影」には、現実を鋭く切り取るエッチングから芭蕉の俳句精神が匂いたってくる。<sup>18)</sup>

馬場氏は「駒井哲郎を追いかけて」のイベントや講演会を第一回から第四十回まで行って

いる。これまで、馬場氏は俳句を詠んでいるときに一時期スランプにおちたことがあったが、やがてそこから抜け出して新世界を発見する時に句画集があり、そこから新しいアイデアが生まれた。つまり、芭蕉や曾良が俳人同士で歌を競って発句や連句を創作して競いあうのとは異なり、駒井哲郎と馬場氏の場合、駒井の銅版画と馬場氏の俳句が互いにぶつかりあって組み合わせる句画集ができた。その時、馬場氏は、切磋琢磨して、優劣を超えた処にある新機軸を切り拓き、新しいアートの素地となる地平に逢着したのである。

駒井哲郎の銅版画の技術は西洋にあったが、かつて日本にはなかった芸術分野で、駒井はパリに留学したときに、まざまざと日本銅版画の後進国性を目の当りにした。だが、駒井は諦めないでパリで学び独自の銅版画への道を切り拓いていった。馬場駿吉氏は駒井の銅版画の中にいばらの道を見てとった。だが、馬場氏にとって、駒井のいばらの道は、ちょうど、芭蕉が自らの時代にはあった俳句の新奇性を連想させた。馬場氏自身は、芭蕉が抱えていた様式の古い短歌を言葉によって新機軸を拓くのではなくて、駒井の銅版画にある内面性と呼応した暁に新しく生れたのであり、それが馬場氏と駒井の共同作業から誕生した句画集であった。馬場氏は自作の俳句と駒井の銅版画とコラボレーションが上手くいった時こそ、現代俳句による新機軸がその句画集から拓かれると考えた。駒井哲郎の銅版画の新奇性と駒井の不治の病との間に、馬場氏は、自ら俳人として、また絵画の評論家として、更に、駒井の難病と向き合うことができる医者として専門性を発揮し、自らの句画集『断面』を創作して、駒井の銅版画と真っ向から向き合った。

憂愁の夜が来る 薔薇と銅版画 137 『断面』

人に癌殖ゆるをやめず梅雨永し 192 『断面』

因みに馬場氏は銅版画の腐食剤とがんとの関係を寺山修司の『血と麦』や『花粉航海』に見ている。

銅版画の鳥に腐食の時すすむ母はとぶものみな閉じこめぬ 『血と麦』

癌すすむ父や銅版画の寺院 『花粉航海』

馬場氏は「駒井の銅版画を見る時、寺山が綴った句を思いだす」としばしば語った。中村稔は駒井の伝記『束の間の幻影』の中で馬場氏から依頼があった『断面』制作過程を駒井の日記から引用している。



「銅版画の制作を開始するのは11月28日である。同日の記事に〈銅版にグラウンドを引いたりする〉とあり、翌29日〈エッチングを久し振りではじめる〉、30日〈硝酸を買いに行き、馬場氏のための銅版大体腐食終わる、夜10:00にねる〉とある。12月5日〈馬場さんの句集のための印刷自分でやって見る。軀のために良し。11:30床、画室でねる。〉6日〈7:00起、8:00より印刷始める〉〈馬場氏の作品40枚すむ〉7日〈10:30までに馬場氏の仕事終わる〉と続く。(中略)19日〈馬場駿吉に銅版とEp.a.A.4枚送る〉と記し、〈馬場駿吉への手紙〉の中に〈仕事への欲望が狂暴と言って良いくらいわいて来た〉と書いた旨を記している」(234)

馬場氏は駒井の銅版画と出会い、『束の間の幻影』に表された細密描写を凝視し、自ら俳句の新しい意義を見いだして、遂に自身の句画集『断面』が誕生したのである。だが俳人馬場氏の再生は駒井との別れとなった。銅版画の腐食剤は駒井の舌を犯したのであり、馬場氏の句画集もその犠牲のもとに生まれたのである。中村は同書で次のように綴る。

馬場駿吉は駒井の作品による句画集を発行した俳人だが、同時に耳鼻咽喉科の専門医としてわが国における権威者の一人である。その馬場から教えられたところによれば、義歯に不適合があると、舌のへりに義歯があたり、舌のへりを刺激する。刺戟が続くと、舌のへりにやがて腫瘍ができる。(277)

馬場氏は「レンブラントと芭蕉」(『星形の言葉を求めて』)の中で、銅版画と俳句の関係をレンブラントの銅版画と比較して次のように述べている。

制作過程での修正がほとんど利かぬ銅版画であればこそ、光と闇が揺れ動き呼び交わす中で、人物や風景が瞬間的に見せる真の姿を引きとどめることができる—それをあらためて再認識させられた。その時ふと胸に浮かんだのは、日本の一七世紀最大の詩人(俳人)松尾芭蕉(一六四四—九四年)の

「物の見えたる光、いまだ心に消えざる中に言いとむべし」

という言葉だ。物の本質から発せられる微光を捉えるための箴言である。(34-35)

馬場氏が駒井哲郎の銅版画に見いだしたのは、芭蕉のこの箴言であったことが分かる。馬場氏は「私の文筆遍歴—俳句を中心に」で次のように綴っている。

一九六一年の夏、私は偶然、銅版画家・駒井哲郎の作品展に出会い、急速に現代美術への眼を開かせられることとなった。(82)

馬場氏が現代の美術へと真に開眼したのはこの時期だった。同時に、駒井哲郎の銅版画は、馬場氏にとって現代俳句開眼のきっかけともなった。いうまでもなく、馬場氏の現代俳句は駒井の銅版画と馬場氏のコラボレーションである句画集『断面』の誕生を意味した。

## 08. 池田龍雄の『アヴァンギャルドの奇跡』

池田龍雄氏は前衛芸術家で、15歳の時に海軍航空隊に入隊し、特攻隊員や予科練を経験して、敗戦を迎えた。その後、池田氏は1948年に多摩造形専門学校（現多摩美術大学）に入学、無窮運動「梵天の塔」のパフォーマンスを造形した。また、池田氏は映画・演劇（出演／美術）に加わり、独自のアートを展開して、粕三平監督『怨霊伝』、松本俊夫監督『薔薇の葬列』、池田龍雄作『梵天』、寺山修司制作・人間座第12回公演『吸血鬼の研究』の創作活動に参加した。池田氏は岡本太郎や花田清輝らの「アヴァンギャルド芸術研究会」に参加して、アヴァンギャルド（前衛芸術）の道を歩んだ。また、池田龍雄氏の前衛芸術には芭蕉の作句から着想をえた表現がみられる。馬場氏は「微笑むアヴァンギャルド—池田龍雄」（『時の晶相』）の中で、池田氏が捲るめく人生体験をした芸術家として紹介している。

池田さんは中学三年から海軍甲種飛行余暇練習兵（予科練）となり、修了後、特攻隊に編入され終戦直前出撃命令を受けた。(251)

馬場氏は『時の晶相』の中で、池田氏が戦後一段と変化する社会情勢の中で芸術家として目まぐるしく激動する渦中におかれながら、創作活動を遂げたと回顧している。

60年代にはそれまで盛んに描かれた社会事象に材を得た作品が減り、生命の原器をなすエロスを秘めた有機的な形象がシュルレアリスムの手法で描かれることが多くなってゆく。古い体制的因習からの解放をめざすはずの社会主義が、芸術家の自由を封殺するという矛盾を露呈し始め、革命の芸術から芸術の革命へと比重を移す選択がなされたのだろうか。あるいは未開の状態にある眼をもって現実を見据える事が出来る真のシュルレアリスト瀧口修造への結果なのだろうか。おそらくその両方が重なったのだと思う。(254)

馬場氏は、結局、池田氏の芸術がシュルレアリスト瀧口修造と出会うことによって著しく飛躍し大きく花開いたと述べることになる。

## 09. 加納光於

加納光於氏は、昭和後期から平成時代の版画家で画家でもある。加納氏は、版画、絵画の領域において実験的手法により独自の世界を切り開いた。仕事柄、加納氏は、瀧口修造、大岡信、澁澤龍彦、渋谷孝輔、加藤郁乎、吉増剛造、巖谷國士、馬場駿吉、平出隆ら文学者との交流や仕事が多くなった。加納氏は、東京、神田に生まれたが、病弱のために中学を中退し、10代の後半、闘病生活中、微生物や植物の形態に関心を寄せた。また加納氏は、アルチュール・ランボーなどフランス詩に傾倒した。加納氏は、1953年、19歳のときに独学で版画をはじめ、1955年に私家版銅版画集『植物』を出版した。加納氏は、瀧口修造に見いだされ、瀧口の推薦で1956年にタケミヤ画廊にて初個展を開催した。加納氏は、東京国際版画ビエンナーレには第1回（1957年）から出品して、3回展（1962年）では亜鉛版を腐食させたモノクロームのインタリオ《星・反芻学》（1962）で国立美術館賞を受賞した。その他国内外の数多くの展覧会に出品し、受賞を重ねている。馬場氏は「翼あるいは熱狂の色彩—加納光於展に」の評論で次の世に評している。

1963年2月、すなわち、今からほぼ15年前、加納光於の名古屋では初めての個展が開かれた。(略) そこには星雲の誕生を思わせる巨大な宇宙的イメージと、極微視の世界での生命誕生を彷彿とさせるイメージとが通低し合い、また一方では化石の中に封じこめられた始祖鳥の翼のような、あるいは巨大な爬虫類の骨を蒐めて作られた冥王の簾のような死のイメージが、インタリオによって鮮烈に刻印されていた。<sup>19)</sup>

やがて、馬場氏は加納光於氏や駒井哲郎の絵画から触発されたばかりか、知遇を得ることになり、自身も俳句の境地が新しく飛躍して、新生の俳人馬場駿吉が誕生する事になる。

## 10. 加藤楸邨の『寒雷』

加藤楸邨は松尾芭蕉をライフワークとして研鑽し、芭蕉の俳句研究に貢献した。その結果、楸邨の業績を讃えて、その功績を伝える記念館ができた。楸邨自身の作句の態度は「真実感合」を唱えて、人の内面心理を詠むことを追求し、中村草田男、石田、波郷らと共に人間探求

派と呼ばれた。楸邨は『寒雷』（1941）を発表し、「寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃」「鮫鯨の骨まで凍ててぶちきらる」「木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ」の句を詠んだ。楸邨の作句は芭蕉研究を濾過して現代に芭蕉の精神を蘇らせた。田川飛旅子は評伝『加藤楸邨』の中で楸邨の句を評釈しながら芭蕉と比較して論じている。

芭蕉の研究に力を入れていた楸邨は、芭蕉の俳句が旅を契機として内面的に変貌発展してゆく過程を興味ふかく見ていた。特にこのころ「芭蕉表現研究」が丁度「野晒」にさしかかって、人間としての芭蕉が、あの旅で、今まで外へ向っていた表現契機が一切内面化し、無化してゆく大へんな転換が行われたことを思っていた。<sup>20)</sup>

馬場氏は加藤楸邨が膨大な『芭蕉研究』をするにあたって、楸邨は重要な評釈者であると看破していた。また、馬場氏は「私の文筆遍歴—俳句を中心に」（『星形の言葉を求めて』）で、高校時代に受験雑誌に投稿したが選者の一人が加藤楸邨であったのを回想している。

高校時代も受験雑誌の俳句蘭（加藤楸邨選）に投稿入選し、そのうちの一句が高校の国語教科書に掲載されて得意になったこともあったが、本格的にのめり込んだのは、大学入学後からである。（80）

馬場氏は受験雑誌「蛍雪時代」や「学燈」に投稿して入選を果たした。その後になってから、寺山修司が同受験雑誌に投稿し始めた。

## 11. 加藤郁乎 『えくとぶらすま』『詩集ニルヴァギナ』

加藤郁乎は前衛俳句・詩『腔内楽』『形而情学』『ニルヴァギナー加藤郁乎詩集』から『江戸俳諧歳時記』『加藤郁乎俳句集成』『日本は俳句の国か』『芥川竜之介俳句集』『荷風俳句集』まで幅広く俳句を探究した。馬場氏は「言葉の刺客—加藤郁乎」（『時の晶相』）で加藤郁乎の俳句と詩の関係を次のように述べている。

俳句形式に現代の詩性を色濃く取り込んだり、俳句と現代詩の間を往来してハイブリッド（混種）俳人とでも呼ぶべき作家も出現してきた。その元祖ともいえるのが加藤郁乎ではないだろうか。（101）

馬場氏は同評論（『時の晶相』）で、加藤郁乎が澁澤龍彦に対して物怖じせずに俳句で詠った態度を高く評価して以下のように評している。

例えば澁澤龍彦に向けては  
おれんじ公が失神に青痣の四季咲き  
というサド研究・翻訳の大家への献句と解される作があるが、後に澁澤龍彦が〈言葉の刺客〉との称号を贈ったように、日常的な言葉の意味を刺し殺す俳諧師の面目躍如たるものがあった。(102)

馬場氏は加藤郁乎に対して俳人としての類まれな資質について「方寸のポテンシャル2—瀧口修造の俳句的表現—」（『洪水』第8号）の中で次のように評価している。

俳人かつ詩人加藤郁乎は俳人として瀧口修造の至近距離にいた稀有な一人。その郁乎に宛てた献句には  
晴れるやらむこの日の客の風ふくべ（「螺旋儀」創刊号に初出。七一年九月）  
荒れるやらむ今宵の蟹の VAGINA 食い 小翁  
星のねぐらぞ郁乎行かずや 越坊  
一九七一年、加藤郁乎は詩集『荒れるや』（思潮社）と『ニルヴァギナ』（薔薇十字社）を相次いで上梓した。この二詩集は、パロディ、綺想、エロスをカクテルにした酒気が満ち溢れていて、超現実的なつむじ風がハレルヤの世界へ里帰りさせてくれる、といった按配。風ふくべは風瓢とも風吹く辺とも読める。瓢には睾丸のイメージが重なるか。小翁は蕉翁（芭蕉）、越坊は越中富山県人の瀧口修造（蕉門十哲の一人には越智越人という俳人もいた）。蟹は新宿・花園神社で行われた、これら詩集出版記念会における食材に因む、とは鶴岡善久の調べによる。そして〈郁乎〉を〈行くや〉と読めばこの対句の意味は一転、艶っぽくなる。それにしてもこの二句の言葉の遊行と応答の妙に感嘆する。<sup>21)</sup>

馬場氏は加藤郁乎の詩や俳句に深く共感したが、両氏に共通するのは濃密な母なる生命力である。そして、その原点は、特に、馬場氏の場合、氏が学生時代に愛読した『デカメロン』があり、郁乎の詩や俳句解釈に少なからぬ影響を与えているようだ。

## 12. まとめ

馬場駿吉氏は唐十郎、澁澤龍彦、マルセル・デュシャン、四谷シモン、吉増剛造、瀧口修造の迷宮の世界を辿りながら俳句や美術作品を微細に研究している。それらの論考を集約し蒐集した精髓を雑誌『洪水』に纏めつつある。その核にあるのは松尾芭蕉の俳句研究である。芭蕉の芸術は、DVD『冬の日』のアニメに纏められた。『冬の日』は江戸時代の絵巻だけでなく、現代の時代に活躍する世界各国のアニメーターたちが、芭蕉を多面的に解釈して映像化している。特に、馬場氏の俳句論は瀧口修造の短詩論・俳句論に着目して芭蕉の芸術を展開しているところにある。瀧口は、シュルレアリスムのデュシャンのアートに対する造詣が深かった。殊に、馬場氏は瀧口が短詩・俳句を論じている点に着目して俳人芭蕉の俳句を詳細に探求した。とりわけ、馬場氏は、芭蕉とベケットの流浪の芸術に着目し共通点を見いだして論評し、次いで2013年開催の愛知トリエンナーレで、芭蕉とベケットの精髓を抉りだして、現代に俳句を蘇らせた。その根本にあるのは、馬場氏は同じことを繰り返して言わないことである。馬場氏は総べての論文や講演で語り論じおおせた後、いわば白紙の状態から新たに研究を始めるという。従って、馬場氏の主張は前言を覆す論調であったり発言であったりする。その精神はアヴァンギャルドに見えるけれども、実は芭蕉の精神と相通じているのである。とどのつまり馬場氏の精神は芭蕉の「不易流行」を現している。過去、現在、未来に変わらない不変の精神があるが、一度その断面を切り取って見ると、噴き出す血潮のように新たな生命に溢れ、芭蕉の辞世の句「旅に病んで夢は荒野を駆け巡る」の光景が現れ、芭蕉が全生命を出しきった姿が句に見てとれるのである。この俳句精神こそ、馬場氏の俳句や俳句論のどの断面を切り取って確かめてみても、みてとれる断末魔の命の叫びであり、全く矛盾するが生命の讃歌でもあるのだ。

## 注

- 1) 馬場駿吉『星形の言葉を求めて』（風媒社、2010）、216-217頁。以降、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 2) 馬場駿吉『時の晶相』（水声社、2004）20頁。以降、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 3) 村松喬「基礎医学」（『日本における言語聴覚士をめざすひとのために』丸善、2003）、107頁。
- 4) 佐谷和彦『原点への距離—美術と社会の狭間で』（沖積舎、2002）、15頁。
- 5) 馬場駿吉『句集 断面』（昭森社、1964）、92-93頁。以降、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 6) Pinter, Harold, *Old Times*, (*Complete Works: Four*, Grove Press, Inc., 1981), pp. 27-28.
- 7) *Samuel Beckett The Complete Dramatic Works* (Faber and Faber, 1990), p11. 以降、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 8) 堀真理子『ベケットの巡礼』（三省堂、2007）、170頁参照。以降、同書からの引用は頁数のみ記す。

- 9) 『コレクション 瀧口修造』 3 (みすず書房、1996)、375頁。以降、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 10) 『コレクション 瀧口修造』 4 (みすず書房、1996)、128頁。同書からの引用は頁数のみ記す。
- 11) 『コレクション 瀧口修造』 8 (みすず書房、1996)、83頁。同書からの引用は頁数のみ記す。
- 12) 『コレクション 瀧口修造』 5 (みすず書房、1996)、30頁。
- 13) 武満徹『音楽の余白から』(新潮社、1980)、73頁。
- 14) 鍵谷幸信「瀧口修造著『余白に書く2』」(三田評論、1982.12) 89頁。
- 15) 馬場駿吉『液晶の虹彩』(書肆山田、1984) 39頁。
- 16) 塚本邦雄「アダムの林檎 馬場駿吉「薔薇色地獄」解題」(馬場駿吉『薔薇色地獄』湯川書房、1976) 34頁。
- 17) 馬場駿吉「俳句は俳句に学べない」(『点』2号、1966)、14頁。
- 18) 中村稔『束の間の幻影』(新潮社、1991)、277頁。以降、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 19) 馬場駿吉「翼あるいは熱狂の色彩—加納光於展に」(加納光於展、パルル画廊、1978)
- 20) 田川飛旅子『加藤楸邨』(桜楓社、1985)、261頁。
- 21) 「馬場駿吉方寸のポテンシャル2—瀧口修造の俳句的表現—」(『洪水』第8号、2011)、108-109頁。

## 参考文献

- Beckett, Samuel, *En attendant Godot* (Les Editions de Minuit, 1952)
- Beckett, Samuel, *Waiting for Godot* (Faber and Faber, 1965)
- Samuel Beckett The Complete Dramatic Works* (Faber and Faber, 1990)
- Three Novels Samuel by Beckett Molloy Malone Dies The Unnamable* Translated by Patrick Bowles (Grove Press, Inc. 1965)
- Cronin, Anthony, *Samuel Beckett The Last Modernist* (Harper Collins Publishers, 1997)
- Zurbrugg, Nicholas, *Beckett and Proust* (Colin Smythe Barnes and Noble Books, 1988)
- Samuel Beckett Now* Edited by Melvin J. Friedman (Chicago U.P., 1975)
- James Knowlson & John Pilling, *Frescoes of the Skull: The Later Prose & Drama of Samuel Beckett* (Grove Press, Inc. 1980)
- Kalb, Jonathan, *Beckett in Performance* (Cambridge U.P., 1991)
- Doherty, Francis, *Samuel Beckett* (Hutchinson University Library, 1971)
- Alvarez, A., *Beckett* (Fontana Collins, 1973)
- Josephine Jacobsen & William R. Mueller, *The Testament of Samuel Beckett* (A Dramabook, 1964)
- Core, Richard, N., *Beckett* (Oliver & Boyd, 1964)
- A Samuel Beckett Reader* Edited by John Calder (The New English Library Limited, 1967)
- Modern Critical Interpretations Samuel Beckett's Waiting for Godot* Edited by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1987)
- File on Beckett* Compiled by Virginia Cooke (A Methuen Paperback, 1985)
- Matsuo, Bashō, *On Love and Barley* Translated from the Japanese with an introduction by Lucien (Stryk University of Hawaii Press, 1985)
- The Monkey's straw raincoat and other poetry of the Basho school* Introduced and translated by Earl Miner and Hiroko

- Odagiri (Princeton University Press, 1981)
- A haiku journey, Basho's The narrow road to the far north and selected haiku* Translated and introduced by Dorothy Britton (Kodansha International, 1974)
- 堀真理子『ベケット巡礼』(三省堂、2007)
- 校本芭蕉全集 第1巻-10巻(角川書店、1960)
- 芭蕉講座 第1巻-5巻(有精堂、1983)
- 新芭蕉講座 第1巻-9巻(三省堂、1995)
- 守隋憲治監修『去来抄』(評論社、1970)
- 長谷川權『松尾芭蕉 奥の細道』(NHK テレビテキスト100分 de 名著、2013年10月)
- 芭蕉『おくのほそ道』付『曾良旅日記』、『奥細道菅菰抄』萩原恭男校注(岩波クラシックス8、1987)
- 櫻井武次郎『奥の細道行脚『曾良日記』を読む』(岩波書店、2006)
- 南信一『三冊子総釈改定版』(風間書房、1979)
- 浪本澤一『芭蕉七部集連句鑑賞』(春秋社、1964)
- 桜井武次郎『奥の細道行脚『曾良日記』を読む』(岩波書店、2006)
- 立石巖『西行・世阿弥・芭蕉一自殺者の系譜』(ぼんブックス26、1991)
- 馬場駿吉『点』創刊号(1965)、2号(1966)、3号(1967)、6号(1976)
- 馬場駿吉「特集—荒川修作」(アールヴィヴァン1号、1980)
- 馬場駿吉「幾何学的抽象の極北から吹く風の中で—ヴァザリ展に寄せて—」(『GALERIE VALEUR』、1976)
- 馬場駿吉「愛知曼荼羅から東松照明曼荼羅へ」(『愛知曼荼羅—東松照明の原風景』、2006)
- 馬場駿吉『時の諸相』(水声社、2004)
- 馬場駿吉『海馬の夢』(深夜叢書刊、1999)
- 馬場駿吉『液晶の虹彩』(書肆山田、1984)
- 馬場駿吉『耳海岸』(書肆山田、2006)
- 馬場駿吉『句集 夢中夢』(星雲社、1984)
- 馬場駿吉『星形の言葉を求めて』(風媒社、2010)
- 馬場駿吉『澁澤龍彦西洋芸術論集成』下、解説(河出文庫、2010)
- 馬場駿吉『感染症21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床』19(中山書店、2000)
- 馬場駿吉『駒井哲郎展 第17回オマージュの瀧口修造』(佐谷画廊、1997)
- 馬場駿吉「世界をからめとるものとしての色彩—加納光於に」(『加納光於胸壁にて—1980』、アキライケダギャラリー、1980)
- 馬場駿吉「ブーメランの獲物たちのために」(『加納光於—油彩』アキライケダ、1982)
- 馬場駿吉「万物の海としての補遺—岡崎和郎の作品に触れて」(『岡崎和郎展』倉敷市立美術館、1997)
- 馬場駿吉『サイコロラマの木霊 名古屋発・芸術時評1994~1998』(小沢書店、1998)
- 馬場駿吉「コレクターとしての二つの原則—私の蒐集40年の歩みをふり返って—」(『版画芸術』、2003)
- 馬場駿吉「—俳人のコレクションによる駒井哲郎銅版画展—イメージと言葉の共振—」(名古屋ボストン美術館、2008)
- 馬場駿吉「集積燦々アルマン Accumulation 論」『Accumulation Arman』(GALERIE VALEUR、1978)
- 馬場駿吉「翼あるいは熱狂の色彩—加納光於展に—」(『加納光於 GALERIE VALEUR、1978』)
- 馬場駿吉「見えるものから観念への逆探知—ジャスパー・ジョーンズ・レッド・レリーフ展に—」(『Lead



- Reliefs Jasper Johns』GALERIE VALEUR, 1978)
- 馬場駿吉『薔薇色地獄』(湯川書房、1976)
- 馬場駿吉「方寸のポテンシャル」(『洪水』第七号、2011.1.1)
- 馬場駿吉 spiralviews 瀧口修造残像「方寸のポテンシャル2」(『洪水』第八号、2011.7.1)
- 馬場駿吉 spiralviews 瀧口修造残像2「方寸のポテンシャル3」(『洪水』第九号、2012.1.1)
- 馬場駿吉 spiralviews 瀧口修造残像3拾遺「方寸のポテンシャル4」(『洪水』第十一号、2013.1.1)
- PHARMAKON '90 (幕張メッセ現代の美術展、1990.7.28 アキライケダコーポレーション)
- 日常に偏在するアート (日常に偏在するアート展実行委員会 サン・メッセ、2003.10.7)
- 谷口幸代「名古屋の文学—俳人・馬場駿吉が見た名古屋—」(『名古屋の観光力』風媒社、2013)
- 『コレクション瀧口修造』1巻～13巻、別巻1～2巻 (みすず書房、1993)
- 『特集 瀧口修造』(本の手帖、No. 83. 昭森社、1969.8)
- 『瀧口修造』(『現代詩手帖』、1974.10)
- 『瀧口修造追悼』(みすず書房、No. 233、1979-10)
- 『池田満寿夫「愛の瞬間」』(美術出版社、1987)
- 『戦後詩大系』3 (三一書房、1970)
- 加藤楸邨『現代俳句の中心問題』(交蘭社、1940)
- 加藤楸邨『俳句教室—俳句表現の道—』(創藝社、1951)
- 加藤楸邨『一茶秀句』(春秋社、1965)
- 『加藤楸邨全句集』(寒雷俳句会、2010)
- 『加藤楸邨句集』(岩波書店、2012)
- 『増補現代俳句大系』第七巻 (角川書店、1981)
- 『現代俳句文学全集 加藤楸邨集』(角川書店、1957)
- 加藤楸邨訳「芭蕉名句集」(『日本国民文学全集第一四巻古典名句集』河出書房新社、1957)
- 田川飛旅子『加藤楸邨 新訂俳句シリーズ・人と作品16』(桜楓社、1985)
- 加藤郁乎『江戸俳句歳時記』(平凡社、1983)
- 加藤郁乎「詩集「形而情学」から ぼえしす」(『戦後詩大系II』、三一書房、1970)
- 加藤郁乎編『吉田一穂詩集』(岩波文庫、2004)
- 加藤郁乎編『荷風俳句集』(岩波文庫、2013)
- 加藤郁乎編『芥川龍之介俳句集』(岩波文庫、2010)
- 加藤郁乎「久友土方巽」(『アスベスト館通信』8、1988)
- 加藤郁乎「旧雨音なし」(『総特集 濫澤龍彦』『ユリイカ』6、1988)
- 『加藤郁乎俳句集成』(沖積舎、2000)
- 加藤郁乎『陸内楽』(大和書房、1975)
- 加藤郁乎『夢一筋 あるいは夢の研究』(コウベブックス、1976)
- 『加藤郁乎詩集ニルヴァギナ』(薔薇十字社、1971)
- 加藤郁乎「迷宮の建築術が生んだ傑作」(週刊サンケイ、1970.12.31)
- 加藤郁乎詩集 (現代詩文庫45、思潮社、1971)
- 『加藤郁乎詩集成』(沖積舎、2000)
- 加藤郁乎『後方見聞録』(学研M文庫、2001)

- 加藤郁乎「牧神そのひと」(『大野一雄の舞踏』白林聖堂、1977)
- 天野文雄著編「江口」『世阿弥』(角川学芸出版、2013)
- 渡辺保『西行山家集全注解』(風間書房、1971)
- 吉本隆明『西行論』(講談社、1990)
- 梅原猛、観世清和監修『能を読む②世阿弥神と修羅と恋』(角川学芸出版、2013)
- 『本の宇宙—詩想をはこぶ容器』(栃木県立美術館、1992)
- 駒井哲郎「パウル・クレエ」(『アトリエ』、アルス、1949.11)
- 駒井哲郎『白と黒の造形』(小沢書店、1970)
- 駒井哲郎『銅版画のマチエール』(美術出版社、1976)
- 『駒井哲郎銅版画作品集』(美術出版社、1973)
- 『駒井哲郎銅版画展』(東京美術館、1980)
- 『駒井哲郎版画作品集』(美術出版社、1979)
- 『駒井哲郎回顧展 没後15年銅版画の詩人』(第1回資生堂ギャラリーとそのアーティスト達、1991)
- 『駒井哲郎と現代版画家群像果実の受胎』(埼玉県立近代美術館、19947)
- 「特集 駒井哲郎」(『みづゑ』No. 860、1977.3)
- 「対決! 駒井哲郎」(版画芸術80、阿部出版、1993)
- 『加納光於—瀧口修造に沿って』(『第3回オマージュ瀧口修造展』、佐谷画廊、1983)
- 加納光於『「骨の鏡」あるいは色彩のミラージュ』(愛知県美術館、2000)
- 「特集加納光於」(『みづゑ』No. 876、1978)
- 大岡信『加納光於論』(書肆風の薔薇、1982)
- 『加納光於 Paintings '80-83』(北九州市立美術館、1983)
- 『加納光於展』(バルール画廊、1978)
- 「特集加納光於色彩の光芒1954-1992」(版画芸術76号、阿部出版、1992)
- 『加納光於《胸壁にて》—1980』(アキライケダギャラリー、1980)
- 『加納光於—油彩』(アキライケダギャラリー、1982)
- 池田龍雄『アヴァンギャルドの奇跡』(山梨県立美術館、2010)
- 池田龍雄「漂着」(『第21回オマージュ瀧口修造展』、佐谷画廊、2001)
- 『池田龍雄展』(梵天シリーズ 第5章「点生」、ギャラリーさんよう、1981)
- 池田龍雄「驚異の人・土方巽」(『驚異の人とその周辺展』横浜市民ギャラリー、1989)
- 池田龍雄「ナンデスカコレワ」(『点』創刊号、1981)

# アメリカとロシアとに於けるアヴァンギャルド

——村上春樹と亀山郁夫の迷路——

清水 義和

## 01. はじめに

ロシアのアヴァンギャルド・アートとアメリカのアヴァンギャルド・アートを近代史の推移から比べると、芸術は政治と本来無関係である筈であるが、政治的な問題を抜きにして芸術を論じることが出来ない場合が多く、しかもその影響が大なることに気がつく。

亀山郁夫氏の『破滅のマヤコフスキー』を概観しただけでも、先ず政治状況を抜きにしてロシアのアヴァンギャルドを考えないわけにはいかない。

或いは、アメリカのアヴァンギャルドを見た場合も、ロシアのアヴァンギャルドと比較すると、独裁者スターリンほどの粛清ではないにしても、マッカーシー旋風が吹き荒れ、赤狩り時代があった。ブレヒトでさえ、ヒットラーのゲシュタポから逃れシベリアからスウェーデンの貨物船で遙々自由の国アメリカを求めてやって来たが、それにもかかわらず、赤狩りの裁判を避けることは出来ず、1947年10月30日に非米活動委員会の審問を受けた。「職業は何ですか」と尋ねられた時、ブレヒトは「詩人で、劇作家です」と答えた。結局、ブレヒトはアメリカを翌日去ってスイスへ逃れた。

また、喜劇俳優チャップリンでさえアメリカを去らざるを得なかった。『ローマの休日』のシナリオ・ライターもクレジットではマクレラン・ハンターとなっているが、本名はダルトン・トランボであった。トランボも赤狩りの犠牲者となった。

亀山氏は、筆者が2014年1月7日に対談した時、ロシアのアヴァンギャルドに対するスターリンの粛清が凄まじかったと語った。確かに、スターリンの粛清ほどではなかったにしても、それでもなおアメリカのアヴァンギャルドに対するアメリカのFBIによる厳しい搜索活動も

かなり似ていると推測出来た。恐らく、戦前から米ソ冷戦時代を経て、両国のスパイ活動は熾烈を極めた時代から生じた悲劇であった。

マヤコフスキーが自殺しゴーリキーが不明な死を遂げる顛末は、どこかしら、マッカーシー旋風が吹き荒れた時代の赤狩りや、或いは、時代が下ってジョン・レノンやキング牧師が暗殺された政治的背景と類似している面があった。マーク・チャップマンがFBIからサリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』と執拗な電話によってマインドコントロールされ、ジョン・レノン暗殺に加担することになったと報道された。

アヴァンギャルド・アートに対する風当たりはロシアばかりでなく、戦前の日本でもアヴァンギャルド・アーティストに対する政治的圧力があつた。吉行淳之介の父エイスケは日本のアヴァンギャルドの小説家で、辻潤と交友があつた。辻潤の妻であつた伊藤野枝は大杉栄と一緒に陸軍甘粕正彦によって暗殺された。

1994年、筆者がロンドン大学で研究していた時、デヴィッド・ブラッドビー教授は「日本のアヴァンギャルドは誰か」と尋ねた。その時、筆者は「戦前は、辻潤、村山知義、吉行エイスケがいた。けれども、戦後、エイスケの息子の吉行淳之介はアヴァンギャルド・アートを放棄していたので、その後の世代の寺山修司が日本のアヴァンギャルドだった」と答えた。寺山は1983年に亡くなったが、死後もアヴァンギャルド・アートの影響を与え続けた。

1994年吉行淳之介が亡くなったことを、筆者はロンドンで1週間遅れの新聞記事を読んで知った。その当時、亀山氏も数日遅れの新聞で日本の事件をモスクワで読んでいたと自著に書いている。

戦前の日本のアヴァンギャルドは特高警察によって致命的な弾圧をうけ壊滅状態にあつた。アヴァンギャルド・アーティストの村山知義はドイツの表現主義に影響を受けて帰国し、ロシアのアヴァンギャルドに匹敵するモダンなアートを展開した。だが、軍事国家の日本では、左翼的だと思われたドイツの表現主義的な村山のアートは次第に活動の場を奪われた。戦後日本のアヴァンギャルド・アートはニューヨークのアヴァンギャルド・アートの影響が強かつた。1960年代、草月会館に集まつたアーティストは、ジョン・ケージやオノ・ヨーコ、一柳慧、武満徹、高橋悠治らのアートに寺山修司は多大な影響を受けた。

他方、ロシアでは軍事国家日本とは異なって、帝政ロシアを打倒したスターリンのソ連体制がメイエルホリド、エイゼンシュテインらの表現主義芸術を悉く粛清したのである。

本稿では、アメリカとロシアのアヴァンギャルドを亀山氏や村上氏のロシアやアメリカ文化のとらえ方を比較しながら現代のアヴァンギャルド・アートを探求する。

## 02. マヤコフスキーの『風呂』

亀山郁夫氏が著した『破滅のマヤコフスキー』には、マヤコフスキーがアインシュタインの相対性理論や H. G. ウェルズの SF 小説を読みタイムマシンに関心を懐いて、戯曲『風呂』にその時代背景を書いた記述がある。

芝居の冒頭から H. G. ウェルズやアインシュタインの名前が飛び出してくる。劇中、発明家のチュダコフは次のように言う。

The fireworks fantasies of H. G. Wells, the futuristic brain of Einstein, and the bestial hibernating habits of bears and yogis—all these are compressed, squeezed together, and combined in my machine!<sup>1)</sup>

チュダコフはタイムマシンが空間と時間を猛スピードで飛ぶという。

Well, with that control switch you isolate the occluded space, and you cut off all currents of the earth's gravitation from all other gravitational forces. Then, with those funny-looking levers there, you put in speed and direction of time. (200)

チュダコフはアインシュタインの『相対性理論』に基づいて作ったタイムマシンの威力を説明する。

Watch! I just touch this dial, and time picks up tremendous speed and starts to compress and alter the space we have compartmented here in this insulated chamber. (202)

チュダコフは50年後に書かれた手紙について話し始める。

Hurray! Let's shout and leap for joy! Just look at this! It's a letter—a letter written fifty years in the future. (210)

タイムマシンの中から燐光の女性が現れて近未来から、現在の時間にやってくる。

Greetings, comrades! I am a delegate from the year 2030. I've been switched into your present

time for twenty-four hours. (239)

『風呂』の幕切れで、調和管理局長官のポベドノーシコフは、「この戯曲で作者のマヤコフスキーは何を言いたかったのか」という。こここのところは、ルイジ・ピランデッロの『作者を探す六人の登場人物』の結末と似ている。言い換えれば、不条理劇作家ピランデッロと『風呂』を劇作したマヤコフスキーは、劇中作家本人が登場させる点で類似している。スターリンの時代に表現主義や不条理劇『風呂』を上演することはかなり難しい情勢にあったことは確かだ。

寺山修司の『邪宗門』は劇中作家本人が登場するところがピランデッロの『作者を探す六人の登場人物』の結末と似ている。従って寺山はマヤコフスキーの『風呂』に影響を受けて『邪宗門』を書いた可能性が出てくる。因みに、G. B. ショーの『ファニーの処女作』とピランデッロの「作者を探す六人の登場人物たち」について劇構成が類似していると指摘されたが、その他にショーは近未来劇『アップルカート』や創造力的神話劇『メトセラに還れ』で時間と空間を飛び越える芝居を書いた。マヤコフスキーの『風呂』はH. G. ウェルズやアインシュタインを介してショーの演劇とも繋がっている。

日本では戯曲『風呂』が関根弘と小笠原豊樹訳で1973年飯塚書店から出版された。寺山修司は1974年に制作した映画『田園に死す』で、タイムマシンを使っている。恐らく、寺山は関根弘と小笠原豊樹訳でマヤコフスキーの戯曲『風呂』を読んだ可能性がある。既に、寺山は1971年映画『書を捨てよ、町へ出よう』を制作し、スクリーンに映写した壁面にマヤコフスキーの詩を引用した。

映画『田園に死す』では、原田芳雄が扮する元共産党員の嵐と八千草薫が扮する化鳥が恐山で心中する場面がある。寺山がマヤコフスキーの戯曲『風呂』を念頭において『田園に死す』撮ったのだとすれば、何故寺山が嵐の心中を描いたのかその疑問の一端が氷解し、この心中シーンを通して、寺山は、マヤコフスキーの死をオマージュとして描いた理由がわかって来る。

守安敏久氏が著わした『バロックの世界』研究では、寺山は、H. G. ウェルズが書いた『宇宙戦争』やオーソン・ウェルズの『火星襲来』に触発されて『大人狩り』を描いたことを明らかにしている。まず、オーソン・ウェルズがH. G. ウェルズの『宇宙戦争』に感化を受けて、ラジオドラマ『火星襲来』を放送して、聴衆をパニックに陥れた。そして、今度は寺山が福岡放送で『火星襲来』を翻案したラジオドラマ『大人狩り』を放送し、聴衆をパニックに陥れた。次いで、寺山は実験映画『トマトケチャップ皇帝』や『ジャンケン戦争』を表わした。寺山の新機軸は単にパニックをテーマに使うだけではなくて、子供は大人の言い成りにはならない提言もラジオや映画で現した。

つまり、守安氏が分析した『宇宙戦争』や『火星人襲来』の考察を辿っていくと、寺山の『田園に死す』のタイムマシーンとマヤコフスキーの『風呂』に出てくるタイムマシーンとの結びつきは意外に思われる。しかし、マヤコフスキーが西側に度々旅行して、当時ヨーロッパで話題となっていた H. G. ウェルズの SF 小説『宇宙戦争』、『タイムマシーン』や、アインシュタインの相対性理論に関心を持った。また、寺山にしても H. G. ウェルズやアインシュタインばかりでなく、マヤコフスキーの『風呂』に出てくるタイムマシーンに強い感化を受けた。むしろ、詩人の寺山が、H. G. ウェルズやアインシュタインばかりでなく、マヤコフスキーの詩や劇からも幅広く知識を得ていたことは注目に値する。

亀山郁夫氏は『破滅のマヤコフスキー』の中で、「マヤコフスキーがピストル自殺をしなかったとしても、早晩スターリンの粛清に遭遇したであろう」と述べている。特にマヤコフスキーのアヴァンギャルド・アートがソビエト政府の標榜した芸術規範と相容れなかったとしても不思議ではなかった。たとえば、当時、フェビアン社会主義のバーナード・ショーはソヴィエトに旅行して演説を行ったが、ショー独特の政治風刺はソビエト政府の要人に悪い印象を与えた。もし、ショーがソビエトに長期滞在すれば早晩暗殺か粛清されたといわれた。亀山氏も指摘しているが、ショーの盟友 H. G. ウェルズの妻はソ連のスパイだった。

ソ連の笑い話に、俳優が芝居でスターリンの悪口を言っていた時に、舞台の袖で仲間がちょうどスターリンが芝居を観に来ていると告げ口すると、忽ち心臓麻痺で死んだという。だが、当時、サルトルですらスターリンの粛清を知らず、ソ連は絵に書いたような理想国家だと信じていた。1962年、ソルジェニチンが『収容所列島』でソ連の現実を暴露しても西側の知識人には俄かに信じ難かった時代があった。

アヴァンギャルド・アーティストを標榜したマヤコフスキーがソビエトにとどまり、詩の朗読会を開催した芸術活動と現実のソ連政府との衝突は避けがたくなっていた。そもそも、ソビエトの社会主義もアヴァンギャルド・アートも帝政ロシアからみれば同じ新時代の標語であった。だが帝政ロシアが滅びソビエトが政権を掌握すると、同じ新しい時代の標語であった筈の政治と芸術の間に亀裂が生じ始めた。

### 03. ドストエフスキー 父殺しの文学

亀山郁夫氏は自著『ドストエフスキー 父殺しの文学』の中で、ドストエフスキーが著わした『カラマーゾフ兄弟』の中で描かれた父殺しを論じている。亀山氏によると、ドストエフスキーの父殺しのテーマは、シラーの『ドン・カルロス』の影響にあると指摘している。

シラーの『ドン・カルロス』ではドン・カルロスの父フェリペ二世は独裁者でドン・カルロ





王妃エリザベトの突然の死によって父フェリペ二世が顕示する父性は『ドン・カルロス』のテーマであることが浮き彫りになって幕となる。

『カラマーゾフ兄弟』の父親フュードル・カラマゾフが息子たちを窮地に陥れる手段は残忍非道であるが、長男ミーチャ、次男イワン、三男のアリョーシャの赤裸々な現実が深く抉りだされるに従い、父親フュードルの存在が次第に希薄になっていく。

亀山氏が指摘するように『カラマーゾフ兄弟』にはシラーのシュトゥルム・ウント・ドラング (Sturm und Drang 疾風怒濤) の影響が濃厚である。父親フュードルが長男ミーチャと女性カテリーナを巡って血腥い闘争を展開する。これは『ドン・カルロス』で父フェリペ二世がドン・カルロスと王妃エリザベトを巡って血腥い争いを展開するのと極似している。

『カラマーゾフ兄弟』では、長男ミーチャが親フュードルを殺害し三千年ループル盗んだかどうかを巡った事件が中心となって展開する。見かけは長男ミーチャが父親のフュードルを殺害するのだから父親殺しがテーマになっている。だが、作中、弁護人は、スメルジャコフが長男ミーチャの失踪した後で、フュードルを殺害したと推測して次のように言う。

He might have waked up from deep sleep (for he was only asleep ... an epileptic fit is always followed by a deep sleep) at that moment when the old Grigory shouted at the top of his voice 'Parricide!'<sup>3)</sup>

更に、弁護人はスメルジャコフがフュードルを殺害したと推測して次のように重ねて言う。

I swear by all that is sacred, I fully believe in the explanation of the murder I have just put forward. 898

次いで、弁護人はスメルジャコフがフュードルを殺害して血の粛清をおこなった状況を推測して次のように指摘する。

Yes, the accumulated effort is awful: the blood, the blood dripping from his fingers, the blood-stained shirt, the dark night resounding with the shout 'Parricide!' 898

弁護人はスメルジャコフがフュードルを殺害した状況を推測して次のように語る。死体は父親のフュードルであると指摘する。

... “what is really damning for my client is one fact ... the dead body of his father. 899

弁護人は殺人が父親フュードル殺しであると主張する。

But it’s not an ordinary case of murder, it’s a case of parried. 900

次いで、弁護人は父親フュードルの殺人が如何に罪深いかを以下のように述べる。

How can such a prisoner be acquitted? What if he committed the murder and gets off unpunished? That is what everyone, almost involuntarily, instinctively, feels at heart. Yes, it’s a fearful thing to shed a father’s blood ... the father who has begotten me, loved me, not spared his life for me, grieved over my illnesses from childhood up, troubled all his life for my happiness, and lived in my joys, in my successes. To murder such a father ... that’s inconceivable. 900

とりわけ、ドストエフスキーは『カラマーゾフ兄弟』の前半で父親殺しが如何に罪深い犯罪であるかを度々シラーが『群盗』で表わした父殺しのテーマを例に引いている。父親のフュードルは次男のイワンを指さし、カール・モールと呼び、長男ドーミトリー（ミーチャ）をフランツ・モールと呼び、自分自身をフォン・モール伯爵と呼んでいる。

... he cried pointing to Ivan, “that is my son, flesh of my flesh, the dearest of my flesh! He is most dutiful Karl Moor, so to speak, while this son who has just come in, Dmitri, against whom I am speaking justice from you, is the undutiful Franz Moor ... they are both out of Shiller’s Robbers, and so I am the reigning Count von Moor” 80

ドストエフスキーは『カラマーゾフ兄弟』の中で、父フュードルが子供に三千ルーブル遺産相続する分を長男ミーチャの女性カテリーナに与えて、カテリーナの気を引き、子供には遺産を与えないという目論見があった。この遺産を巡る争いもシラーの作品『群盗』や『ドン・カルロス』と比較すると一層明らかになってくる。

ドストエフスキーは『カラマーゾフ兄弟』の前半にあたる部分を書きあげたところで急逝する。なので後半部分でこの小説が厳密にはどのように展開するのか分からずじまいになった。

亀山氏は、『カラマーゾフ兄弟』の日本語訳の後に更にエピローグを書き加えて『カラマーゾフ兄弟』の後半部分を予測してみせた。更に、亀山氏は2014年7月に『文藝』に『カラマー

ゾフ兄弟』を書き改めた『新カラマーゾフの兄弟』の執筆を開始した。

スターリンの独裁は極悪非道を極めたが、その渦中であって粛清された芸術家たちの抵抗はその記録を辿っただけでも底知れぬエネルギーに漲っている。また、スターリンの独裁にロシアの父性を見るとするなら『カラマーゾフ兄弟』の父性と連続性があることが見えてくる。

亀山郁夫氏が著した『ドストエフスキー 父殺しの文学』を見ていくとシラーの『ドン・カルロス』や『カラマーゾフ兄弟』の親殺しやスターリンの粛清を歴史的に俯瞰してみる事が出来、父親殺しのテーマが浮き彫りになってくる。

寺山修司はエッセイ『歩けメロス』のなかで、太宰治の小説『走れメロス』には、太宰が典拠としたシラーの『人質』に示されるような父性がないと論じている。そして、寺山は、『人質』のなかの父性とは絶対権力を掌握した専制君主のことであると断じている。

寺山は、1966年ミュンヘンオリンピック記念公演の野外劇上演に参加したが、9月にテロが発生した時、ドイツ政府が取った行動は戦前のナチス政府と同じであると主張し、戦後のドイツ政府さえも、絶対権力を握っている政府が、絶対権力者として行動したのであり、その原点は、いわば、シラーが『人質』や『ドン・カルロス』の著作と父性に結びつきがあると論じている。

亀山郁夫氏は『ドストエフスキー 父親殺しの文学』の中で、シラーの『ドン・カルロス』が齎した父殺しの影響のもとに、『カラマーゾフの兄弟』に著された父殺しを論究している。

寺山は、ミュンヘンオリンピック芸術祭展示や野外劇で、シラーが『ドン・カルロス』や『人質』に描いた父性をもとにした野外劇『走れメロス』を上演した意義は興味深い。

寺山が自書『死書の書』の中で、ミュンヘンオリンピック大会の野外劇で父性を扱い、浅間山荘事件やテルアビヴ空港乱射事件によって、岡本公三らが父に逆らってテロの行動を取ったことに論評を加えた。これは、寺山がシラーの『ドン・カルロス』や『人質』から『カラマーゾフの兄弟』を経て、ミュンヘンオリンピック大会の野外劇『走れメロス』へと受け継いでいく過程で、父性の問題が浮き彫りにしている事が解る。

亀山郁夫氏は『ドストエフスキー 父親殺しの文学』の中で、シラーの『ドン・カルロス』と『カラマーゾフの兄弟』に関係づけて父親殺しを明示しているが、寺山も『ドン・カルロス』と『カラマーゾフの兄弟』にある父性の問題を当然意識していた。というのは、寺山は自作『花札伝綺』(1967)の中で2回「死の家」について語りドストエフスキーの『死の家の記録』を惹起させるからである。また、寺山が『短歌研究』の特選に応募した表題は「父還せ」であり、このテーマはドストエフスキーの父殺しと寺山の父の死を巡る関係が顕在化してくる。特に寺山が幼い頃父はセレベス島で戦病死したのだから父の死は単なる病死や事故死ではなくて、国家権力が関与した死であり、『ドン・カルロス』とも結びついており、寺山がミュ

ンヘンオリンピックの野外劇で『走れメロス』を上演した意図も父性の問題と関係してくる。

ドイツ政府がミュンヘンオリンピックに介入してテロリストを鎮圧したことに抗議して各国の演劇人が結集して集会を開いた。けれども、寺山は抗議集会をボイコットして、野外劇『走れメロス』で使った張り物の板を燃やして抗議するにとどまった。何故、寺山が、ミュンヘンオリンピック各国の演劇人と行動を共にして抗議集会に参加しなかったのか。その理由には不明な点がある。考えられることは、寺山の持論であったが、政治では社会は変革できないが演劇では世の中を変えることが出来るという信念があったからだろう。寺山は身体が弱く酒や煙草を受け付けなかった。確かに寺山は酒や煙草を嗜むポーズをとって写真やコマーシャル撮影に参加した。つまり、寺山は身ぶりで自分の意思を示して、本当に酒や煙草を嗜んだのではなかった。言い換えれば、寺山にとって、ミュンヘンオリンピックでの野外劇『走れメロス』は演劇 (play) であって政治参加 (engage) ではなかった。元々寺山が政治参加するには相当の体力が必要で、自分自身にそれだけの体力がなかった筈だ。

また、寺山は『死者の書』でミュンヘンオリンピックでの野外劇『走れメロス』や浅間山荘やテルアビヴ空港でのテロリストたちの行動を描いている。「岡本公三は、テロを考えた時点で死者になっている。岡本が考えた理想の国家は頭の中にあるだけで実現することは念頭になり、その時点で岡本は死者になっている」と論じている。だから、文字通り『死者の書』は死者の書だというわけである。そうだとすれば、理想の国は頭の中にだけあるのだから、現実には存在しない。従って、寺山の芝居も現実を描いているというよりも、頭の中にある想像の世界を描いていることになる。

#### 04. 亀山郁夫の『新カラマーゾフの兄弟』

亀山郁夫氏は、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を舞台と時代を帝政ロシアから日本の現代に移して『新カラマーゾフの兄弟』を書いた。この翻案はいわば、ボッカチオが『デカメロン』で著したイタリアを、チョーサーがイギリスの『カンタベリー物語』に移したり、あるいは紫式部が『源氏物語』で表わした平安時代の貴族社会を井原西鶴が江戸庶民を描いた『好色一代男』の風俗に移したりしたように、先例は数多く見られる。

亀山郁夫氏の『新カラマーゾフの兄弟』が異色なのは、サリン事件とドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の父殺しをオーバーラップさせていることであり、更に、村上春樹氏が著した『1Q84』の青豆のテロや『海辺のカフカ』のカフカ少年の父殺しが、『新カラマーゾフの兄弟』の父殺しと重なっている箇所が随所に見られることである。

殊に、亀山郁夫氏の『新カラマーゾフの兄弟』が異色なところは、やはり、時代と舞台をロ

シアから日本に移したところにある。亀山氏には既に『カラマーゾフの兄弟』の日本語の翻訳があり、特に、ドストエフスキーの急逝によって未完に終わった『カラマーゾフの兄弟』を、亀山氏が自ら完結してみるといった構想はエピローグとして付け加えられた『カラマーゾフの兄弟』の後半部分にも見られる。けれども、それでもなお、原作者ドストエフスキーのオリジナルと乖離があり、その問題を解決する為に、亀山氏は新しく『新カラマーゾフの兄弟』として書き改めたものと推察される。

亀山氏は『新カラマーゾフの兄弟』の冒頭のところで、リョウの眼を通して、エミリー・ブロンテが『嵐が丘』で表わした冷血漢のヒースクリフとキャサリンとのこの世に存在しない愛の交感を導入している。

リョウに、生涯に残る経験をもたらした一冊の本がある。それがエミリー・ブロンテの『嵐が丘』である。荒涼たるヨークシャーの丘に立つヒースクリフの孤独な面影に深く胸をゆすぶられ、涙にくれる夜が続いた。キャサリンへの愛に絶望し、飽くなき復讐心に燃えるヒースクリフとの一体化が起こった。<sup>4)</sup>

続いて、リョウは映画『ハムレット』を観て、衝撃を受けて以下のように語る。

ヨークシャーの丘はエルシノアの丘と、ヒースクリフはハムレットと二重写しになり、キャサリンはいつのまにかオフィーリアに変身していた。85

次いで、リョウはハンス・ホルバインの絵画「墓の中の死せるキリスト」を眼前にして奇妙な知見に遭遇する。

キャンバスに描かれている死んだキリストが、なぜかしら『嵐が丘』のヒースクリフと二重写しになり、それがリョウの体と一種の不思議な一体化を引き起こしたのである。89

この一種の観念連合は『新カラマーゾフの兄弟』の第一部の結末で、リョウの魂が今度はイサムの子、香奈に憑依し、かくして香奈は彼女の眼を通して、まるで『嵐が丘』墓にいるヒースクリフとキャサリンとのこの世に存在しない霊の交歓を体験することになる。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』で、父フェードルが不可解な死を遂げる経緯はブロンテの『嵐が丘』のヒースクリフの不自然な死を思い出させる。

Mr Heathcliff was there —laid on his back. His eyes met mine so keen and fierce, I started: and then he seemed to smile. I could not think him dead; but his face and throat were washed with rain; the bedclothes dripped, and he was perfectly still.<sup>5)</sup>

ヒースクリフの不自然な死後、ヒースクリフとキャサリンの二人が亡くなった後、少年が彼らを見たという。だが語り手には何も見えなかったという。

‘What’s the matter, my little man?’ I asked.

‘There’s Heathcliff and a woman, yonder, under t’ nab,’ he blubbered, ‘un’ I darnut pass ‘em.’

I saw nothing; but neither the sheep nor he would go on; so I bid him take the road lower down.

440

嵐が丘の住民らは不思議な霊と交わるが、これはカラマーゾフの兄弟一族が謎に満ちた複雑な関係と繋がりがあがるように思われる。つまりそれほど死者キャサリンとヒースクリフが交わす魂の交歓は『新カラマーゾフの兄弟』の中に濃厚に現れる。亀山氏は『新カラマーゾフの兄弟』でブロンテの『嵐が丘』の魂の交歓を重要なモチーフとして使っている。

『ドン・カルロス』や『カラマーゾフの兄弟』に描かれた父性の問題や父母と息子を巡る愛憎は複雑に絡み合い根が深い。『新カラマーゾフの兄弟』の中で、長男ミツルの婚約者瑠佳は亡父黒木兵午と関係があったことを隠し、その為に彼女が兵午殺人事件と関わりがあるのではないかと疑念を懐かせる。その結果瑠佳は必然的に父性の問題を惹起させることになる。吉行淳之介が著した『砂の上の植物群』では伊木一郎は妻が亡き父と関係があったのではないかと疑う。明らかに吉行は『砂の上の植物群』で父性の問題を顕在化させている。

『カラマーゾフの兄弟』ではスメルジャコフがイワンに父フェードル殺しの真相を知っていると話すのが自殺を遂げる。それと同じような伏線が、『新カラマーゾフの兄弟』の中にあり、イサムは須磨幸司が亡父黒木兵午の自殺の原因を知っているのではないかと疑念を懐く。

映像作家、安藤紘平氏がフェルメールの絵画を映像化した『フェルメールの囁き』がある。安藤氏は、寺山修司が戯曲『盲人書簡』で表した「よく見るために、もっと闇を！」<sup>6)</sup>を、今度は安藤氏自身の想像力によって創作し、舞台を400年前のオランダから100年前の日本に移して映像化した実験映画である。時間と場所を自在に飛び回るという観点からみていくと、『フェルメールの囁き』は亀山氏が『新カラマーゾフの兄弟』で描く異次元空間の飛翔と類似点が見られる。

或いは安藤氏が寺山修司の映画『田園に死す』を四次元化した『アインシュタインは黄昏の

向こうからやってくる』は、亀山氏が専門とするマヤコフスキーのSFドラマ『風呂』を寺山が『田園に死す』で表わしたSF小説の空間に基づいており、更にアインシュタインの『相対性理論』で映像化した実験映画でもある。

亀山氏の『新カラマーゾフの兄弟』は、またトマス・ピンチョンが小説『V.』で著した異次元空間を自在に飛び回る手法が見られることだ。映像作品と小説との違いは抜きがたい。だが、亀山氏が『新カラマーゾフの兄弟』を仮に映像化したら、『アインシュタインは黄昏の向こうからやってくる』の異次元空間は、亀山氏が小説でイメージ化した意図と重なるところが出てくるのではないか。

## 05. 村上春樹の『1Q84』

亀山郁夫氏は、村上春樹氏の『1Q84』について、テロリストの青豆が法の裁きを免れている小説の展開に対して、『1Q84』続編の構想を展開している。恐らく、亀山氏はドストエフスキーの『カラマーゾフ兄弟』が作者の死によって中断してしまったので、続編を構想してみたことがあるから、村上春樹氏の『1Q84』の続編の場合もあるのではないかと仮想したものと思われる。

河竹黙阿弥は勸善懲悪で著した『天衣紛上野初花』で、片岡直次郎は悪事のなれの果てに首を獄門にさらされる。けれども、寺山修司は『天衣紛上野初花』を翻案した映画『無頼漢』で、オリジナルの『天衣紛上野初花』にない直次郎の母親を登場させたり、江戸蜂起のさなか、直次郎は母親を背負って敵前逃亡を図ったりする。

寺山が『無頼漢』で書いた直次郎の敵前逃亡は、村上春樹氏の『1Q84』でテロリストの青豆が法の裁きを免れているところと似ている。ところが亀山郁夫氏は、青豆のテロは法の裁きを免れることは出来ないとして『1Q84』の後篇を仮想するのである。

ポール・ヴィノグラードフは『法の常識』の中で、人間は悪を犯すので法律が必要であるとし、人間の性悪説をとっている。また法治国家は、檻に譬えられ、人間はその檻の中の囚人であるとされてきた。

だが、ニーチェは『善悪の彼岸』では、善の中に悪が含まれているのであり、悪を内包した善がより完全な善だと考えた。

いっぽう、亀山郁夫氏によると、『悪霊』のスタヴローギンは、全能の神が悪を抱え、神を越えようとした人格として論じている。そのような観点で見えていくと、『白痴』のムイシュキン公爵は、悪と知りながら、手を出さず、相手が殺されるのを見て見ぬふりをする偽善者になる。

ドストエフスキーの世界は暗いブラックホールの重力で底なしの地下へと引き込まれてしまう予感がする。

ホーキング博士によれば、ブラックホールの重力は、ビッグバンのエネルギーに匹敵すると論じている。

つまり、『悪霊』のスタヴローギンや『白痴』のマイシュキン公爵が悪を抱えた神だとすればブラックホールの重力を思わせる。だが、ブラックホールの重力を、真逆にビッグバンのエネルギーに想定して考えると、明るいギリシャ神話の全能の神ゼウスが思い当たる。ゼウスは様々な姿に変身して女性を誘惑して妊娠させたり殺害したりする。

また、ギリシャ神話は、イマジネーションの力によってのみ、雷神の輝きを発する。これは、譬えるならば、アラビアンナイトのシエラザートの不思議な物語を思いださせてくれる。

村上春樹氏が描いた『1Q84』のテロリスト青豆は、悪霊のスタヴローギンよりもむしろギリシャ神話の全能の神ゼウスやアラビアンナイトのシェヘラザードに近いのではないか。

また、村上春樹氏の『アンダーグラウンド』はサリン事件の被害者からインタビューして纏められたものだ。更に、『約束された場所で—underground 2』は加害者からインタビューして纏められたものである。

ここで、『悪霊』のスタヴローギンや『白痴』のマイシュキン公爵が悪を抱えた神だとすれば、確かに村上氏が纏め『アンダーグラウンド』や『約束された場所で—underground 2』で報告した事件はブラックホールの底なしの重力を思わせる。

けれども、『アンダーグラウンド』や『約束された場所で—underground 2』が『悪霊』のスタヴローギンから埴谷雄高の『死霊』へ直接結びつくに至る懊悩は見られない。なぜなら、『悪霊』や埴谷雄高の『死霊』は単に事件だけではなくて、倫理観や永遠の謎も秘めているからだ。『死の家の記録』『罪と罰』『悪霊』『白痴』『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキー自身が体験した事件よりも精神的にみていくと強力な重圧を遙かに越えてしまっており、まさにその先にあるブラックホールの底無しの重力を思わせる。

いっぽう、ある若い世代の人たちがVR、バーチャルリアリティ、CG（コンピュータ・グラフィックス）などを使ったアニメーションによって生活の大部分を費やしてしまい、本来、人間が経験して身につけなければならない自然哲学の叡智をないがしろにして、仮想現実の世界で生活している。

ヴィノグラードフは『法の常識』で法は、交通規則やスポーツのルールと同じで、規則やルールを守らないと交通渋滞や事故を引き起こし、またスポーツも成り立たなくなると説いている。

だが、デパートや遊園地にあるゲームのルールはその規範を免れている。木や鉄でできた人



形を倒してもルール違反でも犯罪にならない。アニメや映画で人間の殺害を見ている共犯者にはならない。

小説の場合も文字で人を殺しても犯罪者にはならない。恐いのはゲーム感覚には、道德観や倫理観が希薄であることだ。

ドストエフスキーのラスコーリニコフの犯罪には倫理観が働き、スタヴローギンの冷血な反応に対しては道德観によって良心が咎めた。

けれども、村上氏が『1Q84』に著した青豆のテロ行為はスリルこそ感じはするが、倫理観が沸き起こってこない。つまり、ビデオゲームで人形を倒していく感覚である。

倫理観が希薄になり生の人間は機械人形やサイボーグのように無意識に反応している。エントロピー現象のように情報量があふれると、倫理観を持っていた人間までが、脳や身体まで希薄になってしまい退化してしまうかのようなのである。

村上氏が『1Q84』で描いた青豆のテロ行為には倫理観が欠けていることを、亀山氏が『悪霊』のスタヴローギンや『白痴』のマイシュキン公爵の懊悩を介して浮き彫りにした。亀山氏の指摘のおかげで、青豆の良心には倫理観が欠落しているの気づかせてくれた。

ドストエフスキーは百年以上時が経ても、人の心をとらえる。その理由は、生の人間の苦悩があるからであり、SF小説のロボットのように中身がなく実体がないからではない。

村上氏が『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』で表した多崎つくるとは、『白痴』のマイシュキン公爵のように欠けているものがある。また、多崎つくるとの友人は『カラマーゾフの兄弟』の兄弟たちのように色がついて翳がありひと癖もあってとても純粹とはいえない。更に、多崎つくるとはサリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』に出てくるホールデン・コールフィールドのように強いて言えば浮薄な生活を続けている。

しかも、サリンジャーが描く『ライ麦畑で捕まえて』に出てくるホールデンはネルソン・オルグレンやウィリアム・サローヤンが描く人たちが属しているマイノリティが持つ悲哀の翳がない。

村上氏はサリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』に浮薄な生活のエッセンスを掴んで色彩を持たない多崎つくるとのキャラクターを作りだしたことは確かだ。しかし多崎つくるとは『白痴』のマイシュキン公爵の神聖な愚か者と似ているが、闇に潜む苦悩が欠けている。

それは、ロシア革命によって生まれたスターリンの独裁政治によって剥奪された人間の悲哀である。日本では戦前の特高警察によって久保栄や小林多喜二は人間性を剥奪された。アメリカでも、オルグレンは大戦で負傷しモルヒネをうち、中毒になった。シカゴにはモルヒネ中毒の娼婦が大勢いて戦後アメリカの闇の部分を生みだした。村上氏がスコット・フィッツジェラルドやレイモンド・チャンドラーから闇の部分を受け継いでいるが、オルグレンの虚無やサロ

イヤンの静かな悲しみが無い。

オルグレンやサロイヤンのマイノリテイの宿命は確かにドストエフスキーにもない。だが、ドストエフスキー自身が抱える不安は絶え間なく苦しみ続けることによって、その結果その悲痛によって研磨され、泥沼から蓮の花が出てくるように神聖な言葉が生まれでる。

亀山氏が訳出したドストエフスキーの『悪霊』の新訳は、百年以上たっても今の言葉で蘇ることを証明してくれた。村上氏も『偉大なキャツビー』、『ライ麦畑で捕まえて』など新訳をだしてスコット・フィッツジェラルドやレイモンド・チャンドラーを新しく蘇らせた。だが、果たして、村上氏の『IQ84』が百年後に残るかどうかは分からない。

村上氏はスコット・フィッツジェラルドの『偉大なキャツビー』やレイモンド・チャンドラーの『ロング・グッドバイ』やサリンジャーの『ライ麦畑で捕まえて』を自ら訳したばかりでなく、カポテイの『ティファニーで朝食を』やティム・オプライエンの『本当の戦争の話をしよう』やレイモンド カーヴァーの『大聖堂』やジョン アーヴィングの『熊を放つ』やクリス・ヴァン・オールズバーグ『西風号の遭難』、マイケル・ギルモアの『心臓を貫かれて』、ビル・クロウ『さよならバードランド—あるジャズ・ミュージシャンの回想』、シェル・シルヴァスタイン『おおきな木』、マーク・ストランド『犬の人生』、ポール・セロー『ワールズ・エンド』、C・D・B・ブライアン『偉大なるデスリフ』、グレイス・ペイリー『最後の瞬間のすぐく大きな変化』、マーク・ヘルプリン『白鳥湖』、アーシュラ・クローバー・ル＝グウィン『空飛び猫』、ジム・フジリー『ペット・サウンズ』、マーセル・セロー『極北』、ジェフ・ダイヤー『バット・ビューティフル』など幅広く翻訳している。村上氏がこれらの作品を翻訳する事によってアメリカの多様な文化が明らかにした。

村上氏はアメリカの前近代と現代社会と文化の仕組みを網羅的に掌握している。いわば、村上氏は、アメリカの社会を俯瞰して全般的にみている。だが、やはり、アメリカ文化の黎明期を経て現代へと移行する社会から見れば、中でも、村上氏は、主としてフィッツジェラルド、チャンドラー、サリンジャーの時代から遡って現代を見つめようとしているのが浮き彫りになって見えてくる。

## 06. まとめ

亀山氏は、「ロシアのアヴァンギャルドのマヤコフスキーらを研究してから、学生時代に研究していたドストエフスキーを本格的に取り組むことが出来た」と語った。

マヤコフスキーはソビエト政府と共生しながら、スターリンの粛清と対置しなければならなかった。ドストエフスキーはマヤコフスキーの時代の前に属する人であるが、やはりロシア帝

政や封建制度と闘わねばならなかった。ドストエフスキーに対して、かつて、マヤコフスキーは帝政ロシアと闘った者同士だった筈だが、何故、マヤコフスキーはスターリン体制と対峙しなればならなくなかったのか。その理由はスターリンが古いロシアの歴史を引きずる独裁者であったからである。だからスターリンが古いロシアの農奴制を解放しながら、ソビエト体制で信じがたい粛清を行ったのである。

このアンビバレントな状況を探求する為には、むしろ、ソビエト体制の以前の農奴制時代のツアリズムに立ち返って、いわば農奴制と農奴解放をセットにしてロシアを俯瞰して眺めると、農奴制と農奴解放の双方がよく見えてくるのである。

亀山氏が提示してきたロシアのアヴァンギャルド研究を辿ってから、改めてその前の時代に戻ってロシアのアヴァンギャルドに関係する文献を再読すると、レーニンらが革命を起こして封建制度を倒した後もなお、変わらないギリシャ正教や文化遺産が厳然としてあることに気がつく。

ちょうど、現代音楽の作曲家、坂本龍一氏がシンセサイザーを演奏した後で、坂本氏が企画した日本の伝統音楽演奏雅楽や読経や能狂言のエロキューションを提示すると、かえって、古い日本の伝統音楽に新しさを感じてしまう。それとロシアのアヴァンギャルドとギリシャ正教との間にある種の類似性も認める事が出来るのである。従って、亀山氏のロシアのアヴァンギャルド研究を探求した後で、逆に古い封建時代のドストエフスキーがロシアの土着のギリシャ正教を土台にして書いた『罪と罰』『白痴』『カラマーゾフ兄弟』を読むと、時代がソビエトに変わって新しくなったというだけでは、古い時代の文化を過去の遺物として闇に葬ることは出来ないことを明かにしてくれる。亀山氏は「ロシアのアヴァンギャルドを研究したことが、ドストエフスキーを再度研究し直した時に大変役立ちました」と述べたことが強く印象となって残った。

亀山氏が『破滅のマヤコフスキー』で著したマヤコフスキーの自殺はロシアのアヴァンギャルドの象徴となったマヤコフスキーの自爆死を想わせる。一体誰がマヤコフスキーを殺したのか。『破滅のマヤコフスキー』はその謎に答えないままで終わっている。少なくとも、亀山氏が『破滅のマヤコフスキー』で著したスターリンとマヤコフスキーの関係は、スターリンが行った粛清からその軌轢が培養されるのが見えてくる。従ってスターリンとマヤコフスキーの関係は、ちょうど『カラマーゾフの兄弟』の「父殺し」のそれと同じように、灰塵の中から癩癩の持病を抱えたドストエフスキーの「父殺し」のテーマが縮図となって再び復活したのを見る事が出来るのである。

亀山氏は村上春樹の文学を、ドストエフスキーの文学構造と対比しながら論じている。村上氏の『色彩を持たない多崎つくると、その巡礼』に出てくる多崎つくるとの六人の友人は『カラ

『カラマーゾフの兄弟』の兄弟の心理状態と似ている」と論じている。また、村上氏が書いていない『IQ84』の続編について、亀山氏はドストエフスキーが急死した為に『カラマーゾフ兄弟』の二部が書かれなかったことと関連づけて述べている。こうして、亀山氏は村上春樹氏がドストエフスキーの『カラマーゾフ兄弟』を念頭において書いた小説『IQ84』について極めて独創的な解説をしているのである。

村上氏は、吉行淳之介、安岡章太郎、遠藤周作たちの第三の新人をプリンストン大学で教えた経験で、村上氏は小説『ノルウェイの森』から『ドライブ・マイ・カー女のいない男たち』まで、吉行淳之介の『砂上の植物群』や『原色の街』から『暗室』に見られる不幸な女性の哀れさを描く文体が目立ってきた。吉行は父エイスケのアヴァンギャルドの影響を受けながらも、永井荷風の文体が浮き彫りになって滲み出ている。

亀山氏は寺山の『初恋地獄篇』を独自の観点から見ている。恐らく亀山氏はドストエフスキーが『罪と罰』のラスコーリニコフ、『死霊』のイワン・スタヴローギン、『カラマーゾフ兄弟』のアリョーシャに示した原罪意識との関係を『初恋地獄篇』のシュンの原罪意識と比較して見ていると推測される。

また亀山氏は、美輪明宏氏の『よいとまけ』の唄やカルメンマキの『時には母のない子のように』に強い関心を持っている。恐らく亀山氏は、美輪明宏氏やカルメンマキの唄にロシアの庶民と日本の庶民との裾野の部分に共通性を見ているのではないかと推察される。

寺山は、あるときは、政治発言をし、そうかと思えば、その直後、「政治に関心はない」と言いきった。寺山のこのアンビバレントな発言は様々な解釈を呼び起こした。ひとつの理由として、マヤコフスキーが自殺に至る要因と関係があるのではないと思われる。もし、マヤコフスキーがスターリンの粛清の時代に遭遇しなければ、芸術家として一生を全うした筈である。だが、反対に、マヤコフスキーがスターリンの粛清の時代に遭遇したからこそ、マヤコフスキーの受難の芸術が生まれたともいえるのである。

寺山は、マヤコフスキーが死と死を避けることとの狭間を迫体験することによって、政治的な発言をしたかと思えば、次の瞬間にそれを否定する発言をした。それは、寺山がマヤコフスキーの死の誘惑に引き寄せられながらも、最後にきっぱりと、その誘惑を退けたことを意味するように思われる。

また、その拒絶は、寺山が父の死を思いだしたからではないか。マヤコフスキーの自殺の後、マヤコフスキーの子供とその母が遺された。しかし、そのことは、寺山自身が、マヤコフスキーの遺児と同じように、つまり父が戦病死し、母が働きに出て家に居なかった経験から、政治と決別し、政治の現場を去り劇場を選んだのではないだろうか。

或いは、政治と芸術の二者選択を迫られた時、政治を捨てることがよしとされなかった時代

に、寺山はあえて、政治を捨てた。その理由は、マヤコフスキーの政治的自殺と関係があるように思われる。そして、結局、寺山が政治よりも芸術をとったのは、マルセル・デュシャンの生き方を模範にしたからではないだろうか。デュシャンは、最初第一次大戦を避けてパリを逃れ、また、同じ理由で、第二次大戦を避けて、ニューヨークを逃れ、アルゼンチンに避難した。だがマヤコフスキーに限らず多くの芸術家は、戦争に巻き込まれても、祖国を捨てなかった。寺山は、マヤコフスキーの轍を踏まず、デュシャンの人生を選んだものと推測される。

ショーの政治狂想劇『アップルカート』は、主人公が政治参加を標榜しながら、最後に政治を捨て第一線から去る。所謂、アリストテレス以来あるドラマのカタストロフィーの否定である。

村上氏は、フィッツジェラルドやサリンジャーに遡ることにより、メインカルチャーよりもサブカルチャーを選んだ。たほう、亀山氏はロシアのアヴァンギャルドからロシア帝政時代のドストエフスキーに遡ることにより、スターリンの粛清によってロシアのアヴァンギャルドが一度見失ったロシアの原点に立ち返ったのである。

村上氏の場合、マッカーシー旋風やマルセル・デュシャンやオルグレンなどの疾風怒濤の渦中に巻き込まれながら、先祖帰りしたわけではない。村上氏の文体は、亀山氏の文体に比べソフトである。それは、ロシアとアメリカのアヴァンギャルドとの違いだけではない。むしろ、メインカルチャーとサブカルチャーの違いといってもいいかもしれない。亀山氏のドストエフスキーは、ギリシア正教やモラルやツアリズムが濃厚でその心が暗い。いっぽう、村上氏のフィッツジェラルドはジャズエイジのスラップステイックスが濃厚である。更に、村上氏が関心を懐いたサリンジャーの心の病は、ドストエフスキーに繋がる場所があり、この点では、亀山氏と村上氏の接点にもなっている。先にも述べたように、サリンジャー作『ライ麦で捕まえて』のマインドコントロールはFBIを思いですが、ロシア帝政時代とスターリンのソビエトのスパイ活動をも想起させてくれる。

村上氏は小説『ねじまき鳥クロニクル』にノモンハン事件を挿入したり、ドキュメンタリーとしてサリン事件を『アンダーグラウンド』で書いたりしている。そのところは、歴史解釈において、村上氏と亀山氏とは拮抗するところでもある。けれども、亀山氏は『新カラマーゾフの兄弟』でサリン事件を「父殺し」のテーマに関連付けていることは注目に値する。恐らく、亀山氏の『新カラマーゾフの兄弟』は村上氏の『アンダーグラウンド』に対する一種の挑戦状であるとも受け取れる。

村上氏は、亀山氏のロシアのアヴァンギャルドや寺山のアメリカのアヴァンギャルドとあまり関係がない。少なくとも、村上氏は亀山氏のキリスト教に対する信念は必ずしも似ていない。たとえば、亀山氏が著した「新カラマーゾフの兄弟」には井上ひさしの『父と暮らせば』

に見られる父親殺し（弟子たちのキリストの裏切り）が濃厚に存在している。だが、視点を変えて、ホメロスの『オデッセイ』の迷宮探索という観点で見えていくと、村上氏と亀山氏のドストエフスキー感覚は似ている。いわば迷路が二人の作家の緩衝地帯になり、これまで隠れて見えなかったアートの世界に、二人が光を投じてくれているのである。

## 注

- 1) *The Bathhouse (The Complete Plays of Vladimir Mayakovsky, Translated by Guy Daniels, A Touchstone Book, 1968)*, p. 200. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 2) Shiller, Friedrich, *Plays* (Continuum P.C., 1983), p. 280. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 3) *The Brothers Karamazov* by Fyodor Dostoyevsky Translated by Constance Garnett (The Modern Library 1950), p. 896. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 4) 亀山郁夫「新カラマーゾフの兄弟」(『文藝』、河出書房新社、2014秋) 84頁。以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 5) *The Complete Novels of Charlotte and Emily Bronte* (Avenel Books, 1981), p. 440. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- 6) 寺山修司『盲人書簡（上海篇）』(『寺山修司戯曲集3—幻想劇篇』劇書房、1995)、204-205頁。

## 参考文献

- The Complete Plays of Vladimir Mayakovsky* Translated by Guy Daniels (A Touchstone Book, 1968)
- Dostoyevsky, Fyodor, *The Brothers Karamazov* Translated by Constance Garnett (Modern Library College Editions, 1950)
- Dostoyevsky, Fyodor, *Crime and Punishment* Translated by David Magarshack (Penguin Books, 1982)
- Dostoyevsky, Fyodor, *The Idiot* Translated by David Magarshack (Penguin Books, 1983)
- Dostoyevsky, F. M., *Der Idiot* Übersetzt von August Scholz (Rowohlt, 1964)
- Shiller, Friedrich, *Don Carlos* (Rowohlt, 1853)
- Shiller, Friedrich, *Plays* (Continuum P.C., 1983)
- Murakami, Haruki, *A Wild Sheep Chase* (Vintage, 2003)
- Murakami, Haruki, *After Dark* (Harvill Secker, 2007)
- Murakami, Haruki, *NORWEGIAN WOOD* Translated by Jay Rubin (Vintage, 2003)
- Murakami, Haruki, *Sputnik Sweetheart* Translated by Philip Gabriel (The Harvill Press, 1999)
- Murakami, Haruki, *The Wind –up Bird Chronicle* Translated by Jay Rubin (The Harvill Press, 1998)
- Murakami, Haruki, *Underground* (The Harvill Press, 2000)
- Murakami, Haruki, *Underground: The Tokyo Gas Attack and the Japanese Psyche (Panther)* Translated by Alfred Birnbaum (Random House, 2001)
- Murakami, Haruki, *Kafka on the Shore* (Vintage, 2005)
- Murakami, Haruki, *Dance Dance Dance* (Vintage, 2007)

- 亀山郁夫『ドストエフスキー父殺しの文学（上）（下）』（日本放送協会、2004）
- 亀山郁夫『悪霊』（新潮選書、2012）
- 亀山郁夫『ドストエフスキー謎とちから』（文芸新書604、文藝春秋、2007）
- 亀山郁夫『謎とき『悪霊』神になりたかった男』（みすず書房、2005）
- 亀山郁夫『熱狂とユーフォリアスターリン学のための序章』（平凡社、2003）
- 亀山郁夫『礎のロシアスターリンと芸術家たち』（岩波書店、2003）
- 亀山郁夫『終末と革命のロシア・ルネサンス』（岩波書店、1993）
- 亀山郁夫『ロシア・アヴァンギャルド』（岩波書店、1996）
- 亀山郁夫『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する』（光文社新書319、2007）
- 亀山郁夫『甦るフレーブニコフ』（平凡社、2009）
- 亀山郁夫『ドストエフスキー共苦する力』（東京外国語大学出版会、2009）
- 亀山郁夫、江川卓・他『ドストエフスキーの現在』（JCA 出版、1985）
- 亀山郁夫『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房、1998）
- 亀山郁夫『あまりにロシア的』（文春文庫、文藝春秋、2013）
- 亀山郁夫『チャイコフスキーがなぜか好き熱狂とノスタルジーのロシア音楽』（PHP 新書781、2012）
- 亀山郁夫、佐藤優『ロシア闇と魂の国家』（文春文庫623、文藝春秋、2008）
- 亀山郁夫『大審問官スターリン』（小学館、2006）
- 亀山郁夫『『罪と罰』ノート』（平凡社、2009）
- 亀山郁夫「独裁者との対話—ブルガーコフとスターリン」（『ファシズムの想像力歴史と記憶の比較文論的研究』、人文書院、1997）
- 亀山郁夫「自足する猿の小さな悪意—スターリン時代の検閲文化とその一断面」（『メディアの力学』岩波講座文学2、岩波書店、2002）
- 亀山郁夫「人生が本のようにあるうちに—読書をめぐる青春と老境のダイアログ」（『読書のとびら』岩波文庫、2011）
- 亀山郁夫「神の夢、またはIQ84のアナムネーシス」（『村上春樹の読みかた』平凡社、2012）
- 亀山郁夫「中野重治の写真・詩に触発されて」（『国文学』解釈と教材の研究、第44巻10号、1999.8）
- 亀山郁夫「世界の終末はロシアより」（『オウム真理教の深層』「imago 8」青土社、1995）
- サラ・ウォリス、スヴェトラナ『私たちがこどもだったころ、世界は戦争だった』亀山郁夫、赤根洋子、河野麻里子、関口時正、田口俊樹訳（文藝春秋、2010）
- シラー、『ドン・カルロス』野島正城訳（『ゲーテシラー』世界文学全集9、河出書房新社、1961）
- シラー、『ドン・カルロス』北通文訳（『古典劇集』筑摩世界文学大系18、筑摩書房、1975）
- 亀山郁夫、望月哲男「ドストエフスキー読解の可能性」（『ドストエフスキー』現代思想、vol. 38-4、青土社、2010.4）
- 亀山郁夫「革命ロシアとフレーブニコフ」（「特集革命と芸術」『状況』、状況出版、1976.5）
- 亀山郁夫「思索するスクリャービン—ロシア世紀末と音楽—」（『世紀末研究』vol. 4、JCA 出版、1981.8）
- 亀山郁夫「《不死》のアルカディア世界(I)—フレーブニコフの牧歌詩をめぐって」（『ロシア文学研究誌ジュラーヴリ 創刊号、1975.8）
- 亀山郁夫「なべて地平線は火に包まれ—世紀転換期のモスクワ、6つの《光景》」（『プーシキン美術館展シチューキン・モロゾフ・コレクション』朝日新聞社、2005-2006）

- 亀山郁夫、河合忠信『明治初期日露交渉樺太文書(一)』(『ビブリア第82号』1984)
- 亀山郁夫「ゴリキーとスターリン」(『思想』岩波書店、1997.6)
- 亀山郁夫「熱狂を見つめて—20世紀ロシア文化における全体性」(『ロシア・東欧研究』第30号、ロシア・東欧学会年報、2001)
- 亀山郁夫『ドストエフスキー『罪と罰』』(100分 de 名著 NHK テレビテキスト、2013.12)
- 亀山郁夫『偏愛記ドストエフスキーをめぐる旅』(新潮文庫、2013)
- 『亀山郁夫全著作展至福と共苦の旅』(名古屋外国大学・名古屋学芸大学図書館、2013)
- 亀山郁夫「新カラマーゾフの兄弟」(『文藝』、河出書房新社、2014秋)
- 水野忠夫『マヤコフスキー・ノート』(中央公論社、1973)
- ドストエフスキー『悪霊』1・2・3・別巻、亀山郁夫訳(光文社、2011)
- ドストエフスキー『罪と罰』1・2・3、亀山郁夫訳(光文社、2013)
- ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』1・2・3・4、亀山郁夫訳(光文社、2007)
- ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』5—エピソード別巻、亀山郁夫訳(光文社、2009)
- ドストエフスキー『地下室の記録』亀山郁夫訳(集英社、2013)
- グロイス、ボリス『全体芸術様式スターリン』亀山郁夫訳(現代思潮新社、2000)
- ドーリン、アレクサンドル『約束の地の奴隷』亀山郁夫訳(中央公論社、1991)
- アイトマートフ、チンギス『チンギス・ハンの白い雲』亀山郁夫、飯田規和訳(潮出版社、1991)
- カーリンスキー、サイモン『パイオグラフィー・女たちの世紀知られざるマリーナ・ツヴェターエフ』亀山郁夫訳(晶文社、1992)
- ボーレフ、ユーレイ『スターリンという神話』亀山郁夫訳(岩波書店、1997)
- アードイン、ジョン『ゲルギエフとサンクトペテルブルグの奇蹟』亀山郁夫訳(音楽之友社、2006)
- フレープニコフ、B. クルチュヌイフ『地獄の戯れ』亀山郁夫訳(ART VIVANT、4号、1982)
- フレープニコフ、ヴェリーミル『ザンゲジ』亀山郁夫訳(ART VIVANT、7・8合併号、1982)
- ユトケーヴィチ『乾パンの都』(『ザンゲジ』上演をめぐる三つの資料)亀山郁夫訳(ART VIVANT、7・8合併号、1982)
- プーニン、ニコライ『『ザンゲジ』上演をめぐる』亀山郁夫訳(ART VIVANT、7・8合併号、1982)
- タトリン、ウラジーミル『『ザンゲジ』上演について』亀山郁夫訳(ART VIVANT、7・8合併号、1982)
- セミョーノヴァ、スヴェトラナ『フュードロフ伝』亀山郁夫、安岡治子訳(水声社、1998)
- 『マヤコフスキー選集』I・II・III、小笠原豊樹、関根弘訳(飯塚書店、1966)
- 浦雅春・武隈喜一・岩田貞篇『ロシア・アヴァンギャルド・ポエジー言葉の復活』5(国書刊行会、1989)
- 亀山郁夫・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド・ポエジー言葉の復活』5(国書刊行会、1995)
- リュダ&ジャン・シュニツェル、マルセル・マルタン『回想のロシア・アヴァンギャルド』岩本憲児、大石雅彦、宮本峻訳(新時代社、1987)
- 村上春樹『風邪の歌を聞け』(講談社、1979)
- 村上春樹『羊をめぐる冒険』上・下(講談社、1994)
- 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』1・2・3部(新潮社、1987)
- 村上春樹『ノルウエイの森』上・下(講談社、1987)
- 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』上・下(講談社、1996)
- 村上春樹『アフターダーク』(講談社、2004)



- 村上春樹『スプートニクの恋人』（講談社、1999）
- 村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』上・下巻（新潮社、h22）
- 村上春樹『はじめての文学』（文藝春秋、2007）
- 村上春樹編訳『月曜日は最悪だとみんなは言うけれど』（中央公論新社、2000）
- 村上春樹『意味がなければスイングはない』（文藝春秋、2005）
- 村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文藝春秋、2013）
- 村上春樹『1Q84』BOOK1（4月－6月）後篇（新潮社、2012）
- 村上春樹『村上朝日堂ジャーナルうずまき猫のみつけかた』（新潮社、1996）
- 村上春樹『螢・納屋を焼く・その他の短編』（新潮社、1984）
- 村上春樹『アンダーグラウンド』（講談社、1997）
- 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです村上春樹インタビュー集1997-2011』（文藝春秋、2012）
- 村上春樹『約束された場所で』（文藝春秋、1998）
- 村上春樹『走ることに語るときに僕の語ること』（文藝春秋、2007）
- 村上春樹『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』（中公文庫、1991）
- 村上春樹『やがて悲しき外国語』（講談社、1994）
- 村上春樹「僕が「僕」にこだわるわけ。」（『広告批評』35号、1982.3）
- 村上春樹「「カーヴァー・カントリー」を描くロバート・アルトマンの迷宮映画」（『本』講談社、1993.7）
- 村上春樹「「やさしい」映画を作ろうとするほど映像はデモニッシュになる。『ツイゴイネルワイゼン』（『太陽』No. 207、平凡社、1980.6）
- 村上春樹「歌舞伎町のゲーム・センターで時折感じる“リアリティ”。『スター・ウォーズ／帝国の逆襲』（『太陽』No. 209、平凡社、1980.8）
- 村上春樹「完璧な「書き割り」の平面に、ポランスキーの才気がひかる。『テス』（『太陽』平凡社、No. 209、1980.9）
- 村上春樹「くだらない男は撃ち殺せ！ 八〇年代の女はタフにならねば。『ハンター』と『グロリア』（『太陽』No. 209、平凡社、1980.9）
- 村上春樹「バルト海の底で僕を待ち受けていた鰻たちに関する「テーゼ」。『ブリキの太鼓』（『太陽』No. 218、平凡社、1981.4）
- 村上春樹「ドライブ・マイ・カー 女のいない男たち」（文藝春秋、2013.12）
- 河合隼雄、村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』（岩波書店、1996）
- 小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』（講談社現代新書2071、2010）
- 小山鉄郎『空想読解なるほど、村上春樹』（共同通信社、2012）
- 諏訪哲司、「村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を語る。」（七ツ寺通信32号2013年6月）
- 吉本由美『するめ映画館』（文藝春秋、2010）
- 鈴木和成『テレホン村上春樹、デリダ、康成、ブルースト』（洋泉社、1987）
- 『村上春樹が分かる』（AERA Mook Asahi Shinbun Number 75、2001）
- 『村上春樹テーマ・装置・キャラクター』（国文学解釈と鑑賞、至文堂、h20.1.5）
- 「総特集村上春樹を読む」（『ユリイカ』Vol. 21-8、2000.6）
- 「村上春樹の世界」（『ユリイカ』Vol. 32-4、1989）

- 小森陽一『村上春樹論』(平凡社新書、2006)
- チャンドラー、レイモンド『ロング・グッドバイ』村上春樹訳(早川書房、2009)
- フィッツジェラルド、スコット『マイ・ロスト・シティ』村上春樹訳(中央公論新社、2012)
- 明里千章『村上春樹の映画記号学』(若草書房、2008)
- 清水良典『村上春樹はくせになる』(朝日新書、2006)
- 村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話』(文春新書、h12)
- 村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』(文春新書、h15)
- 柴田元幸、沼野允義、藤井修三、四方田犬彦『世界は村上春樹をどう読むか』(文藝春秋、2006)
- ルービン、ジェイ「何故世界中で読まれるのか「1984」翻訳者が語る村上春樹」(文藝春秋、2000)
- 村上春樹訳、解説「〈ポール・セローの世界〉」(『文学界』文藝春秋、1986.7)
- セロー、ポール『緑したたる島』村上春樹訳「ポール・セローの世界第二弾」(『文学界』文藝春秋、1986.8)
- 村上春樹訳、訳、構成「ジョン・アーヴィング〈特別インタビュー〉物語の力について」(『文学界』文藝春秋、1986.1)
- 村上春樹「怒りとその響きかた—J・アーヴィングへのインタビューについて」(『文学界』文藝春秋、1986.1)
- セロー、ポール『文壇遊泳術』村上春樹訳「〈特別企画1〉」(『文学界』文藝春秋、1987.1)
- 村上春樹、村上龍『ウォーク・ドント・ラン村上龍 VS 村上春樹』(講談社、1986)
- 村上春樹、川本三郎『映画をめぐる冒険』(講談社、1985)
- 村上春樹『女のいない男たち』(文藝春秋、2014)

## 「アンチ=プラトン」解釈の試み

尾崎孝之

1923年に生まれたイヴ・ボヌフォワが、1953年に刊行した最初の詩集『ドゥーヴの動きと不動』<sup>1)</sup>は、多くの処女作と同じように、その内に既にボヌフォワの将来の詩作品の世界の展開を予見させるような幾つかの側面を含んでいる。

そこには、シュールリアリストたちの影響を強く受けた詩人が、その影響から離れて、独自の世界を形成しようとする様子が垣間見られるのである。<sup>2)</sup>

ボヌフォワが目指そうとする詩の世界は、既に詩集の題名『ドゥーヴの動きと不動』からも窺うことができる。

ドゥーヴという語は、詩集の中で、一人の女性を思わせる固有名詞として使われている。もともこの固有名詞は、ボヌフォワが最終的にその出版を断念した作品『秘密工作員の報告』の登場人物の一人に与えていた名前だった。ドゥーヴには普通名詞としての「城などの掘割」という意味も残っていると詩人は述べている。<sup>3)</sup>この語は事実、詩集の中で、一人の女性と結びつくだけではなく、「荒地」や「地下を流れる川」「崖」といった自然の情景にも結びついている。

また、ドゥーヴという語には、ボヌフォワがその詩を読んで感動し、やがては自らの詩集を送って親しく交際するようになる詩人ピエール・ジャン・ジュヴ (Pierre Jean Jouve) の名前の響き (Jouve) を聴き取ることもできる。<sup>4)</sup>この時、Douve-Jouve はボヌフォワが目指す詩の世界の理想となるかのようである。

因みに、ミシェル・フィンクはドゥーヴ (Douve) という語の内に「ドーバー海峡 (Douvres)」や「開かれた (ouvert)」という語との共鳴を聴き取っている。<sup>5)</sup>

ダニエル・ランソンはドゥーヴという語について、「特定化することのできない名前、つま

り言ってみれば、空ろな記号表現<sup>6)</sup>と言っているが、それは同時にボヌフォワが目指す詩のあり方の一側面を暗示していると思えることもできる。

最後に、詩人自身も研究者たちも言及していないが、ある一つの事柄を挙げておきたい。それは、ドゥーヴが現実存在する一つの川の名前であるという事実である。

ドゥーヴは、軍港で有名なシェルブールの南から発して、ヴェイ湾に注ぐ、ノルマンディー地方のコタンタン半島を流れる全長64キロメートルの川の名前である。<sup>7)</sup>その河口近くに、1944年のノルマンディー上陸作戦で多くの死者を出したユタ・ビーチがある。この事実の内に戦争の影を読み取ることは余りにも恣意的であるかもしれないが、インドシナで戦争が始まった時、イヴ・ボヌフォワはジルベール・ルリを始めとする仲間と共に、反植民地主義的な文書の作成を計画したりした。<sup>8)</sup>ここに、社会問題、特に戦争に対する詩人の関心の深さを認めることができる。ボヌフォワが、一時期シュールレアリスムに接近したのも、アンドレ・ブルトンとそうした社会問題、政治問題に対する考え方を共有したからでもある。そして、ドゥーヴという語の内に「侵犯の標章であると同時に侵犯の工作員」という側面もあるとボヌフォワは言っている。<sup>9)</sup>

ミシェル・フィンクが、ドゥーヴ (Douve) の内に「ドーバー海峡 (Douvres)」や「開かれた (ouvert)」を聴き取った例に倣えば、この単語の内に「二重性 (double)」の響きを聴き取り、その内に動きと不動が提示する二重性を重ね合わせることができる。<sup>10)</sup>そして、それは例えば甘美さ (douceur) と苦しみ (douleur)、生きることや死ぬことの甘美さと苦しみとどこかで繋がっているのかもしれない。ここに、互いに対立するような二つの動きが並び立つ様子を窺うことができ、それがボヌフォワの詩の世界の主調低音を奏でていると言えるだろう。

ともあれ、動き (du mouvement) は具体的な動きのあり様を示し、不動 (de l'immobilité) は動きの (抽象化された) 不在を示している。しかも二つともが部分冠詞という抽象化の許されない具体的なあり様を示す語によって先立たれている。(〈de〉を部分冠詞を構成する語ではなく、前置詞と解釈すれば、この詩集の題名は『ドゥーヴの動きと不動について』となる。) この部分冠詞からも、あくまでも具体的な場面に留まろうとする詩人の思いを読み取ることができる。

詩を形成するのはことばであるが、正にことばそのものに、この具体と抽象の、あるいは動きと不動の両方の側面がある。極めて単純化して言えば、ことばの中の具体的な側面とは、人が発声するその音であり、白い紙の上に刻印されているその黒いしみであろう。そして抽象的な側面とは、いわゆることばが意味しようとする内容であろう。

例えば、「叫ぶ」という単語を例にして、このことばの具体と抽象について少し考察してみよう。

まず具体的な側面として、〈sa-ke-bu〉という音がそこにはある。そして〈叫ぶ〉という黒いしみが白い紙の上に観察される。一方で、この単語に対面する人は心の中や頭の中で、他人や自分が叫んでいるイメージをその声と共に思い描く。叫ぶというイメージは具象的なものであると思われるかもしれないが、それが今とここという現在の時空に存在しないという意味において、抽象的なものなのである。

しかし次のように、逆の方向から観察してみると、どうなるのであろうか。「叫ぶ」ということばが存在しないとしたら、何が起こるのであろうか。その時、叫ぶという動作が今とここという現在の時空にあったとしても、それが叫ぶという動きとしては認識されないということが起こる。と言うことは「叫ぶ」ということばが、叫ぶという動きを今とここという現在の時空に存在させていることになる。

この意味においては、イメージを具体的に思い描くためには、(それ自体は)抽象的なことば(の存在)がどうしても必要なのである。

もう一つ例を挙げて、ことばをめぐる動きと不動について考えてみたい。それは、ことばを水の流れと解釈して、その流れる水が形成する動きと不動の関係、つまり川となって流れる水の動きと、それを動きたらしめている岸辺の不動の関係について考察することである。つまり、川の流れそのものをことばの流れと重ね合わせる時、流れていく水をことばの意味内容の動きにつなげ、岸辺をことばの音や白い紙の上の黒いしみという不動とつなげることが可能であろう。

しかし、ここでも岸辺という不動がなければ、川の流れという動きは存在しないということを理解しなければならない。

即ち動きは動きだけで自立することはないし、不動も不動だけで自立することはないということである。動きは不動があって初めて動きであり、逆に不動は動きがあって初めて不動たりえるのである。そしてこの関係は、生と死とのそれとも重なり合う。

具体的に言えば、この詩集の中で「ドゥーヴが語る」<sup>11)</sup>というセクションがある。つまり、死んだ女性が生きている詩人に語りかけるのである。死者が生者に語りかける。詩の源としてのことばが、詩人を通して、詩人の場において出現する。言ってみれば、ことばを通して、ことばの場で、死が生と出合いをする。<sup>12)</sup>

詩を作るとは、詩を読むとは、この「動きと不動」という、言ってみればことばの持つ二重性の内に身を置くことなのだ。ことばを持ってしまった人間、ことばに領略されている人間にとって、最早、ことばから完全に切り離された、裸形の今とここという現在の時空に身を置き続けることはできない。しかしボヌフォワにとって詩に関わることは、ことばを通して、ことばの場でそうした時空に身を置こうとする、少なくともそれへの接近を常に試みようとするこ

となのである。

だからこそジャン・スタロピンスキーは、「現前」（今とここという現在の時空に立ち合い、そこに身を置こうとすること）に接近するためには、ことばという道を通るしかないと言うのである。<sup>13)</sup>イヴ・ボヌフォワも、「受肉化（incarnation）＝現前」の叫びはことばが必然的にもたらず「脱肉化（excarnation）＝非現前」の後にしか生じないと言っている。<sup>14)</sup>そしてジョン・E. ジャックソンも「イメージはことばの宿命であり同時に好機である」と言っている。<sup>15)</sup>

さらに言えば、そうした裸形の今とここという現在の時空がもしあるとすれば、それは真空中に譬えることができるかもしれない。しかし、真空の中では人は一瞬たりとも生きることができない。人が生きてゆくためには、ことばという空気を欠かすことができないのだ。

モーリス・ブランショが『文学空間』という書物を刊行したのが1955年であった。<sup>16)</sup>その書物の中でブランショは文学という世界を空間（espace）、しかもそれは、今でもなくここでもないニュートラルな空間としてとらえている。一方で1953年に最初の詩集を刊行したボヌフォワは「詩と希望とをほとんど同じものと見做したい」<sup>17)</sup>と言う。そこには、ボヌフォワにとっての詩の世界がことばとここという空間（むしろ「場所（lieu）」と言った方がいいかもしれない）に関わるものだけではなく、同時に過去—現在—未来という時間にも関わっていることが含意されている。

ともあれ、ボヌフォワは今とここという現在の時空に拘る。しかし先ほどから述べているように、今とここという現在の時空は、ことばとの関わりを通して、ことばとの関わりの中で、今でもなく、ここでもない時空に常に既に結びついてしまっている。ところが、シュールレアリストたちは、ことばやイメージとの関わりを通して、ことばやイメージとの関わりの中で、今とここという現在の時空をいきなり超えようとする、そのことでその現在の時空を否定しようとして、もう一つの世界を作り上げようとする。ボヌフォワには、それを受け入れることができない。詩人はあくまでも今とここという現在の時空から眼を逸らすことはない。

しかも、今とここという現在の時空が必然的に押し付ける苦しみや不幸、最大のそれは愛する人の、あるいは自らの死であるのかもしれないが、そうした苦しみや不幸や死を詩ということばの場で、ことばを通して希望に変えようとする。ことばという希望を生きようとする。何故ならボヌフォワにとって、生きようとする意欲（希望）のないところに生（詩）はないからである。<sup>18)</sup>

これから、1986年に刊行された『詩集』において、『ドゥーヴの動きと不動』の前に置かれた「アンチ＝プラトン」<sup>19)</sup>を構成する〈I〉から〈IX〉までの詩篇を順を追って読みながらイヴ・ボヌフォワの詩作品がどんな特徴を提示しているのかについての考察を始めよう。

## Anti-Platon

(1947)

### I

Il s'agit bien de *cet* objet : tête de cheval plus grande que nature où s'incruste toute une ville, ses rues et ses remparts courant entre les yeux, épousant le méandre et l'allongement du museau. Un homme a su construire de bois et de carton cette ville, et l'éclairer de biais d'une lune vraie, il s'agit bien de *cet* objet : la tête en cire d'une femme tournant échevelée sur le plateau d'un phonographe.

Toutes choses d'ici, pays de l'osier, de la robe, de la pierre, c'est-à-dire : pays de l'eau sur les osiers et les pierres, pays des robes tachées. Ce rire couvert de sang, je vous le dis, trafiquants d'éternel, visages symétriques, absence du regard, pèse plus lourd dans la tête de l'homme que les parfaites Idées, qui ne savent que déteindre sur sa bouche. (p. 11.)

## アンチ=プラトン

(1947年)

### I

たしかにこの物が問題である。実物よりも大きな馬の頭が問題なんだ、一つの町全体がそこに嵌めこまれ、通りや砦がその眼の間を走り続け、曲がりくねって伸びる鼻面と一つになっている。一人の男が木や段ボールでこの町を作り上げて、本当の月で斜めからそれを照らすこともできた、たしかにこの物が問題である、蓄音機のターンテーブルの上で髪を振り乱して回る一人の女の蠟の頭が問題である。

ここのすべてのもの、柳やドレスや石の国のすべてのもの、つまり、柳や石にそって流れる水の国、しみのついたドレスの国のすべてのもの。私は、永遠の密売人、左右対称の顔、眼差しの不在であるあなた方に言いたいのだが、血に覆われたこの笑いは、男の口の上で色褪せることしかできない完璧

な「アイデア」よりも、男の頭の中に重くのしかかっている。<sup>20)</sup>

昼という現実の太陽の明かりの下ではなく、夜の月というもう一つの明かりの下に展開する世界を描いた、キリコ<sup>21)</sup>を始めとするシュールリアリストたちの絵画を思わせるイメージから「アンチ=プラトン」が開始される。そこには、頭に対するボヌフォワの拘りが垣間見られる。「馬の頭」、「一人の女の蠟の頭」、「男の頭」と3回用いられている。この3つの「頭」は外側から見られた頭の形、物としての頭であると同時に、その内側で思考作用が司られる場所でもある。この「アンチ=プラトン」には、「頭」が多用されているが、次の『ドゥーヴの動きと不動』の終わりに近くなると「心（臓）」が多用されるようになる。<sup>22)</sup>

ここでの「頭」はプラトンの究極的な「アイデア」<sup>23)</sup>を司る部位に結びつくよりも、むしろ今とここという現在の時空において、具体的な思いを働かせる部位として用いられている。ボヌフォワは完璧な「アイデア」よりも、不完全な現実の生、死を含んでしまった、その限りにおいて、敗北せざるを得ない生の形としての現前の方を肯定する。何故ならジャン・ピエール・リシャールの言うように、「アイデア」（あるいは「概念」）とは「畏、逃避、閉鎖、麻痺、裏切りとして描写される」ものなのであり、「我々を偽りの安らぎの内に浸らせて本質的なものから迂回させようとする」ものだからである。<sup>24)</sup>

また、「アンチ=プラトン」という形で詩人がプラトンに反対しているのは、ギリシャの哲学者がその『国家』において、詩人は国家にとって相応しくない存在であると言っているからでもあろう。<sup>25)</sup>「アンチ=プラトン」とは従って詩人擁護の書でもある。因みに、ボヌフォワには『ことばが犠牲にされた世紀』と題された詩の存続を祈願する書物もある。<sup>26)</sup>

ところで、詩人が、「この物」という具合に指示形容詞の「この」を強調するのは、あくまでも今とここという現在の時空に拘るからである。しかし問題なのは、今とここが必然的に今でもないここでもないものから成り立っているということである。つまり、「馬の頭」は、ただ単純に今とこここの馬の頭であることはできずに、その内に今でもないここでもない時空としての町を、いわゆる現実とは違うもう一つの世界を含みもっている。

「馬の頭」に内包される町という「アンチ=プラトン」冒頭のこのイメージに、川端康成の『雪国』のやはり冒頭の有名な描写、夕暮れの汽車の窓ガラスに写った娘の顔と外の風景との二重写しの描写を結びつけることができるかもしれない。『雪国』には次のような文章がある。「鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのように動くのだった。（中略）人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた。」<sup>27)</sup>

イヴ・ボヌフォワの詩がうたう「馬の頭」と町の重なりには、しかし、「この物」の持つ物



質性、堅固さがある。一方で、川端の二重写しは「はかな」くて「おぼろ」である。そこには、立体的な世界と平面的な世界との違いが垣間見られる。換言すれば、川端の世界では窓ガラスの上で出会う人物と風景とは「融け」てしまう。これに対して、ボヌフォワの詩篇においては二つの世界が重なり合うことはあっても「融け」てしまうことはない。<sup>28)</sup>

また、町を含んだ「馬の頭」は、マニエリスム芸術を代表する16世紀のイタリア生まれの画家ジュゼッペ・アンチンボルトの絵画世界を彷彿とさせる。この画家は、花や果物や魚貝類を使って、人物像を多く描いている。

例えば、「水」と題された作品について、高階秀爾氏は次のように言っている。「この作品の興味深い点は、個々の魚類や甲殻類だけにあるではありません。これらの標本が集まって一人の人間の胸像を作っていることが、何よりも特徴的なのです。頭に珊瑚の飾りをつけ、首にみごとに真珠の首飾りをしているところを見ると、おそらく描かれているのは女性でしょう。貝の耳には、下の方がふくらんでいる真珠のイヤリングまでつけています。つまり、ここに描かれた海の生物は、それぞれ魚や貝であると同時に、女の人の衣装であったり、顔の一部であるという役割を果たしています。まことに手のこんだ卓抜なダブルイメージの好例といえてよいでしょう。」<sup>29)</sup>

いずれにしても、「馬の頭」という「この物」<sup>30)</sup>に町というイメージが重なり合うのだが、ここでは、何故「馬の頭」なのかを問わなければならない。馬はここでは恐らく馬力という語が喚起する、人間を超えた大きな力を暗示している。そして、その大きな力の内に人間や町を破壊する戦争の持つ力を感得することが許されるかもしれない。因みにアルノー・ビュックスは、この「馬の頭」はトロイア戦争で使われた木馬、その内にギリシャ兵を隠して敵陣に入り込み、トロイアの町を破壊する手段として用いられた木馬の伝説を想起させると言っている。<sup>31)</sup>

さらには、「馬の頭」に嵌めこまれた町が、あたかも生きたもののように「走り続け」たり、馬の鼻面と「一つになっている」という2つの現在分詞の働きによって能動的な、主体的な動きを呈していることが理解される。

しかもその町は、一人の男が「木」や「段ボール」で作り上げたものであるという。ここに、この町と〈I〉の後半部に出てくる「完璧な『イデア』」と、それに結びつく「永遠の密売人、左右対称の顔、眼差しの不在」との重なりが感得されるであろう。<sup>32)</sup>

頭は肉体的な頭であるだけでなく、その内に宇宙と拮抗することのできる無限の広がりというもう一つの想像世界を持っている。そして、頭の中のこの無限の広がりがある今とここという有限な時空にいる人間のあり方に深く関わっているのは先に観察した通りである。

ところで、〈I〉の後半部には、ボヌフォワの生まれ育ったトゥールやその周辺の風景とその

時代が反映されているかのようなのである。そこでは、ロワール川の流れと、第二次世界大戦のときに流された血に覆われた（生の発現としての）笑いがうたわれている。その笑いは、しかし、（生の発現としての）笑いだけではなく、その底に、その内に死を秘めた笑いでもある。それは、死を象徴する頭蓋骨が口を開けたイメージを喚起してもいるのだ。

その時、「眼差しの不在」は、死者の眠りを思わせると同時に、戦争を引き起こして、多くの者を死に追いやってしまった人間の悲惨さに眼を向けようとしないう永遠の存在としてのイデア＝神をも思わせる。

## II

L'arme monstrueuse une hache aux cornes d'ombre portée sur les pierres,  
Arme de la pâleur et du cri quand tu tournes blessée dans ta robe de fête,  
Une hache puisqu'il faut que le temps s'éloigne sur ta nuque,  
O lourde et tout le poids d'un pays sur tes mains l'arme tombe. (p. 12.)

## II

化け物のように恐ろしい武器 石に支えられた影の先端を持つ一つの斧、  
怪我をしたお前が祭りのドレスを着て回る時の青白さと叫びの武器  
一つの斧 時がお前の首筋の上を遠ざからねばならないからだ  
おお重々しく、お前の手の上に一国のすべての重さがのしかかって武器が襲いくる。

「アンチ=プラトン」においては、奇数の番号を付された詩篇の多くが2つの部分に分かれた散文で構成され、偶数の番号を付された詩篇が、4行の韻文で書かれている。そして前者が3人称（〈I〉）の後半の「私はあなた方に言いたいのだが（je vous le dis）」、〈V〉の前半の2つの直接話法「永遠よ、お前が憎い！（Éternité, je te hais!）」「この一瞬が私を自由にしてくれるように！（Que cet instant me délivre!）」、そして〈IX〉の冒頭の直接話法「掘るがいい、お前の歯が（creuse ... tes dents）」という例外を除いて）の語りで、後者が1人称、2人称の語りで書かれている。ここでも、外の世界と内の世界の出会いと重なり合いが見られる。

この最初の韻文では、女が「お前」と呼びかけられている。この「回る（tourne）」「お前」は、〈I〉で同じように「回る（tournant）」という動詞と共に用いられていた「一人の女」とどこかで関係しているのであろう。〈I〉の女は「ターンテーブル」の上で回っていた。<sup>33)</sup>〈II〉で

は、それが「祭りのドレスを着て」回っている。〈I〉と〈II〉との間には、レコードが奏でる音楽、祭りをにぎやかなものにする音楽、生きることの楽しみや悲しみを象徴する、そのことで日常の時空から離れたもう一つの生の時空としての音楽という共通項がある。その生の時空に、「青白さと叫び」をもたらす「武器」が侵入して、女を傷つけ、その生を構成していた時空を破壊しようとする。

またこの女は、例えば「私」の傍にいた現実の女であると同時に、フランスを擬人化しているのかもしれない。第二次世界大戦で多くの死傷者を出してしまったフランスに対する、あるいはボヌフォワの故郷であるロワール川やトゥールに対する「お前」という呼びかけでもあり得る。

日常生活において人は、武器を持つことは稀である。とすれば、この「武器」、あるいは「斧」は、自分や同朋や祖国の生と死とが賭けられた戦争という非日常の時空に結びつくと考えられる。ここでも、「お前のドレス」「お前の首筋」「お前の手」という具合に2人称単数の所有形容詞が、男にとっては愛する女の大切な指標となる名詞に結びついて用いられている。生そのものを象徴する「お前」、その「お前」を傷つけ、死に至らしめようとする「武器」、戦争の脅威をここに聴き取ることが許されるだろう。

ところで、この「お前」に対する呼びかけからは、「私」は「私」だけでは成り立たない、必ず「お前」が要るし、さらには「彼」や「彼女」も要るのだという考えを読み取ることができる。それは、自分を成り立たせる他者の存在と、他者を成り立たせる自分の存在のあり方である。

先にも述べたように、特に初期のボヌフォワにはシュールレアリスムの影響がある。〈I〉でうたわれていた馬の頭にしても、女の頭にしても、それは、キリコに代表されるシュールレアリストたちが描いた世界を感じさせる。所謂現実にも密着してそれを忠実に描いた世界ではなく、現実の裏に潜むもう一つの現実を視る者に感じさせる世界である。そのもう一つの現実を、このボヌフォワの詩篇では、ことばが創出している。

今とここという現在の時空にいて、詩人は、机に座って詩を構成することばを書くこと以外の何もしていない。しかしことばの世界では叫んだり、走ったり、愛したり、死んだりしている。ことばが描き出すこの振舞い (gestes)、中世フランス文学で言う武勲詩 (gestes) がうたいあげる行為、振舞いこそが、ボヌフォワの詩に窺えるもう一つの現実の世界である。<sup>34)</sup>

ともあれ、詩作品を作ること、読むことは、ことばで構築された世界に立ち向かうことであるが、その世界は、詩人にしても読者にしても完璧には「分かる」ということができない世界である。ことばの主な存在理由は、所謂コミュニケーションを成り立たせる意味内容の遣り取りであるが、その意味内容の遣り取りだけでは詩作品は完成しない。

換言すれば、詩人は自分が何をうたっているのか、うたおうとしているのか完璧には「分か」らないし、読者も、詩人が何をうたおうとしているのか本当には「分か」らない。この「分か」らなさがことばの一方的な、一方向的な流れを止めて、そこに宙吊りの時間、時間の宙吊りを生むのだ。

その宙吊りをもたらす一つの要因に、ジェローム・テロの言う詩のことばが出現させる「矛盾」<sup>35)</sup>があるのだろう。読者にできるのは、そして恐らく詩人にできるのも、こうして出現した宙吊りの時間、時間の宙吊りを真正に生きることだけであろう。それでも、読者や詩人が、詩作品の「解説」を試みようとするのは、「分か」りやすいことばを使って安心したい、納得したいという気持がその心の内にあるからであろう。

### III

Quel sens prêter à cela : un homme forme de cire et de couleurs le simulacre d'une femme, le pare de toutes les ressemblances, l'oblige à vivre, lui donne par un jeu d'éclairages savant cette hésitation même au bord du mouvement qu'exprime aussi le sourire.

Puis s'arme d'une torche, abandonne le corps entier aux caprices de la flamme, assiste à la déformation, aux ruptures de la chair, projette dans l'instant mille figures possibles, s'illumine de tant de monstres, ressent comme un couteau cette dialectique funèbre où la statue de sang renaît et se divise, dans la passion de la cire, des couleurs ? (p. 13.)

### III

次のことにどんな意味を貸与したものだろう。一人の男が蠟と色彩で一人の女の模造品を形作り、あらゆる似姿で飾り立て、生きるようにしむけ、巧みに組み合わせた照明によって、動きの縁のこのためらいそのものを彼女にもたらしている、そのためらいを微笑が同じように表明している。

その後で、松明を手にする、気ままに燃える炎に女の全体像を投げ捨て、その肉肌の形が崩れて壊れるのに立ち合い、一瞬の内に可能な千もの像を投影し、多くの化け物の光で輝き、この葬送の弁証法をナイフのように感じるのだろうか、そこでは血の彫像が蘇り、蠟の苦難の内で、色彩を配分し合っている。

〈I〉では「一人の女の蠟の頭」がうたわれていたが、〈III〉でも「蠟と色彩」で形作られた「一人の女の模造品」がうたわれている。また〈I〉の「血に覆われたこの笑い」が〈III〉では「微笑」や「血の彫像」となつてうたい継がれている。そして、〈II〉の「武器 (arme)」という名詞が〈III〉では「松明 (という武器) を手にする (s'arme)」という動詞となつて引き継がれている。こうしたことから、「アンチ=プラトン」の〈I〉から〈IX〉までの9つの詩篇は、相互に緊密な関係を作り出しながら全体を構成していることが理解される。

本稿では、「アンチ=プラトン」を構成する9つの詩篇を、主に二つの観点、その内の一つが、終わったばかりの戦争という観点から、もう一つが、ボヌフォワが目指す詩の世界がどんなものであり得るのかを追求する観点から論じているが、ここでもそれを続けていきたい。

さて、〈III〉の2部構成は、前半が生や創造への肯定的な動き、後半が死や破壊への否定的な動きに結びついているようだ。

例えば、モナリザの微笑のように、果たして微笑しているのか、それとも微笑していないのかを決定することができない宙吊りの状態を、「動きの縁のためらい」と形容することを通して、二つの対立するものが出会い、重なり合う動きを読者に実感させるところにボヌフォワの詩法の一つを感得することができる。

また、彫像の破壊とその蘇りを通して、生と死との微妙な出会いが表現されている。この蘇りもボヌフォワの主題の一つを形成している。彫像が生きた女に蘇る動きは、オリヴィエ・イミも言うように<sup>36)</sup>「ピュグマリオン神話」を思い起こさせる。

それは、ギリシャ神話においてキプロス島の王ピュグマリオンが、自ら作り上げた彫像に恋して、アフロディーテに自分の彫像に似た女に会わせてほしいと懇願して家に帰ると、その彫像が生きた女に変わっていたという話である。

シェークスピアの『冬物語』にも、この神話に題材を借りたと見做すことのできる場面があるが<sup>37)</sup>、イヴ・ボヌフォワは自らの詩集にエピグラムとして、『冬物語』からの抜粋を掲げている。<sup>38)</sup>

因みに、イミは、特にキリスト教によって代表される、不完全なこの世と完全なあの世に二分する考え方に対して、ボヌフォワが反対していると述べている。<sup>39)</sup>だからこそ詩人は、この世とあの世との間を明確に隔離することはなく、2つの世界を、詩のこぼれを通して、こぼれ場で、行き来するのである。

そしてイミは〈III〉が「次のことにどんな意味を貸与したものだろう」で始まり、最後が疑問符で終わっていることから、たとえ前半は建設的、肯定的で、後半が破壊的、否定的な動きをうたっているとしても、その二つの動きは分離されたものではなく、むしろ強く結びついていて、その結びつき方をこそ追求しなければならないと言っている。<sup>40)</sup>

また後半部には本来あるべき「一人の男 (un homme)」の主語人称代名詞「彼 (il)」が欠けている。そこには、他者を破壊しようとする時、自分も破壊されることになるという暗示を読み取ることができるかもしれない。

ところで、オリヴィエ・イミは「与える (donner)」ではなく、「貸与する (prêter)」という語の選択、また「次のこと (cela)」という表現から、冒頭で既に〈III〉の詩篇全体の意味が宙吊りにされることになるかと述べている。<sup>41)</sup>彼はまた、後半部において、破壊の動きが、同時に現実を豊かなものにする「可能な像」の創造にも転換しようと述べているが<sup>42)</sup>、ここにも、死の後の (funèbre)、死を超えた、生の蘇りに通ずる「弁証法」の姿が垣間見られる。それは、生と死との弁証法だ。<sup>43)</sup>生と死との出会いの上に、出会いの場で、出会いを通して、もう一つの生が想定されている。あたかも、「血」が生と死とを、さらにはもう一つの生を喚起するようである。

それでも、それは今とここという現在の時空を離れてしまうことを意味しない。「弁証法」は、今とここという現在の時空と、今でもないここでもないもう一つの世界の両方を超越しつつ、同時にその両方をも保存するのである。それは二分法という閉ざされた世界ではなく、三分法という完結することのない開かれた世界なのである。

詩のことばは、滅びや死から生を取り戻してくれる。今とここにあるものは、今とここにある限りにおいて必ず滅びる。それを蘇らせてくれる働きが詩のことばにはある。それが、ボヌフォワが詩に求める希望のあり方である。

#### IV

Le pays du sang se poursuit sous la robe en courses toujours noires  
 Quand on dit, Ici commence la chair de nuit et s'ensablent les fausses routes  
 Et toi savante tu creuses pour la lumière de hautes lampes dans les troupeaux  
 Et te renverses sur le seuil du pays fade de la mort. (p. 14.)

#### IV

いつも黒く競い合うドレスの下で血の国が追い求められる  
 その時、「ここに」夜の肉肌が始まり、偽りの街道が砂に埋もれる、と言う人がいる  
 すると物知りのお前は、高いランプの光を求めて群れの中を掘る  
 と、死のくすんだ国の戸口であおむけに倒れる。

この〈IV〉の韻文作品でも、女の「お前」が用いられている。〈II〉でも述べたように、この「お前」は、生身の女であると同時に、アレゴリーとして用いられたフランスやフランスの魂のことなのかもしれない。〈I〉でも既に「ドレスや石の国」「水の国」「ドレスの国」という具合に「国」が多用されていた。やはりここにも、2回繰り返されている「国」の使用を通して、ドイツによって蹂躪され、存亡の危機に曝された祖国フランスに対する切迫した気持ちが読み取れるのではないだろうか。

この詩篇は「血の国 (pays du sang)」で始まり、「死の国 (pays (...) de la mort)」で終わっている。戦争という語はどこにも用いられていないが、「血」「黒い」「夜の肉肌」「偽りの街道」「ランプ」「群れ」「死」という単語が、軍隊や戦争の暗い時代の雰囲気や醸し出している。しかも、この4行で構成される韻文は極めてスピーディーにうたわれている。そのスピード感は、例えば1行目における一つひとつの単語の短さ（2音節の単語が3回用いられているが）に由来するし、[s] と [u] という音がそれぞれ5回繰り返されることによってもその感覚が強化されている。

ここで、戦争によって大量に引き起こされる死のことを考える時、「アンチ=プラトン (Anti-Platon)」というこの詩篇の題名（アンチ= (anti-) という接頭辞そのものが既に戦争の本質をなす敵対する動きを提示している）は同時に「アンチ=プルトン (Anti-Pluton)」という響きを持つこともできる。何故なら、ギリシャ神話においてプルトンこそは、死者が赴く黄泉の国を司る王であるし、人間をそこに突き落とす力（その最も極端な例が戦争の破壊力）でもあるからである。

因みに、シュヴァリエとゲールブランドは、ユングの説を引きながら、人間の心の奥底にはプルトンによって象徴される最も深い真理、あるいは最も根本的な欲求としての力が蠢いていて、もし人間がこの力を無視しようとするれば、この力が人の心の内に発酵させるものによって、人間はバランスを失い、そのために引き起こされる破局を通して深淵に突き落とされると、述べている。<sup>44)</sup>

ところで、イヴ・ボヌフォワの詩作品の中で象徴的に用いられるようになる「ランプ」という語が、この詩篇で（「死」という語と同じように）最初に用いられている。夜の闇を照らす光源としてのランプ。それは、死の肉肌を形成する暗闇から生の明るさを取り戻すものとしての詩のことばと結びついている。ここでも、しかし、「弁証法」は作動していて、夜の闇がなければ、死の闇がなければ、ランプの明るさも価値がない、その存在理由がないことになる。希望と切り離すことのできない詩のことばも、従って、絶望の闇がなければ意味を持ちえないことになる。「ランプ」と「死」とが〈IV〉で同時に登場するのは偶然ではない。

ボヌフォワにとっては、絶望や苦しみは、言わば必然的に、希望としての詩のこぼれを求めている。とすれば、絶望や苦しみや死がない時には、希望という詩のこぼれもないことになるのだろうか。そうではなくて、ボヌフォワにとっては、絶望や苦しみや死がない時はないのである。だからこそ、希望という詩のこぼれを常に既に欠かすことができないのだ。それは詩人にとって、生きることとほとんど同じことであるのかもしれない。

V

Captif d'une salle, du bruit, un homme mêle des cartes. Sur l'une : « Éternité, je te hais ! » Sur une autre : « Que cet instant me délivre ! »

Et sur une troisième encore l'homme écrit : « Indispensable mort. » Ainsi sur la faille du temps marche-t-il, éclairé par sa blessure. (p. 15.)

V

一つの部屋に囚われ、物音に囚われた男が一人トランプをまぜる。一枚のトランプには「永遠よ、お前が憎い！」もう一枚には、「この一瞬が私を自由にしてくれるように！」

そして3枚目のトランプにも男は書く、「不可欠の死」。こうして時の裂け目にそって彼は歩く、自らの傷に照らされて。

〈II〉では、女としての「お前」が「怪我をし (blessée)」ていたが、この〈V〉では男が「傷 (blessure)」を負っている。こうして男と女とが傷を共有していることが理解される。もっと言えば、生きることは傷つくことであると詩人が思っていると考えてもいいかもしれない。

ところで〈V〉の、部屋と物音に囚われる男、今とここという現在の時空に限定されてしかありえない男はトランプをまぜている。トランプは、人の運命を占う手段としての、あるいは、今とここを逃れる遊びとしての道具だ。普通、トランプには常に既に印や絵が描かれている。しかし、この作品では、男がトランプにこぼれを書く。男は自分の人生を自分で生きる、人に命令されるがままに生きるのではなく、自分で生きる。しかもそれは「永遠」「瞬間」「死」という過去、現在、未来にわたる時間や、その時間に結びつくことを通して自分を束縛し続けるものからの解放を求めてもいることを意味する。



この箇所でもやはり解放を求めるためには、その前に、それと同時に、束縛に囚われることが不可欠なのだという動きを読み取ることができる。だからこそ死は「不可欠」なものとなるのである。そして〈V〉においても、前半と後半において、生と死との出会いと重なり合いがある。

人は生きている限り、「永遠」や「死」を避けることができない。そして、生と死とは、それだけで完結する二つのものではなく、第三の方に向かって開かれたままになっている。「弁証法」の動きをここに感得してもいい。

ボヌフォワが今とここを肯定しようとしても、それがいきなり出現したり、それが永続することはない。最早存在しないものとしての過去と、未だ存在しないものとしての未来との間に挟まれた時空にあるかもしれない現在を、詩人といえどもそれを直接的に、いきなり (*immédiatement*) 把持することはできない。ボヌフォワが今とここをそれでも肯定しようとし続けるのは、それが一回限りに、そして完璧に実現しないからなのである。

ところで、この9つの詩篇の題名「アンチ=プラトン」を通して詩人は、前述したように、ギリシャの哲学者が想定するアイデアという完全無欠な理想世界に対する疑惑、否定を表明している。それはそのアイデアの世界が、どこかで、永遠につながり、不死につながっているからである。詩人は、そうした完全無欠な理想世界から出発したり、そこに収斂したりすることを望まない。あくまでも今とここという現在の時空から眼を逸らすことはない。

一方で、彼は、詩と希望とを切り離すことができないと言う。そのときの希望と、今とこことはどんな関係にあるのであろうか。希望とは、本来今とこことは違う、今とここにはない状態やものに憧れることである、そのことを通して、希望は一見すると今とここを否定するかのようである。

ボヌフォワが詩をうたわずにいられない、そのことで希望を抱かずにいられないのは、今とここという現在の時空が「永遠」や「死」というアイデア、理想、破局に常に既に曝されているからである。だからこそ、詩を通して、詩の場で、そうしたアイデア、理想、破局に負けないように立ち向かうことが希望の動きと結びつくのだ。「死」という「時の裂け目」を「彼」は背負いながら、「傷つき」ながら、むしろ「傷つく」ことで逆に希望の明かりを灯しながら歩いて行くのである。

## VI

Nous sommes d'un même pays sur la bouche de la terre,

Toi d'un seul jet de fonte avec la complicité des feuillages

Et celui qu'on appelle moi quand le jour baisse

Et que les portes s'ouvrent et qu'on parle de mort. (p. 16.)

## VI

私たちは大地の口に面した同じ国の出だ  
葉群と共謀してたった一度だけ投擲された鑄鉄のお前  
と、陽の光が低くなり、戸が開けられ、死が  
話される時に私と呼ばれる者とは。

この〈VI〉でも〈I〉や〈IV〉と同じように、「国」がうたわれている。そしてここでも以下に観察するように、戦争を暗示する語彙が用いられている。<sup>45)</sup>

ところで、〈VI〉で初めて「私たち」（「お前」と「私」）が登場する。「私たち」が「大地の口」に属しているとは、誰もがそこから生まれ、そこに帰っていくという死に宿命づけられた人間のあり方をうたっている。誰もが「大地の口」から出てきて、そこに飲み込まれるのだ。

「お前」は、葉群の陰から、誰にも分からないようにいきなり発射される銃弾、つまり、死をもたらすもの、あるいはもたらされる死であろう。一方で「私」は、「お前」によって生命を奪われる者であろうか。そのために生きている者のように自ら「私」と名乗ることはできずに、他人によって「私」と呼ばれるしかないのだ。その「私」は、一日の終わりが象徴する生命の終わりにいる。そしてそこで開かれる「戸」とは、「大地の口」と同じく、死への入り口であるかのようだ。

また、「私と呼ばれる (qu'on appelle moi)」と「死が話される (qu'on parle de mort)」における構文の外見上の類似から、「私 (moi)」と「死 (mort)」とが重なり合っている様子が窺える。陽が低くなり、夜の闇が訪れる。それは、死の国の始まりでもであろう。死の家の「戸」が開くことでもあろう。

こうして、生の裏には常に既に死が張り付いていることが理解される。生と死とは表と裏の関係にあって切り離すことはできない。ボヌフォワにとって、生を肯定するとは、同時に死を肯定することでもある。

むしろ、こう言った方がいいかもしれない。生と死とは重なり合う、と。例えば「アンチ=プラトン」〈II〉の中で用いられていた「石」は、武器（や墓石<sup>46)</sup>）という生と死の境を分ける、そのことで生と死とを結びつける動きを呈していた。シュヴァリエとゲールブランドは、ギリシャ神話におけるプロメテウス伝説をめぐって、石と人間との関係を次のように述べてい

る。「石と人間は、上昇と下降という二重の動きを提示する。人間は『神』から生まれ『神』に戻る。自然の石は空から下降し、加工された石は空の方へと上昇する。」<sup>47)</sup>ここには人間と同じように石の二重性が観察される。それは、〈II〉の「石」と同様、生と死とを結びつける石の二重性を思わせる。<sup>48)</sup>

生と死をめぐるっては、生と死とは二つの別のものであるという二面性ではなく、生が死ぬと言えらば、逆に、死が生きるとも言えるという二重性の方を見なければならぬ。もう一度言えば、「石」が死を喚起するとしても、それは同時に生を蘇らせ、立ち上がらせる土台でもあるのだ。

## VII

Rien ne peut l'arracher à l'obsession de la chambre noire. Penché sur une cuve essaye-t-il de fixer sous la nappe d'eau le visage : toujours le mouvement des lèvres triomphe.

Visage démanté, visage en perdition, suffit-il de toucher ses dents pour qu'elle meure ? Au passage des doigts elle peut sourire, comme cède le sable sous les pas. (p. 17.)

## VII

黒い部屋の強迫観念から何も彼を引き離すことはできない。水槽の上に身を屈めて彼は水の広がり  
の下にある顔を見つめようとする。いつも唇の動きが勝利する。

マストをなくした顔、遭難する顔、歯に触れさえすれば、彼女は死んでいくのか。歩む足の下で砂  
が沈み込むように、指を動かすと彼女は微笑むかもしれない。

〈I〉と〈III〉では、女の頭や彫像が蠟や色彩で造形されていたが、この〈VII〉の女は、写真というもう一つの模造品の形式でうたわれている。この3つの詩篇において、女の頭や彫像や写真を出現させているのは男である。ここには男である詩人がうたいあげようとする詩作品は女であるという構図も思い浮かぶ。

前半の死の闇を思わせる「黒い部屋」とは、同時に写真の暗箱、あるいは現像を行う暗室のことでもあろう。写真を現像する時に、写像=イメージが浮かび上がるのを待つと同じように、ここでは、死んでしまった「彼女」、あるいは「彼女」の写像=イメージが蘇るのを待つ

「彼」の姿勢がうたわれている。<sup>49)</sup>「唇の動き」とは、写像＝イメージとしての女が男に語りかける唇の動きであると同時に、写像＝イメージとしての死者が蘇るようと呪文を唱える「彼の唇」であるのかもしれない。本稿の冒頭でも触れたように、『ドゥーヴの動きと不動』の中に「ドゥーヴが語る」というセクションがあって、そこでは死んだドゥーヴが詩人に語りかけている。死者がことばを通して、ことばの場で蘇るのだ。

後半では「歯に触れる」とか「歩む足の下で砂が沈み込む」とうたわれている。「歯」はここでは、〈IV〉でうたわれていた「肉肌」という柔らかさ（〈IV〉でも「肉肌」は死を想起させる「夜」と結びついていた）に対比される、死を思わせる石や骨の堅さに結びつくのであろうか。また、やはり〈IV〉で「偽りの街道が砂に埋もれる」とうたわれていた生を覆う死としての砂が、ここでは、足の下で沈み込むとうたわれている。これは、生を支えるものとしての死＝砂が、生と死との区分局を超越した時空の内に滑り込む様子を提示しているのであろう。

また「歯」について次のように考えることも可能であろう。それは、前半でうたわれていた、死に勝利して男に語りかける女の唇の間に見えていた歯である。その女の顔は「マストをなくした」ような、「遭難する」ような顔をしていて、必死に男に訴えかけているのだが、その歯に男が触れる（toucherには人やものに弾丸を命中させるという意味もある）ことで、女は語ることを止めてしまうのであろう。そして男がさらに指を移動させることで、女は「歩む足の下で砂が沈み込む」ように「微笑む」。それは死を受け入れる「微笑」なのかもしれない。その時の男の指の動きは前半の唇のそれと同じように、どこかで祈りの時の指の動きでもあろう。

いずれにしても、ここでうたわれている「歯」や「砂」が生に結びつく動きの内では用いられているのか、死に結びつく動きの内では用いられているのか明瞭に結論づけることはできない。

ボヌフォワは、それでも、生とは何か、死とは何かを問わない。何故なら、その問いが正にプラトンのアイデアに向かうからである。そもそも、生とは何か、死とは何か問うてもそれに対する答えは得られない。私たち人間は常に既に生を与えられ、そのことで死を与えられている。生を与えられ、そのことで生を奪われるように宿命づけられている。本質的な受動性がそこにはある。

私たちにできるのは、私たちが能動的に振る舞えるのは、生きること、生きようとするだけだ。「風が出てきた！ 生きてみなければならぬ！ 〈Le vent se lève!... Il faut tenter de vivre!〉」とポール・ヴァレリーは「海辺の墓地〈Le cimetière marin〉」<sup>50)</sup>の最後にうたう。ここでは生きることが問題になる。生きるとは何かが問題なのではなく、何かは明瞭には分からないとしても、とにかく生きることが問題になる。

VIII

Captive entre deux voleurs de surfaces vertes calcinée

Et ta tête pierreuse offerte aux draperies du vent,

Je te regarde pénétrer dans l'été ( comme une mante funèbre dans le tableau des herbes noires )

Je t'écoute crier au revers de l'été. (p. 18.)

VIII

緑の表面を盗む二人の泥棒の間に捕まって焼け焦げ

風のドレープにお前の石の頭が捧げられると、

(黒い草の絵の中に入る葬送のマントのように) お前が夏の中に入って行くのを私は見つめる、

裏返された夏にお前が叫んでいるのを私は聴く。

〈V〉が「一つの部屋に囚われ、物音に囚われた男が一人 (Captif d'une salle, du bruit, un homme)」で始まっていたように、この〈VIII〉も「二人の泥棒の間に捕まって (Captive entre deux voleurs)」で始まっている。〈V〉では男がトランプをしていたが、〈VIII〉では女である「お前」が捕まっている。そして、二つ前の韻文〈VI〉では、「お前」は「私」に死をもたらす者、あるいはもたらされる死としてうたわれていた。事実、ここで「お前」は「焼け焦げ」たとうたわれているが、この語は、どこかで戦場での死を思わせる。

ところで、「緑の表面を盗む二人の泥棒」とは、緑が生命を象徴することを考慮する時、今とここという現在の時空を前後左右から盗もうと窺う過去や未来という時間、あるいはここではなくあそこという空間のことを暗示しているのかもしれない。

それでも「お前」は「夏の中に入って行く」し「裏返された夏に叫ん」でもいる。つまり、「私」にとっては、死んだ「お前」は「私」がうたいつつある詩の中では生き続けるのである。

また、「緑」と「黒」、「石」と「風」、「夏」と「葬送」、「見つめる」と「聴く」という具合に、普段は対立する語が並んで用いられている。それは、あたかも、生と死とがそこで出会いをしているかのようである。

そして「捕まって (captive)」と「焼け焦げ (calcinée)」という具合に同じような音で構成される2つの単語が1行目の始まりと終わりを形成している。また、3行目も「入って行く (pénétrer)」と「夏 (l'été)」という具合に同じ音の繰り返しが効果的に使われている。詩の中における音の役割は、ことばが喚起するイメージに劣らず重要なものである。この視覚と聴覚

との出会いは、「見つめる」と「聴く」の使用の内にも観察される。

生命の高揚する「夏 (été)」は、同時に「ある (être)」という動詞の過去分詞 (été) としての、過ぎ去ってしまった存在としての、死でもあり得る。

総じて言えば、ここでも、現前とイメージ、あるいは動きと不動、生と死の二重の関係を観察することができる。

ところで、現前といっても、それは私たちが何もしないでもそこにあるものではない。現前はイメージという不在を通して、不在によって、始めて存在するようになるものであることにもう一度注意しておこう。これはどういうことであろうか。

私たちは見たり聞いたり味わったり嗅いだり触れたりして、つまり五感の働きの内で、五感の働きを通して、感覚する (sentir)。この感覚 (sens) が意味 (sens)、方向 (sens)、道筋 (sens) という言わば広義のイメージを喚起する。

例えば、一つの青い広がりを見るとき。ことばを知る前の幼児は、この一つの青い広がりを目に映すとしても、必ずしもそれを「見」ているとは限らない。それを大人のように「見る」とは、その一つの青い広がり「海」とか「空」ということばを与えることであろう。目に映すことと「見る」こととはこうして同一のことではなくなる。「海」ということば、「空」ということばが一つの青い広がりにとって代わる、あるいはその一つの青い広がりにも重なる、さらにはそれを覆ってしまうところにイメージというものが生まれる。

その時、イメージはことばと極似たものになる。幼児の目に映った像 (vision) そのものがイメージなのではなくて、イメージはどこかで「海」や「空」ということばと結びついてしまっている。それは「空」のイメージであり、「海」のイメージでないのであって、何ものでもないもののイメージ、つまりことばと結びつくことのないもののイメージというものは考えられないと言ってもいい。

恐らく詩人はイメージ以前、ことば以前の像 (vision) から出発して、ことばというイメージを経由してもう一度出発点としての像 (vision) を現前させようとする。換言すれば、ことばを使って、ことばでは表現しきれない時空を現前させようとする。一方で、詩の読者は、詩人が使っていることばというイメージから出発して、詩人が最初に感じた像 (vision) の時空に辿り着こうとする。『『これが手だ』と、『手』といふ名辞を口にする前に感じてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい』<sup>51)</sup>という中原中也のことばを使えば、『手』がイメージであり、「手」が像 (vision) に相当するのである。

IX

On lui dit : creuse ce peu de terre meuble, sa tête, jusqu'à ce que tes dents retrouvent une pierre.

Sensible seulement à la modulation, au passage, au frémissement de l'équilibre, à la présence affirmée dans son éclatement déjà de toute part, il cherche la fraîcheur de la mort envahissante, il triomphe aisément d'une éternité sans jeunesse et d'une perfection sans brûlure.

Autour de cette pierre le temps bouillonne. D'avoir touché cette pierre : les lampes du monde tournent, l'éclairage secret circule. (p. 19)

IX

人が彼に言う。柔らかいこの少しの土、彼女の頭を掘るがいい、お前の歯が一つの石を再び見つけるまで。

ただ転調や、推移や、均衡の震えや、既に至る所で起こった炸裂の内に確証された現前だけを感じる彼は忍び寄り死の瑞々しさを求め、若さのない永遠や火傷をすることもない完璧さに易々と勝利する。

この石のまわりで時が沸騰する。この石に触れたために、世界のランプがまわり、秘められた照明が循環する。

〈IX〉では「人」が、〈VI〉で「私と呼ばれて」いた男に呼びかける、むしろ命令する。「柔らかいこの少しの土」と同格に置かれた、〈VIII〉で「お前の石の頭」とうたわれていた「女の頭」を掘るようと、しかも、男の歯が女の生きた証であるかのような「一つの石」を見つけたら掘るようと命令する。〈VII〉で「触れる」べくうたわれていたのは「彼女の歯」であったが、この〈IX〉では男である「お前の歯」が「石を見つける」とうたわれている。とすれば、ここでも死んで石になってしまった女を見つける、女を蘇らせようとする男である詩人の「歯」をめぐって、そこに詩のことばの働きの暗示を読み取ることが許されるかもしれない。その時、「石」はことばの働きが作り上げる詩作品の形姿を取ることになるであろう。

今まで奇数の番号を付された詩篇はすべて二つの部分から成り立っていたが、最後の〈IX〉

に来て、それが三つの部分に分けられている。二つから三つへのこの変化はやはり、「アンチ=プラトン」の次に配置されている『ドゥーヴの動きと不動』に付されたエピグラムの作者ヘーゲルの言う「弁証法」の動きを反映したものかもしれない。二つの互いに対立するものが出会うが、最終的には三番目の時空へと開かれたままで対立関係は、超越されつつ存続するのである。

「アンチ=プラトン」は、〈I〉の「馬の頭 (tête de cheval)」で始まり、〈IX〉の「彼女の頭 (sa tête)」で終わっている。〈I〉の「馬の頭」はその内に一つの町を取っていた、一つの町と二重写しになっていた。〈IX〉の「彼女の頭」でも、頭は「柔らかいこの少しの土 (ce peu de terre meuble)」と重ね合わされている。<sup>52)</sup>頭と町や土との重なりは、ことばと今とここという現在の時空との重なりに通じている。

そして、〈VII〉に出てきた「歯に触れる (toucher ses dents)」と共鳴するかのように「お前の歯が石を再び見つける (tes dents retrouvent une pierre)」とうたわれている。「歯」をめぐることは前述したように、いろいろな意味が存在するであろうが、ここでは詩人のことばの働きを暗示する「歯」が、一つの具体的な詩作品、しかも砂や土とは違って持続する堅固さを備えた詩作品を暗示する「石」を「再び見つける」という先ほどの解釈を提示することができる。

そして、2番目の部分では「彼」がうたわれていて、その「彼」も偽りの世界であるアイデアの完璧さの不動ではなく、今とここを脅かす「死の瑞々しさ」に結びつく様々な変化との出会いを求めている。ここでも、〈VII〉で女の唇が死に対して「勝利 (triomphe)」したように、男はアイデアが象徴する「若さのない永遠や火傷をすることもない完璧さ」に「勝利する (triomphe)」。

最後の3番目の部分に来て、「この石 (cette pierre)」が二回繰り返されている。「この石」は〈IX〉の冒頭でうたわれている詩のことばや女の死に結びつく「一つの石」であろう。〈VII〉では「歯に触れさえすれば、彼女は死んでいくのか」という文脈で用いられていた「触れる (toucher)」が、ここでは「この石に触れたため (D'avoir touché cette pierre)」とうたわれていて、それが完了したことが強調されている。そのために死がもたらされ、従って死に結びつく時がもたらされることになる。

つまり、1番目にうたわれていた石と2番目にうたわれていた死とが会って、そこに時間がマグマのように生じるあり様がここでうたわれている。そして動き出した時間をもたらす死の闇を照らすランプとしての詩も誕生し、そこに秘かに希望の明かりを灯し始めるのである。

また〈I〉で「女の蠟の頭」と共に用いられていた「回る」が〈IX〉の最終行で「世界のランプ」と共に用いられていることから、女の頭が物そのものでありながら、同時に詩のことばを創出する世界の広がりを持っていることが理解されるのである。



最後に「アンチ=プラトン」という詩篇の題名についてももう少し補足しておこう。

イヴ・ボヌフォワがここで名付けているプラトンは、勿論ギリシャの哲学者であるが、その中でも彼の「イデア」という考え方に対してボヌフォワは反対を唱える。極めて簡略化して言えば、「イデア」はこの世に存在するすべてのものが、この世とは別の時空にある理念の反映にしかすぎないという考え方である。その限りにおいて、今とここという現在の時空に存在するものは、それ自体としては存在していないことになる。この現在の時空の否認が詩人には耐えられない。「イデア」を肯定するために現在の時空を否定することは詩人にはできない。

たとえ今とここという現在の時空で展開されるものが、その前の虚無（「永遠」）とその後の死後という二つの永遠によって制限、限定されているとしても、それは、制限し、限定する永遠よりも、とは言えないとしても、それに劣らず貴重なものなのである。ただ前述したように、今とここという時空はそれだけが直接的にいきなり出現するものではない。それを制限しそれを限定するものによってしか、あるいはそれらを通してしか出現しえないし、存在しえない。

と言うことは、今とここを生きようとすればどうしても今でもなくここでもない時空を想定せざるを得ないことになる。極言すれば、生を生きるには死を想定せざるを得ないことになる。そして、受け入れた死の圧力に負けないで、今とこの生を肯定しなければならない。そこに働くのが希望の力なのである。死の圧力に負けない希望は、ボヌフォワの詩の世界において死者が蘇る、死者が語るという形で表現される。死を受け入れざるを得ないが、しかし、詩のことばの場で、詩のことばを通して死者はことばとして蘇るのである。

ただ「アンチ=プラトン」に見られる死は、それが1947年という第二次世界大戦の直後であることを考慮する時、戦争における死、戦場での死が詩人の意識を侵略していたのではないのかというのが、本稿の視点の一つであった。そのために「アンチ=プラトン」は同時に「アンチ=プルトン」でもありうるという意見を述べておいた。この二つは「アンチ=モール（mort=死）」という共通項を持っているのである。プラトンは今とここという現在を否定し、プルトンは今とここという現在に生きる人を破壊して死に至らしめるからである。

しかし忘れることが許されないのは、「アンチ」と言っ、あるものに反対するという行為は、その前提として反対すべき対象を想定していなければならないということだ。つまり、プラトンやプルトンや死は、それを一回限りに否定したり、遠ざけたりすることはできなくて、反対するその都度まずそれを受け入れなければならない。ボヌフォワにとって重要なことは、死を受け入れた後で、それを乗り越えようとする事だ。それが詩人にとっての希望という詩のことばのほのかな明かりになるのだ。<sup>53)</sup>

注

- 1) *Du mouvement et de l'immobilité de Douve* dans *Poèmes*, Mercure de France, 1986, pp. 23–91.
- 2) « Entretien avec John E. Jackson sur le surréalisme » dans *Entretiens sur la poésie (1972–1990)*, Mercure de France, 1990, pp. 68–87.
- 3) « Lettre à John E. Jackson » dans *Entretiens sur la poésie (1972–1990)*, pp. 95–96.
- 4) 平井照敏も、ドゥーヴの内にジュエヴの響きを聴き取るジャン・ルスロの意見を記述している。(平井照敏、『イヴ・ボヌフォワ研究』、1967年、115頁。)
- 5) Michèle Finck, *Yves Bonnefoy le simple et le sens*, José Corti, 1989, pp. 57–58 et pp. 66–67.
- 6) Daniel Lançon, *Yves Bonnefoy histoire des œuvres et naissance de l'auteur*, Hermann, 2014, p. 115.
- 7) *Grand Larousse encyclopédique*, Librairie Larousse, 1961. (non paginé)
- 8) Daniel Lançon, *Yves Bonnefoy histoire des œuvres et naissance de l'auteur*, pp. 44–45.
- 9) « Lettre à John E. Jackson » dans *Entretiens sur la poésie (1972–1990)*, p. 96.
- 10) この動きと不動の二重性については、「ラヴェンナの墓」の中の次の文を参照。「水の清澄さと装いの流麗さとが会おうと、荘厳な不動と秘められた動きとが会おうと、不思議なことに最悪の不安も鎮まるのだ。」(*L'improbable*, Mercure de France, 1971, p. 16.)
- 11) *Du mouvement et de l'immobilité de Douve* dans *Poèmes*, pp. 57–70.
- 12) ことばは、人や物を死に結びつけるが、それは他方において人や物を死から逃れさせてもくれるという動きについては、ジェラルド・ガザリアンの文を参照。(Gérard Gasarian, *Yves Bonnefoy, la poésie, la présence*, Champ Vallon, 1986, p. 23 et p. 51.)
- 13) Jean Starobinski, « Préface » aux *Poèmes* (d'Yves Bonnefoy), Poésie / Gallimard, 1982, pp. 27–28.
- 14) *Le Nuage rouge*, Mercure de France, 1977, p. 344.
- 15) John E. Jackson, *Yves Bonnefoy*, Seghers, 2002, p. 26.
- 16) Maurice Blanchot, *L'espace littéraire*, Gallimard, 1955.
- 17) *L'improbable*, Mercure de France, 1971, p. 149.
- 18) ボヌフォワは次のように言っている。「存在があるようにという私たちの意欲のあるところにしか存在は存在しない」(*La Présence et l'image*, Mercure de France, 1983, pp. 43–44.)
- 19) *Anti-Platon* dans *Poèmes*, pp. 9–19. (本文における引用では、その末尾に頁のみ表示した。) この作品は最初、1947年に発表されたが、1962年に縮小された。(「Note bibliographique」 dans *Poèmes*, p. 333.)  
 ジャックソンが著した2冊のボヌフォワの評伝の内、1979年版の「作品抜粋 (choix de textes)」には「アンチ=プラトン」が掲載されていないが、2002年のボヌフォワ自身による「作品抜粋」には「アンチ=プラトン」が掲載されている。この事実から詩人のこの作品に対する愛着を読み取ることができるであろう。(John E. Jackson, *Yves Bonnefoy*, Seghers, 1979 et *Yves Bonnefoy*, Seghers, 2002, pp. 99–102.)
- 20) 下線は、原文がイタリック体であること、そして「 」は、原文が大文字で始まっていることを示す。
- 21) *L'arrière-pays*, Flammarion, 1982, pp. 53–61.  
 キリコの絵画に対しては、それが想像の作り上げる、その意味において現実にはありえない世界であると感じていたボヌフォワは、イタリアに行ってそれが実際に存在していて、そこに居住することもできることを発見する。
- 22) 11–19頁の「アンチ=プラトン」では「頭」5回、「心(臓)」0回という使用状況であり、71–91頁の「オ

レンジ園「真実の場所」では「頭」2回、「心（臓）」6回という使用状況である。

23) 『哲学事典』、平凡社、1983年、85頁。

なお、アルノー・ビュックスは、「イメージ=世界」をめぐる、プラトンとボヌフォワが類似した考え方をしているが、プラトンがあくまでも「イメージ=世界」に拘るのに対して、ボヌフォワは現実の方を目指すという違いがあるとしている。(Arnaud Buchs, *Yves Bonnefoy à l'horizon du surréalisme*, Galilée, 2005, p. 243.)

24) Jean-Pierre Richard, *Onze études sur la poésie moderne*, Éditions du Seuil, 1964, p. 208.

25) プラトン、『国家』『プラトン全集』第11巻、藤沢令夫訳、岩波書店、1987年、718頁。

26) *Le siècle où la parole a été victime*, Mercure de France, 2010.

27) 川端康成、『雪国』、新潮文庫、2014年、10頁。

28) しかし、*Du mouvement et de l'immobilité de Douve*, p. 34, p. 36には、ドゥーヴの肉体が土に融ける情景がうたわれている。

29) 高階秀爾、『岩波美術館・テーマ館第11室』、岩波書店、1983年。(頁表示なし)

30) ボヌフォワは、1980年の「手紙」において、「今」だったら「物」と名付けずに「現前」と名付けると言っている。(« Lettre à John E. Jackson » dans *Entretiens sur la poésie (1972–1990)*, pp. 92–93.)

31) Arnaud Buchs, *Yves Bonnefoy à l'horizon du surréalisme*, p. 269.

32) *Ibid.*, p. 273.

33) アルノー・ビュックスは、「ターンテーブルの女」のイメージは『客観的な照明』の次の文に由来すると述べている。「夜の広場には多くの彫像があって、その頭がレコードのように回るであろう」。(Arnaud Buchs, *Yves Bonnefoy à l'horizon du surréalisme*, p. 278.)

34) *Du mouvement et de l'immobilité de Douve*, pp. 43–56. には、「最後の振舞い（武勲詩）(Derniers gestes)」と題された15の詩篇を取めたセクションがある。

35) Jérôme Thélot, *L'immémorial*, encre marine, 2011, p. 253.

36) Olivier Himy, *Yves Bonnefoy—Poèmes commentés*, Champion, 1991, p. 23.

37) Shakespeare, *Winter's Tale in Complete Works*, Oxford University Press, 1974, pp. 352–354.

38) *Poèmes*, p. 161 et p. 229.

39) Olivier Himy, *Yves Bonnefoy—Poèmes commentés*, p. 20.

40) *Ibid.*, p. 22.

41) *Ibid.*, p. 22.

42) *Ibid.*, p. 25.

43) 『ドゥーヴの動きと不動』のエピグラムでボヌフォワはヘーゲルの次の文を引用している。「だが精神の生は、死の前で決してたじろぐことはないし、死から身をきれいに守る生でもない。それは死を支え、死の内に身を保つのである。」(*Du mouvement et de l'immobilité de Douve*, p. 21.)

44) Jean Chevalier, Alain Gheerbrant, *Dictionnaire des symboles*, Robert Laffont / Jupiter, 1984, pp. 768–769.

45) 詩人は『ドゥーヴの動きと不動』の中の「真実の名前」において、ドゥーヴについて「私はお前を戦争と名付けよう、そしてお前から/戦争の自由を取り上げよう」という具合に「戦争」という名詞を使っている。( *Du mouvement et de l'immobilité de Douve*, p. 51.)

46) ボヌフォワは「ラヴェンナの墓」において、墓石に彫られた葡萄の実について「そこに、心が知らず識らずのうちに、生きることの栄光と死の教えとを汲み尽くしにやってくる。石とはそういうものだ」と述べな

がら、石が持つ二重性を表現している。(L'improbable, p. 18.) また、その「ヴァレリー論」の中で、「形を、意識や陽光の中で作動する精神と同一視しているが、石にとってしか、つまり破壊や夜にとってしか形はないということを知らなかった」ヴァレリーとは違って、石の秘める死の重みを強調している。(Ibid., p. 145.)

47) Jean Chevalier, Alain Gheerbrant, *Dictionnaire des symboles*, p. 751. (太字は、原文がゴシック体であることを示す。)

48) ミシェル・フィンクも石を生の実と死の両方に結びつけている。(Michèle Finck, *Yves Bonnefoy le simple et le sens*, p. 55 et p. 61.)

49) 詩人はドゥーヴと共にブラック (Plaque = 感光板) と名付けられるべき人物を『秘密工作員の報告』に登場させることを計画していた。その名残がこの詩篇の「黒い部屋 (暗室)」にもあると言っている。(« Lettre à John E. Jackson » dans *Entretiens sur la poésie (1972-1990)*, p. 95.)

50) Paul Valéry, *Charmes* dans *Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1957, p. 151.

ボヌフォワは、しかし、ここでヴァレリーがうたっている「風」は(本当の)風ではない、そのためにヴァレリーのうたはボヌフォワが目指す祈願の形の芸術ではなく、閉じた形の芸術でしかないと言っている。(L'improbable, p. 145.)

51) 中原中也、「芸術論覚え書」『中原中也全集』第3巻、角川書店、1967年、81頁。

52) 注28参照。ここに「アンチ=プラトン」と『ドゥーヴの動きと不動』との連続性を読み取ることができる。

53) ジューヴは自らが目指す詩について次のように言っている。「詩とは、死んだとしても、そのことによって生き延びる偉大な『エロス』の生そのものである」(Pierre Jean Jouve, *Sueur de sang* dans *Œuvre I*, Mercure de France, 1987, p. 199.)

# Thirty Years of Task-Based Language Teaching

Daniel DUNKLEY

## Abstract

This paper looks back at 30 years of research and practice in Task-Based Language Teaching (TBLT), and assesses its impact on classroom language teaching in the 21st century. After introducing the background to the first suggestion of TBLT in the midst of the communicative language teaching debate of the 1980s, we attempt a definition of *task* in this context. Then we look at different types of task and also their implementation in the classroom. Finally we describe how a task can be used effectively in a language class for non-specialist students in a university.

## Introduction

We find a great difference between the degree of consensus on the subject of language teaching aims on one hand and language teaching methods on the other. There is general agreement that at the end of a foreign language course students should be able to use the language to do useful things, such as order food in a restaurant or introduce themselves. They need *everyday* or *living* language skills, especially in speaking. However, when we discuss how this is to be achieved, there are wide diversities of opinion.

In debates about language teaching methods there are several main areas of disagreement. Arguments tend to be about three main questions. The first concerns discourse versus discrete points. One school of thought insists that a first language is learned in phrases and sentences understood from the situation, and proposes this as a model for second language learning. In opposition to this is the idea that language is a system that must be split into its component parts such as grammar rules and vocabulary items in order to be understood; only when students understand the patterns of the language can they make useful and well-formed sentences. The second point of disagreement is about the roles of the teacher and learner.

The teacher-centered school sees the teacher as the authority figure, the one who talks the most and who decides the content and plan of the lesson. In contrast, the learner-centered supporter would argue that each learner has their own interests, personality and “internal syllabus” and that learning is most effective when learners are given the chance to co-operate with each other and to take decisions for themselves. The third and final area of disagreement is over communication versus form. The communication school prioritizes achieving communicative goals, doing useful things with language. For them inaccuracy is a natural by-product of trying to communicate, rather than a bad habit to be eradicated at all costs. On the other side we have the form-focussed school who see the first aim of language teaching as helping the students to make grammatically correct sentences, which then make effective communication possible. In sum, we observe general agreement about the goal of language teaching, but a wide range of opinions on how the goal is to be achieved.

### **The Origins of Task-Based Language Teaching (TBLT)**

In the 1950s and 60s the predominant model of language teaching was the grammar translation method, in which the mastery of separate grammatical and vocabulary items was the first priority. Presentation of discrete items by the teacher, followed by practice by the students, and finally use in functional language activities was the preferred order of events. “Learners were expected to transfer the explicit knowledge of form into the meaningful, integrated use of language.” (Van den Branden, et al 2009, 3). This led to dissatisfaction among some learners and teachers. There was a general suspicion that to treat the learner like a machine, with the thought that learning was a succession of stimulus-response cycles on the behaviorist model, was misrepresenting the capacities of the learner. At the same time, theoretical linguistic research in such fields as semantics, pragmatics and sociolinguistics emphasized that language use in the real world was very complex, and revealed a new set of unwritten rules of language use which constituted another body of knowledge to be added to the normal language rules. In a separate body of research into first language acquisition researchers such as Brown (1973) and Halliday (1975) showed that children learning their first language do not start with rules and then build meaningful sentences, but rather they use their language for useful interactions and only later become aware of the rules.

In addition to research into adult language use and child first language acquisition, there were changes in general educational thinking. Pedagogical psychologists and theorists such as Dewey (1938) and Vygotsky (1978) suggested that education should aim for ability as much as knowledge, and thus the learner should be given a greater role in relation to the teacher. It was suggested that the teacher should

manage social interaction and that students could learn by solving a succession of problems.

In parallel with these developments in linguistics research and educational thought, language educators were investigating new ways of teaching languages. Realizing that communicating in a second language involves much more than producing grammatically correct utterances, teachers aimed to help their students achieve “communicative competence” (Canale and Swain, 1980). Thus there was a shift from knowledge of the language to communication in the language. Proponents of this type of teaching, which was always known as the communicative *approach* rather than the communicative *method*, emphasized doing things through language, in other words functional language learning. At the same time the idea of giving the students more control over their learning, was proposed by the *learner autonomy* movement (Holec, 1985). However, although this sounds like a leap forward in language teaching, when these ideas were applied without sufficient thought, they resulted in students being presented with language beyond their level of comprehension, so there was a vigorous debate such as that between Swan (1985) and Widdowson (1985).

A strong communicative approach, in which learner autonomy, authentic materials and negotiation of meaning in the target language were important, was proposed by Allwright (1984) and Breen (Breen and Candlin (1980)). However, in practice a weak version of the communicative approach became common, in which teaching material was pseudo-authentic, adjusted to the students’ level, and bilingual vocabulary lists were produced to help the learners. Critics from the strong wing objected that the communicative approach was implemented half-heartedly and was thus ineffective: teachers merely added a few communicative activities while resolutely teaching grammar, maintaining “the structural knowledge-oriented framework” (Van den Branden et al, 2009, 5). Thus the communicative approach resulted in a continuum of applications, very much dependent on local circumstances such as the students’ age, first language and ability level, ranging from strong to weak.

### **The beginning of task-based teaching**

The communicative movement was partly about method (how to teach) and partly about content (what to teach). In the debate of the 1980s several different content, or syllabus models were proposed. The process syllabus, associated with Candlin and Breen (1980), involved a negotiation of the syllabus between students and teacher. The subject of study was no longer the language, but the language learning process: they advocated “a change of focus from content for learning towards the process of learning” (Breen, 1984, 52). A second school of thought was the procedural syllabus of Prabhu (1987) in which

lessons consisted of problem-solving. For Prabhu a task was “an activity with requires learners to arrive at a given outcome through some process of thought” (1987, 24). In contrast, Long and Crookes, the first major theorists of task-based language teaching, had a specific and non-linguistic definition for task. A task is not something you say, but something you do. “Tasks are the things people will tell you they do if you ask them and they are not applied linguists” (Long, 1985, 89). To make a task-based syllabus we first do a needs analysis of what our students need to do, rather than what they need to know. The resulting list of tasks is then divided into task types. The list of task types is the basis for pedagogic tasks, which are then put in a logical sequence to form a syllabus.

How do we sequence tasks effectively? The danger of TBLT is that tasks are completed while accuracy is neglected, so the result of this method becomes: “immediate communication rather than authentic interlanguage change and growth” (Skehan, 1996, 58). Skehan sets out a system by which the tension between form (accurate grammar) and meaning (completing the task) might be overcome. Each task must be analyzed in terms of its code complexity (grammatical difficulty), cognitive complexity (the amount of processing required) and communicative stress (time pressure or degree of importance). As for using tasks, Skehan suggests a procedure to be strictly applied: that before a task is attempted there must be sufficient preparation, perhaps with an element of grammar training. The task must be of appropriate level for successful performance. Finally, post-task activities can include tests, public performance or writing.

How do tasks differ from exercises? While in an exercise focus on form (linguistic accuracy) is primary, in a task focus on meaning is important. The goal of an exercise is to master the code (grammatical or vocabulary accuracy), while the goal of a task is the achievement of a communicative goal. Thus for example a typical exercise for elementary students of English takes this form: Insert the correct form of the verb *to be*

He \_\_\_ from Osaka. They \_\_\_ tall. I \_\_\_ a baseball fan

A task could be as follows:

Write down three questions beginning with *what where how or when* about vacations. Ask five students about their vacations Write the answers. Example “Where did you go?” Thus a task is designed to achieve a goal- in this case finding information- which will naturally involve a limited area of grammar (in this case using Wh- questions about the past). Exercises on the other hand are focused on the forms alone.



## Designing tasks

What roles do learners play in tasks, and what benefits accrue from using tasks? Firstly a task is not any co-operative activity; clearly students can work together without doing a task. An example is reading a dialogue from a text book. This has many benefits in terms of pronunciation, intonation, vocabulary, grammar and idiomatic expressions, but cannot be called a task, because neither participant is changing the language in any way. Another activity that can be done in pairs does involve processing, and is equally valid as an exercise:

Student A Every day *I ride a bicycle*

Student B Yesterday *I rode a bicycle.*

Here there is comprehension and real processing, and it is thus a valid exercise or drill, but still not a task. Naturally we are the stage of learning the code, rather than achieving an outcome.

One important feature of a task as opposed to an oral drill or an exercise is that students must find something out. This can be real information, as in personal information about other students' families or preferences, or fictional information, as in games.

Pica and her colleagues provided a useful taxonomy of tasks (Pica et al 1993). In the course of performing a task a student can do three things: comprehend input, provide feedback and develop his or her language. The best type of task (assuming it is for two students) has four characteristics: Each student has some information which must be exchanged to complete the task. Both students must ask and answer. Both students have the same goal. Finally, only one outcome is possible. If any of these conditions are not met, then the task is not optimally stimulating growth in the students' language skills.

For tasks for pairs of students, Pica gives four categories: *jigsaw* "X and Y hold portions of a totality of information which must be exchanged and manipulated" (Pica et al 1993, 17). *Information gap* "one participant holds information that the other does not already know, but needs to know in order to complete the task" *problem solving* "a task oriented to toward a single outcome" *decision-making* "participants work toward a single outcome, but have a number of outcomes available to them" and finally *opinion exchange* or discussion, which is the least satisfactory type from the point of view of the three things that students must do.

To give an example of each type "Who is who?" picture puzzle is an *Information gap* task: two students have the same picture of many people, but only half the names are given, They must describe each person to elicit the names from their partner. An example of *problem solving* is the "Hotel theft" task in which one student takes the role of a hotel guest who has been robbed of all his belongings. He must

phone the other students to solve the problem. “Who gets the heart” is a *decision-making* task: students get information about six people who need a heart transplant, and must choose which person should get it. Finally “advice” is an *opinion exchange* task. Students in groups must write down five pieces of advice in priority order on some familiar topic, for example “How to get into the university you want.”

### Using Tasks in the Classroom

So far we have seen that there has been considerable effort expended on the theoretical background of the task-based syllabus, and on the establishment of a taxonomy of tasks. But exactly how are tasks integrated into a lesson? Willis drew on her experience of classroom teaching to give a very practical set of guidelines for task use. She emphasizes that when learners are sure that they can work autonomously they become more confident, which is a great help to learning.

She divides the task cycle into two main parts, introduction and task. The task cycle includes the task itself, followed by planning and report. The introduction sets the scene for the task, ensuring that all students understand the goal. Additionally the teacher must provide the students with any essential vocabulary or grammar items necessary to accomplish the task. The students then do the task. At this point achieving the task goal is the priority, not linguistic accuracy. “The main focus is getting their meaning across” (Willis, 1996, 53). As a result another stage is needed, with the aim of achieving linguistic accuracy. This is the report stage, “where learners naturally strive for accuracy and fluency together.” The report can take several forms: a performance by each group before the class, or writing a short report and reading it out. Whichever method is chosen, planning time is needed. This is a vital stage, during which students think about their language.

The students therefore play a central role in accomplishing a task. However, the teacher’s role is also vital. The traditional image of a teacher is of a person who stands up and talks, but this is only one of the many roles of the teacher. The most fundamental one is as a manager of learning, and much of this management does not involve talking. In using a task the teacher’s role is to choose that task, introduce it (this is the traditional “teaching” part), but as soon as the students start doing the task, the teacher has to *monitor*, or observe the students without intervening. During the planning stage the teacher becomes a language adviser, helping students to improve their reports. Finally in the report stage the teacher is a chairperson, deciding who speaks next and providing a summary at the end. In this way the amount of “teaching” time is greatly reduced, while the proportion of class time in which students are working autonomously increases.

### **Task-based language teaching in a Japanese university**

The above research comes from a wide variety of teaching situations: different class sizes, different target languages, different first languages, and different age groups. What relevance does it have to this author's situation, in a Japanese private university, teaching large groups of freshman students taking a mandatory English oral communication course?

The basic principle that students must receive as much comprehensible input, or English which they understand, is very important. For the sake of speed one is tempted to use the learners' first language too often, whereas there are many opportunities to use effective target language expressions, especially for often-repeated comments or instruction. For example, the teacher can repeatedly tell students to turn to a certain page, repeat a dialog in pairs and so on. As for using tasks to provide opportunities for negotiation of meaning, intensive practice with a specific vocabulary area or repetition of a certain grammatical form, this is a very useful idea. Especially in a 90-minute class, students need a period when they are not required to sit in their desks either listening or writing.

The essential features of a task for this level of student is that it must be easy to understand and relevant to the theme of the lesson. Thus for example one unit of the text *Top Notch 1A* (Saslow and Ascher, (2011)) concerns the topic of machines or technology, a very current theme in the age of the smart phone. There is a section on "suggesting a brand" so a relevant task is a survey in which each student is given a questionnaire survey print and a question of the form "What is your favorite brand of \_\_\_? Why? Each student must write an answer for each of the five interviewees. To make this feasible many steps are required. First, the students focus on the vocabulary of electronic devices, by doing a quiz in which they write the correct English for 10 common katakana words such as プリンター and スマホ. Then they practice a dialog in which someone recommends a brand of TV because it is *inexpensive*. This leads to a listening exercise, in the form of advertisements for unusual gadgets, on adjectives such as *convenient*, *affordable* and *portable*. Then the teacher hands out the questionnaire papers and explains the procedure, filling in a chart on the board to illustrate each step. Only when all these preliminary steps are completed are the students able to do the task with confidence.

At the start of the activity there is a period of quiet when nothing seems to be happening. Students are talking to each other, probably in their first language, checking what they have to do. At this point the teacher walks to the back of the class, so that students know that they will not be interrupted by an announcement. Additionally, if students glance to the front of the class, which is their natural tendency if they are not sure what to do next, they will see the sample interview chart on the board, and work out

what to do if they are unsure. A further help is a list of extra vocabulary at one side of the board, with expressions such as “has a good picture, has a big memory, has many functions”, so that when more than a single adjective is needed students have access to the correct phrase. After a few minutes the braver students have got out of their seats and walked over to another part of the class to ask their first interviewee, while others remain in their seats and ask the two or three students immediately next to them. Slowly the buzz of conversation grows. A short time later the teacher starts to walk round and check that all the students are writing down answers. Those who are slow are encouraged with phrases such as “Just three more answers.” Finally, when nearly everyone has finished, the teacher walks to the front of the class and writes a sample “report sentence”, for which space is left on the questionnaire sheet “Mr Suzuki likes Sony music players because they have a good sound.”

With a small group this can be followed by students reading out their texts, but with a larger group the teacher collects the papers and corrects them before the next class. To round off the lesson, the last 15 minutes are spent on a video activity. Two people are in an electronics store looking for a present, and describe many items. The students are supplied with the script, and have to fill in the gaps choosing from a list of adjectives.

This strategy ensures that the task is both enjoyable and effective. By putting a task at the end of several preparatory activities, the task is well prepared so that it is at the right level and useful in providing practice, while giving some room for individual variation.

The above sample lesson is certainly not an example of a task-based syllabus. The syllabus is based on themes with related vocabulary and grammar, and thus it could be criticized for being “knowledge based”. However, to the present author, teaching in a specific set of circumstances, it seems like a realistic and effective application of the task idea.

We have observed that TBLT emerged in the early 1980s out of the debate on language teaching, and has many different versions. It has been three decades of quiet growth, no mean achievement when several other trends of the 1980s proved to be short lived and are all but forgotten. Like the communicative approach it has proved to be a robust concept, which arouses support in many quarters. For example there are international conferences on TBLT, a wealth of publications, both journal articles and books, and considerable support among practicing classroom teachers. Accordingly, it seems realistic to suppose that its influence will continue to grow over the next thirty years.

## References

- Allwright R. L. (1984) The importance of interaction in classroom language learning *Applied Linguistics* 5, 156–171
- Breen, M. P. and Candlin, C. N. (1980) The essentials of a communicative curriculum in language teaching *Applied Linguistics* 5, 156–171
- Brown, R. (1973) *A first language: the early stages* London: George Allen and Unwin
- Canale, M. and Swain, M. (1980) Theoretical basis of communicative approaches to second language teaching and testing *Applied Linguistics* 1,1 1–47
- Dewey, J. (1938) *Experience and Education* New York: Collier Books
- Halliday, M. (1975) *Learning how to mean: explorations in the development of language* New York: Elsevier
- Holec, H. (1985) On autonomy: some elementary concepts. Riley P (ed) *Discourse and Learning* London: Longman (1985) (pp. 173–190)
- Long, M. H. (1985) Task, group take-up and task-group interaction *University of Hawaii Working Papers in ESL* 8,2 1–26
- Pica, T. Kanagy, R. Falodun, J. (1993) Choosing and using communication tasks for second language instruction in Crookes, G. and Gass, S. (eds) *Tasks and language learning: Integrating theory and practice* Clevedon: Multilingual Matters (1993) (pp. 9–14)
- Saslow J. M., Ascher, A. (2011) *Top Notch Second Edition* London: Pearson Longman
- Skehan, P. (1996) A framework for the implementation of task-based instruction *Applied Linguistics*, 17, 38–62
- Swan M. (1985) A critical look at the communicative approach *ELT Journal*, 39,1 and 39,2
- Van den Branden, K., Bygate, M., Norris, J. (2009) *Task-Based Language Teaching: a Reader* Amsterdam: John Benjamins
- Vygotsky, L. S. (1978) *Mind in Society: the development of higher psychological processes* Cambridge MA: Harvard University Press
- Widdowson, H. (1978) *Teaching Language as Communication* Oxford: Oxford University Press
- Widdowson, H. (1985) Against dogma: a reply to Michael Swan *ELT Journal*, 39,3
- Willis, J. (1996) *A framework for task-based language teaching* New York: Longman

# Global Warming 2014

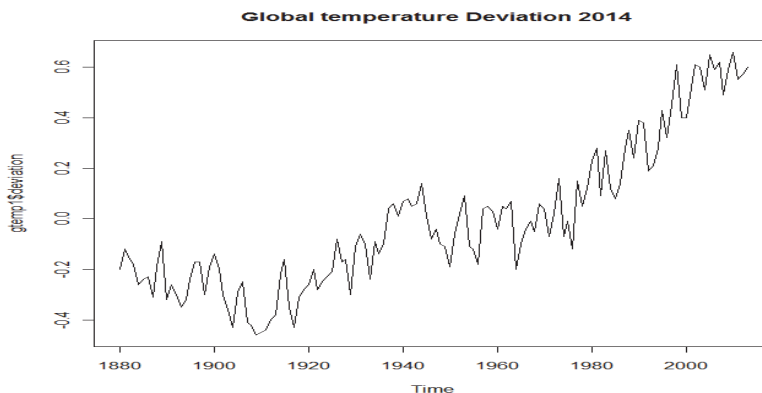
小 村 賢 二

要約;NASA GISS(Global Warming)データについて komura[4]は短期予測値を求めた。今回 NASA の GISS Surface Temperature について更新された Global Surface Temperature に基づいて予測値を計算し直した。komura[4]が求めた予測値とその後の実現値がどうであったかと気温の変化がどうなっているかを調べる。さらに時系列予測のモデルに変更が必要であるかを吟味することである。時系列データはトレンドを含む非定常時系列であるから時系列の階差をとった非定常時系列モデルの ARIMA モデルを適用する。今回の分析結果は時系列の傾向は今後も増大していくのが確認できる。予測に用いたソフトは Global Standard である R-3.1.0 である。

キーワード; Global Warming, R-3.1.0, ARIMA(3, 1, 2), ARIMA(12, 1, 1), ARIMA(0, 1, 2), auto.arima, 線形トレンド, State Spaceモデル, ETS, 予測値, AIC, BIC, 予測の精度

## § - 1 Global temperature 時系列データのプロットについて

時系列データは 1880-2013 年である。プロットしたグラフ表示は以下である。



(gtemp1\$deviation)

Time Series:

Start = 1880

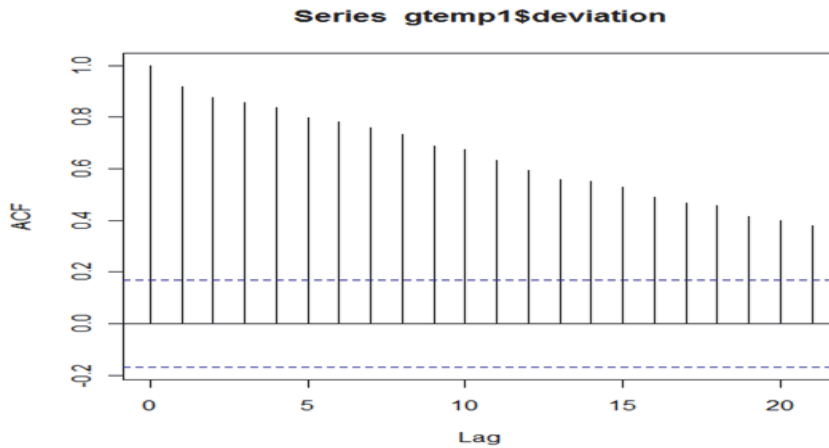
End = 2013

Frequency = 1

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| [1]   | -0.20 | -0.12 | -0.15 | -0.18 | -0.26 | -0.24 | -0.23 | -0.31 | -0.19 | -0.09 | -0.32 | -0.26 |
| [13]  | -0.30 | -0.35 | -0.32 | -0.24 | -0.17 | -0.17 | -0.30 | -0.19 | -0.14 | -0.20 | -0.30 | -0.36 |
| [25]  | -0.43 | -0.29 | -0.25 | -0.41 | -0.42 | -0.46 | -0.45 | -0.44 | -0.40 | -0.38 | -0.22 | -0.16 |
| [37]  | -0.35 | -0.43 | -0.31 | -0.28 | -0.26 | -0.20 | -0.28 | -0.25 | -0.23 | -0.21 | -0.08 | -0.17 |
| [49]  | -0.16 | -0.30 | -0.11 | -0.06 | -0.10 | -0.24 | -0.09 | -0.14 | -0.10 | 0.04  | 0.06  | 0.01  |
| [61]  | 0.07  | 0.08  | 0.05  | 0.06  | 0.14  | 0.01  | -0.08 | -0.04 | -0.10 | -0.11 | -0.19 | -0.06 |
| [73]  | 0.02  | 0.09  | -0.11 | -0.12 | -0.18 | 0.04  | 0.05  | 0.03  | -0.04 | 0.05  | 0.04  | 0.07  |
| [85]  | -0.20 | -0.10 | -0.04 | -0.01 | -0.05 | 0.06  | 0.04  | -0.07 | 0.02  | 0.16  | -0.07 | -0.01 |
| [97]  | -0.12 | 0.15  | 0.05  | 0.12  | 0.23  | 0.28  | 0.09  | 0.27  | 0.12  | 0.08  | 0.14  | 0.28  |
| [109] | 0.35  | 0.24  | 0.39  | 0.38  | 0.19  | 0.21  | 0.28  | 0.43  | 0.32  | 0.45  | 0.61  | 0.40  |
| [121] | 0.40  | 0.52  | 0.61  | 0.60  | 0.51  | 0.65  | 0.59  | 0.62  | 0.49  | 0.59  | 0.66  | 0.55  |
| [133] | 0.57  | 0.60  |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |

偏差は 1951 年－1980 年の平均が基準である。

自己共分散(acf)関数のグラフは以下である。



## §—2 global warming データの予測について

Global Surface temperature の時系列データについて、R-3.1.0 を使い予測値を求める。分析結果は auto.arima によってモデル ARIMA(3, 1, 2) with drift である。確率過程 ARIMA(3,1,2),

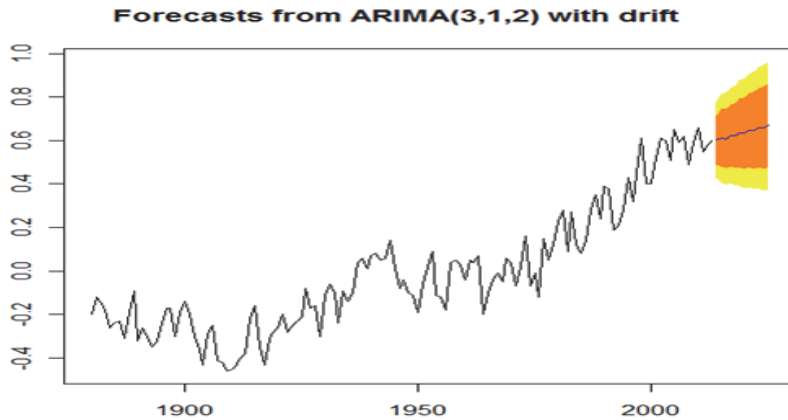
ARIMA(12, 1, 0)の予測値と予測の精度と適合度を比較検討する。

先ず自己回帰集積移動平均モデルから検討する。ARIMA(3, 1, 2)は以下である。

$$\phi(B)\nabla Z_t = (1 - \theta_1 B - \theta_2 B^2) a_t$$

ここで  $\phi(B) = (1 - \phi_1 B - \phi_2 B^2 - \phi_3 B^3)$  ,  $\nabla = (1 - B)$  ,  $BZ_t = Z_{t-1}$  ,  $a_t$  はホワイトノイズである。

以下は ARIMA(3, 1, 2) 過程の予測値プロットである。



モデルの推定と予測の精度の要約は以下である。

Forecast method: ARIMA(3, 1, 2) with drift

Model Information:

Series: gtemp1\$deviation

ARIMA(3,1,2) with drift

モデルの推定値と AIC,BIC の基準値

| ar1         | ar2     | ar3     | ma1    | ma2     | drift  |
|-------------|---------|---------|--------|---------|--------|
| -0.7338     | -0.0600 | -0.2560 | 0.3178 | -0.4956 | 0.0059 |
| s.e. 0.1701 | 0.2267  | 0.1069  | 0.1691 | 0.1611  | 0.0031 |

sigma^2 estimated as 0.007911: log likelihood = 132.76

AIC = -251.52    AICc = -250.62    BIC = -231.29

予測値の精度は

In-sample error measures:

| ME            | RMSE         | MAE          | MPE          | MAPE         | MASE         |
|---------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| -9.209192e-05 | 8.861350e-02 | 7.207095e-02 | 2.089157e+01 | 6.517994e+01 | 8.729906e-01 |

である。



予測値と 80%と 95%の予測信頼区間；

|      | Point Forecast | Lo 80     | Hi 80     | Lo 95     | Hi 95     |
|------|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 2014 | 0.6018896      | 0.4879007 | 0.7158785 | 0.4275586 | 0.7762206 |
| 2015 | 0.6128070      | 0.4808016 | 0.7448124 | 0.4109222 | 0.8146918 |
| 2016 | 0.6091712      | 0.4717951 | 0.7465472 | 0.3990726 | 0.8192697 |
| 2017 | 0.6228695      | 0.4816705 | 0.7640685 | 0.4069242 | 0.8388148 |
| 2018 | 0.6224102      | 0.4724693 | 0.7723511 | 0.3930953 | 0.8517250 |
| 2019 | 0.6350257      | 0.4784755 | 0.7915758 | 0.3956029 | 0.8744484 |
| 2020 | 0.6344584      | 0.4703245 | 0.7985923 | 0.3834373 | 0.8854795 |
| 2021 | 0.6464047      | 0.4770024 | 0.8158071 | 0.3873262 | 0.9054833 |
| 2022 | 0.6466122      | 0.4704090 | 0.8228154 | 0.3771326 | 0.9160917 |
| 2023 | 0.6580578      | 0.4766821 | 0.8394336 | 0.3806675 | 0.9354482 |
| 2024 | 0.6587575      | 0.4710031 | 0.8465119 | 0.3716120 | 0.9459031 |
| 2025 | 0.6696737      | 0.4770305 | 0.8623169 | 0.3750513 | 0.9642960 |

ここで予測値の値は上昇していく。2014年の値は2013年と粗同じ水準である。

予測値は条件付き期待値  $\hat{Y}_t(l) = E[\hat{Y}_{t+l}] = E[\hat{Y}_{t+l} | \hat{Y}_t, \hat{Y}_{t-1}, \hat{Y}_{t-2}, \dots]$ 。予測値の計算は G

E.P.Box,G,Genkins& C Reinsel [2]に従う。

次に集積移動平均過程の ARIMA(0,1, 2)モデルを検討する。計算と推定と予測の精度である。

summary(forecast(fit,h=12))

Forecast method: ARIMA(0, 1, 2)

Model Information:

Series: gtemp1\$deviation

ARIMA(0,1,2)

arima(x = gtemp1\$deviation, order = c(0, 1, 2))

モデルの推定値:

```

      ma1      ma2
-0.4190 -0.1675
s.e.   0.0834  0.0756

```

sigma^2 estimated as 0.008552: log likelihood = 127.75

以下は赤池情報量基準とバイズ情報量基準と予測の精度である。

AIC = -249.5 AICc = -249.31 BIC = -240.83

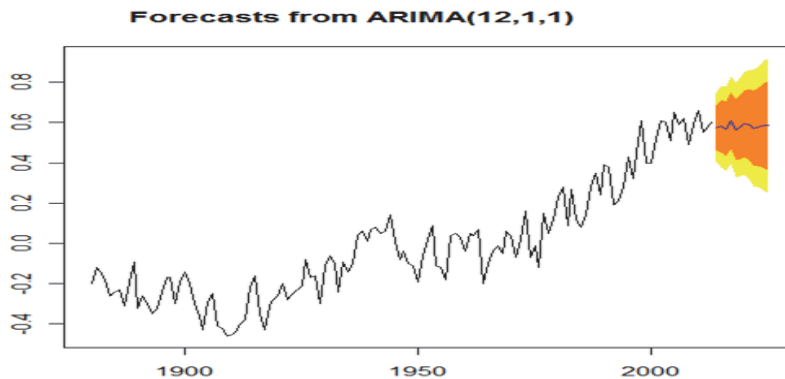
In-sample error measures:

| ME         | RMSE       | MAE           | MPE         | MAPE       | MASE       |
|------------|------------|---------------|-------------|------------|------------|
| 0.01398420 | 0.09213329 | 0.07637884 16 | .07462089 7 | 0.47477325 | 0.92517170 |

予測値と 80%と 95%の予測信頼区間；

|      | Point Forecast | Lo 80     | Hi 80     | Lo 95     | Hi 95     |
|------|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 2014 | 0.5906145      | 0.4720979 | 0.7091311 | 0.4093590 | 0.7718700 |
| 2015 | 0.5871667      | 0.4500993 | 0.7242340 | 0.3775402 | 0.7967931 |
| 2016 | 0.5871667      | 0.4416031 | 0.7327302 | 0.3645464 | 0.8097869 |
| 2017 | 0.5871667      | 0.4335762 | 0.7407571 | 0.3522703 | 0.8220630 |
| 2018 | 0.5871667      | 0.4259484 | 0.7483849 | 0.3406047 | 0.8337287 |
| 2019 | 0.5871667      | 0.4186656 | 0.7556677 | 0.3294666 | 0.8448668 |
| 2020 | 0.5871667      | 0.4116848 | 0.7626485 | 0.3187903 | 0.8555430 |
| 2021 | 0.5871667      | 0.4049712 | 0.7693621 | 0.3085228 | 0.8658105 |
| 2022 | 0.5871667      | 0.3984964 | 0.7758369 | 0.2986205 | 0.8757129 |
| 2023 | 0.5871667      | 0.3922366 | 0.7820967 | 0.2890468 | 0.8852865 |
| 2024 | 0.5871667      | 0.3861716 | 0.7881617 | 0.2797712 | 0.8945621 |
| 2025 | 0.5871667      | 0.3802843 | 0.7940490 | 0.2707674 | 0.9035659 |

以下のグラフは ARIMA(12,1,1)過程のモデルによる予測値のプロットである。



次に ARIMA (12, 1, 1) モデル；自己回帰集積移動平均過程の計算と予測の精度を求める。

```
summary(forecast(fit, h=12))
```

```
Forecast method: ARIMA(12, 1, 1)
```

```
Model Information:
```

```
Series: gtemp1$deviation
```

```
ARIMA(12,1,1)
```

```
arima(x = gtemp1$deviation, order = c(12, 1, 1))
```

モデルの係数の推定値:

| ar1    | ar2     | ar3     | ar4     | ar5     | ar6     | ar7    | ar8    | ar9    |
|--------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|
| 0.8247 | -0.5632 | -0.4507 | -0.1945 | -0.1492 | -0.0817 | 0.0538 | 0.1908 | 0.0833 |
| 0.2284 | 0.1825  | 0.1081  | 0.4375  |         |         |        |        |        |
| s.e.   | 0.5067  | 0.2184  | 0.2243  | 0.1876  | 0.1274  | 0.1383 | 0.1260 | 0.1270 |
| 0.1454 | 0.1187  | 0.1453  | 0.0877  | 0.5046  |         |        |        |        |

sigma^2 estimated as 0.007554: log likelihood = 135.56

AIC = -243.12 AICc = -239.56 BIC = -202.66

当てはまりの良さの基準でモデルの中では1番小さい。Akaike[1]赤池情報量基準。

In-sample error measures:

| ME          | RMSE        | MAE           | MPE         | MAPE        | MASE        |
|-------------|-------------|---------------|-------------|-------------|-------------|
| 0.009726984 | 0.086588951 | 0.071204076 2 | 1.126539149 | 4.165994551 | 0.862490169 |

Forecasts,(予測値と0.80,0.95%の予測信頼区間)

| Point | Lo 80     | Hi 80     | Lo 95     | Hi 95               |
|-------|-----------|-----------|-----------|---------------------|
| 2014  | 0.5755177 | 0.4641331 | 0.6869023 | 0.4051697 0.7458658 |
| 2015  | 0.5807973 | 0.4501660 | 0.7114286 | 0.3810140 0.7805807 |
| 2016  | 0.5686848 | 0.4317438 | 0.7056258 | 0.3592517 0.7781180 |
| 2017  | 0.6099679 | 0.4679642 | 0.7519716 | 0.3927920 0.8271439 |
| 2018  | 0.5640755 | 0.4123093 | 0.7158417 | 0.3319692 0.7961819 |
| 2019  | 0.5725888 | 0.4138971 | 0.7312806 | 0.3298907 0.8152869 |
| 2020  | 0.5928257 | 0.4271782 | 0.7584732 | 0.3394896 0.8461617 |
| 2021  | 0.5899025 | 0.4145065 | 0.7652985 | 0.3216574 0.8581475 |
| 2022  | 0.5710109 | 0.3819934 | 0.7600283 | 0.2819337 0.8600880 |
| 2023  | 0.5778620 | 0.3816746 | 0.7740494 | 0.2778193 0.8779048 |
| 2024  | 0.5851035 | 0.3762731 | 0.7939339 | 0.2657249 0.9044821 |
| 2025  | 0.5850267 | 0.3657000 | 0.8043534 | 0.2495955 0.9204580 |

時系列の予測値が過去の時系列のウェイト平均として表現されて,予測の精度の基準AIC,BIC の値は小さいモデルが選択される。従いARIMA(12, 1, 1)が選択される。

最後に線型モデルによる予測値である。トレンドモデルは以下の解析結果である。

$$y_t = -1.4425 + 0.00647 T$$

decom6(gtemp1\$deviation,se1=1,fore1=12)

| (Intercept)  | t1          |
|--------------|-------------|
| -1.442564246 | 0.006474694 |

予測値と 0.95 の予測信頼区間は以下である。

|      | pred      | lower     | upper     |
|------|-----------|-----------|-----------|
| 2014 | 0.4315195 | 0.1440173 | 0.7190217 |
| 2015 | 0.4379942 | 0.1503973 | 0.7255910 |
| 2016 | 0.4444689 | 0.1567760 | 0.7321617 |
| 2017 | 0.4509436 | 0.1631534 | 0.7387337 |
| 2018 | 0.4574182 | 0.1695294 | 0.7453071 |
| 2019 | 0.4638929 | 0.1759040 | 0.7518819 |
| 2020 | 0.4703676 | 0.1822773 | 0.7584580 |
| 2021 | 0.4768423 | 0.1886492 | 0.7650355 |
| 2022 | 0.4833170 | 0.1950197 | 0.7716143 |
| 2023 | 0.4897917 | 0.2013890 | 0.7781945 |
| 2024 | 0.4962664 | 0.2077568 | 0.7847760 |
| 2025 | 0.5027411 | 0.2141234 | 0.7913589 |

結論 ;

Global Warming が多く議論されているなかで、NASA によっていろいろな予測が行われている。その予測方法は偏差の時系列の移動平均法による予測が主である。ここで求めているのは短期時系列予測の点予測である。予測の分析の結果は ARIMA(12,1,1)過程が予測の精度を基準とすれば BIC (AIC も含めて) の値が最も小さく選択される。auto.arima によって選択された ARIMA(0,1,2) と ARIMA(3,1,2)を比較すれば予測値は ARIMA(3,1,2)の方が ARIMA(0,1,2)より少し高めに評価される。

参考文献 ;

- [1] Akaike, H., [1969], Fitting autoregressive models for prediction. *Ann. Inst. Sta. Math.*, 21.
- [2] Box, G. E. P. and G. M. Jenkins and Gregory C. Reinsel, [2008], *Time Series Analysis, Forecasting and Control*, Fourth Edition, Wiley.
- [3] Brockwell, P. J. and R. A. Davis, [1991], *Time Series. Theory and Methods*, 2nd Ed. Wiley.
- [4] Komura, K., [2012], Rによる Global Warming, 愛知学院大学教養部紀要、第 60 巻第 2 号
- [5] Robert H. Shumway and David S. Stoffer, [2011], *Time Series Analysis and Its Applications*. Springer.
- [6] NASA GISS Data, gistemp: (<http://data.giss.nasa.gov/>)
- [7] CRAN . R-3.1.0.

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（八）

——明治三十三年一月～明治三十三年四月——

川口高風

凡例

- 一、本稿は「能仁新報」に掲載されている現在の名古屋市内にあたる地域の仏教関係の記事を採録した。「能仁新報」（名古屋朝日町五十六番戸 能仁社発行）の原本は東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫に所蔵するものを使用した。同文庫には明治二十三年五月十二日発行の第一号より明治三十三年六月二十五日発行の第六四九号まで所蔵するが、明治二十四年六月八日（第五十七号）、六月十五日（第五十八号）、同二十七年九月七日（第三三三号）から同二十八年七月三十日（第三七〇号）、同二十九年十一月十六日（第四三八号）から同三十一年八月三十日（第五五五号）までの発行号数は欠本となっているため、その間の記事はない。
- 一、第八回は「能仁新報」第六二四号（明治三十三年一月一日）より第六四一号（明治三十三年四月三十日）までから採録した。
- 一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、記事に付してある漢字のルビは削除し、明らかな誤植は訂正した。
- 一、記事は掲載年月日順に配列したが、記事中に「当市」とあるのは名古屋市のことである。

### 愛知仏教会大会の延期〔明治33年1月1日 第六二四号〕

同大会開会の事は前々号に記し置きしが、各宗取締より延期の段を申込まれたり。逐て大会開会の際は更に詳記する事あるべし。

### 小栗憲一氏管事となる〔明治33年1月1日 第六二四号〕

同氏には当名古屋教区の管事を命ぜらる。

### 加藤喜右衛門氏帰る〔明治33年1月1日 第六二四号〕

同氏は上京直ちに帰名されたりと見え、日々県会に出頭さるゝを見受く。

### 宮本熊楠氏を説く〔明治33年1月1日 第六二四号〕

同氏に当市の大谷派寺院総代として上京、政教問題に付運動あらん事を太田元遵氏より説きたるも同氏は応ぜず。

### 元始祭の祈祷般若〔明治33年1月1日 第六二四号〕

当市七小町の普蔵寺に於ては、来る三日元始祭の日を卜して、組合の寺院一同を招集し、午後一時より盛んに大般若経を転読して吉祥講七号支部の月次法会をも執行したる後、早川見竜氏の出席を乞ふて新年初会の仏教法話を営む筈なりと云ふ。

### 名古屋の名刹 七ツ寺の由来〔明治33年1月1日 第六二四号〕

能仁には、曾て同寺の略歴を記したる事ありしが、旧年九月四日

并に十月廿三、四、五の三日間、内務省博物局より態々官吏の派遣ありて同寺の什宝等を取調べられ、殊に同寺所蔵の古写の大蔵経は希有の珍品なるより、経函の如きも数葉の写真を撮り参考用として持ち帰られたり。斯る什宝を所蔵し、且つ一千余年前の建立に係る古刹とは、稀には知らざる人もあらんを思ひ、数年前に記したる寺伝を訂正再録し、以て読者に紹介せんとす。幸に其の重複を訝る勿れ。抑も同寺は今を去る事壹千壹百余年の昔し、天平七年に行基菩薩の当国に巡化し、今の中島郡萱津の里に一字を建立し、正覚院と号して親から八尺五寸の阿弥陀仏と五尺五寸の観音勢至の二菩薩を彫刻安置し玉ひぬ。此三尊は前年内務省より宝物の鑑査状を付せられぬ外に、同じく持国多聞の天像其の他靈仏夥しければ略す。其の後、光仁天皇の天応元年に河内権守維広秋田城の介に任せられ、赴任して任満ち帰京の途次に、萱津の里に到りしに、京に遺せし最愛の女兒の父を慕ひて下国しけるが、此の里に於て重く煩らひ絶息けるに逢ひ、歎きの余りに此の寺の住僧智光上人に乞ひ蘇生の祈願を求めけるに、仏の感応にや父子再び相名乗る事を得しも、亡児は永く冥土に帰りけるを悲しみ、菩提の為に屍を同寺に葬り、亡児の齢に均しき七区の堂宇を建立せしより七ツ寺とは称するに至りたり。之れ今を去る事一千年前の昔、延暦六年十二月とす。其の後仁和年中に水災あり。天慶年中に兵乱ありて堂宇大に廃頽せしを、六条天皇の御宇尾張権守大中臣朝臣安長は当時勝幡城に在りしが、寵愛の女子の亡没せしを悲しみ、其の菩提の為に七ツ寺の七堂を再建し稲園山長福寺と号

したるは、今を去る事七百余年前の仁安二年六月十五日とす。引き続き又安元元年正月より治承二年八月までに、五千余卷の一切經を筆写し經函を造り輪藏を建て、蔵め奉る。之れ前記内務省より数回官吏を派出されて調査されし什宝なり。其の年代も前記の如く七百年前にして、恰も源平の争乱起らんとせし頃なりき。然るに天正十九年豊臣閔白の命を奉じ、清洲の住人鬼頭孫左衛門吉久之れを清洲に移す。其の後名古屋移城の時に、今の地を賜り移転せしも、幸にして昔の遺形尚存じ、今の本堂の内陣の如きも内務省よりは宝物鑑査状を付せられぬ。

三層塔は、元禄六年より同十三年間の建立にして国君瑞竜院殿より資財を賜り、京都の仏師運長に命じ五智如来と八大菩薩の像を鑄て塔中に安置す。

抑も当寺は、前記由緒の外、旧藩の際には御祈願所として年々御材木下賜、又御祈祷料金七枚宛御靈屋廻向料金廿両宛とし、右御供養の為に春日井郡小松寺三百石をも兼帯せり。

斯る名利なるを以て、境内の広き市内屈指の巨刹にして、観音聖天十王堂影堂輪藏（安長筆写の一切經を蔵む方二畝ありき）鎮守弁天等の諸堂嚴然位置を為せしも惜むべし。維新の際に寺禄没収の為、堂宇経営の途なく、遂に今日の荒廢に至りたるは、深く痛歎すべきの至りならずや。

爰に掲ぐるは、前記の如き由緒ある現在の本堂なり。

#### 曹洞宗第八中学の拡張〔明治33年1月8日 第六二五号〕

当市布ヶ池町の同林は、先きに岐阜と聯合して生徒三十余員の増加あり。爾來倍々拡張の企画中なりしも、何分年末に際したる事として、一新面目を頭はざりしも、本年よりは宗内教師を悉く改め、外来教師にも増俸などして大に従來の弊を革め、生徒の実力を養成せんとて、同校関係の諸氏は、去る二日新年の祝典を挙ぐると共に、其の計画を協定せられたり。

#### 仏教講義所の好成绩〔明治33年1月8日 第六二五号〕

当市宝町の禅芳寺に開設せる仏教講義所は、過ぎつる明治三十三年の一月より創立せしものにて、今や滿三年を経過したるが、一回も休講したることなく、信徒の信仰力は頗る上層の程度に達したれば、受持講師の早川見竜氏は、客臘より講本を永平家訓に改め、例月十日と廿日の両日午後七時より一般公衆の為に講述する、筈なるが、来る十日は例の如く午後七時より本年初開の講義を催さるゝ由。

#### 家門繁栄の祈祷般若〔明治33年1月8日 第六二五号〕

当市末広町の小間物問屋なる村上庄造氏は、当市内に於ける曹洞宗屈指の篤信家なるが、昨七日は午前九時より大光院住職電桑巖師を始め帰依の寺院一全を自宅に招聘し、恭しく大般若經を転読して、天皇陛下の万歳と家門の隆盛を祈祷し、夫れより一同の寺院へ最とも鄭重なる清齋の供養を設けられしと云ふ。

**広告**〔明治33年1月8日 第六二五号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**特別広告**〔明治33年1月15日 第六二六号〕

来る二月廿一日ヨリ

伝戒式 安齋院

但西有老穆山老師、午前午後ニハ禅戒篇提唱、暁天ニハ三物秘弁ノ密授伝法、已上ノ有志者ハ紅衣ハ軋衣ノ年月ト、罷参ハ入室ノ年月トヲ添へ、二月十日マデニ当寺へ申込置、二十日午後マデニ衣鉢携帶ニテ到着可有之候、謹白

**万松寺の寺伝**〔明治33年1月15日 第六二六号〕

名古屋

万松寺

万松寺の寺伝を記するに先き立ち、二百年前の名古屋の状態を記さるゝ可らざるものあり。抑も三百年以前の名古屋は、或は那古野と書きたりし如き郊野たりしものにて、天正年間に清洲城を移し、今の名古屋城を築造し、今の名古屋市街を建設せし当時は所

謂基盤割ぞ、名古屋の京なりける万松寺は、此の際に於て今の菅原町より本町を通じて其の境内とし、桜天神は実に其の寺の鎮守なりしなり。方今に社殿の通路に背反せるも其の遺影なり。斯りければ万松寺は恰も中央道路に蟠まりたる盤石的の厄介物たり。之れを今の地に移したるは、当時政府の命令……併しながら、予め此の盤石的の巨宇の那古野てふ郊野に存在するの次第を述べざれば、万松寺をして其の万松寺たらしめし所以を解するに苦しむの人もあらん。抑も此の万松寺といふは、武衛斯波氏の臣なる両織田氏の事は暫く措き、織田信長の家系に属する織田備後守信秀の古渡城（今の東本願寺別院の地）に在りし、天文九年に前記今の菅原町に一寺を建立し、大雲和尚を開山とせしを創立とす。同二十三年三月三日に信秀は末森に於て卒去せしを、同寺に葬り法号を万松院桃岩道見と号せり。其の後名古屋開府の時今の地に移せしも、依然同寺号を襲用せり。然るに同寺四世永播、深く高源院夫人（国祖源敬公室）の帰依を受けられしより、其の遺命により江戸府に於て薨ぜられしを、万松寺より九名の迎僧に伴はれ、其の遺骸を同寺に葬りたり。今の御霊屋は其の御墳墓の上に建てたる者なるを世人、或は誤つて観音堂といふ。其の次第は次号に記さん。

**飯田道一氏の印度行**〔明治33年1月15日 第六二六号〕

同氏が印度に赴き、三年間仏祖の靈跡に止住して御供養を申さんとの大願を起し、有志の賛成を求められ、既に準備整ひて渡航さ



れしかと思ふ寸間、帰朝されしかば人々其の行を怪しみ、種々の評語をさへ加ふるに至り。吾人も亦氏が前言に似ざるを訝り居しに、去る八日発行の大坂毎日に印度大北紀行と題し孟買の青木生の報じたる中に、飯田道一氏の名の印度に存ずるを見れば、兎に角に氏が名は印度仏跡の参拝帳に記入しある者と知らるゝなり。今其の一節を左に録す。

六月八日、払曉馬車を命じて仏陀ヶ谷へ向ふ。仏陀ヶ谷はガヤと称する駅を距る東南凡そ七哩ガンヂス川の支流に沿へる一小村なるが、積尊の殿堂こゝに存するより其名近郷に高し。

仏陀ヶ谷の殿堂は、釈迦涅槃後二百年即ち今を去ること二千二百四十三年、印度国アソラ王の建築に係る。その当時に在りては、常に一万の徒弟本堂に集り看經に余年なかりきといふ。かくて近世紀に至り、マホメダン王兵を率ゐて仏陀ヶ谷に侵入し、仏教徒を逐ひ、殿宇を破毀し偶像を滅却せるため、世にも有名なりし殿堂は終に地下に埋没して、亦之を顧みるものなきに至れり。然るに今より僅に二十五年前、ビルマ王釈迦殿堂の徒に一塊の土壌に葬り去られんことを憂ひ、従者二人を遣りて掘鑿修理に従事せしめしかば、円錐形の壁龕より成る九階の大尖塔は、忽然として地下より現出し。次で千八百七十五年印度政府自ら手を下し、幾多の金子を費し、これを記録に徴し、つとめて古風の原態を害はざる様に一大修繕を加へしかば、こゝに現時の美観を呈するに至れり。

先づ正面の入口より進みて、恭して錦繡の帷幕を掲ぐれば、高

さ六尺余の坐像を拜することを得、次に階段を上れば、恰もその上層に当りて夫人の立像安置せらるる西方殿堂の背後に、肅然として一株の菩提樹の茂るあり。伝ふらく積尊この樹下に於て、洽ねく衆生を濟度し玉ひし所と之を仏陀ヶ谷中最も神聖の場所とす。然るに其の後、前原樹枯死して今や幼樹今に代り枝葉まさに長へに繁茂せんとしつゝあり。一説に依れば、原樹の一枝仏力によりて遠く錫蘭島に飛び、今猶そこに生長すといふ。抑もマラスス人のこの仏陀ヶ谷に巡礼し来るや、全く先祖代々の罪障消滅を禱るがために、初め郷閭を発するの時、先づ五回己れの住村を廻りて以て先祖の靈魂を伴ひたりとし、ガヤに來ればプラマン ガイドなる者之を仏陀ヶ谷へ案内するをもて例としたりといふ。

同じく殿後の一小丘に登れば、マハプヂ ソサイテーと銘せる建物ありと見れば、日本人かと疑はるゝビルマの僧徒一人、先年この会の任務を帯びて、仏教視察のため日本へ渡航せし達摩波羅の日本より持ち帰りし仏像の下に兀坐して読經を為し居れり。而かしてそが上には、芝天徳寺の住職朝日奈琇宏師が同人へ与へし自筆の額掲げられあるなど、何となく望郷の情に堪へざらしむるものあり。こゝには前に日本人の來往せることもあることゝて、僧侶等一見旧知の如く茶杯を勧めて余等が遠路を慰藉しぬ。記録簿を繙くに仏陀ヶ谷に参謁したるわが国人は、飯田道一(名古屋) 釈守愚(京都) 川上貞信(熊本) 大宮孝潤(東京) 佐々木千重(越前) 渡辺要(熊本) 河口慧海(大坂)

その他五人なりき、而して最も古く来れるもの、時日は、千八百九十三年なり。

#### 仏教生命保険出張所設置披露会〔明治33年1月15日 第六二六号〕

去五日午後、名古屋栄町旧松島楼に於て同会社名古屋出張所設置披露宴を開催、来賓は愛知三重岐阜三県各代理店及び診査医新聞記者等約六十名にして、席定るや名古屋出張所長松田七郎氏挨拶し、続て支配人前野芳造氏斯業拡張に就て一場の演説、早川見竜氏仏教と斯業提携の可なる簡単な演説あり。天皇陛下万歳、仏教生命保険会社万歳を唱ひて式を閉ち宴に移る。余興として大福引等あり。一同十分の歓を尽し散会せしは、午後七時頃にして盛会なりき。

#### 西有穆山老師〔明治33年1月15日 第六二六号〕

西有穆山老師は別項広告の如く、安齋院先住十七回忌法要の焼香を行ふ為めに来錫されし。因に同院に於て伝戒式を挙行さるゝも、何分八十余歳の高齢に付き、在家の請待、又は揮毫等は一切謝絶せられ、加行専修にて二時には展鉢式を行ひ、専ら宗風を振興せらるゝ由。

#### 広告〔明治33年1月15日 第六二六号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

#### 顕明院殿の御来名〔明治33年1月22日 第六二七号〕

去る十四日に、能仁の号外を以て名古屋市内の誦者に報導せし如く、真宗大谷派播州姫路別院の御連枝顕明院殿には、十六日午前八時三州岡崎より笹島停車場に御来着ありしが、同場にては予て準備の灯火數十本を打ち揚げ、出迎人は各宗僧侶を始め同派内の僧俗数十名にて、一行は腕車を聯ね、大谷派別院に着せられたり。午後の定剋に至るや、流石に宏大なる対面場も四千余名の聴衆の為に立錫の余地もなく、来賓としては陸軍将校あり。県会議長、議員卅余名あり、弁護士あり、新聞記者あり。先づ第一席に富永寛静氏登壇し、滔々たる掛河の弁を振ひて顕明院殿御巡回の次第を述べらる。次に連枝は、墨染の法衣の廉なる出で立ちにて、朗々として法治国には完全なる法律無かる可らざる次第より宗教法に移り、同法の完全なる者を得て、本末一同安穩に布教に従事し度き希望を述べ玉ひしが、該法は無論完全なるべきを希望するも、之れが為に軽拳無き様にと一同に諭示せられぬ御連枝には、姿勢正して直立し、其の音声の明確なりしと。説示の順序ありしは唯感服の外無かりしのみならず、聴者数千は恰も沈黙に

て、座中人なきが如く静肅深夜の如き看ありしは其の徳望の高きを表したりといふべし。就中涕泣して面を覆ひし者ありしなどは、尋常の法座に於て見ざりし所なりき。次に七十の老僧関西の名僧後藤祐護氏登壇せらる。老僧は音吐快爽に恰も壯者の如く諄々として顕明院の諭示を複演し、懇切に政教の不二なるを説き、我が帝国は仏教と国家と相離れざる次第より歴代天皇の奉佛法は此の歴史ある仏教を保護する完全の者たらざる可らざる次第を二席に陳述せられしが、語々肺腑より出で、懇篤人をして能く其の意を了得せしめしは老手腕といふべし。因に同氏の事は、余り世人の知らざる者多きも、氏は関西に在て西派の七里恒順と併称せらるゝ道徳家にして、平常は更に奔走する事なく、本山の要職に挙げられんとするも応ぜず、一意に念仏して祖風を宣揚するを専らにせらるにも、今回は大に感ずる所ありて、斯く連枝を補けて東上し、尚ほ各地を巡教せらるゝ次第なりと云。当日は警官の注意か干渉か、制服の警部以下数名出席し、連枝を始め他の法話を一々速記せしめられたり。一行は翌十七日午前、伊勢に向けて当地を出発せられしが、見送人は前日同様にて頗る盛大なりき。

**名古屋市内本派信徒の会合………本山の狼狽**〔明治33年1月22日 第六二七号〕

名古屋市西本願寺の信徒には、去月末に彼の赤松連城氏が、政府

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（八）

提出の宗教法案を賛成し、各宗委員会の席上に於て大失敗を来したるは、定めて当時御東上中なる大法王猊下の御親憂なるべきを畏察し奉つり、御慰問を申し上げんために東上委員を撰挙せしに、別院知堂（輪番に同じ）及び宮本熊楠、中村元亮の参名は決定せられしも、知堂は本山へ伺済の上ならでは上京し難しとの事にて、長文電報を以て本山に伺ひ出でしに、

シバラクミヤワセ

なる返電に接し、孰れも上京せざりしが大法主猊下及び赤松氏等の帰山せるや、知堂を本山に招喚し、名古屋地方信徒の状況を聞き、斯くては本山も………なれば、然るべく云云と………的に懇示したるも、当地の同派信徒は充分に建仁寺会決議の件を實行せざるに於ては、徳義上各宗に対するに相済まざるのみならず、西派が政府の依頼を受けて政府案に同意せり云云の街説に対しても、之れを明亮にせざる可らずとて、大運動を為さん計画中なり。

**特別広告**〔明治33年1月22日 第六二七号〕

来ル二月廿一日ヨリ

伝 戒 式 安 齋 院

但、西有老穆山老師、午前午後ニハ禪戒篇提唱、暁天ニハ三物秘弁ノ密授、伝法已上ノ有志者ハ、紅衣ハ軋衣ノ年月ト、罷参ハ入室ノ年月トヲ添へ、二月十日マデニ当寺へ申込置、二十日午後マデニ衣鉢携帯ニテ到着可有之候、謹白

廣告〔明治33年1月22日 第六二七号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

末広座の仏教演説〔明治33年1月29日 第六二八号〕

去る二十六日、市内各宗有志の催に係る同演説会は、過般東京に於て開会したる全国仏教徒大会に出席されたる当市の人々を迎へ、報告の大会を為すべき計画にて各宗取締とも交渉して催したる者なり。主意右の如くなれば、各団体よりも案内状を出し務めて多数の人を集め、又た一方に於ては可成上京者を多く出席せしめて其の所見を述べ、目下の一大問題たる仏教の死活に関する宗教法案をして、我々が希望の如く政府をして為さしめんには、議会開会中に運動せざる可らず。仍て開会も日を急ぎし為めか、上京者の帰名したる者少なく、橘臣順慶氏は播州への帰途に立ち寄られ、其の他原、畑見、藤木等各県の人々も、始めは二十五日の筈なりしを一日延引したる為めに、他約の日と衝突せし為出席なかりしは遺憾なりしも、当日は宗教を思ふ熱心の人々には烈寒をも厭はず、四千余名来会せらる。初めに宮本熊楠氏開会の主意を

述べて、本会は仏教死活の大問題たる宗教法案に付き、我々の一刻も黙し居るべき時に非ざれば、各宗有志相斗り仏教徒大会の方針を貫徹せしむる為、一大運動を当地に於て為さん計画なる旨を述べ、次に讃岐貫我、横井英光、鈴木敬嶽、水野錠太郎、橘臣順慶、大柿沖、近藤疎賢、早川見竜、中村元亮、天野、水野道秀等の諸氏、交々宗教法案に対する希望を、或は諷し、或は陰に曲弁し、聴衆をして拍手喝采夜の寒く時の永きを忘れしめ、十一時を報ずるも尚ほ数名の弁士ありしも、宮本氏出て、閉会を告げ、両陛下と仏教の万歳を大呼して退散したり。当日は相変らず警官の臨場速記さるゝ等、殆んど政談演説の光景ありき。

金城館の新年大会〔明治33年1月29日 第六二八号〕

来る四日を以て、県下の仏教各団体は金城館に相会し、懇親会を兼ねたる大談話を催さんとて、早川見竜、横井英光の諸氏は、専ら斡旋し数回協議する所あり。愈々各宗取締以下三百余名の賛成あるを以て、開会当日は恐らくは四百余名に及ぶべし。其の会費は金四拾銭にして既に広告料の如きも寄付者あり。尚ほ同会の都合にて一大演説会を開かるゝやに聞く。

廣告〔明治33年1月29日 第六二八号〕

来る二月一日午後一時より、大光院に於て

宗承陽大師降誕会執行

当日は転大般若、并に法話も有之候条、吉祥講員の御方は必ず御参拝致下候

愛 吉祥講本部  
知

**特別広告**〔明治33年1月29日 第六二八号〕

来ル二月廿一日ヨリ

伝 戒 式 安 齋 院

但西有老穆山老師、午前午後ニハ禅戒篇提唱、暁天ニハ三物秘弁ノ密授、伝法已上ノ有志者ハ、紅衣ハ転衣ノ年月ト、罷参ハ入室ノ年月トヲ添へ、二月十日マデニ当寺へ申込置、二十日午後マデニ衣鉢携帯ニテ到着可有之候、謹白

**名古屋西別院輪番の栄転**〔明治33年1月29日 第六二八号〕

三宅知堂には、今回紀州鷲ノ森別院外二院の輪番を兼ね、大阪教区の幹事に栄転されしを以て、後任は美濃別院の知堂が来院さるゝ由なり。

**広告**〔明治33年1月29日 第六二八号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観 音 普 門 品

受持講師 水野道秀師  
永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**特別広告**〔明治33年2月5日 第六二九号〕

来ル二月二十一日ヨリ

伝 戒 式 安 齋 院

但西有老穆山老師、午前午後ニハ禅戒篇提唱、暁天ニハ三物秘弁ノ密授、伝法以上ノ有志者ハ、紅衣ハ転衣ノ年月ト、罷参ハ入室ノ年月トヲ添へ、二月十日マデニ当寺へ申込置、二十日午後マデニ衣鉢携帯ニテ到着可有之候。謹白

**特選住職**〔明治33年2月5日 第六二九号〕

県下愛知郡香久山村靈鷲院住職伊藤文梁氏は、予て布教熱心家なりしが、今回埼玉県武蔵国大里郡藤沢村昌福寺へ本月十五日付を以て管長より特撰住職を命ぜられたりと云。

**壹百五十拾円の支出**〔明治33年2月5日 第六二九号〕

全国仏教徒大会を継続する為に全国より委員を出し、東京に於て會議したる結果に、尾張よりは太田元遵氏委員として出席し、壹百五十円支出の件を諾したりと云ふ。

**高木忍海師略歴の補遺**〔明治33年2月5日 第六二九号〕

高木忍海師の略歴は別項に記す如くなるが、尚遺偈等を得たれ

ば、左に

明治廿八年認可僧堂已来、皓台大光永建の三所に正師家を命ぜられ、僧堂接衆を担任せらる。又遺傷は左の如し。

不生之生。不滅之滅。八両半斤。何有交渉。多々知々。六十九年。

### 大谷派別院の集会〔明治33年2月5日 第六二九号〕

全国仏教徒大会に出席したる同派の僧俗は、明六日別院に集會し、爾後の方針を協議せらるゝ由。

### 各宗取締の会合〔明治33年2月5日 第六二九号〕

今五日、午後より七ツ寺に於て、各宗取締は集會し何事をか協議せらるゝ筈。

### 大谷派本山の指令〔明治33年2月5日 第六二九号〕

同本山に於ては、名古屋市に於て各宗と提携し、宗教上に関する運動を公認する旨指令ありたり。

### 西派は各宗と絶つ〔明治33年2月5日 第六二九号〕

市内の西派寺院は各宗と提携して宗教上の運動を為すには、過般本山より訓示の次第もあれば、当分の内は提携を絶つ旨申込めり。

### 曹洞宗々祖の降誕會〔明治33年2月5日 第六二九号〕

去る一日は、大光院に於て挙行せられしが、市内外の信徒数百名出席し頗る盛大に挙げられたり。当日は水野、近藤、早川氏等の仏教演説ありしが、孰れも時事問題を痛論し聴衆をして大に感動せしめられたり。

### 高木忍海師逝く〔明治33年2月5日 第六二九号〕

曹洞宗にて有名なりし当市出身の同師は、去る二十六日午前十時遷化せられたり。師の略歴は左の如し

誕辰 天保三年三月一日、尾張国名古屋市東田町三百二十二番

地高木太助方に

得度 天保十四年十二月朔日、越前国敦賀郡松原村永建寺為霖

和尚に就て

入衆 弘化三年四月二日、全国全郡敦賀町洲江庵伝翁の初会に

立身 安政元年冬、同国同郡道之口村禅源寺童童の初会に立職

伝法 万延元年四月四日、全国全郡松原村永建寺住職為霖の室

にて嗣法

住職 文久二戊九月十五日、滋賀県近江国蒲生郡日野町慈眼院

に首先住職

転衣 万延元年十月二十日、大本山永平寺に就て転衣

結制 慶応三年冬、近江国蒲生郡日野町慈眼院に於て初会修行

明治六年三月二十日、試補拜命

明治七年四月二十七日、岐阜県美濃国大垣町全昌寺住職拜命

明治七年十一月二日、肥前国長崎市皓台寺住職拜命

明治七年十二月十五日、少講義拜命

明治八年七月七日、長崎市教導取締拜命

明治八年九月十九日、中講義拜命

明治十二年三月十八日、権大講義拜命

明治十二年九月二十日、教会講義拜命

明治十六年六月二十六日、大講義拜命

明治二十年一月二十日、皓台寺退隱

**広告**〔明治33年2月5日 第六二九号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**名古屋市共同墓地の撰定**〔明治33年2月12日 第六三〇号〕

名古屋市共同墓地は、名古屋市役所にて爾來該地所撰定に汲々たれども、何分適當の場所にて纏りたる売物なきを以て容易に抄取らず。漸くにして此頃東部に一箇所の地面を発見するを得たるが、該地所は曩に遊廓移転問題の囂々たりし頃、針屋町渡辺重助

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（八）

といふが購ひ置きたるものにして、面積一万七千二百四十九坪あり。当局者は此地所に就き、過般來交渉の結果坪一円四十七銭余、即ち総額二万五千三百と十余円にて受渡整ふべき相談にまで運びたれば、市当局者は不取、敢之を購入して第一共同墓地を建設し追て南部に尚二三の箇所を購入し、通じて約十萬坪の共同墓地を得る見込なりと云ふ。（西部は地面低きを以て、候補地より除却せり）而して此費途は、之を市の特別費を求むる筈にて、既に八日午後より開きたる市参事会に提出したる由なれば、参事会の結果により遠からず市会に提案さるゝに至るべし聞く。

**金城館に於ける仏教徒新年大会**〔明治33年2月12日 第六三〇号〕  
本県下仏教各団の教徒三百余名は、去る四日午後一時より金城館に集會し、新年の大会を催せり。今其の景況を記さんに、当日は各団体より数名の委員を出し、接待係あり會計係ありし準備は、充分に整頓せしが定時前より続々と來集せる會員を同館百畳の広間に案内し、満員に及びし頃に早川見竜氏開會の主旨を述べ、各自抱負の所見を続々と述べられん事を乞ふとの挨拶により、中央なる演壇に踰れし讚岐貫我氏は、左の祝文を読まる。次に鈴木義方の祝文朗誦あり。（余白なきを以て、次号に譲る。）

夙に仏教隆盛の地を以て鳴る我が愛知県尾張國の教徒は、腦漿概ね仰信的奉仏にして、其教理如何に至りては之を顧る者稀なるの感なき能はざりしか、余と同感の士曾て之を慨し、率先して幾多の仏教団体を組織し、例月法筵を開て盛に國家經綸の大

道を講じ、仏教智徳の妙理を啓くに勤めらる。嗚呼法輪此より大に転ずべし、国の為め、法の為め豈に慶して賀せざるを得んや。不肖貫我冀くは、仏教者諸士の驥尾に付し、法輪旋転の途に上り、旌旗堂々獅子奮迅の勢を以て、彼れ跳梁を逞ふせんとするの外教を摧破し、赫々たる仏光を中天に曜さんことを望むや切なり。

茲に今月今日を卜し、当地有為の諸士相集つて仏教徒新年大会を金城館に挙げらる。不肖貫我幸に其末班に列するの光榮を荷ふ、歡喜踊躍豈一片の意思を述ぶるなからんや。聊か蕪言を綴り、以て祝詞に代ゆ。 大日本帝国愛国協会本部幹事

明治卅三年二月四日 讚岐貫我

各地送付の祝文祝電の代読あり、続て近藤疎賢、水野道秀、岩佐大道、其の他合せて十八名の演説は饗膳の間拍手の裡に弁ぜられたり。午後五時を過ぎんとする頃に、早川見竜氏は満場に計るに、県下の仏教各団体は今回の大会を機とし、合して一団たる可き時は、一の仏教倶楽部に集まる事とし、名を愛知仏教倶楽部と稱し、之れを金城館に置く事を以てせしに異議なく可決したり。次に目下仏教界の時事問題たる宗教法案の件に付、初めより意志を一貫し、尽力ありたる大谷派の如きには感謝状を呈し、又七宗管長に向つては飽く迄も其の決議を徹せられん事を注言する事を計りしに、是れ亦満場異議なく可決せしかば、氏は左の二書を認めて、夫々へ送達せられたり。

不肖見竜、愛知県下仏教拾八団体を代表し、爰に貴師に対し、

貴派が巢鴨檻獄の教誨師事件より以来宗教法案に関する迄も強硬なる態度を取り初志を一貫せられ、我々仏教徒をして依て以て望を属せしむるの名譽を頌し、併せて倍々尽力あらん事を希望すると共に、我々も亦犬馬の労を吝まざるを誓ふ。

明治三十三年一月五日

愛知県下仏教十八団体代表者

興昌寺住職 早川見竜

大谷派本願寺特別教務局御中

不肖早川見竜、愛知県下仏教拾八団体を代表し、爰に七宗管長殿下に対し、各殿下が日本仏教各宗を代表し宗教法案に関し曾て政府に進言ありたる条目をして、政府に実行せしめ毫も譲歩等を為さず、日本仏教者が強硬なる態度をして内外国に知覚せしめられん事を希望す。

(以下同文にし、宛名は七宗管長なれば略す。)

当日は、場内に角袖巡查拾余名打ち交り居たりとの評あり。又能仁新報社が入会の申込場たりし為めに、誰人か姓名も語らず。日々数回入会人数を探聞に来られしは何の故か薩張……

名古屋大谷派別院の大会 (明治33年2月12日 第六三〇号)

尾張に於ける大谷派本願寺信徒の大会は、去六日午後二時より下茶屋町の別院に開かれしが、最初には古御殿に於て来会者約一千人に対し、同本山連枝顯明院殿隨行富永覚静氏が、宗教法案に於ける反対三ヶ条の旨趣を説明せしが、此時には門前町細川警部及



び正服巡查十数名平服巡查も亦二十名程出張し居りしも、此旨趣説明後は全く信徒中の上京委員三百五十余名を其場に残留して他は退去を求め併せて、警察官にも退席を請求したるに依り、茲に信徒と警察官は其場を去りしが、其後名古屋教務所の岡野覚心師座長となりて東京近時の模様を報告し、当日東京始め各地よりの祝電十七通を朗読し、続て前日、京都の妙心寺より来電に、同地の基督教派も亦法案反対の運動に着手すとの報道を為したる上、種々協議の末、若し貴族院にて現法案が通過し衆議院へ廻さるゝ等の事あらんには、直ちに尾州の信徒一人を上京せしめて大に運動すべしとの決議を為し、更に去る十日を以て同別院に於て報告大会を開き、信徒に向て法案反対の旨趣を披露し、尚ほ尾張国内十六組に於て各々大に政談演説会を開くことを決定し、次に同派の上京委員加藤喜右衛門氏、上京中の模様を報告し、午後五時頃散会したり。

### 蓮友少年会の大演説 (明治33年2月12日 第六三〇号)

仏教大演説、本月十三日午後六時、当市梅川町梅香院に於て蓮友少年教会の仏教大演説を開会せらる。弁士は岩佐大道、早川見竜、松本愛鷲、森西舟、吉水徳成、の諸氏なりと云ふ。

### 広告 (明治33年2月12日 第六三〇号)

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(八)

受持講師 水野道秀師  
永平家訓

受持講師 早川見竜師  
会場は宝町 禅芳寺

### 愛知県下の宗教法案問題 (明治33年2月19日 第六三一号)

愛知県下は、最初同案に対するの聲は甚だ高からず、名古屋に於ては、昨年五月仏教各宗同盟会なる者を総見寺内に設け、各宗合同して宗教問題に関する運動を始めんとしたり。併し其会の目的たる強ち宗教法案に対する運動を目的としたるに非ず、否未だ同案は僅かに各宗委員の手にある中なりしなり。併しながら宗教者としては時事の問題をも研究せざる可からず等の意味は、充分に含み居たり。即ち貴衆両院の議員に対して、对宗教の意見を聞かんと申込みを為したるにても知るべし。其の当時、仏教者として一大運動を為したるを明治館に於ける仏教者大会とす。同会は同志会なる者の発会の如き有様にて、同会の新役員と称せられたる者の斡旋にて開会せられ、尾三両国の有志五百名は明治館に集りぬ。又東京よりは、大日本仏教同盟会の幹事近角常観氏来り、末広座の大宴会となり、夜間新守の仏教大演説会となりしは、実に近来になき盛挙なりしなり。然るに同会より貴衆両院議員に質問したる对宗教の意見書は、一も返答の来りし者なく、明治館の大会も三ヶ条の決議を為したる俛にて、其の本尊の同志会

と共に竜頭蛇尾の立ち消えとなりしこそ是非なけれ。此の立ち消えより暫しの裡は、消息も無かりし宗教時事問題を久我侯爵と共に担ぎ上げたるを、東陽館なる各宗発企の演説会とす。同会も徳川侯爵の臨場もあり、旁々一時の花は咲きつるも、実は果して結べりしや否を認むるを得ず。將又同侯の来遊に付き、地方に宗教時事問題なる気焔を高めしや否は、吾人の保証に苦しむ所なり。然るに時なる哉々々々々々、全国仏教徒の大会は本年一月廿日を以て東京に開かれたり。此の大会や、実に我が愛知県をして宗教時事の大問題に目を注ぎ始めし導火線とはなりぬ。抑も此の大会や政府が之れを如何に誤解しけん仏教徒の一企騒乱にても発らんかの如くに思ひ、地方官に訓令し上京者の員数より及ぶ可くは、姓名をも調査せしめり。此の訓令や或る地方にては上京者抑留の手段となり、上京旨義尋問の召喚となり、警察力の及ぶ所之れを施さゝるなきに至りしより、却て地方人士の激昂を求め、遂に政府が提出したる宗教法案に反抗するよりも寧ろ干渉政策に反抗するの奇態を併発し、県下の仏教徒は爰に層一層と宗教時事なる問題の気焔を高めぬ聞くが如くんば、知事排斥の運動を企てんとし、或る地方の如きは警察官吏転命の計画をさへ為したりしと。偕此の全国仏教徒大会に出席したる県下の仏教徒は、幾干なりしやは之れを詳悉するを得ざるも、凡そ四百名に近しとは敢て誇大の言に非ず。此の四百名中少なきも両三日、永きは十余日在京し、其の滞留間に於て遂に一種謂ふべからざるの薫染を脳庭に受けて帰国したり。……此の上京者は、先づ東京土産として自己

が脑中より族類は勿論、知己朋友に傾ちし者は政府提出の宗教法案の不完なる者てふ一語なりけり。……延て一月廿六日、末広座に於ける大会報告の演説会は、満場の人をして成る程と宗教法案の不備なる事を悟り始めしめたり。引き続き二月四日の東別院の大会は、幾千人てふ集合にて、其の決議として十日に大演説を開会する事とし、八日の東陽館大演説は、蓋し壹万以上の人数は門前に来りしならん。又十日の東別院の大演説の如きは、未曾有の盛挙にして全く法案反対の理由を了解せしめたり。而して其の来聴の多くの郡村の人々なるを見るも、如何に法案問題の地方に喧しきかを知るに足らん。之れを郡別すれば、中島郡を最も気焔高き地方とす。同地方には愛国護法同盟仏教会ありて、其の運動は怠たり無く、次を愛知郡の西部とす。海西、丹羽、葉栗之れに続き、海東これに相比ふも、両春は稍底きが如し。要するに人気の向ふ所、当る可らざるは河の決したるが如し。苟も演説会といへば、恒には三四十の人の会せざる者も、目下は尚ほ時事問題てふ触れ込みならば、五百以下は欠く事なし。豈に畏るべきは社会の趨勢なる哉、目下の宗教法案問題の気焔は、先づ全国の中にて当県は三四と下らざるべし。

**永平寺實主の御来名**〔明治33年2月19日 第六三一号〕

別項特別広告の如く御来名あり、御親教其の他を営まる。

**遠忌と授戒会**〔明治33年2月19日 第六三二号〕

当市白川町西光院に於て、来る三月四、五両日、派祖西山国師六百五十回遠忌音楽大法会、同六日より十二日迄、授戒会戒師を管長清水大僧正猥下を屈請し修行する由。

**特別広告**〔明治33年2月19日 第六三二号〕

来ル三月十八日ヨリ(旧二月十八日ヨリ)

伝戒式 乾徳寺

但西有老穆山老師、午前午後ニハ禪戒篇提唱、暁天ニハ三物秘弁ノ密授伝法、已上ノ有志者ハ、紅衣ハ軋衣ノ年月ト、罷参ハ入室ノ年月トヲ添へ、当山へ申込置、前日午前マデニ衣鉢携帶ニテ到着可有之候、謹白

**特別広告**〔明治33年2月19日 第六三二号〕

勅特賜性海慈船大禪師御親臨

愛知 吉祥講 春際大法会

光明寺村 追悼大法会  
焼死工女  
来る三月二日午前十一時より

門前町大光院内

愛知 吉祥講本部

**東別院大会岡野氏の手腕**〔明治33年2月19日 第六三二号〕

過日、当市東別院に開会したる尾張より仏教大会に出席したる四百余名の大会は、岡野覚心師座長に就き議事を整理せられしが、当日は種々の意見を抱ける者多く、別に議案として配布したるにも非ざれば、議場は定めて混雑せんと我れ人も痛心せしに、岡野氏の手腕は能く此の多人数者を制し、無人の境を行くが如くに議事を進行せしめしは、流星の愛知天狗も鼻を屈めて氏が手腕を歎称せり。

**尾張仏教徒大会報告会の決議**〔明治33年2月19日 第六三二号〕

前号に記したる当市別院に開きたる大会報告の結果、左の五ヶ条を決議せり。

一、一村に二名の委員を設け、絶対的宗教法案に反対せしむる事

一、委員他行の場合には、必ず組長に届け置く事

一、宗教法案が委員会を経て貴族院の本議に廻付せらるゝ場合には、各村二名の委員は挙げて上京する事

一、代議士及有力者間を訪問し意見を訴ふる事

一、各郡村に盛大なる法案反対仏教演説会を開く事

**広告**〔明治33年2月19日 第六三二号〕

二月廿日午後一時始

仏教大演説会

清水町 開闢寺

曹洞婦人教会〔明治33年2月19日 第六三一号〕

当市桜町の安清院を本部と定めたる同教会にては、去る十一日午後一時より第四回目の講話を開演せしか。当日は粟田広治氏が古今和歌集の講義をなし、次に早川見竜氏が仏教修身要訣の講話をなして最とも殊勝に午後五時頃閉会せしと云ふ。因みに記す当日は、(朝霞)と云へる題にて会員の和歌を募りしに、何れも熱心に募集に応せしが、其内二三を左に記載す。

朝霞 すゝ子

見渡せはかすまぬ山もなかりけり

はるの朝たの空のどかにて

全 たま子

あさ霞たなびく山はみえねども

鳴くうぐひすの声ぞきこゆる

全 さく子

遠山ものどかに見えて朝ぼらけ

はなのかすみそ立わたりける

全 ふさ子

あさがすみ限りも見えずたちこめて

空ものどかにはれる春かな

全 いな子

ほのゝと朝たのどけく見渡せば

全 四方の山辺はかすみたなびく  
じやう子

あさぼらけ野末もわかず山もとの

全 烟りとゝもにたつ霞かな  
ひろ子

朝風はまだ寒むけれど立こめし

全 かすみに春のけしきなりけり  
ひさ子

あさぼらけ遠山もとをながむれば

全 梅の花咲き霞たなびく

祖録の講義〔明治33年2月19日 第六三二号〕

当市桜町安清院に於ては毎月一日、十五日の両夜、早川見竜師が学道用心集を講義せられつゝありしが、更に鈴木敬嶽師を請し、去る十五日の夜より正法眼蔵の内帰依三宝の巻の講義せらるといふ。

広告〔明治33年2月19日 第六三一号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川 見 竜師

会場は宝町 禅 芳 寺

### 宗教法案の否決愛知県知事の賛成〔明治33年2月26日 第六三

二号〕

政府が、第十四議會に於て、最も難案とし、其の通過に全力を注きたるにも似ず。脆くも十七日の大失敗は、吾人仏教徒をして、仏教万歳を唱呼せしむると共に、政府党が、如何に面目を欠き、如何に落胆せしかを想像するに余りあり。愛知県知事冲守固君は、法案賛成の一人たれば、吾人は他日君が賛成の理由を聞くの日もあるべけれども、君は自己の意見よりも、寧ろ長州出身として、御用議員として、現内閣に忠なるの為に、盲立ちの賛成なるべしとは吾人も推測に苦しまざるなり。若しも否らずして、冲君其の人にして、盲従に非ずとせば、吾人は、大に君の所論を聞かん事を望む。抑も愛知は日本全国中に於て、最も寺院多く、信徒多き仏教の中心国なり。君にして此の土に令たり、而して全仏教徒が（一部を除くも）不備の法案に悉く反対を唱へ、死を以て争ふの当時に於て、君は其の反対者なる賛成家たれば、大に決する所ありて賛成を表せられしなるべき乎。故に曰く盲従に非ざれば大決心ありと、吾人は将来に於て、愛知県仏教徒の一問題として、君が盲決二点の孰れかを聞き、我が仏教国に令たるの知事冲守固君の進退を伺はんとするなり。

### 愛知県累代の知事は皆賛成〔明治33年2月26日 第六三二号〕

本県累代の知事にして貴族院の議員たる者は冲現知事を始めとして岩村、時任ともに三名なるが、三名とも法案に賛成し、又滝兵右衛門氏は何故か不出なりし。

#### 冲知事の法案賛成

冲愛知県知事が、其の筋の訓令により仏教徒大会以来宗教法案反對者に向ひ非常の干渉を為したる事は世論の既に喧すしき所なるが、果せる哉氏は法案通過に賛成せし一人にて、勿論政府党御味方議員なるは謂ふまでもなき事なれども、知事が仏教中心の愛知県に就任中、全県民が反對する法案に賛成す。知事の心や吾人仏教徒たる者は之れを解するに苦む。

#### 宗教法案賛否人名

##### 反対者(百二十一名)

|      |      |       |
|------|------|-------|
| 二条基弘 | 長谷信篤 | 久我通久  |
| 黒田長成 | 大原重朝 | 勸修寺頭允 |
| 清棲家教 | 立花寛治 | 大村純雄  |
| 徳川達孝 | 谷干城  | 鍋島直   |
| 曾我祐準 | 立花種恭 | 平松時厚  |
| 伏原宣足 | 前田利堤 | 功長    |
| 山本実庸 | 錦織教久 | 松平忠恕  |
| 京極高厚 | 細川興貫 | 仙石政固  |
| 竹内惟忠 | 久世通章 | 唐橋在正  |
| 野宮定毅 | 京極高典 | 大河内正質 |

|     |    |    |    |    |     |    |     |    |     |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |     |    |    |
|-----|----|----|----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|-----|----|----|
| 久保田 | 生駒 | 高崎 | 岩倉 | 杉溪 | 中御門 | 安藤 | 伊達  | 柴原 | 中島  | 神山 | 永井 | 丹羽 | 山井 | 稲垣 | 戸田  | 新莊  | 小笠原 | 鳥居 | 板倉 | 大久保 | 松平 | 戸田 |
| 讓   | 親忠 | 安彦 | 具威 | 吉長 | 経隆  | 直行 | 宗敦  | 和  | 錫胤  | 郡廉 | 尚敏 | 長保 | 兼文 | 太祥 | 忠義  | 直陳  | 寿長  | 忠文 | 勝達 | 忠順  | 乘承 | 忠行 |
| 谷森  | 真田 | 辻  | 酒井 | 南  | 菊池  | 玉松 | 西五辻 | 名村 | 金子  | 野村 | 尾崎 | 高野 | 松平 | 千種 | 舟橋  | 久留島 | 本莊  | 京極 | 山内 | 大田原 | 青山 | 一柳 |
| 真男  | 幸世 | 健介 | 忠弘 | 光利 | 武臣  | 真幸 | 文仲  | 泰蔵 | 堅太郎 | 素介 | 三良 | 宗順 | 直平 | 有梁 | 遂賢  | 通簡  | 寿巨  | 高德 | 豊誠 | 一清  | 幸宜 | 末徳 |
| 何   | 西村 | 紀  | 平野 | 新田 | 島津  | 本多 | 金子  | 村田 | 小沢  | 宮本 | 伊丹 | 牧野 | 青木 | 入江 | 梅小路 | 黒田  | 松平  | 内藤 | 鍋島 | 鍋島  | 山田 | 内田 |
| 礼之  | 亮吉 | 俊秀 | 長祥 | 忠純 | 珍彦  | 副元 | 有卿  | 武保 | 武雄  | 小一 | 重賢 | 忠篤 | 信光 | 為守 | 定行  | 和志  | 康民  | 政共 | 直柔 | 直虎  | 弘達 | 正学 |

|     |     |     |    |     |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |         |     |     |    |     |     |     |    |
|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|---------|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|
| 寺島  | 有地  | 田尻  | 園田 | 調所  | 鍋島 | 千家  | 北垣 | 三好 | 本田 | 辻  | 堀田 | 長岡 | 坊城  | 徳川  | 贊成者(百名) | 早川  | 荒野  | 高橋 | 佐藤  | 都筑  | 馬屋原 | 中島 |
| 秋介  | 品之允 | 稻次郎 | 安賢 | 所広丈 | 島幹 | 家尊福 | 国道 | 退蔵 | 親雄 | 新次 | 正養 | 護美 | 俊章  | 家達  | 周造      | 由次郎 | 喜惣治 | 国彦 | 馨六  | 筑馨六 | 原彰  | 永元 |
| 吉川  | 長松  | 時任  | 小牧 | 渡辺  | 岩村 | 三浦  | 赤松 | 平康 | 渡辺 | 揖取 | 久松 | 伊東 | 吉井  | 壬生  | 岡田      | 飯尾  | 米谷  | 最上 | 児玉  | 山脇  | 富田  |    |
| 重吉  | 幹   | 為基  | 昌業 | 千秋  | 高俊 | 浦安  | 則良 | 毅  | 清彦 | 素弘 | 定弘 | 祐鷹 | 幸蔵  | 基修  | 太平治     | 麟太郎 | 半平  | 広畔 | 上一郎 | 淳一郎 | 鉄之助 |    |
| 小早川 | 木梨  | 平山  | 鈴木 | 中村  | 船越 | 渡辺  | 伊藤 | 松平 | 清浦 | 岡内 | 相良 | 岡部 | 広沢  | 正親町 | 鳥越      | 橋本  | 角田  | 広瀬 | 熱海  | 石井  | 森山  |    |
| 四郎  | 清一郎 | 成信  | 大亮 | 元雄  | 越衛 | 洪基  | 藤雋 | 正直 | 奎吾 | 重俊 | 頼紹 | 長職 | 金次郎 | 実正  | 貞敏      | 吉兵衛 | 林兵衛 | 和育 | 孫十郎 | 忠恭  | 茂   |    |

|        |       |        |
|--------|-------|--------|
| 毛利五郎   | 高木兼寛  | 石井省一郎  |
| 児玉少介   | 渡正元   | 湯地定基   |
| 南郷茂光   | 松本鼎   | 小原重哉   |
| 内海忠勝   | 平田東助  | 沖守固    |
| 武井守正   | 鮫島武之助 | 川崎祐名   |
| 折田平内   | 菊池武夫  | 堀基     |
| 大沢謙二   | 木下平次  | 高橋新吉   |
| 磯辺包義   | 児玉利国  | 田中綱常   |
| 沢簡徳    | 宮島誠一郎 | 三崎亀之助  |
| 秋月新太郎  | 穂積八束  | 住友吉左衛門 |
| 三田昌馬   | 中西光三郎 | 山田卓介   |
| 三木与吉郎  | 小幡篤次郎 | 井狩弥左衛門 |
| 下田幸三郎  | 五十嵐甚蔵 | 臼井儀兵衛  |
| 野村恒造   | 赤沢伊太郎 | 海江田平治  |
| 色部義太夫  | 菊池長四郎 | 松木彦右衛門 |
| 田中源太郎  | 八坂甚八  | 野口耿    |
| 菅野伝右衛門 | 松永安形  | 鎌田勝太郎  |
| 中山文樹   | 山本忠秀  | 斯波与七郎  |

**特別広告**〔明治33年2月26日 第六三三号〕

戒師 大本山総持寺貫主  
 勅賜 法雲普蓋大禪師  
 御親化授戒会

来ル明治卅三年 三月十八日  
 旧二月十八日 ヨリ

東田町  
 乾徳寺執事

**特別広告**〔明治33年2月26日 第六三三号〕

勅特賜性海慈船大禪師御親臨

愛知 吉祥講 春際大法会

光明寺村 追悼大法会

焼死工女 追悼大法会  
 来る三月二日午前十一時より

門前町大光院内  
 愛知 吉祥講本部

愛知人物誌 **帝室技芸員伊藤平左衛門氏**〔明治33年2月26日 第六三三号〕

伊藤氏の祖先は甲斐の人なり。世々平左衛門を以て通称とす。慶長十四年、徳川義直の尾張に封ぜらるゝや工匠の職を以て之に随ひ、藩の棟梁となり名古屋宮町半の切に住し、是より世々建築を以て職を襲ふ。三世平左衛門に至り、其業務を拡張し一般社寺の建造を掌るに至る。当時大谷派本願寺法主光海一如上人、名古屋に於て別院を創建するに当り、平左衛門は命を受け大師堂を建つ。(此堂は目今の大師堂に非ず、今の大師堂を建るに及び取量

み別に蔵し置たるを、安政年中本山焼亡に際し以て仮大師堂に充て、其後之を泉州境に送り、今の境別院の本堂即ち是也）五世平左衛門を中興の祖となす。其の名古屋本願寺別院の山門を経営するに当たり、先づ範を京都大派本山の山門に取り、次で古代の建築を観察せん為め、大和国の古社寺を巡視すること十三回に及び、而して始めて莊嚴の構造を全ふす。現今の山門即ち是なり。

而して、其初めて経営の命を受しは、実に弱冠前後なりと。

六世平左衛門、大谷派本願寺の両堂、山門建築の設計を為し、文化二年十月斧始の式を行ひしが其功を果さずして没す。

七世平左衛門に至り、継で同工を起し、文政五年十一月に竣工す。法主光朗達如上人、其功を嘉し、通称に代るに信濃の国名を以てす。之より本山内に於ては、信濃を以て之を称す。

八世平左衛門、高野山金峰寺大金堂即ち十二間四面の多宝塔を建立す。蓋し海内の偉観と称する処にして、此他京都華頂宮御用を受け、知恩院山内に数棟の建築をなす。其建築の茶所は目下現存すれども、鐘樓西の五角堂は今亡びたり。又大谷派本願寺大工総肝煎を勤め、両堂、大門集会所、其他の工事を監督し、其他尾張津島神社の造営を命ぜられし等、工事の数枚挙に遑あらず。

九世は即ち現今の平左衛門氏にして、文政十二年十一月十九日名古屋宮町半の切（現今の朝日町一丁目）の家に生る。幼名を陽一郎といふ。冬至一陽来復の候に生れしとて、尾州藩の碩儒奏鼎翁の命名せし所にして、稍長して鼎翁の門に入り、四書の素読等を受く。十五歳より父の膝下に在りて工匠の業に従ひ、傍ら建築法

の規範を学び、十八歳に至り名称を平作と改め、父と共に高野山大塔の建築に従ひ、二十歳にして監督図工方に進み、野山に居ること六年にして、其落成をみる。後京都に來りて別に居を卜し、洛の内外及び大和の古社寺等を巡視する数回、且つ父の負担せる鷹司家の諸造営及び寺院の諸建築を視、三十五歳郷里に歸りて、更に平左衛門と改称す。

文久三年世上の形勢一変し、諸公先を争ふて京都に朝し、其邸第を営むに及び、岡崎吉田の地は尾州加州芸州薩州の邸宅を以て填咽するの状あり。氏は尾州邸建築の棟梁として日夜工事を督す。成るに及んで巍然輪奐の美を極め、大に他棟梁の眼を驚かす。次で近衛家の河原御殿を造る。

元治元年征長の師起るに及びて、尾州侯其総督たり。氏は統領頭として軍旗に先ち、鹿島に至り兵舎を造営し、同年乱平ぐに及びて帰郷す。是より先長軍嵯峨天竜寺に屯し、以て元治甲子の兵役を開き、薩軍進んで其陣營を焼く。兵燹延きて後嵯峨龜山の二帝陵を荒蕪す。本願寺嚴如上人之を歎き、（龜山天皇は、文永九年久遠実成阿弥陀本願寺の寺号を見真大師三世覚如上人に賜はり、初めて勅願所となされ、後嵯峨天皇は其御父たる由緒を以て）孝明天皇の朝に請ひ、御陵を修理し双立の法華堂を新設す。平左衛門氏父子、其工事に參し経営慘憺彫樓の美を藉らず、工匠の善を尽して建営せり。



名古屋東別院の大会（明治33年2月26日 第六三二号）

去る十六日、東別院に准参務谷了然氏等来会し仏教大演説会を開かれし事は、前報の如くなるが、当日四ヶ国の僧俗相合し左の決議を為せり。

尾濃参勢联合会規約

第一條 本会は尾張美濃三河伊勢の四ヶ国の聯合を図り、本山施行の方針に従ひ一派教学の發達を期するを目的とす。

第二條 本会は教務所員賛衆国役及各寺住職其他有志の僧俗を以て組織し、当分特別教務局の監督の下に在るものとす。

第三條 本会は本部を名古屋教務所に置き、支部を岡崎桑名岐阜大垣の四教務所に置く。

第四條 本会は各教務所管事を委員とし専ら会務の処理に任じ、賛衆を顧問とし国役一般を評議員とす。

第五條 本規約は聯合大会の決議に抛り、修整加除することを得  
聯合会決議

第一 布教の發達

一 凡そ布教上風紀を矯正する事は一般僧侶各自相警め、国役は専ら其取締の責に任ずること。

一 慣例の布教の外、少年教会工場教会等の布教の新方面を開く事。

一 会員交互に聯合区内を巡回せしめ、前項の実行を奨励し其成績を取調ぶること例せば尾張の会員を三河に、三河の会員を尾張に巡回せしむる如し。

第二 布教の策進

一 派内子弟の就学を奨励すること。

一 女子教育貧民教育等の社会的事業に着手すること。

第三 教学費の奨励

一 各国役は勿論、各寺住職は教務所施行の方法により率先尽力して其奨励を為すこと。

第四 宗教法案に対する運動

一 本件に関しては尾濃参勢其歩調を一にし機敏の運動をなすこと。

一 時宜により各地の有力者を上京せしめ各代議士を訪問し、本件に関する意見を叩き其同意を求むること。

一 地方運動は各地其適宜の方法に依ること。  
一 既設の団体に関しては、耐久維持の策を請すること。

右決議す。

明治卅三年二月十六日

広告（明治33年2月26日 第六三二号）

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**広告**〔明治33年3月5日 第六三三号〕

来ル三月九日ヨリ十三日迄

天下泰平国家安全五穀成就祈祷会万巻陀羅尼修行

大導師 小林 日 董 殿

説教 大僧正 小林日董殿

同 前 講 千葉完妙殿

橘町七面山

妙 善 寺

**特別広告**〔明治33年3月5日 第六三三号〕

戒師 大本山総持寺貫主

勅賜 法雲普蓋大禪師

御親化授戒会

来ル明治卅三年 三月十八日

旧二月十八日 ヨリ

東田町

乾徳寺執事

愛知人物誌 **帝室技芸員伊藤平左衛門氏** (承前) 〔明治33年3月5日 第六三三号〕

明治四年陸軍愛知分営の御用を蒙むり、次で病院兵営等を構造し、全五年東京横浜に遊びて洋風の建築法を視察し、全八年愛知県棟梁となり、全県庁議事堂其他建築する処多し。

全十年二月、八世平左衛門の没するに及びて家名を継襲し、九世平左衛門と称す。此年尾張津島神社改造御用を蒙むる。又三重県庁建築を命ぜらる。

全十一年、大谷派本願寺に於て清国上海に別院を建立し、以て布教を計るに当り、氏は其建築法取調の爲め、全年六月清国に渡航し、上海付近より浙江省に至り、更に寧波より天童山及び補陀落山等を巡視して支那建築の構造法を了得し、全年八月帰朝せり。

全十二年五月、大谷派本願寺両堂再建の議決するや、氏は大師堂の棟梁職、木子棟齋氏は阿弥陀堂の棟梁職となり、氏は更に全堂梁の加談となりたり。次で上海別院創立棟梁となり、別に北京の北清教校南京の江蘇教校の建築を命ぜらる。

全十三年十一月二日、大師堂の斧始めを行ふ。

全十四年五月、高野山再建係より大塔建築正棟梁を命ぜられ、全年七月斧始式を挙ぐ。

全二十一年、北海道函館にて於て、本願寺別院建築につき本堂、表門、書院、庫裡等の設計に囑せられ、之と全時に北海道に寺院五ヶ所の建築を依頼さる。

全二十二年、奈良県より吉野郡に設立せらるる、官幣中社吉野宮御造営設計を托せらる。

全二十三年、自ら北海道に至り函館、札幌、江差、古平、福島等を歴巡し、土着住民の建築術に拙なるを慨し、大に斯術を説き、彼地の木工をして啓発せしむることを努めたり、停ること三年にして、二十五年帰国し、本願寺の工事を督する旧の如し。

全二十三年、東京第三回内国、勸業博覧会へ三層造高貴殿雛形を出品し、「棟梁の名夙に閑左に聞ゆ、意匠精細構造詳悉彫飾を施さずして輪奐の美備はる。其妙技甚だ嘉賞すべし」とて、妙技二等賞を賜はり。全品は今尚ほ上野博物館に保存せらる。之よりして氏の名はいよ／＼世上を喧伝す。

全二十八年四月に至り、大谷派本願寺両堂全部成功す。外人の觀光者も嘖々歎称せざるなし。氏は家業継承以来、諸所の工事を負担する事故拳に暇あらず。二十九年の統計によれば、仏寺四十三、神社三十六、官衛十一、学校十五、邸宅及び雑種四十七にして、其後統々増加なし、現今は、まだ洛北今宮神社の再建設に従事す。

#### 日蓮宗管長の来名〔明治33年3月5日 第六三三号〕

別項広告の如く、小林僧正には橘町七面山に來り、法会及び説教を開会さる。

#### 永平寺貫主〔明治33年3月5日 第六三三号〕

永平寺貫主には予報の如く、去る二日來名されたり。

●枇杷島青年教会には去る三日、天野若円氏、早川氏等を招き演説開会。

#### 仏教青年会発会式〔明治33年3月5日 第六三三号〕

本県知多郡野間村仏教青年の諸氏には、標題の如き団体を組織

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（八）

し、毎月仏教の講話をなし、大に青年の志気を鼓舞目的にて、昨四日全地正蔵寺にて発会式を挙行し、水野道秀師の演説会を催されたり。

#### 蓑虫仙人逝く〔明治33年3月5日 第六三三号〕

木ヶ崎長母寺にて、笈を卸して風流を友としありし同氏の事は曾て本紙にも記せしが、氏は美濃の人にて、十四歳より全国を遊歴し、各地にて古代の土器石器刀剣又は書画類数百点を採集し、又南画を善くせらるゝより、各地の風景を写したる物数百枚の多きを所蔵せられしが、惜い哉六十五歳にて、去る廿日同寺にて死去せられたり。因に同氏は、原籍も無く同寺を尋ね來りたるは、無住国師の徳を慕ひしによる由。その詠に、

同じ木の先へ蓑虫來て鳴けり

所蔵の古書刀剣書画類は同寺に保存せらるゝ由。

#### 広告〔明治33年3月5日 第六三三号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**特別広告**〔明治33年3月12日 第六三四号〕

戒師 大本山総持寺貫主

勅賜 法雲普蓋大禪師

御親化授戒会

来ル明治卅三年 三月十八日 ヨリ  
旧二月十八日

東田町

乾徳寺執事

**永平寺仏殿用材の運搬**〔明治33年3月12日 第六三四号〕

曹洞宗の大本山なる越前永平寺にては、仏殿の建築工事も追々歩を進め、来る四月の中旬には柱立ての式を執行する予定なるが、右仏殿の欄間に用ゆる檜板十二枚（長三間半にして中は曲尺五尺）は齋藤運漕店の手を経て、此の程既に笹島停車場へ着せしを以て、去八日愛知郡瑞穂、御器所、川名、末森、石仏付近の信徒三百余名が繰出となり、右十二枚の板を大八の荷車廿四輛に積み分け、尚ほ一同の信徒は大本山の定紋を染め抜きたる手拭を振り廻しつゝ、愛知吉祥講の旗数旒を推し立て、エイヤ／＼の掛け声やら、又た木遣歌を謡ふて新柳町通りより順路鉄砲町末広町を経て、門前町大光院の境内へ運搬せしが、其の一行は殆んど三丁余の長きに亘り、之に見物人の群集せし為め一時は通行止となりし箇所もありたる程の混雑を呈せしが、吉祥講の世話人近藤嘉七、渡辺正中、早川義兼、加藤鉞次郎、水野清兵衛等が前後を警衛せ

し為め、一点の支障なく至極好都合なりしと云ふ。

**広告**〔明治33年3月12日 第六三四号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**仏骨を歓迎せよ**〔明治33年3月19日 第六三五号〕

別項に記す如く、暹羅皇帝は、我が日本公使の請に応じ、仏骨贈付の鳳命ありきと、幸に来る明治三十四年は、仏滅二千八百五十年の忌辰に際するを以て、其の歳を以て、全国の仏教徒は大歓迎の式を挙げ、之れを叡山亦は其他に奉安し、一は南方仏教国皇帝の厚志に酬ひ、一は亜細亜仏教国の親交を之れより敦くすべき幸機の来れる者とし、吾人は大に之れを慶賀すると共に、諸氏の歓迎に尽力せられん事を欲せざるを得ず。

（右遺骨発見の事も別項に詳し）

**暹羅皇帝仏骨を日本に贈る**〔明治33年3月19日 第六三五号〕

叡山鉄道の事に就ては次に記載する如くなるが、昨秋高木文平氏

が帰京の車中に、暹羅全権公使稲垣満次郎氏に出逢ひし節、叡山  
 鉄道架設の件を談りたるに、公使も大に同情を表し居りしに、此  
 程公使より昨春、印度政府が同国にて発見したる釈尊の遺骨を暹  
 羅皇帝に贈呈したりしに、同陛下には更に右遺骨の一部を本邦の  
 仏教界に御贈与あらせられん叡旨有りし由にて、同公使より本邦  
 仏教各派管長に左記の書面を送り以て、各派協議の上適當の委員  
 を撰び派遣せられ度旨申送りたる。而るに高木文平氏は、叡山鉄  
 道否決の件に付き、此程内貴市長を訪問したる際、右の趣を漏し  
 たるに同市長も斯る事なくとも是非同鉄道の再願を為すべしとの  
 意見を抱き居りし際なれば、大に之を賛し是非仏骨は仏教上由緒  
 深き叡山に安置せんと、遠からず市内の重なる大寺を訪問して意  
 見を叩かんとすと。

(前文略す) 小生熟ら世界宗教界の大勢を察するに、仏回基所  
 謂世界三大宗教の中に就て仏教は、前後両印度より支那日本に  
 亘りて尚数億万の信徒を擁す。若し夫れ一朝好機の乗すべきあ  
 り、此等南北両仏教の一致を計り数億万の信徒凝つて一塊石の  
 如くならば、其勢や真に計るべからざるものあり。仏教是に至  
 て世界に雄飛するを得べく、仏教如斯にして二十世紀文化の上  
 に一大光明を發揮すべし仏教徒の天職亦実之に存する事と信  
 候。誠に之を小にしては日本仏教徒を打つて一丸となし、大に  
 しては世界仏教の一致を計り、茲に仏教の一新時期を画し、暗  
 中の大飛躍を試むる事今日仏教界の急務にして、諸氏等先進の  
 責任亦是に在りと信候。

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(八)

而かして、小生は今諸氏と共に仏教一新の好時機到来したるを  
 祝せんと欲するものに御座候。夫は諸氏も御承知の如く、昨春  
 英領印度政府は同国ピルハラに於て、ペツペ氏の発見したる  
 釈尊の遺骨及遺灰其他の遺物(遺物発見の記事及項御参照相成  
 度候)をば、仏教国唯一の独立国たる当国王陛下に贈呈し、当  
 国王陛下亦空前の盛式を以て之を迎ひ給ひしが、陛下には右聖  
 物を各仏教国に頒ち、世界仏教徒の一致を計らんとするの御聖  
 旨あり。而して今一月には錫倫島及緬甸の両地より委員を派遣  
 し、盛大なる儀式を以て各々聖物の頒を得申候。語る□這回当  
 国王陛下、亦た聖物の一部を我国仏教界に贈るの聖旨あり。小  
 生の指して以て仏界一新の好機となすは、即ち此事に御座候。  
 抑も聖遺聖物なるもの、如何に教徒の熱信を昂かめ渴仰を加ふ  
 るかは、今更呶々を要せざる処に候。彼の露国莫斯科府の「カ  
 セドラル オフ アツサンブシヨン」に於ける黄金龕中基督磔  
 刑の古針が、常に巡拝の善男善女をして随喜の涙を墮さしむる  
 が如き、或は「クリミヤ」の大戦亦其遠因を聖地「ゼルサレ  
 ム」の事に発し、或は独帝「ゼルサレム」に巡拝し給ひしが如  
 き、所謂聖地聖物なるもの、如何に欧米基督教国の民に渴仰せ  
 られつゝあるかを推知するに難からず候。

這回の事実には仏教界空前の盛事たり。諸氏宜しく御好機に乗じ  
 て南北仏教の一致を計り、以て世界仏教徒の情眼に鞭ち仏界一  
 振の盛挙に出でられん事熱望に不堪候。  
 当国王陛下が我仏教界に対し、聖物御贈与の聖旨に出でられた

ること既に当国外務大臣より通知有之、且つ我邦より派遣委員に対して御謁見等の御厚待をも賜はるべき旨、之亦外務大臣の通知に接し申候。但し陛下の聖旨、特に之を或る一宗派に贈るにあらずして、我邦仏教徒全体に賜ふものに御座候。

右の次第に候得共、我邦仏教各派の中より可成高德博学にして、英語を能くする仁数名を委員に御撰び相成、至急に派遣相成度候。敬具

明治三十三年二月十二日

在暹羅國盤谷府日本帝國公使館

稲垣満次郎

聖旨発見の由来

釈尊降誕の地カピラプツを距る数哩「ピラハワ」に、地主ペツペ氏なるものあり。数年前適々自己の地面内に一個の古墳あるを見て、若し之を発掘せば何等か仏界に光明を与ふべき発見あらんことを想ひ、其後工夫を督して之が発掘に従事せしが、ペツペ氏の熱心遂に空しからず。地下二十呎にして仏教界に一新時期を画すべし。一 大発見を為すに至りぬ。其発掘せし品々は一石櫃一個。二 水晶及蠟石瓶二個中一個は記銘せり。三 遺骨及遺灰。四 塗灰及木皿の破片。五 寶石其他裝飾物の多量等、にしてペツペ氏は直に之をバスターの収税官ラマサンカー氏に報じ、且つ添ふるに蠟石瓶の銘文を以てせり。サンカー氏ペツペ氏の書を領するや氏は直に之を熱心なる仏教学者博士ホエイ氏に対し其研究を依頼せり。

而して博士研究の結果、遂に上記の遺物は釈尊火葬の後、其兄弟サカヤスの依存したるものなるを明にせり。

以上は聖物発見の大歴史にして、其詳細に至ては昨年二月十七日発兌に博士ホエイ氏の論文あり。又「ロイヤル アヂマチツクソサイヌー」の報告書に、ペツペの聖物発見に関する記事あり。就て見らるべし。

曹洞婦人教会〔明治33年3月19日 第六三五号〕

早川見竜氏の唱導に係る全会は、去る十一日午後一時より其の本部なる桜の町の安清院に於て、第五回目の例会を催せり。全日は会員の集まれる者六十余名にて、一全は恭しく宗祖承陽大師の御真前にて最敬礼を行ひ、夫れより、栗田広治氏が古今和歌集、早川見竜氏が修証義を講述せられ、尚ほ（野の残雪）と云へる題にて和歌を募りたるに、会員の中にて其の募りに応じたる者も数多ありしが、其の中より高点の部を左に録せん。因みに記す。当日は全会の旨趣を翼賛して、新たに入会を乞へる者も拾余名ありて、前途頗る好望の感ありしと云ふ。

岩室 大 円 尼

梅の花さく野さかりの春なるに

いつまで野辺にのこるしらゆき

ま つ 子

打むれて若葉つまんとこしものを

のべの芝生にゆきぞのこれる

とく子  
 やまこえてすそ野のみちにいまもなほ

日かげつれなく残るしら雪  
 たま子

はるさむき野川の氷とけやらで

たなじの川にのこる白ゆき  
 いな子

春くればうめの花か見えにけり

こほりて残るのべのしらゆき  
 ふき子

はる来ても木がくれ毎にめづらしく

消えのこりたる野辺のしら雪  
 よう子

冬草のかればがくれに白ゆきは

きゆるもをしき春の野辺かな  
 さく子

はるの野に氷りてのこる白ゆきを

去歳のかたみと見るもはかなし  
 つゆ子

春の野にきえのこりてはあさ日にや

つれなく見ゆるゆきの色かな  
 じよう子

はる来ても野べの小松にきえのこる

雪のけしきをいざゆきて見む

すゝ子

日かげにもつれなくのこる春の野の

ゆきのむらさえ珍らしきかな

のぶ子

見あかねば今もなつかし春の岩に

まだとけやらぬ去歳のしらゆき

せい子

春きても雪はこの野辺にいま

もゆる若葉やときを知るらん

大沢智光尼

若葉つむ人にふまれて春の野に

かつゝのこるゆきのあはれさ

海辺春望 早川見竜

あさまだき八重の汐路を見わたせば

霞にうかぶ沖つしまやま

川柳 ふさ子

舟つなぐ入江のきしの糸やなぎ

かげもなびきて春風ぞふく

**仏教講義の好結果** (明治33年3月19日 第六三五号)

当市宝町の禅芳寺にては、過ぎつる明治三十年の三月より仏教の通俗講義所を設立し、水野道秀、早川見竜の両氏が出席して、毎

月二回づゝ曹洞宗の信徒を誘掖しつゝ、ありしが、本年は創立以来より恰も三ヶ年の星霜を閲したるを以て、近日の中に創立三周年の祝賀法会を執行する予定なりしと云ふ。

### 追吊会と永代経

〔明治33年3月19日 第六三五号〕

当市門前町七ツ寺境内善光寺に於て、昨十八日より廿四日迄七日間、常灯講中の永代経修行并に、来る廿一日光明寺村焼死工女の追吊会を修行せらるゝ由。

### 広告

〔明治33年3月19日 第六三五号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

### 愛知仏教会事業略報告

〔明治33年3月26日 第六三六号〕

明治廿三年一月創立し、各宗高僧を請し発会式を挙行し、西別院に於て大演説会を開く。

同年七月二日、名古屋市長中村修氏に宛て貧民千三百三十四名に白米五合宛配与方を出願し、門前町極楽寺に於て実行す。

同年八月八日、同上沓千式百名を市長代理吉川義道氏宛に出願実行す。

同十日、千三百四十四人に同上実行す。

明治二十三年朝鮮事変に際し、本邦罹災人救護の爲金五拾七円四拾五錢を贈る。

明治廿四年尾濃大震災被害者救助として、金七百七拾沓円參拾參錢六厘并に白米及衣類等約五千点を贈与す。右賞として、

廿六年二月一日、岐阜県知事より

木盃 壹個

同 年四月廿日同 上

木盃 壹個

同上

木盃 壹個

同上

賞状 壹通

同 年十二月廿日、愛知県知事より

木盃 壹個

同上

賞状 壹通

同上

賞状 壹通

同上

賞状 壹通



同上

木 盃三個 壺 組

明治廿七八年、戦役に際し恤兵義金六百六円四銭物品食品等献納の賞として、

木 盃三個 壺 組

明治廿九年、奥羽海嘯被害者救恤且慰問の爲め慰問使を遣し、金員并に物品を贈与す。右の賞として

木 盃三個 壺 組

等下賜せらる。其他受領証書類数十通あり。以上を慈善事業とす。

本会は、明治廿三年より毎年当師団の招魂祭場に於て読経す。

明治廿七八年戦役に際し、出戦并に留守軍人の爲に出願を爲し、許可を得て軍営内の説教を始め曹洞宗管長其他各宗より営内に於て法話ありたり。第三師団の軍人説教の公許は実に本会を始めとす。

明治卅二年四月改正条約実施祝賀会を本県々會議事堂に於て行はるゝや、本会の申立により仏教各宗取締は同式に参列者として加へらる。

其他当市に於て挙行せる仏教事業の運動の枢区は、必ず本会ならざる事なく定期演説并に死亡会員の法要も華麗と質実の差ありと雖も之れを挙行せる事数拾回、其他会員の死亡ある時其の通報を得ば之れに会葬せしめ殊に明治廿七八年戦役に際し、戦死軍人の葬儀には市長の通知により必ず代表者を会葬せしめて弔文を捧げ

り。以上を布教部の事業とす。

仏籍の講義は明治廿七年迄春秋に挙行し、仏教夏期講義会を開く事二回なるも経費の都合連続するを得ざるを遺憾とす。

新聞紙発行は能仁新報を発行する事十年、一日の如し。蓋し全国中に於て(本山設立に非ざる教会にして)其の機関新聞を十年一回の休刊なく連続せるは本会に限れり。其他廿七八年戦役に法話の雑誌を軍隊に贈る事数千部、右を講義出版部の事業とす。

東京に於て明治廿四年全国仏教者大会の第一回を開かるゝや、本会より総代を上京せしめ、尚ほ第二回の大会を名古屋東別院に開き了て金城館に於て大園遊会を開く。全国の来会者驚歎して曰く。斯る仏教者の会合は未だ見ざる所なりと。其の来会者は長崎あり、青森あり、大会の報告書を出板す。

明治廿五年京都に於て 桓武天皇祭を施行せらるゝや、本県も之れに賛同され、本会は本県賛同の一部として 桓武天皇祭を一週間挙行す。

明治卅二年五月、名古屋市大光院に於ての豊太閤の法要は、本会の名を以てし黒田侯爵の参拝あり。尚ほ本会より金五拾円を献備し、豊太閤の事蹟式千部を贈進す。

以上は、本会が既往挙行したる事業の一般を報づるに止まる者にして、将来に於ては其の時あるに際し、方に大に為すあらんとす。謹て報ず。

愛 知 仏 教 会

**曹洞宗の現況**〔明治33年3月26日 第六三六号〕

宗教法案に関する運動も既に終りたれば、今後は最早宗内のことを処理する外、別に用事なきこととなれり。然るに両本山には、越大本山の大工事の重大事件あり。能大本山の再建大工事あり。越本山の工事費は三十万円の予定とか聞きたりしが、「宗報」の報ずる所に依れば、登録金額猶ほ六万一千九百円に過ぎず。今後追々募集さるべきことならんか。能大本山の方は未だ其処までの運びも付かず、是亦偉大の事業たらん。▲大学林は旧臘閉鎖以来、未だ開かれず。当局者の方針更に明め難し。生徒は大抵帰省して読書に志す者は甚だ多からずと云ふものあり。之に対する吾人の定見は、之れを本領欄に収められたれば、敢て再言せざるべし。

▲高等中学林は紛擾ありたりとの報ありたれど、其後の報道に依れば、職員一同は先きに辞表を呈し、伊藤、平島両教授は自坊に帰り、山田、真鍋の二教授は留守番同様林内に在りしが、宗務局にては、当初は一同改任する予定にて後任者を探求し、前教授忽滑谷氏にも勧告する所ありしが、氏は応ぜざりしかば、先月二十四日石川執事を遣林し、大講堂に於て山田教授及び真鍋副学監へ管長より厚く留任すべき旨を促され、二氏も留任することに確定し、平島学監の後任は田中道光氏任命せられ、伊藤助教授の後任は中村黄竜氏任命せられし旨を告げ一段落を告たるが、いづれ四月頃には退林生一同入林せしむべき旨、山田教授より生徒一同に誓約せしと云ふ。(和融誌)

**久我侯爵の来名**〔明治33年3月26日 第六三六号〕

大日本仏教徒同盟会愛知部発会式

同候には、昨廿五日午前六時二十分東京発同午後四時二十分笹島着にて来名されしが、右は本日、東別院に於て開会の大日本仏教徒同盟会の発会式に臨まるゝ為にして、右を終り次第大阪より九州地方を巡回せらるゝ筈なり。尚同発会式、其の他は次号に於て詳報すべし。

**法雲普蓋禪師**〔明治33年3月26日 第六三六号〕

曹洞宗総持寺の貫主には当市東田町乾徳寺の授戒を親修され、去る廿四日満戒に付、発錫見送人等非常に多かりし。

**愛知郡に於ける仏教団体の組織**〔明治33年3月26日 第六三六号〕

同郡の各寺院及び吉田高朗、永田与右衛門、中西鉦太郎、中村嘉六、荒川雅楽郎、鈴木岩次郎の諸氏発企となり、愛知仏教同志会といふ一仏教団体を組織せらるゝ事となり、左の主意書及び規則を発表せられしが、其の発会は五月上旬の由にて、その際は大谷派中の御連枝を招待せらるゝやに聞く。

夫れ我大日本帝国の国体は、世界万国に比類なき金甌無欠の宝国にして、上に万世一系の皇帝在して、億兆の民を統御せさせられ、其民や克く君臣父子の道を遵奉して淳良なる所以を問はば、一に祖先伝来の遺訓の篤きと 天皇陛下の御聖徳の然らしむる所とはいへ、復た大乘仏教化薰陶力の之に与りて大に力

ありと云を憚からざるなり。故に聖德皇太子は、日域は大乗相應地と鑽仰し玉ひ、明に仏教道德の真理を以て十七憲法の骨子とし玉へり。辱くも歴代の聖主は叡慮を深く此仏教に注ぎ以て、天下に仁慈を垂れ玉へり。其下に生息したる我々の祖先は、偏に帝徳と厚き仏法味とに依りて、鼓腹の快樂を享有て千有余年の今日に至るものなり。然るに物は換れり、星は移れり、遂に今日は是れ中外雑居と信教自由の時となりて、種々に主義の異なる宗教と習慣の変れる人情とを以て、我国固有の美德を攪乱し、人心を四分五裂ならしめんとせり。噫此時に当り、固有の仏教道德を發揮し無上の国体をして益々光輝を放たしめんと籌るは、実に我々仏教徒の急務なり。然るに世態の急変は、堤を決するの水の如く、個人を以て之に当るは不可なり。昔人云く、一枝の箭は折り易く、一束の箭は折り難し。治国平天下を計らは夫れ宜く同心協力すべしと、今も亦爾り。個人の信仰は夫れ堅しと雖も團結の強なるには如かず。況んや大乘仏教の真理は、個人的のものに非ずして、社会的のものなるをや故に、愛知郡有志の縑素は茲に見る所ありて、愛知仏教同志会なるものを組織し、内には信仏の因縁を啓発せしめ、外には仏教の光輝をして国光と共に益々熾盛ならしめんことを期す。希は仏教有縁の諸氏よ。速に前陳の趣旨に賛同し、奮て本会に加入ありて設立の目的を達することを得ば、独り本会の幸慶耳非るなり。

○本会の会員は名誉会員特別会員正会員の三種とす

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（八）

○名誉会員は学識名望ある人士、又は本会に殊に功勞ある人士を評議会員より推戴するものとす。

○特別会員は年々半期毎に金廿五錢宛を収むるもの、又は一時金五円以上を寄付するものとす。

○正会員は年々半期毎に金六錢宛を収むるもの、又は一時金一円已上を寄付するものとす。

○毎年春秋二期会員死亡者の追吊法会を修す。

○特別会員の死亡せしときは、特派僧を遣し会葬せしむ。

○名誉会員の死亡せしときは、特派使を遣し奠物をなさしむ。

○仮事務所を愛知郡（旧五女子）源通寺に置く。

#### 安齋院伝戒会〔明治33年3月26日 第六三六号〕

同戒施行の事は既に記載せしが、同会に掛錫されしは左の諸氏なりしと以て、其の盛挙を知るべし。

|         |         |         |
|---------|---------|---------|
| 尾張 橘    | 成典      | 伊勢 水野良英 |
| 尾張 岩山臥竜 | 同 松浦祖英  |         |
| 同 宇野品覚  | 同 河田蘊瑞  |         |
| 同 牽童円牛  | 丹波 和田慈穩 |         |
| 尾張 靈岳諦道 | 同 平林法輪  |         |
| 丹波 本覚玉明 | 尾張 土屋徳瑞 |         |
| 河内 坪井道契 | 尾張 丹羽普禅 |         |
| 同 匠印元宗  | 同 服部瑞雲  |         |



|   |    |    |   |     |    |
|---|----|----|---|-----|----|
| 同 | 大野 | 義童 | 同 | 祥岳  | 道麟 |
| 同 | 梅本 | 石竜 | 同 | 萼良  | 仲  |
| 同 | 渡辺 | 嶺猛 | 同 | 伊井野 | 天真 |
| 同 | 秋田 | 道機 | 同 | 水野  | 宗光 |
| 同 | 山口 | 義範 | 同 | 大沼  | 麟応 |
| 同 | 奥山 | 祖道 | 同 | 山崎  | 高俊 |
| 同 | 松村 | 透関 | 同 | 桑原  | 眉賢 |
| 同 | 宮田 | 靈牛 |   |     |    |

**広告**〔明治33年3月26日 第六三六号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**仏骨奉迎に關し、遠藤氏の贈れる文**〔明治33年4月2日 第六三七号〕

在暹羅稻垣公使よりの書簡等は既に掲載せしが、左に盤谷府勅願所遠藤竜眠氏より稻垣氏と意見を同くせるの文を贈れるあり。此に掲載す。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（八）

抑々当仏骨は、正曆千八百九十七年英人ピツプなる者、カピララストを距る二三哩ピツチの地にて発見せり。嘗てピツプ思へらく、此地は釈尊の遺骨を奉葬せるが故に、必ずや古代の器物等あるべきを信じ、其古塔を穿つと廿尺余に及びり。果せる哉一大石窟あり。其内より遺骨及寶石等数種を出す。其内水晶に文字を彫刻せるものあり。是をドクトルホイットなる人の手に依て翻訳せらる。曰く仏滅後、その遺族の仏の遺骨を分与せらる云々の事明記せる。是に依てピツプは、此の如き古代の宝物を私宝と為すを惜み、都て英政府へ奉納し、且上奏して曰く是を四分と為し、一分は印度カルカッタの博物館に納め、一分は英政府へ納め、一分は発拓者へ分与せられ、而して仏骨に属する部分は、当時仏教國たる暹羅王国へ送呈せられ度き旨を以てす。英政府は同人の希望に一任す。是に依て昨年五月、暹羅政府は勅使を遠く印度に派して奉迎し、前後三十余日の大祭を執行し、王国の道俗千里を遠くとせずして盤谷府に來集す。當時の景況は、嘗て我同胞に報ぜしを以て、今茲に略す。本年一月、緬甸錫蘭の仏徒道俗三十余人來暹し遺骨の分与を受け、在留二十余日にして帰途に登れり。茲に於て、我日本公使稻垣滿次郎氏は暹國皇帝に上奏して曰く、我日本帝國は仏教渡來後、茲に千有余年、上は天皇より下庶人に至るまで仏陀大悲の慈恩に薰習せざるなく、其教義發達の点に至りては、南北仏教中大高位にあらや世界各国の許す所にして、上下一致同胞の仏教國たるに依り、冀くば同仏教國の好を以て分与あらば、我同胞の大幸何ぞ是に過ぎんと奏聞數回、遂に今回王命を以

て分与の確報を得たり。是偏に公使の周旋多きに依ると雖も、亦我が神州の国威と我仏教界の實力偉大なるの然らしむる所たるや明なり。

(中略)

又我国仏教徒は、暹羅王室より幾多の厚意を受けつゝあり。初めには暹羅の一大藏経を我国各宗本山に奉納せらる。其後二三の僧侶此地に止まるあり。今又仏骨の分与を受くる事を得、此の厚意に対して我日本仏教徒は、大に酬ひざるを得ざる義務を有せり。特に今回の如きは、南北仏教徒中最第一位に在りと、嘗て自負せるに愧ぢざるの實を挙げざる可らず。将来人智の發達と共に各自分業を云々し、或は錫蘭に入り、或はサンスクリットを学習するもの、或は暹羅に來りパリを学ぶもの年を追ふて増々多からん。或は更に印度暹羅の仏徒にして日本に至り、日本仏教の如何を研究するものも生ぜん。是将来の想像にあらずして、現今其緒に付きつゝあり。

何れの点よりするも、今回の件は彼我同盟の第一着歩として逸すべからざる好機会たり。此の如き機会を根底と為し、将来暹羅を南北仏教中央政府と為し、一方には緬甸錫蘭に入り、一方にはカンプヂヤ、安南、老過、西藏、カシユミル、ブータン、クシヒムより更に転じて南方支那の一帶に及び、北方は日本を本部として蒙古朝鮮より支那本部に入り氣脈相通じ、朝にはヒマラヤの山嶺に雲を起し、夕には蒙古の沙漠に雨を降すに至らば、豈一大快事ならずや。

**広告** (明治33年4月2日 第六三七号)

例月十日廿日の両日午後七時より

観音 普門 品

受持講師 水野道秀師

永平 家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**広告** (明治33年4月9日 第六三八号)

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音 普門 品

受持講師 水野道秀師

永平 家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**愛知中学林教授** (明治33年4月16日 第六三九号)

愛知中学林教授、左の任命ありたり

(三月十二日)

任曹洞宗愛知中学林教授 樺山 励 本

(全)

任曹洞宗愛知中学林教授 水野雷幢

**仏骨歡迎に関する協議**〔明治33年4月16日 第六三九号〕

各宗委員会は既報の如く、去る七日洛北妙心寺竜泉庵に於て第一回を開きしも、翌八日より妙心寺に於ては授戒会、大谷派本願寺に於ては大法要の執行あり旁々開会する運びに至らざりしも、暹羅皇帝より仏骨遺灰及遺品等分与の件に付、至急協議を要するを以て、十三日午前十時より竜泉庵に於て第二回委員会を開けり。出席者は左の如し。

臨濟宗鎌倉円覚寺派小島蔵海、建仁寺南禅寺相国寺兼任瑞岳能岳、妙心寺派稻葉元厚、真宗高田派大西靈純、天台宗寺門派河村暹導、本派本願寺神根善雄、時宗河野良心、真言宗岡本慈航、仏光寺派有馬憲文、大谷派土屋観山、同石川馨、同野間凌空、浄土宗西山派青井俊法、同靈群諦全、真言律宗岩成元随、黄檗宗松原正英、天台宗蘭光徹、妙心寺前田誠節、大徳寺小堀宗長

当日の議案は歓迎委員派遣の件、同経費の件、暹羅国皇帝陛下へ献上品の件等なりしが、本件に付ては、本派本願寺へも特に照会したれば、同本山より神根善雄師出席し、斯くて午前十一時三十分より午後二時に亘りて協議会を開き、午後二時四十分より更に本会議を開き、本派委員神根師は、本件は近日開くべき各宗派管長会議に提出し慎重に討議せんと述べしも、既に期日切迫せることなれば、管長会議を待ち難しとの事にて、結局調査委員三名を撰び

付托することとし、尚ほ本件に付、日蓮、曹洞、浄土の三宗より照会の次第もあれば委員を東上せしめ、右三宗に交渉し暹羅国皇帝陛下の思召の如く、我が仏教各宗派一致して奉迎せんとするに決し調査委員三名を撰挙せしに、本派本願寺委員神根善雄、大谷派本願寺委員土屋観山、臨濟宗建仁寺委員瑞岳能岳の三師当撰し、次に日蓮、浄土、曹洞三宗への交渉委員一名を撰挙せしに、仏光寺派委員有馬憲文氏当撰せり。依て右調査委員の報告を待ちて、来る十八日午前十時より更に本会を開くこととし、四時過ぎ散会せり。尚ほ仏骨歡迎委員は此程の紙上に、大谷派連枝宝香院大谷勝道師を推薦すべしとのことを記せしが、聞く処に依れば、委員会にては同派新門主大谷光演師を撰せんとするの意向なりと。

**愛知吉祥講の大拡張**〔明治33年4月16日 第六三九号〕

愛知吉祥講は全国中屈指の大講にして、有力なる事は皆人の知る所なるが、尚進んで大拡張を為さるゝ由、我が宗教界の為に大賀すべき事なり。

**石田寅方氏**〔明治33年4月16日 第六三九号〕

当市曹洞宗学林の元教授たりし同氏は、目下杉の久国寺に在錫さるゝが、去る八日は海東郡須成の仏教会が催しの降誕会に招待されて仏教演説ありたり。当日は村長を始め参拝され、各宗よりは真言の舟性院を始め正法寺、竜照院、建宗寺等、其他学校教員あ

りて五百余名の来集なりしと。

#### 開山報恩会〔明治33年4月16日 第六三九号〕

西春日井郡金城村曹洞宗靈源寺開山三百回遠忌正当に付、本月十七日同門法類之該寺院数名を招き盛なる報恩会を執行せらる、由。

#### 県下仏教各団体の降誕会〔明治33年4月16日 第六三九号〕

愈々来る廿二日正午より大光院に於て修行せらるゝ事に確定し、宮本熊楠氏其の他の斡旋にて来会券も一千余を製されしを以て、当日の盛挙は推知すべし。其の会費は拾銭にして茶菓を呈し、法要後に談話会を催さるゝ計画なり。

#### 七ツ寺の集会〔明治33年4月16日 第六三九号〕

同寺所蔵の什宝一切経は、今回国宝に編入せられしを以て、右の保存に関する件等につき、昨日同寺檀方等は集会を催されたり。

#### 長母寺の法会〔明治33年4月16日 第六三九号〕

去る十三日、木ヶ崎の同寺に於て故蓑虫山人の為に追悼会を行ひ、尚同人遺物保存の件につき協議する所ありたり。

#### 広告〔明治33年4月16日 第六三九号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

#### 仏骨奉迎〔明治33年4月23日 第六四〇号〕

同伴に關し前報後の模様を聞くに、去十五日再び竜泉庵に前田誠節、和田円什、蘭光轍、青井俊法、有馬憲文、土屋觀山、神根善雄、瑞岳惟陶の八師会合し、諸般の協議を為し由なるが、各師は仏骨奉迎正使には是非共大谷派本願寺新門主大谷光演師を煩はし、各宗中より一名、若くは二名の副使を出し、又暹羅皇帝陛下への献上品は一千円以上、一千五百円の範囲内にて美術品を撰はんと意向なり。又曹洞日蓮浄土三宗への交渉委員有馬憲文師は、同日午後八時八分発列車にて東上して十七日帰京。翌十八日は更に妙心寺竜泉庵に第二回仏骨奉迎各宗派委員会を開く由。

#### 仏骨奉迎準備〔明治33年4月23日 第六四〇号〕

仏骨奉迎に關する各宗の委員会の調査委員大谷派土屋觀山、本派神根善雄、臨済宗瑞岳惟陶三師に、既報の如く去十五日午後妙心寺に集会の妙心寺派の前田誠節師も発企委員として出席し、又十八日同寺に開く各宗委員会への提案案を密議せしよし。今その密



議を洩れ聞くに、稲垣公使よりは我高德の奉迎せんことを希望し来りたれば、大谷派本願寺法主は明治五年に欧米巡航し、釈尊遺蹟を巡拝ありしこと人の知る処なるを以て、師を正使に依頼せんとせしも、目下其の望みに応じ難しとの内意あるより、更に同新門主大谷光演師を正使に推挙し、尚各宗より副使四名（但し一宗派より二名以上を派遣するを得ず）を出さんとするに在る由。又日蓮、浄土、曹洞三宗に対する本件交渉委員有馬憲文師辞任せしを以て、天台宗の蘭光轍師之に代りて一昨夜八時八分列車にて東上し交渉を纏めて、去十七日午後九時七条着列車にて京都に引返し、十八日妙心寺会には日蓮、曹洞、浄土宗委員も列する筈なりと。

**近藤疎賢氏は曹洞宗第一位の弁士**（明治33年4月23日 第六四〇号）

同宗の和融誌に左の記事ありたり。氏の弁士ある事は天下通り切りなるべし。

曹洞宗は兎角弁士少なき宗旨なり、近藤疎賢と云ふ人の雄弁なる由は、わが少き時間きたることなり、されど未だ其人に接せず。木田韜光氏も雄弁家なりとぞ。其外にもエウキ人の地方に数多く居たまふことなるべし。されど東京の仏教界に弁士として鳴るべき人も見えざるにや、和融会の大会に三四の宗内の弁士を招聘したるとあれど、聴衆は感服して帰らざりきと云ふ。

**妙心寺会議**（明治33年4月23日 第六四〇号）

各宗派の仏骨奉迎協議会は、既記の如く十八日午前十時より妙心寺竜泉庵に開きたるに、前日浄土、曹洞、日蓮三宗交渉の為め東上委員に選定されたる有馬憲文師は、仏光寺派法務多忙の為め辞したるも、成るべく同氏の東上を冀望する事情ありとかにて、矢張全師東上なし三宗へ交渉の結果、何れも協賛を得て三宗の委員と共に同日午後三時京都鉄道花園駅着列車にて帰京することとなりしかば、同師等の出席を俟て本議を開くこととし、午前は協議会を開き、午後一時より正副議長を撰挙せしに、前田誠節師議長に、名和瀏海師副議長に当撰し、夫より前田議長は曹洞、日蓮、浄土三宗に往復の電報及書面等を報告し、尚ほ全師は十七日天竜寺に峨山和尚を訪ひしに、此程峨山和尚東上中鳥尾子、三浦子に面会せしに、仏骨奉迎に付ては啻に各宗派のみならず稲垣公使より鳥尾、三浦等の居士へも通知ありしよしにて、両子爵より各宗派委員に伝言されたしとのことなるが、其の旨趣は奉迎するは容易なれども、将来に対する崇敬維持上に付、充分暹羅国皇帝に対しても後日信実を欠くことなきよう十分計画ありたしとのこと。又某有志者より峨山和尚に托せし将来計画の参考書等を一読し、各委員の参考に供し午後二時散会せり。十九日も引続き午前八時より開議せり。

**広告**（明治33年4月23日 第六四〇号）

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**特別広告**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

前住葬送の際は、各位御多用中にも不閑多数御会葬被下難有混雑中尊名伺漏も可有之哉と存候付、不取敢新報紙上を以て御厚礼申上候也。

名古屋市松山町梅屋寺住職

水野道秀

**仏骨奉迎事務所**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

同事務所は京都大仏妙法院内に設置し、去廿三日には同事務所に委員会を開きたり。

**書面の奉呈**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

奉迎使派遣に就き、各宗派より暹羅皇帝陛下及同国外務大臣并に稲垣公使へ各管長連署の書面を奉呈する筈にて、目下前田誠節師其起草中なり。

**仏骨仮奉安所**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

仏骨仮奉安所は、当分大仏妙法院と決定したる由。

**大辻是三老師の遷化**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

曹洞宗の硬骨として有力なりし同師は、去る十一日八十四歳の高齡をもて遷化せられたりと。

**仏骨奉迎協議会**〔西京通信〕〔明治33年4月30日 第六四一号〕

各宗派仏骨奉迎協議会は此程妙心寺竜泉庵に開議したるが、其の出席者は

- 華嚴宗平岡有海、真言律宗岩城元隨、興正派橘正道、西山派青井俊法、融通念仏宗久保良祐、本願寺派星野貫了、神根善雄、名和洩海、大谷派土屋觀山、松岡秀雄、石田馨、藤林広頭、妙心寺派稻葉元厚、前田誠節、真言宗小山知瑞、天野快道、小林栄運、東福寺派平住幽谷、建仁寺派瑞岳惟陶、永源寺派伊藤宗富、浄土宗土田善徹、西山派群諦全、天台宗蘭光轍、木辺派佐々木竜個、黄檗宗松原正英、時宗靈河野良心、曹洞宗弘津説三、日蓮宗田村豊亮、仏光寺派有馬憲文

以上廿九名にして、当日は東京より曹洞、浄土、日蓮三宗よりの出席あり。議長（前田）は仏骨奉迎の議を提出し、演場賛同を表し奉迎を可決したるが、真言宗の小林栄運氏は独り異議を唱へ、此仏骨といふも或は偽物にて牛の骨か馬の骨なるやも計られず、従て調査を要すべしと考ふるにつき、奉迎使差遣に先ちて数名の

先発者を派遣し調査を為さしめんとするの緊急動議を提出したるが、是に対し仏光寺派の有馬憲文氏は、本件は苟そめにも我邦を代表し暹羅国に駐劄せる全権公使にて、於て充分の調査ありし事なれば、牛骨や馬骨の気遣はなく調査の必要なしと駁し、両説とも賛成者あり。一時は議論激々として議場も静かならざりしに、時当に正午にて議長は休憩を命じたるが、其の間に仲裁する者ありて、小林氏は調査説を撤回することとなり午後一時開会せしが、奉迎使に於いて正副を区別するは各宗派の感情を害すべきにつき、原案にある正使一名副使二名とあるを止めて単に委員とし、各宗派より五名を出たさんと云ひ、員数に付てまたく種々の議論出でしが、結局曹洞宗弘津説三氏の説として真言、浄土、曹洞、日蓮、臨濟、本願寺派、大谷派の七宗より各一名の奉迎委員を選出し、而して七委員にて正使副使についての協議を托することにせんとの説に可決し、尚ほ廿日午前九時より引続き帝国仏教会組織の件及び仏骨奉迎事務所設置の件を議する旨を告げて散会したりと云ふ。

#### 仏骨奉迎正使（明治33年4月30日 第六四一号）

各宗管長の代表者として渡航すべき正使は、始大谷派新法主大谷光演師ならんとの噂なりしが、同師は兼て蒲柳の質にもあり殊に謙遵家にて、かゝる大任は年齢少き者の堪へ得べき所にあらずとて達て辞退されしより、今度は専修寺派法主常盤井頁猷氏と定められ各委員と俱に渡暹せらるべしと、同氏は兼て人も知る如く、

久しく独逸に留学し梵語学に精通したる事として此の使命を全くせらるゝには適當なるべしと信ずざるにても、前号に記載したる奉迎委員の議決の七宗中には、専修寺派は加はり居らざりしか、如何の都合にや暫く記して疑を存す。

#### 仏骨奉迎正使（明治33年4月30日 第六四一号）

仏骨奉迎正使は愈々大谷派新門主と決定し、同師は東京の親縁ある華族其の他へ訣別の為に、去る廿五日上京されんと本社へ確報ありたり。

#### 総持寺の移転（明治33年4月30日 第六四一号）

曹洞宗本山総持寺を東京近郊へ移転せんとする由は先頃各新聞にも見えしが、今本社が聞く所に依れば、右は全く事実無根にてざる計画はなき事なれども、元来此風説の伝りし元は、同宗内二三の有志者の意見にて元来能山は能登の一方に僻在して今日と雖も人力車の通行さへも容易ならず、交通頗る不便なると。古来法相、華嚴、真言、天台等の如く帝都に在りて開闢したる宗派は盛に行はれし例もあり、別して東京には芝上野を除くの外取立といふべき程の大伽藍もなければ本山を帝都の近郊に移して大に法幢を建ては如何との建言もありしが、元来宗教上の事は歴史上の關係もあり、且今日より幾層交通不便の時代にも年々登山掛錫する雲衲水衆の蹤を絶たざりし霊場を、今更紅塵万丈の地に移すの必要なしとして、當時に於て既に採用せぬ事となり居れば、今日

かゝる事のあるべき筈なしと語られき。

葬礼ありたり。

**御慶事献納品**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

当市門前町七ツ寺住職横井良琪氏は、東宮殿下の御慶事御奉行に付き奉祝の衷情を表せんとて、先年全国宝物調査局より登録状を下付されし同寺の宝物持国、多聞の二天像を、大須の谷房吉氏に囑して大判の紙に撮映せしめたる写真箱入を献納したき由出願されしと。

**広告**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

例月十日、廿日の両日午後七時より

観音普門品

受持講師 水野道秀師

永平家訓

受持講師 早川見竜師

会場は宝町 禅芳寺

**県下各仏教団体の祝降誕会**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

予記の如く、去る廿二日大光院に於て挙行せられしが、初めに奉祝の誦経あり。次に宮本熊楠氏の開会の主意を第一として各弁士は交々雄弁を振ひて来会者を感動せしめ終て、予て設けの園遊会に移りしが、名古屋吉祥講有志寄付の薦包を解き、酒あり、下物あり、菓子あり、茶あり、湯あり、充分なる歡を尽くし午後六時閉会されしが、当日は玉屋町伊藤氏寄付紅白の餅数千個を参会者に配布されたり。

**大日本仏教徒同盟会愛知部**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

評議員は明一日、同事務所たる七ツ寺に集会。

**梅屋寺前住の遷化**〔明治33年4月30日 第六四一号〕

同氏は久しく老病を悩み居られしが、去る廿四日遷化、二十六日

資料

## 曹洞宗の「宗報」における

### 仏骨奉迎の記事について

川口 高風

明治仏教界において空前絶後の盛況で、大ニュースでもあった仏骨奉迎は、明治三十三年五月に暹羅国へ奉迎使及び随行員を派遣して奉迎されたものである。その報告書が政治家やジャーナリスト、海外事業家などによって刊行されているが、仏教界側では莫大な費用がかかり、奉迎の中心的人物が中傷誹謗されたり、負債償却の責任をとったり、罷免されて投獄されたり悲惨な結末であった。そのため後世では特にとりあげられることなく、奉迎の副使や随行員らの報告書をみると、失敗であったとか事件であったとか、贅沢三昧の奉迎であったとか良いことは述べられていない。

そこで、当時の各宗の事情や意見などをながめ、各宗のといった対応を明らかにするため、各宗の機関誌から関連記事を取り出して考察してみたい。本稿では曹洞宗の「宗報」からみてみよう。

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

「宗報」には明治三十三年五月の仏骨奉迎から大菩提会の創立について、翌三十四年は仏骨の拝瞻会や大菩提会発会式について、三十五年には暹羅皇帝よりの催促による覚王殿の建設地問題、三十六年には覚王殿の敷地決定や日暹寺建立許可について、大正二年には、曹洞宗よりの奉安塔建築に対する寄付金などが報告されている。

### 凡例

- 一、本稿は、明治三十三年五月一日発行の第八十一号より大正二年十二月十五日発行の第四〇八号までの「宗報」に掲載されている仏骨奉迎関係の記事を採録した。
- 一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、明らかな誤植は訂正した。

### 仏骨歡迎の協議会〔明治33年5月1日 第八十一号〕

現任暹羅公使稲垣万次郎氏の斡旋に依り、暹羅皇室に秘蔵せらるゝ釈迦牟尼仏の遺骨を分ちて、我国仏教徒に送附するの運に至りしかば、仏教各宗にては大概仏骨を歓迎する事に決し、先頃京都妙心寺境内の龍泉庵に於て、第二回の各宗委員会を開きしに、出席者は天台、真言、浄土、真宗、時宗、律宗、黄檗、臨済の八宗十八派の委員にして歓迎委員派遣の件、同経費の件、暹羅皇帝へ献品の件等に付協議し、結局調査委員三名を選び附托するに決し、委員を選挙せしに本派本願寺の神根善雄、大谷派本願寺の土屋觀山、臨済宗建仁寺の瑞岳惟陶の三氏当撰したるが、猶ほ第三回を開きて決定する由にて、暹羅国に渡航すべき仏骨歡迎總代には、大谷派新法主大谷光演師を推撰する筈なりといふ。

### 仏骨分与に関する稲垣氏の手簡〔明治33年5月1日 第八十一号〕

仏骨分与に關して、稲垣公使は曩に左の書簡を各宗管長に送付せられたり。

各位倍々御清適為邦家奉大賀候

小生熟ら世界宗教界の大勢を察するに、仏回基所謂世界三大宗教中に就て、仏教は前後両印度より支那、日本に亘りて、尚數億万の信徒を擁す。若し、夫れ一朝好機の乗すべきあり。是等南北両仏教の一致を計り、數億万の信徒凝つて一塊石の如くならば、其勢力や真に計るべからざるものあり。仏教是に至て世界に雄飛し得べく、仏教如斯にして二十世紀文化の上に一大光明を發輝すべ

し仏教徒の天職、亦実に之に存すると信候。誠に之を小にしては、日本仏教徒を打つて一丸となし、大にしては世界仏教徒の一致を計り、茲に仏界の一新時期を画し、暗中の大飛躍を試むる事、今日仏教界の急務にして、諸氏等先達の責任亦是にあることと信候。

而して小生は、今諸氏と共に仏教一新の好機到来したるを祝せんと欲するものに御座候。夫は諸氏も御承知の如く、昨春英領印度政府は同国ピルラハラに於て、ペツペ氏の発見したる釈尊の遺骨及遺灰其他の遺物（遺物発見の記事、別紙御参照相成度候）をば、仏教国唯一の独立国たる当国王陛下に贈呈し、当国王陛下亦空前の盛式を以て是を迎へ給ひしが、陛下には右聖物を各仏教国に頒ち、錫倫島及緬甸の両地より委員を派遣し盛大なる儀式を以て、各々聖物の頒を得申候。然るに這回当国王陛下亦右聖物の一部を我国仏教界に贈るの聖旨あり。小生の指して以て仏界一新の好機となすは、即ち此事に御座候。

抑も聖遺聖物なるもの如何に教徒の熱心を昂かめ渴仰を加ふるかは、今更々々を要せざる処に御座候。彼の露国莫斯科府の「カセドラル、オフ、アツサンプシヨン」に於ける黄金龕中基督磔刑の古釘が、常に巡拝の善男善女をして随喜の涙を墮さしむるが如き、或はクリミヤの大戦亦其遠因を聖地ゼルサレムの事に発し、或は独帝ゼルサレムに巡拝し給ひしが如き、所謂聖地聖物なるもの、如何に欧米基督教国の民に渴仰せられつゝあるかを推知するに難からず候。

今回の事実には、仏教界空前の盛事たり。諸氏宜しく此好機に乘じて、南北仏教の一致を計り以て世界仏教徒の情眼に鞭ち、仏界一振の盛挙に出でられんこと熱望に不堪候。

当国王陛下が我国仏教界に対し、聖物御贈与の聖旨に出でられたること、既に当国外務大臣より通知有之。且つ我邦よりの派遣委員に對しては、謁見等の御厚待をも賜はるべき旨、是れ亦外務大臣の通知に接し申候。但し、陛下の聖旨特に之を或る一宗派に贈るにあらずして、我邦仏教全体に賜ふものに御座候。

右の次第に候得者、我邦仏教各派の中より可成高德博学にして英語を能くする人数名を委員に御撰ひ相成、至急御派遣相成度候

敬具

明治三十三年二月 日

在暹羅國盤谷府日本帝國公使館

稻垣満次郎

曹洞宗管長畔上棟仙殿

聖物発見の由来

釈尊降誕の地カピラヴツを距る數哩ピラハワに、地主ベツペ氏なるものあり。数年前、適々自己の地面内に一個の古墳あるを見て、若し之を発掘せば、何等か仏史に光明を与ふべき発見あらんことを想ひ、其後工夫を督して之か発掘に従事せしが、ベツペ氏の熱心遂に空しからず。地下二十呎にして、仏教史に一新時期を画すべき一大発見を為すに至り。又其発掘せし品々は(一)石櫃

一個(二)水晶及蠟石瓶二個中一個は記録あり(三)遺骨及遺灰(四)塗灰及木皿の破片(五)寶石其他裝飾物の多量等にして、ベツペ氏は直ちに之をバスチの収税官ラマサンカー氏に報し、且つ添ふるに蠟石瓶の銘文を以てせり。サンカー氏、ベツペ氏の書を領するや、氏は更に之を熱心なる仏教学者博士ホエイ氏に致し、其研究を依頼せり。而して博士研究の結果、遂に上記の遺物は釈尊火葬の後、其兄弟サカヤスの保存したるものなることを明かにせり。

以上は聖物発見の小歴史にして、其詳細に至ては昨年二月十七日發兌 Pioneer に、博士ホエイ氏の論文あり。又ロイヤルアヂアチツク、ソサイチーの報告書にベツペ氏の聖物発見に関する記事あり。就て見らるべし。

各宗委員会の概況(明治33年5月1日 第八十一号)

仏教各宗委員会は去月十九日、京都に於て開かれたるが、今その通信を得たれば左に掲ぐ。

『仏骨奉迎各宗委員会』曩に稻垣公使より仏骨奉迎委員派遣に関する照会ありしに依り、予て宗教法案運動委員中天台の蘭光轍、大谷派の和田円什、妙心寺の前田誠節、浄土宗西山派の青井俊法、仏光寺派の有馬憲文の諸氏発企者となり、奉迎の件に関する二三ヶ条の協議案を草して、単に仏骨奉迎の件のみを妙心寺龍泉庵に於て議せんこととなりしに、本件に付ては浄土、日蓮、曹洞よりの冀望もあり。旁々有馬憲文氏交渉委員として東上の結果、

曹洞宗より弘津説三、日蓮宗より田村豊亮、浄土宗より土川善教、各其宗を代表し有馬氏と、もに京都に至り、去十九日午前八時より妙心寺に於て、弥々本会議を開けり。会する者廿九名、議長は妙心寺の前田誠節氏にて十一時三十分一同議席に着き、第一に仏骨を奉迎するや否やを議せしに、満場一致奉迎に賛同し、夫より協議案第一号帝国仏教各派は仏骨奉迎委員として、各宗派より正使一名、副使二名を差遣せんとするの条を議せしめしに、真言宗委員小林栄運氏緊急動議ありて一時議場騒然たりし時、恰も正午となりたれば、議長は休憩を命じたり。中食後協議会を開き午後一時開会に際し、小林栄運氏が緊急動議は自ら之を撤回したり。偕て奉迎の一事となり奉迎使に付、本派本願寺は正副の別を要せず。単に奉迎委員とし定員を設けて各宗派より互選せんと云ひ、大谷派は原案の如く正副説を執り、何れにも賛成あり。定員に付ても或は七名、又は五名、甚しきは各宗派より一名宛を出さんと云ひしもありて容易に纏まらず。幾度か協議会を開きたる末、午後四時に到りて曹洞宗委員弘津説三氏の提出せし奉迎委員は浄土、臨濟、曹洞、真言、日蓮、両本願寺の七宗派より各一名を出し、其の中に於て便宜上正使なり副使なり委員長なりと称するは差支なし。斯の如きは自然の順次に任じ、最初より正使副使として選むは、各宗派の感情を害するなきにあらずとの説賛成多く、此に於て原案の正副説と正副を置かざる説との三案に依り、先づ弘津説に決を採りしに多数にて之に決し、不日七宗派に於て委員を定む可く其経費及奉迎事務所の設置、帝国仏教会組織を翌

廿日に決することしたり。

『仏骨奉迎各宗派委員会結了』 妙心寺に於ける各宗派仏骨奉迎委員会、十九日の模様は別報の通りなるが、翌二十日午後五時に至り、左の如く議了したりと云ふ。右に就き、其翌二十一日より大仏妙法院内に奉迎事務所を設置し、奉迎使選挙は同日より五日以内に其宗派に選挙し、奉迎事務所へ届出ること、為し、尚ほ検査員の外、特別協議案に対する皇太子御慶事献品委員五名を撰挙せしに、左の諸氏当選したり。

妙心寺派稲葉元厚、大谷派土屋観山、真言宗小林栄運、本願寺派名和淵海、時宗河野良心

而して妙法院内仏骨奉迎事務所に五名の事務員を当分置くこととし、此の五名を選挙せしに、右皇太子御慶事献品委員に重ねて依托することとし、是れにて今回の仏骨奉迎各宗派協議会を全く議了せりと。

#### ◎ 积尊御遺形奉迎協議案（決議案）

第一項 帝国仏教各宗派は奉迎使七員を選挙し、暹羅国に派遣せしむる事

但、宗派は真言、臨濟、曹洞、浄土、日蓮、本願寺派、大谷派の七宗より各一員を選出し、出発日時は奉迎使協議の上之を定む

第二項 奉迎使は互選を定て、正使一員を置くことを得。

第三項 各宗派は暹羅国王陛下、同国外務大臣、稲垣公使に宛、管長連署の書面を寄贈し、兼て奉迎使に関する信任状を



呈すべき事

第四項 各宗派は暹羅王室及其他に物品を贈呈する事

但、物品の価格は合て一千円を程度とす。物品の撰択は奉迎使の協定に一任すべし

第五項 各宗派は宗派毎に奉迎員一員を選定し、奉迎に関する事件を取扱はしむべき事

但、選定の姓名住所は本日より五日以内に通知せられたし

第六項 釈尊御遺形仮奉置所及奉迎事務所を設置する事

但、京都市下京区妙法院前町妙法院とす

第七項 奉迎事務所に関する費用は奉迎委員に於て之を議定すべき事、前項の費用は一時借入金を以て之を支弁し、償却方は別途に之を定むべし

第八項 奉迎使派遣の費用予算を定ること左の如し

一金一、万円奉迎使派遣費、内金千円奉呈物品購入費、同七千円奉迎使往復費、同二千円奉迎使予備費、以上費目は奉迎使に推選せられたる宗派にて之を協議し、一時立替ふべし

第九項 御遺形仏事式典は大略左の如し。其法要の施行方法は奉迎委員に於て之を協定すべき事

一、上陸会長崎に於て之を行ふ、一、奉迎会京都に於て之を行ふ、一、仮安置会同上、一、拝迎会沿道各所に於て之を行ふ、一、拝随会仮安置の後、期日を定め之を行ふ

第十項 奉迎委員は御遺形奉安に付、左記各項の事業計画を為し、宗派會議に提出し決定すべき事、

一、塔廟建設の件、一、同上建設地選定の件、一、右費用に關する件

第十一項 奉迎使に推選したる各宗派に対しては、当会より代表者を以て之れが請願を為すべき事。

○特別協議案（決議）

釈尊御遺形を奉迎し、及之を奉安し、日本仏教者に於て永遠護持し奉らんが為め、帝國仏教会を設立すべきこと同会組織方法等は、之を各宗派管長會議に提出議決を求むべし。

仏骨奉迎使（明治33年5月15日 第八十二号）

仏骨奉迎に付、各宗より委員を撰出し、暹羅國へ派遣することなるが、本宗より可睡齋日置黙仙師を委員に撰任せられ、京都に於ける奉迎事務所員は有澤香菴に任ぜられたり。因に記す。右奉迎員の出発期は未定なりと。

報告第一号（明治33年5月15日 第八十二号附録）

全国末派寺院

教主釈迦牟尼世尊御降誕ノ靈蹟カピラヴツヲ距ル數哩ピブラハワニ於テ、ベツペト称スル人アリ。自己所有ノ地面ニアル古墳ヲ發掘シテ、教主釈迦牟尼世尊ノ御遺骨及御遺灰トヲ得タルニ付、英領印度政府ヨリ之ヲ暹羅國王陛下ニ贈与セシニ、同陛下ハ今般右御遺骨等ヲ我国仏教各宗派ニ分贈スベキ旨、暹羅國駐劄公使稲垣滿次郎氏ニ宣命セラレ、同公使ハ之ヲ我国仏教各宗派管長諸師ニ

通知シ、併セテ奉迎使ヲ暹羅国ニ派遣スヘキ旨慫慂セラレタリ。依テ各宗派協議シ奉迎スルコトニ決定シ、尚ホ本宗ハ他ノ真言淨土臨濟真宗等ト各宗派代表奉迎使撰出派遣ノ任ニ当レリ。右報告ス

### 仏骨奉迎使紀事〔明治33年6月1日 第八十三号〕

○枳穀邸の別筵 五月十九日、東本願寺両法主は、仏骨奉迎使并に同事務所委員及び妙法院門跡村田大僧正等を招きて送別の宴を張る。此日、曹洞宗奉迎使日置黙仙師は、随行員を伴ふて会場なる東本願寺別業即ち枳穀邸に至り、先づ来賓諸師と共に邸園を散歩せらる。該邸園は奇を尽し、勝を極めて水石の美、夙に世人の耳にする所なり。園は涉成園と号し十三境の勝あり。曰く印月池、隻梅簷、嗽枕居、臥龍堂、侵雪橋、五松塙、縮遠亭、回掉廊、紫藤岸、丹楓溪、傍花閣、瀉翠軒、偶仙樓是れなり。かくして丹頂の鶴と伍し、水上の鳧のがもと其心を同して仙境に徜徉し、予定の時間に至るや楽隊先づ勇壯の調と嚙唳のがの声を以て一行を壮んにするの曲を奏して宴を開き、両法主より惘なげろに挨拶あり。それより能舞を演じて余興を添へたり。時に光瑩上人日置師を送るの詩を賦せられ、村田僧正も亦三絶を作られたり。並に下項に出す。

此間、主客各歡を尽くし、能舞三番にして楽隊を以て宴を終り、光演上人万歳、奉迎使万歳を三唱して散会せり。因に記す。前十八日午前十時より妙法院事務所に於て、奉迎使一行の爲めに送別

の宴を開き席上、村田事務総理の送別の辞あり。前田副使の答辭ありて午後一時散会せし由。

○奉迎使の出発 兼て京都妙法院内奉迎事務所に於て打合せ居られたる各宗協議委員には、去月十八日一行を請して送別の祝宴を開かる等準備に怠りなかりしが、真宗大派大谷光演、正使臨濟宗前田誠節、本派藤島了穩、本宗日置黙仙の奉迎師、大派随行長南條文雄、随行石川馨以下数名、本宗随行忽滑谷快天の諸氏には謝々。去る廿二日正午零時二十分、七条停車場へ参集せられ、国旗仏旗を交叉して場の内外に整列したる各宗派本山惣代并に奉迎事務所委員附近各宗寺院各宗学校生徒各宗檀信徒数千名の祝送者に応答せられつ、徐おもろに乗車せられ、午後一時二十四分同停車場を出発致されたり。同二時四十二分進んで大坂梅田停車場に至れば、同市附近各宗派寺院并に檀信徒無慮五百余名祝灯流幡を翻して祝送の意を表せらる。而して三時五十分神戸停車場へ到着、諏訪山常盤へ投宿致されたり。翌二十三日京都大坂等より随行見送りせられたる各宗派本山総代事務員有志寺院檀信徒総代に告別せられ、各地方よりの祝電謝状并に兵庫県下各宗寺院及び檀信徒宗学校生徒数百名の奉送祝意を受けられつ、午前十一時、汽船博多丸に乗り込み汽笛一声未曾有の莊途に出発致されたり。因に記す奉迎帰朝の期限は二ヶ月間の予定にて、御遺形仮安置の儀は臨時妙法院宸殿と決定到せりと云ふ。

○贈呈品 奉迎使が這回各宗三十三派の管長を代表し、暹羅国王並に國務大臣及大僧正等へ贈呈する物品は左の如し。

暹羅國王へ献上

金地芝山入花立 一對 (白斜子袋に入れ、茶色紐口結び桐箱に納れ之を復柢櫃の函に入る)

平国蒔絵巻煙草函 一個 (白縮緬帛紗に包み黒柿の函に納め之を復柢櫃の函に入る)

真美大観 甲乙二冊 (紙本絹表紙上等桐文庫に納め之を又柢櫃の函に入る)

大臣、僧正、公使へ贈品

七宝藤模様花立 一對

七宝古代模様花立 一對

古銅象篋花立 一對

古金欄廿五条袈裟 一肩

右袈裟包縮緬紅白昼夜仕立函島桐外函共

真美大観並製 五部甲乙十冊

物品献上瑩雲脚 四台

○送序及留送の詩

送各宗諸師之暹羅國奉迎積尊靈骨序

村田寂順

暹羅國駐在全使稻垣君。以状。牒吾國仏教各宗管長。曰客年二月印度人別氏癸迦毘羅城附近古墳。得遺骨殉寶及壙銘。以古文記之。仏教博士保氏考証其事。以為積尊茶毘後其遺裔之所築古墳。英國印度政府乃分其靈骨殉寶於本國及暹羅國。暹王陛下。虔礼甚厚。領之緬甸及錫倫島。又以吾帝國仏法尤盛。將貽其一分於吾國仏教各宗。使外務大臣伝旨於我。是無前之盛事。蓋仏法興隆之兆也。其宜協各宗之力以奉迎之於是。各宗相謀設委

員。推予總理其事。乃簡各宗。派諸師。以奉迎之。癸有期。相共設齊以饒之。余乃告之曰吾本師釈迦文仏之聖德遐固無論耳。仏法東漸上下帰依。名僧高德相踵輩出。渡洋蹈海冒險排難。以輝仏日。潤法雨者。史不絶書。然其跡概止於漢土。遠及印度者寥寥寡聞。當時交通不便使之然耳。今則万里一瞬。四海比鄰。窮欧米。巡。宇内指不遑屈。而至功德如古名僧者則無聞。蓋有之。我未知之。是豈無故而然哉。夫暹羅雖小。世界旧邦。而為我興國。國王陛下以吾國奉仏教。特頒靈骨。盛旨之所在可知矣今諸師以各宗簡撰。當靈骨奉迎之事。万里飛航以赴其地。其職也榮。其任也重矣。余聞暹國。上自王室。下至衆庶。無不帰仏。其僧侶持律嚴正。戒行尤堅。其所執雖小乘。而比之吾國現狀。豈其之無忸怩乎哉。是尤所當深慮也。夫世界宗教佛法為大。宗義深奧高妙。信徒多殆占宇内人口之四分。而不幸。其本國早衰。大乘妙旨專存於我。是世界仏教者所同許也。而察其末則内顧而疚者頗多。其振刷興隆之任。果是誰之貴耶。今積尊遺蹟顯於印度。暹王陛下。特貽其靈骨於我國。安知非大聖之靈。陰騰其拳。以然乎哉。實可謂仏法中興機矣。諸師能幹其事。以奉迎于此。内之各宗衷協濟。對靈骨如對聖身。虔誠修勤。各務其常務。為其可為。外之大放修教光明。布大乘妙理於彼土。以振刷興隆吾宗。使仏日重輝。法雨永潤。豈非一大美事哉。若夫空失此機。無克有為。則豈口負暹王之盛旨哉。辱帝國之体面哉。其奉對大聖靈骨。復何顏拈念珠。披袈裟。以周旋於其間哉。故余以此拳。卜我國仏教興廢隆替之運也。嗚呼諸師往

矣勉旃。我刮眸以待其□。

維時明治三十三年五月十八日

積尊靈骨奉迎事務総理  
妙法院門跡大僧正

村田寂順

送奉迎積尊遺形各宗諸師渡暹 南 臺 寂 順

奉迎万里渡南洋。靈物東來是吉祥。預祝諸師回錫處。扶桑仏日更生光。

鉄輪截海乱濤開。万里処迎亦壯哉。大聖以追東漸約。更分靈骨渡洋來。

暹王頒贈仏遺形。欣喜奉双迎樹靈。大白牛車容彼土。報恩須布一乘經。

同

大 谷 光 瑩

聖代自呈聖代祥。世尊遺跡現西方。謝君万里迎靈骨。更見日東輝法光。

送光濱渡暹羅

全

西邦皇帝勅宣伝。使事任難爾勉称。奇瑞時生皆善功。靈趾今現立方便。慈恩更洽暹羅国。光益重加日域天。休道海洋航路險。龍神恭護仏陀船。

送 可 睡 默 仙 禪 師 受 仏 骨 奉 迎 之 命 之 暹 羅

西 有 穆 山

五五已過澆季辰。羨君被選奉迎人。波濤万里何須怖。付属巖然護法神。

幻身入浪又従風。何恐茫茫万里空。帰錫須裁西域記。莫驚羅漢現神通。

議論紛々莫敢尋。遺身即是暹王心。誰疑法界塔婆意。無礙光明照古今。

明治三十三年五月謹受 大聖尊御遺形奉迎之命向暹羅

国所感 日 置 默 仙

鴻毛却重泰山輕。惟命惟従万里行。不可得中只麼得。唇皮生醜奉迎情。

歲閱三千不可尋。遺形值遇夙縁深。暹羅月与扶桑日。並照行人一片心。

爺領驢鞍不用疑。随縁感得大慈悲。巖然仏骨今尚在。笑倒当年韓退之。

送默仙宗將為仏骨奉迎之暹羅国 木 田 韜 光

鶴林示寂三千歳。滿德放光天地新。聖骨將迎暹羅国。日東再見祇園春。

送快天道兄赴暹羅国

丹心為法不知躬。万里凌濤氣象雄。靈骨奉迎歸來日。果看鶴唳繞禪宮。

忽滑谷快天和尚の渡暹 (明治33年6月1日 第八十三号)

這回、日置默仙老師の随行を命ぜられ暹羅国へ出発したり

日置默仙師の出発の状況 (明治33年6月1日 第八十三号)

今般本宗仏骨奉迎使として管長の命に依り、暹羅行任ぜられたる遠州秋葉総本殿可睡齋住職日置默仙老師は、本月六日を以て可睡

齋を出発せられたり。依て同日は旅裝既に調ひたれば、午前八時より大仏宝殿に就て合山の清衆及び第四中学林役員生徒宗務支局員并に末山の衆僧等一百余名の僧侶を集め、同師の焼香にて祝聖諷經を奉読し、今上皇帝聖寿万安を祝延し奉り、併せて航海無難を祈り了りて、小参の法を行ひ、其儘宝殿の前門より出で、山門前より十数輛の腕車を烈ねて、袋井駅に向はれたり。而して同日奉送の者は、第四中学林職員生徒宗務局員及び僧堂の雲衲末山の衆僧并に檀信の男女等無慮二百有余名の者数流の大旗を翻し、前後を擁して袋井駅まで奉送し、実に稀有の盛景なりし。

## 報告第二号〔明治33年6月1日 第八十三号附録〕

全国末派寺院

教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎ノ為メ、遠江国可睡齋住職日置黙仙ヲ奉迎使トシ武蔵国蓮光寺住職忽滑谷快天ヲ奉迎使随行員トシ、去月二十三日暹羅国ニ派遣ス。

右報告ス

## 協同事業〔明治33年7月1日 第八十五号〕

『事は自同に成り、而して自異に破る』とは、先賢の既に道破せる千古不磨の確言なるが、世の開進に随ふて、益々協同の必要を見る。国家社会の未だ発達せざるや、各地の交通未だ開けず、人々自家を守りて他を顧ず。恰も封建の時代、若くは戦国割拠の有様なりしかども、今や外、万国と交り、内、商工社会も共に気

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

脈を通じ、互に相助けて各其の利を計るの世となりたるは、亦是れ社会発達の順序なり。されば苟も宗教界と称する以上は、時機によりては外教と、もに手を携へて事に従ふべきことなしとも限られず、まして同一仏教中の各宗に於て最も親密に交り、宗門以外の宗教的事業は、一切同心協力して之を為すべきは固より論を俟たざる所なり。茲に於て乎、先年来「各宗協会」なるもの設立せられ、此の協同の目的を達せんと期せられしも、機運未だ至らざりしにや。其の勢力甚だ微弱にて、顕著の効績も見ざるに、客年宗教法案の議起りてより、漸く協同の勢力を益し来り。遂に本年に入りて仏骨奉迎の事より、愈各宗協同の実を挙ぐるに至りたり。去る六月八日、京都妙心寺龍泉庵内に於て開かれたる各宗派管長会議は、「日本大菩提会」なるものを創立し、以て釈尊の遺形を安置し、其聖徳を顕揚し、国民の道義を涵養せんとす。この目的を達せんが為めに、「覚王殿」を建築し、及び教育慈善等の事業を挙げんことに議決せられたる由。嗚呼、是れ実に曠古の最大美挙にして、将来各宗協同は是れに由つて愈堅固なるべく、而して仏教の宣揚は益々盛なるべし。吾人実に歡喜祝賀の至に堪へざるなり。

然れども、従来協同心に乏しき各宗は、同一の教祖を奉戴しながら、動もすれば、互に反目し、互に嫉妬し、単に自己の宗派を利せんとするよりして、折角計画せし事業も創立以来幾ならずして廃止せること往々之れあり。如斯輕拳は寧ろ初めより之れなきの優れるに若かず。吾人は今他宗他派に於ける従来の非を挙ぐるを

好まず、只吾宗のみに就いて、之を觀るも亦往々此の事あるを知る。中学林の一事にても連合学区の広き丈、それ文学林の維持は容易にして、其事業も盛大なるべきに、事實は全く之れに反して、一国若くは一支局下の設立に係る学林も比較的鞏固にして、数国若くは数支局の下に成れる学林は、却て振るはざるの傾向あり。是れ固より種々の事情にも由ることなるべけれども、其の重なる原因は連合協同心に乏きに帰せざるべからず。同一宗門の事業に於てすら猶ほ此の如しとすれば、這回各宗協同の設立なる「大菩提会」の如きに対する闔宗諸師の感念は推して察すべし。

然りと雖も、今や外教徒は益々協同一致し、互に氣脈を通じ、心力を戮せて、慈善教育等の事業を挙げ、以て彼等が版図を拡張せんとす、其の勢力頗る盛なり。此の時に當りて好個の機会を失ひ、徒らに些細の感情の爲めに、互に一己の私のみを計りて、公共の事業を大成する能はずんば、遂に空しく漁夫をして巨利を獲しめんのみ、豈に惜しからずや。聞くが如くんば某宗派は「大菩提会」設立決議の後、自宗に於て既に計画せる事業に影響するを恐れて、此の協同事業に反対せりといふ。他宗派は兎も角も、吾が宗の如きは決して這般の事あるべからずと雖も、巨資を募りてなすの事業なれば、長年月の間には種々の口実を設けて出金を拒む者なきと保し難し。千丈の巨堤も蟻穴を以て壞る。一宗若し這般の輩出づるときは、折角光前の事業も遂に支離滅裂に帰せんのみ。故に吾人は這回各宗の拳を壮として之を賀すると同時

に、闔宗諸師が些細の閑情実を一掃し、相競ふて、この美拳を賛成せんことを望んで止まざるなり。

#### 各宗派管長会〔明治33年7月1日 第八十五号〕

六月八日午前十一時三十分より妙心寺龍泉庵内に於て開会、出席者は大谷派本願寺法主、天台座主を始め三十六名にて、先づ第一号議案日本大菩提会々則（委員修正案）の議事を開きしに、第三条の起業方法に対し、本派本願寺委員は単に覺王殿建築に止め、教育及慈善事業を見合すべしと發議したるより、議論沸騰し纏らざるを以て交渉の爲め、休憩数度に涉りて午後三時三十分及び本議を開き、本派委員神根善雄師は番外土屋觀山、後藤禅堤両師との間に激論あり。本派委員は徹頭徹尾、教育慈善は大菩提会の事業と為すことに反対せしが、大谷派委員和田円什師の發議に依り、本案の二説会を開くべきや否やに付き採決することに決せしかば、本派管長代理近松尊定、木辺管長代理松原深諦、三元派管長代理星野實了、本派委員名和淵海、同菅田実元、同神根善雄の諸師は袂を聯ねて退場せり。夫より議長は本案に付き採決せしに、過半数にて二説会及び三説会を省略し、本案可決確定し引続き第二及三号議案を議したるに是亦異議なく可決確定し、午後四時五十分散会せり。即ち当日可決確定の議案は、本号宗令に掲載しあれば熟覽あるべし。

### 奉迎委員会〔明治33年7月1日 第八十五号〕

仏骨奉迎に関する準備に付、去月十日午前九時より妙心寺龍泉庵に於て委員会を開きし由。

### 大菩提会創立式の模様〔明治33年7月1日 第八十五号〕

去月十一日、京都大仏妙法院に於て挙行せられしが、当日は雨天にも拘らず、天台座主中山玄航、真宗興正寺派管長花園沢称、建仁寺派管長竹田嘿雷、南禅寺派管長豊田毒湛、栗田青蓮院門跡三津玄津、相国寺派管長中原東岳の諸師、其他管長代理、仏舍利奉迎員、京阪新聞記者等六十余名の出席あり。正午十二時、宝前に於て村田叔順師は左の創立趣旨を朗読す。

世儒曰く。人皆堯舜たるべし。之を前に行ふは古の堯舜なり。之を後に行ふは、今の堯舜なりと在俗已に然り。我徒豈また自棄す可けんや。夫れ釈迦牟尼世尊は已成の仏にして、吾人は当成の仏なり。惟るに夫れ人、寔に先後の差あり。而して教法は因より古今の異りなし。然ば則其の後人をして先覚に同く当世の仏をしても、成の仏たらしめんと欲せば、必ず先づ其古今異なるきの宗教の依らしめざるべからず。然に晩近、桑門の紀綱漸く弛み概ね依るべきの教規に依らずして、却て為す可らざるの事を為し、法力内に衰へ勢利外に競ふ。此に於て檀越信を失ひ、邪魔際を窺ふ。蓋し教風の振はざる職として是れ之に由る。嗚呼、苟も釈尊の徒たるもの誰か奮発興起せざる可けんや。今也、幸に暹羅国王陛下釈尊遺形頒胎の盛事に遭遇するを

得、実に空前の盛事にして、仏法興隆の一大好機たり。而して其奉迎使は、殆ど彼地に達せんとし、靈尊入朝の期亦遠きに非ざるなり。此時に当り、須く先づ内弊を矯正し、三業清浄に虔礼以て之を奉迎し、深信以て恭敬供養の誠を尽さざる可らず。然れども寸膠以て黄河を澄清するに足らず。綿力能く頽運を挽回す可けんや。是を以て鴻業を永遠に凶らんと欲せば、必ず先づ広く天下の信明を結合し、和通損虎以て盛略を贅裏せざる可らず。是れ各宗協同、新に日本大菩提会を創設せる所以なり。抑も本会の目的たるや、先づ輪煥たる大覚王殿を創建して、釈尊の遺形を奉安し、其の遺徳を顕揚し、内には以て国民固有の道徳を涵養し、外には南北仏教を混融し、異苗株根を問はず、等しく大乘仏教の法雨に潤はしめ、以て万世一系の皇威と三千年後の仏光とを併て、宇内に輝かし共に、俱に四恩に報答せんことを企図す。仰願くは寸善尺魔の障礙無く、速に本の結果を成満せんことを。謹で本会創立の趣旨を宣ること云爾。

次で、有馬憲文師祝辞を朗読し、委員総代田村豊亮師答辞を述べ、其後に來賓鳥尾將軍の演説あり。其の大要は左の如し。仏教も時勢の変遷と伴はなければなりません。桓武帝帝都を定めたまひしより明治維新の以前迄は、帝城を此処に定められてありて、自ら政治の中心であつたが、今日は帝都も東京に移され、之と同時に百般の事物も全然変遷して来た。此に於てか仏教徒も大に考へなければならぬ。元來人類社会の機能といふ者

は奇妙な者で、敏捷なる社会に耳目を置くものは外物の刺撃によりて、自然に其の能力も敏捷になるも休止せる社会に処する時は、又自然に其の機能も鈍くなる。従て其の居処に拠て事業發達の難易を来すことは論を俟たず。恰も風上に於て声を放てば、遠く反響を及ぼし、山上にありて下界を瞰視すれば百里の風光一望の中にあると同一の理なり。故に今日仏教徒は相協同し、釈尊の御遺形を奉迎さるゝは甚だ美事であるが、此の御遺形を收容する場所は天下の中心たる東京に定められん事を希望す云々。

**教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎航運日乗**〔明治33年7月1日 第

八十五号〕〔拙稿「日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎」〔愛知学院大学教養部紀要〕第61巻第1号〕に掲載

**報告第五号**〔明治33年7月1日 第八十五号附録〕

報告第五号

全国末派寺院

教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎使ハ去月十四日、暹羅國王陛下ニ謁見シ、其翌十五日ニ世尊ノ御遺形ヲ拝受シタル旨電報ヲ以テ通知シ来レリ。  
右報告ス。

明治三十三年七月一日

曹洞宗務局

**甲第六号**〔明治33年7月1日 第八十五号附録〕

甲第六号

全国末派寺院

教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎ニ付テハ、御遺形奉安ノ覚王殿建築及白毫ノ恩徳ヲ霑被スル為メ、漸次ニ教育及慈善事業ヲ起スヲ目的トシテ、今般仏教各宗派管長聯合會議ヲ開キ、其決議ヲ以テ日本大菩提会ヲ創立シ、廣ク其会員ヲ全国ニ募リ、会員協同結合ノ力ヲ以テ前記覚王殿ノ建築ヲ為シ、尋テ教育及慈善ノ事業ヲ為スモノトス。就テハ今般右日本大菩提会本部ヨリ会則第三条及施行細則第三条ニ依リ、奉迎事務総理兼本会理事長ノ囑托状ヲ携帶セシ勧誘員ヲ全国各地ヘ順次派遣スルニ依リ、宗内ノ道俗一般ハ三千年後ノ今日ニ始テ教主釈尊ノ御遺形ヲ奉迎シ、恭敬供養尊重礼拝スルノ好因縁ニ遭遇シ、誠ニ盲龜ノ浮木ニ於ケルモ菅ナラザレバ、各自教主釈尊ノ御生身ニ奉事スルノ道念ニ住シテ、切ニ本会設立ノ趣旨ニ随喜シ、道俗自他推奨シ本会ノ目的ヲ貫徹スルコトニ励精尽力スベシ。

日本大菩提会会則及其施行細則ハ別記附添ス。

右普達ス。

明治三十三年七月一日

曹洞宗務局

別記

日本大菩提会々則

第一条 本会ハ日本大菩提会ト称シ、本部ヲ京都市ニ置キ支部ヲ各地方ニ設ク。

第二条 本会ハ釈尊ノ遺形ヲ奉安シ、其聖徳ヲ顕揚シ以テ国民



ノ道義ヲ涵養スルヲ目的トス。

第三条 本会ノ目的ヲ達センガ為メ、順次左ノ事業ヲ起ス。起業方法ハ別ニ之ヲ定ム。

第一期 覚王殿建築

第二期 教育及慈善

第四条 本会ノ会員ヲ分テ、左ノ四種トス。会員待遇方法ハ別ニ之ヲ定ム。

一名 譽会員

〔本会職員会ノ推選ニヨル者又ハ金百円已上ヲ喜捨シタル者〕

一 特別会員

〔本会職員会ノ推選ニヨル者又ハ金十円已上ヲ喜捨シタル者〕

一 正会員

金壹円已上ヲ喜捨シタル者

一 隨喜会員

応分ノ金品ヲ喜捨シタル者

第五条 会員ノ徽章及証票ハ本部ヨリ之ヲ交附ス。

第六条 本会ハ各宗派管長ヲ推戴シテ名譽会監トス。

第七条 本会ハ会務処理ノ為メ左ノ職員ヲ置ク。職員ノ服務規則ハ別ニ之ヲ定ム。

一 理事長 一人

一 理事 十人

第八条 理事ハ本会々々議ニ於テ、委員中ヨリ之ヲ互選シ、理事長ハ理事ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム。

第九条 本会ニ監事三名ヲ置ク。其選出方ハ前条ニ準ス。

第十条 本会々々議ハ各宗派選出ノ委員ヲ以テ之ヲ組織ス。

第十一条 會議ハ定期臨時ノ二種ニ分チ、定期会ハ毎年一回之ヲ開キ、臨時会ハ緊急必要アル場合ニ之ヲ開ク。

第十二条 現金ノ出納ハ特約銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシム。

第十三条 經費ノ予算ハ本会々々議ニ於テ議定シ、決算ハ毎年定期会ニ報告ス。

第十四条 支部ニ関スル規則ハ別ニ之ヲ定ム。

○

日本大菩提会施行細則

第一条 本会々々員募集ノ為メ勸誘委員若干人ヲ各宗派ヨリ選出ス。其員數ハ從來ノ慣例ニ依ル。

第二条 勸誘委員ニハ本会ヨリ囑托状ヲ交附シ、其姓名ヲ各宗派ニ報告ス。

第三条 勸誘委員ハ本会本部ヨリ一定ノ方針ヲ示シ派出セシム。

第四条 各宗派ハ勸誘委員ニ便宜ヲ与フル為メ、門末一般ニ對シ訓示スルモノトス。

第五条 勸誘委員派出期限ハ一方面約一ケ年トシ、一組二人以上ヲ以テ各府県ヲ分担セシム。

第六条 勸誘委員ハ其担任地ニ於テ領取シタル金員百円ニ達スル毎ニ、会員ノ姓名簿及金額ヲ明記シ本会ヘ郵送スベシ。

第七条 本会ノ発会式ハ明治三十四年四月之ヲ行フ。

一 入会者凡百万人ニ達スルヲ待チ、覚王殿並ニ附屬物ノ建築ニ着手スルコト。

二 建築物ハ壮大堅牢ニシテ永遠ニ保存シ得ベキ範圍内ニ於テ之ヲ計画スルコト。

三該工事ノ落成期ハ凡七ヶ年間トス。

第二期事業

教育及慈善

第一期事業終了ヲ告タルトキハ、更ニ會員中ヨリ喜捨金ヲ募集シ凡見込ミ立タル時ヲ待チ起業ニ着手スルモノトス。

日本大菩提会趣意書（明治33年7月15日 第八十六号）

京都洛外妙心寺各宗管長会議の結果として日本大菩提会の創立せられたることは既に報道せし処なるが、今回趣意書を得たれば左に掲ぐ。

日本大菩提会趣意書

恭しく惟るに大恩教主釈迦牟尼世尊八相成道の化儀は、微妙不可思議にして法身の理体には隠現なしといへども、大慈大悲の応用には仮に生滅を示し給へり。故に生を中天竺摩訶陀国浄飯王の妃摩耶夫人の胎に托し、四月八日無憂樹下に降誕し、身には三十二相八十種を具足し給ふと雖も、凡夫に似同して嬰兒行を示し、四門に遊観して生老病死を厭ひ、夜半に王城を踰へ、哀龍の衣を脱して袈裟を着し菩提樹の下に正覚を成し給ふ。是則十九出家三十成道と称ふ。爾來華嚴阿含方等般若の四時を経て、如来出世の本懐たる妙法蓮華經一切衆生皆成仏道の旨を説き玉ふ。是を秋收冬蔵更無所作と名く。化縁既に終り、俗に従ひ光を韜み沙羅双樹の間に一切衆生。悉有仏性。如来常住。無有變易と称へて大般涅槃に入り給ふ。嗚呼哀哉。我等衆生宿福

薄劣にして在世の利益に洩れ、金鍔木彫の仏像等住持の三宝を帰憑とし、青蓮満月の妙相を竟に瞻奉すること能はざるは、常に悲嘆に堪へざる所なり。今や天運循環して此明治の聖代に會ひ、世尊の遺形を聖地より奉迎し、親しく瞻仰し奉ることを得るは、優曇の萼浮木の亀も啻ならず。誠に空前の盛事にして仏法興隆の吉兆と何の歡喜か之に若かんや。抑も我世尊は、其在世の化導を以て自ら足れりとせず。其滅後に於ても骨身舍利を以て福を人天に被らしめんと誓ひ給ひけり。即ち円寂荼毘の後ち、靈応極なく祥瑞荐りに臻れり。是に於て、八国の王及諸天龍王骨身舍利を分ちて各宝塔を建て閻維所亦高顯を築き、尊重恭敬して応驗最も著しかりき。這回暹王の頒たれし金軀の遺形は、閻維宝塔の遺物なりと仏教博士保氏の考証せしは斯道名家の証するところにして、益々信念を堅くせり。夫れ世尊の遺形は、即ち大日弥陀三身即一法界塔婆なれば、一瞻一礼するものは或業水の如く消へ、福智雲の如く聚り、速生極業即身成仏の功德を具し給ふと。言の尽すべきにあらざるなり。依之各宗協同して爰に日本大菩提会を設置し協同賛襄の力に頼りて輪奐たる大覚王殿を建立し以て遺形を奉安し、且つ益々仏法を闡明し慧日を發揮し、以て公衆の信念を鞏結し、道德を培養せんことを企てたり。夫れ菩提は、性の真理解脱の大本にして、仏道の極致なれば、之を以て本会の名とし、之を内にして各宗協同一致して本会を隆盛にし、之を外にしては世界仏教者を合同融和して、相共に大乘の法雨に潤ひ醍醐の真味に飽かしめんと欲す

るなり。夫れ我国仏教は各宗派に分れ、其所依を殊にするも其源を窮るときは、仏意に原かざるはなし。猶百川流を分つも同じく海に朝宗し、子孫家を異にするも俱に一祖に帰するが如し。苟も教祖の源旨に帰し、仏法の余流を汲むもの豈協同一致して罔極の慈恩に酬はざるべけんや。仰き願は、帰依仏教の徒は縋素に論なく十方の善男善女皆趣旨を賛成し、続々同盟加入し、相俱に心を協ひ力を戮せ、以て本会の事業を完成ならしめんことを。

明治三十三年六月十一日

積尊遺形奉迎事務総理兼

日本大菩提会理事長

妙法院門跡 村 田 寂 順

名譽会監 天台宗座主(中山玄航) 天台宗寺派長吏(中科祐玉)

天台宗真盛派事務取扱(石山寛湛) 真言宗長者(原心猛) 浄土

宗西山派管長(久田做道) 臨済宗天龍寺派管長(橋本哦山) 臨

済宗相国寺派管長(中原東岳) 臨済宗建仁寺派管長(竹田黙

雷) 臨済宗南禅寺派管長(豊田毒湛) 臨済宗妙心寺派管長(小

林宗補) 臨済宗建長寺派管長(霄貫道) 臨済宗東福寺派管長

(済門敬沖) 臨済宗大徳寺派管長(菅広州) 臨済宗円覚寺派管

長(釋宗演) 臨済宗永源寺派管長(久松琢宗) 曹洞宗管長(畔

上棟仙) 真宗大谷派管長(大谷光榮) 真宗高田派管長(常盤井

堯熈) 真宗興正派管長(華園澤称) 真宗仏光寺派管長(渋谷徴

妙定院) 真宗出雲路派管長(藤善聰) 真宗山元派管長(藤原善

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

(住) 真宗誠照寺派管長(二條秀源) 真宗三門徒派管長(平光圓) 日蓮宗管長(山岩村日轟) 時宗管長(河野覺阿) 融通念仏宗事務取扱(梅原靈巖) 黄檗宗管長(吉井虎林) 法相宗管長(秦行純) 華嚴宗管長(佐久山晋圓) 真言律宗管長(佐伯泓澄)

日本大菩提会支部規則並に会員待遇規定(明治33年7月15日

第八十六号)

日本大菩提会々々則並に其施行細則は曾て本誌に掲げたる所の如し。今其支部規則、並に会員待遇規定等を見るに曰く。

日本大菩提会支部規則

第一条 会則第一条及第十四条に抛り本則を定む。

第二条 支部を設置せんとするときは、予め其方法を詳記し本部

の承認を請ふべし。

第三条 東西両京は日本大菩提会東部西部と称す。

第四条 各地方支部は、日本大菩提会の下に地名を挿入し、何支

部と称す。

但支部は各府県便宜の地に於て之を設くるものとす。

第五条 東西両部は本部の直轄とす。

第六条 支部は本部の指示に遵ひ、其地方の事務を分掌す。

第七条 支部の事務を処理する為め、左の職員を置く。

但職員服務規則は、別に之を定む。

一支部長 一人

一幹事 若干人

一書 記 若干人

第八条 支部長は協議会に於て撰定し、幹事、書記は支部長之を撰任す。

第九条 各府県に協議員を置き、支部に関する重要な事項を協定せり。

但協議会組織方法は、各地方の便宜に依り之を定む。

第十条 支部の経費及職員報酬は本部より之に支給す。

日本大菩提会々員待遇規定

第一条 本会の趣旨を賛成し金員物品を喜捨し会則第四条に依り会員たる者は左の区別に従ひ、会員章証紀念品及謝状を贈るものとす。

一名誉会員

第一種会員章及紀念品金千円以上喜捨したるもの。

第二種会員章及紀念品金五百円以上喜捨したるもの。

第三種会員章及紀念品金三百円以上喜捨したるもの。

第四種会員章及紀念品金百円以上喜捨したるもの。

一特別会員

第一種会員章及紀念品金五十円以上喜捨したるもの。

第二種会員章及紀念品金三十円以上喜捨したるもの。

第三種会員章及紀念品金十円以上喜捨したるもの。

第二条 正会員には会員章及証票を贈与し、随喜会員には識票のみを贈るものとす。

第三条 紀念品には、別に左記の謝状を添付す。

(謝状)

茲に日本大菩提会の主旨を賛成し金何円を喜捨せらる。依て本会既定の正条に依り、第何種会員章及紀念品を贈り以て其芳志に酬ふ。

明治 年 月 日

大日本大菩提会理事長 姓 名

爵 姓 名 殿

第四条 会員は随意に覚王殿の参拝を為すことを得。

第五条 法会施行の節、会員の参拝者には相当の待遇を為すものとす。

但会員章携帯を要す

第六条 会員には明治三十四年四月八日より同年五月十五日に至る期間拝瞻会及覚王殿起工式挙行の当時、汽車汽船賃の割引

票并に各宗派本山の宝物拝観券を贈るものとす。

会員章及紀念品調製方

第一条 会員章は蓮輪式表に何会員之章の字を記し、裏に明治三十四年何月贈焉日本大菩提会と記す。

第二条 名誉会員に贈与する会員章及紀念品種左の如し。

第一種 一等徽章及一等紀念品

第二種 二等徽章及二等紀念品

第三種 三等徽章及三等紀念品

第四種 四等徽章及四等紀念品

第三条 特別会員に贈与する会員章及紀念品種左の如し。

- 第一種 一等徽章及一等紀念品
- 第二種 二等徽章及二等紀念品
- 第三種 三等徽章及三等紀念品

**大聖釈尊御遺形奉迎通信**（明治33年8月1日 第八十七号）

曩に曹洞宗務局より釈尊御遺形奉迎に関する示達これありしが、今回該奉迎使の通信要領を得たるにより、左に掲ぐ。

在暹国奉迎使通信中の枢要事項。左の通に付、不取敢及御通牒候也。

六月十四日奉迎使暹羅王へ謁見の節の勅語大意

仏世尊の神聖なる遺形の一分を受領せんが為めに、始て此国に來れる日本仏教徒の奉迎使を見ることは、朕の喜ぶ所なり。且つ、日本は暹羅よりは遠隔の国にして制度習慣等或る場合に於ては異なるに非ざれども、尚同一宗教を信ずる所の同教國なることを信認することに於て、満心の歡喜と満足の感情とを以て刺撃されたる熱心の程を領解ありたき筈也。朕は仏教の先導者にして、且保護者なることを承認せられし上は、奉迎使へ神聖なる遺形を分配すべき幸福なる義務を尽すことは甚だ喜ぶ所なり。従前日本仏教徒が此神聖にして真実なる遺形の分配を得ざりしことは、彼等が其一分を得んことを欲望すべしとは朕の識認せざりしが故なり。今は此貴重なる宝物の一分を得て日本に安置し、巡拝者をして其使を得せしめんとする彼等の願を信認せし上は、之を手渡しすることは甚だ喜ぶ所なり。

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

奉迎使の此國に來り、且つ普通協同の利益の為めに開明の事業に倦怠なき尽力の程は朕の感謝する所なり。日本仏教徒が海外仏教徒を熟知し一層交際を親密にしたる後は、日本仏教の益々隆盛に赴くことは朕の最も切望する所なり。

六月十八日盤谷王宮中御陪食後告別の勅語大意

日本仏教各宗派が協同一致して神聖なる釈尊の遺形を奉迎することは朕の甚だ喜ぶ所なり。将来益々其協力を堅固にして有益の事業を興起し、宗教上の利益を普通ならしめ、最初の一念を貫徹する様にありたきこと、朕は同一宗教を信奉する上より深く企望する所なり。奉迎使は已に此地に於て作す可き事を作し了れり。今後は我等の宗教が益日本に於て隆盛に赴く可きことは信じて疑はざる所なり。尚今後各宗派の協同一致して布教の策を計画することに於て助力す可き事あらば、朕が如何なることをも辞せざるべしと貴師等に約束す。今日朕が日本仏教徒へ寄贈する所の仏像は、今度受領せられたる釈尊の遺形安置の処に同く安置ありたし。王后よりも三歳聖經の写本を寄贈す可き筈にて之を入るゝに錦囊を手製中なれば、此は後日差送るべし。

御遺形は大切に護持して無難に本國に帰着し、速に奉安処を定めて之を崇敬せらる可し。尚海路平安諸師健全にして帰國せられんことを望む。

紀念章の符号の説明

円かなる紀念章の表面には仏世尊の緑玉石の形像を表し、背面

には「タンニチャカツ」(法輪)即ち法の主権を意味する車輪を表す。之に附記する略字は「アツタンギガマツガ」(八支聖道)を意味す。曰く正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、是なり。

其他の紀念章は、其樹下に於て世尊の正覺を成し玉ひし菩提樹葉の形なり。其表面に付、暹羅に於て多く礼拝する所の世尊の大なる青銅の像なる「ブラ」「尊」「ブツタ」「仏陀」「ヂミナミーハ」(勝師子)と呼ぶ所の像を写し、背面には仏教紀元二千四百年に於て之を創造せし年代を示す文字ありと知るべし。

千九百年六月十八日、盤谷「グランドパレス」(大王宮)にて

#### ○奉迎使盤谷府着

六月十二日午前十時、奉迎使一行は暹羅文部省より出迎の小蒸氣船に搭して盤谷府に上陸せり。在暹日本公使館書記官書記生及公使館附警部等数名奉迎使の便乗せる新嘉坡号迄出迎ひせられたり。一行は波止場より馬車にて先「パレスホテル」着し、昼飯を喫し正使大谷光演、隨行長南條文雄二師及家従下間氏三名は直に公使館に赴き同館に宿泊せられ、而して他の奉迎使藤島前田日置三師は東洋館に移り、光演師隨行の石川大草等十名は「パレスホテル」に留まりて一行は三処に別れたり。

前田藤島日置三奉迎使は同日午後、直に公使館を叩き稲垣公使に面会し、大谷正使と打合の上公使の誘導にて馬車を驅りて文

部外務陸軍の三大臣及參謀總長を訪問せり。是夜稲垣公使は奉迎使四師及隨行長南條を請して晚餐の饗応を為したり。

#### ○巨利訪問及文部大臣迎晚餐會

十三日午前十時、文部大臣は日本公使館に來りて、昨日奉迎使訪問の答礼を為せり。午後奉迎使の一行は文部省書記官の案内に依り、盤谷府南方仏教新派の「ワットブロンスリン」寺に抵り(新派は今を距る五十年前、先王の創設に係る者にして寺院の裝飾儀式并に僧侶の法衣は異なる所あり)釈迦の大像を拝し、高塔を縦覽し、尚ほ寺院内に設立する巴利語學校を巡覽せり。生徒百名計あり。他日僧侶たる可き候補者は勿論、苟も暹羅に於て紳士たる可き者は、巴利語を知らざれば其資格を有する能はず。恰も欧州諸國學士が羅典希臘語を學むと、一般なり該學校は比較的清潔にして西洋風の構造にして教師は皆僧侶なり。日本仏教各宗の學校を以て之に比すれば、或は遜色なき能はざる可し。奉迎使は歸路工部大臣及盤谷府の知事を訪問したりき。此夜稲垣公使奉迎使及隨行南條石川大草七師は文部大臣の晚餐會の招きに應せり。大臣の邸宅には、日本提灯數百を吊し、烟火を打揚げ又蘇音器を以て暹羅の時歌を発せしめたり。深更に及て旅館に歸れり。

十四日午前、各奉迎使は文部省吏員の案内にて仏骨を蔵する高塔を拝觀し、歸路内大臣を訪問す。

#### ○暹王謁見

十四日午後四時、宮内省より日本公使館へ廻はされたる三台の

馬車に各奉迎使及稲垣公使同乗し、隨行の僧侶も亦他の馬車に乗りて隣々と車輪を輾らせて宮門に入れば、近衛兵は左右に排列して捧銃の礼をなせり。各奉迎使は宮内文部二大臣に誘はれて「グラントパーレス」に入れり。王宮は西洋流の石造にして、宏壯輪奐燦然として人目を奪ふ。巴里府の「チュルリー」「白耳塞」の王宮、秦皇の阿房も蓋し之に過るなかるべし。然とも惜しむらく其規模の狭小なるのみ暫くありて、暹王は鬪を排して履声高く軋りて出御し玉ひ、胸間に各国の勳章數個を帯ひ、盛裝嚴然威儀堂々一見人をして仰視に堪へざらしめたり。王は大谷正使より順次に藤島、前田、日置奉迎使に対して、握手の礼を行ひ玉ひ、而して大谷正使は暹王の優渥なる叡慮に依りて、今回日本仏教各宗派に対して、釈尊遺形を分頒せらるゝ、恩旨の辱けなき旨を拝謝せられたれば、暹王は直に暹羅語を以て數十分間の勅答を玉ひたり。其態度の活潑にして、威儀整齊毅然として侵すべ可らず。音吐朗々として満殿に透徹して真に謹聴す可きなり。勅語了りて文部大臣之を英語に口訳し、南條隨行長は又之を日本語に口訳せり。(勅語大意は別記の如し) 謁見式了り、控間に於て宮内大臣は暹王誕生簿を把りて、各奉迎使をして出生の年月日を自署せしめたり。

#### ○仏骨授受

十五日午後四時祇園寺に於て、仏骨授受の式あり。各奉迎使稲垣夫妻、奉迎使隨行諸員及在暹日本居留住民等は既定の時間に先て該寺に參集せり。文部大臣は英語の草稿を把りて、朗読的

演説を為し、然後暹羅新舊派の僧侶數十名椅子「パーツ」(宝珠形扇)を捧持して巴利語の經文を誦し、誦經了りて文部書記官は、小形の金塔を把りて大谷正使に授けたり。是に於て各奉迎使は文部大臣稲垣公使と立会の上金塔を開きて靈骨を拝したり。各奉迎使は準備の如意宝珠形の金函の金塔を収め、更に錦囊を以て之を包み、二重の桐箱に封鎖して前田奉迎使之を馬車に奉じて同乗し、一行は靈骨を供奉して日本公使館に帰れり。是夜各奉迎使は、仏骨を蔵する金函に封印を附し帰朝の後、各宗管長立会の上之を開封することになせり。

#### ○内道場拝觀

十六日午前、各奉迎使は文部省吏員の案内を以て宮中内道場吉祥寺を拝觀す。本尊は翡翠石釈迦の座像(長三尺計)にして往昔隣国老嫗と戦ふて勝利を得たる分取品なりと云ふ。其価値を論ずれば、実に數億万円にして暹国を挙げるも或は之に比するに足らざるなりと。又高數十丈の金塔あり。黄金を以て瓦となし、珠玉を以て柱梁を飾り、金碧燦爛赫奕目を奪ふに至りては、世界希に觀る所の者たり。加之數千の瓔珞風に触れて相摩し、鏘々然として音響を發する有様は宛然として極樂世界に遊ぶもの想ひあり。又堂中敷物は銀板を以て「アンペーラー」に代へるものあり。其他小体黄金仏に至りては、更僕して數ふ可らず。其美を王宮仏殿に尽すに於ては宇内何れの国か。蓋し暹羅に過る者なかる可し。

#### ○愛知阿旧都晚波離宮

十七日午前七時半、奉迎使一行は宮内省より仕立たる列車に搭して旧都愛知阿に赴く。鉄道は広軌式にして、機関車の燃料には割木を用ひ、蓋し暹国は石炭を出す鉱山なきに由る。旧都は盤谷を北に距る三十哩許にして、市街は湄南江の兩岸に跨りて浮家泛家江海に傍ふて櫛比羅列し往来必ず舟楫の便に依らざる可らず。各奉迎使は宮内省の小蒸汽に搭して、知事「ワルボンセー」を訪問せしも不在にして書記官知事に代りて奉迎使を接待し知事の別邸に朝餐の饗応をなしたり。

一行は案内に依て馭象場を縦覧す。該場は巨材を以て埒を結び、毎年交尾の候に際して順養の牧象を率ひて山間に至りて野生の象を誘引して馭象場に欺き入れ、堅く埒を鎖して数象中に就き、良象を択んで余は尽く之を解放する者にして、彼等は其解放せらるゝや、先を争ふて湄南江に投入して濁水を飲み、数日の渴を医する有様は頗る奇観なりと云ふ。蓋し馭象の事は他邦になぎのとして暹羅特色なり。晚波院の離宮は洋風の築造にして其規模頗る宏壯輪奐一見人目を驚すに足る。室内の裝飾には、金銀瑠璃金剛翡翠玳瑁等の寶石を用ひ燦爛赫奕人をして応接に暇まあらざらしむ。実に宇内の珍器宝物を蒐集して、人生の豪奢を極むる者と謂はざる可らず。暹国全体の富の程度に比すれば、或は権衡を得ざるの感なき能はず。英人の暹国に対して垂涎三尺豈に其故なしとせんや。

奉迎使一行は、離宮構内内務次官の別邸に於て、次官より昼飯の饗を享く。配膳頗る丁寧を極めたるを以て、一行は意外の満

足して三時四十分の汽車にて盤谷府に帰れり。愛知阿の旧趾は禾黍離々一も目を寓するに足る者なし。

#### ○宮中陪食

十八日午後二時、各奉迎使は稲垣公使と共に宮内省より廻はざれたる三台馬車に乗り、宮中に伺候したり。則ち宮内文部外務三大臣は奉迎使を出迎ひ、待合の間に導き、暫時休息の後暹羅王寢殿に御し玉ひ、各奉迎使に対して握手の礼を行はせられて自ら先導して食堂に入り玉ひたり。陪食の榮に与りたるは稲垣公使及奉迎使外随行長南條文雄師一人にして、他の十一名は暹国政府の親王及文武官なり。暹王は日本仏教の万歳を祈り、併せて各奉迎使の健康を祝し玉へり。食事中は庭前に絶へず囁きたる天樂を奏し、又大団扇を揮ふて涼風を送り、賓客をして薄暑の苦悩を覚へざらしめたり。食了りて、別室に於て珈琲を賜はり、而して暹王より日本仏教各宗へ対して金銅の仏像（長三尺計）一体を賜はりて勅せられて曰く。「此仏像は暹羅特有の鑄造にして印度に非らず。支那に非らず。純然たる暹羅の仏像にして一千年前の古仏なり。現時鑄造の技術を失ひたれば、今之を鑄造せんと欲するも復た得可らず。是れ我邦の重宝なり。願くは他日、日本に於て仏骨安置の殿堂出来せば、此仏を御前立として安置せられんことを望むのみ。」と懇勲に各奉迎使に對して握手の礼を行ひ、海陸万里帰路恙なきを祈ると勅し玉ひて各奉迎使は退出せり。

正使大谷光演師へ對して、別に金銅の仏像一体（長一尺計）を



賜はり、又各奉迎使に対しては紀念章四枚を賜はりたり。一個は青銅にて、二個銀製他の一個は金製なり。各表面には仏像を彫刻せり。(別記の如し) 文部大臣より各奉迎使并に随員の僧侶に対して仏像一体宛贈与せり。外務大臣よりも各奉迎使へ贈品ありと云ふ。

#### ○公使館夜会

是夜、稲垣公使は各奉迎使及随員其他暹羅政府の文武官并在暹羅の公使領事貴婦人等百有余名を招きて夜会を開き、軍樂を奏し、暹羅の優伎を演じ、日本の烟火を打揚げて余興を助け、立食の饗応あり。主客歡を尽して深更に及て散す。蓋し該会は仏骨奉迎使の爲めに開くものに似たり。

#### ○奉迎使出立

十九日午前十時、奉迎使日本公使館に集まり、文部省より廻はされたる小蒸気船に搭じ、稲垣公使夫婦及文部大臣秘書官等同船して湄南江を下り、河口に碇泊せる独逸船「マラーツト」号に移れり。在暹日本人は勿論文部大臣自ら来りて奉迎使の一行を送れり。而して「マラーツト」は午後二時汽笛と共に抜錨して湄南江を離れたり。奉迎使一行盤谷府滞在は僅か一週日なれども、朝参訪問応請待賓疫病を畏れず、炎熱を憚らず日夜奔走して殆んど寢食に遑まらざりき。又暹羅政府は接待官を附して名勝旧跡に案内して、奉迎使一行をして十二分の満足を与へたり。如此き取扱ひも毫も国賓と異なる所なし。暹羅あらざれば、安んぞ仏教徒に対して如此優待厚遇するの国あらんや。而

して稲垣公使の周旋尽力の行届きたる結果亦与りて其多きに居るとは云はざる可らず。

奉迎使一行は廿四日間、新嘉坡に着し、仏蹟参拝は都合ありて之を見合せ、大谷前田日置の三奉迎使は仏骨を供奉して直に帰朝の路に就き、藤島師は本山の命に依り一行に別れて、来九月初旬巴里に開ける万国宗教歴史会に参会の爲め欧州の鵬程に上れり。

明治三十三年七月

积尊御遺形奉迎事務所

仏教各宗派御中

#### ○同御奉迎法要施行順序左に

法要施行順序

- 一 法要施行の種類を分て左の五種とす
- 一 上陸会は明治三十三年七月長崎着港の翌日より二日間、同市に於て之を行ひ、十五日長崎御乗船、十六日航海中十七日神戸御上陸。
- 一 同十七日午後零時三十分大阪梅田停車場御着。直に天王寺に御入。
- 一 拝迎会は明治三十三年七月十八日大阪天王寺に於て一日間之を行ふ。
- 一 奉迎は明治三十三年七月十九日京都大谷派本願寺に於て之を行ふ。
- 一 仮奉安会は明治三十三年七月二十日より三日間、京都大仏妙法

院に於て之を行ふ。

一 拝瞻会は明治三十四年四月八日より同五月十五日まで京都大仏  
妙法院に於て之を行ふ。

一 上陸会及拝迎会の執行の際、該地方附近の各宗派僧侶は総て出  
勤するものとす。

一 仮奉安会法要執行の順序は左の如し

第一日 天台宗各派、臨濟宗各派、黄檗宗、曹洞宗、

第二日 真言宗、日蓮宗、時宗、華嚴宗、真言律宗、法相  
宗、

第三日 浄土宗西山派、真宗各派、融通念仏宗、

一 拝瞻会法要の執行は毎日一座とし、各宗派輪次之を施行す。宗  
派連合して法要を施行するも妨げなし。

一 上陸会及拝迎会を執行する地方僧侶は宝輿発着の際、適宜の場  
所に於て奉送迎をなすべきものとす。

一 仮奉安所奉安中の御供養

一 一ヶ月を一期とし各宗派毎に一期宛、抽籤を以て輪次奉仕  
し、当番宗派は適當の者を精撰し二名以上常任せしめ、其止  
むを得ざる場合には他へ依托することを得。

二 雇員及び費用に関する事項は別に之を定む。

以 上

明治三十三年七月

积尊御遺形奉迎事務所

○同御遺形長崎御着港以来、順路神戸大阪を経て京都仮奉安所へ  
御着の模様等は、既に其都度各新聞紙上に掲載これあるを以て、今

はこれを略し、単に宗都奉迎の行列図及び参列員心得を左に掲ぐ。  
积尊御遺形各所行列之図

|        |       |          |        |          |
|--------|-------|----------|--------|----------|
| ○先払    | ○六金色旗 | ○空也堂     | ○兵装学生  | ○法服用宗学生徒 |
| ○各宗派講中 | ○六金色旗 | ○空也堂     | ○兵装学徒  | ○法服用宗学生徒 |
| ○各宗派講中 | ○各団体  | ○金閣不動講社員 | ○明暗教会員 |          |
| ○真言律宗  | ○華嚴宗  | ○法相宗     | ○融通念仏宗 | ○時宗      |
| ○日蓮宗   | ○三門徒派 | ○誠照寺派    | ○山元派   | ○出雲路派    |
| ○木辺派   | ○興正派  | ○仏光寺派    | ○高田派   | ○大谷派     |
| ○木辺派   | ○興正派  | ○仏光寺派    | ○高田派   | ○大谷派     |
| ○曹洞宗   | ○黄檗宗  | ○永源寺派    | ○円覚寺派  | ○大徳寺派    |
| ○東福寺派  | ○建長寺派 | ○妙心寺派    | ○南禅寺派  | ○建仁寺派    |
| ○東福寺派  | ○建長寺派 | ○妙心寺派    | ○南禅寺派  | ○建仁寺派    |
| ○相国寺派  | ○天龍寺派 | ○西山派     | ○真言宗   | ○真盛派     |
| ○相国寺派  | ○天龍寺派 | ○西山派     | ○真言宗   | ○真盛派     |
| ○天台宗   | ○六金色旗 | ○天童子     | ○各宗管長方 | ○総理      |
| ○天台宗   | ○六金色旗 | ○天童子     | ○各宗管長方 | ○総理      |
| ○楽師    | ○仏旗   | 旗幢       | 旗幢     | 旗幢       |
|        |       | 〔宝輿〕     | 幡幢     | 幡幢       |
|        |       |          | ○奉迎旗   | ○奉迎正使    |
|        |       |          | ○奉迎旗   |          |

○奉迎旗  
○奉迎使  
○奉迎使随行  
○各宗門跡

○各宗派本山住職  
○各宗派重役  
○官員  
○名誉職員

○新聞記者  
○各宗派僧侶  
○各団体総代  
○各宗派講中

参列員心得

一 明治三十三年七月十九日午前八時五十分釈尊御遺形京都停車場御着。直に大谷派本願寺に於て御休憩。此の間諸員参拝、同午後一時同寺御発輿。烏丸通を北へ五条通を東へ伏見街道を南へ七条通を東へ大仏妙法院仮奉安所へ御奉安し鎮座後、各管長方始め一同焼香拝礼の事。

一 列に加はる僧侶は其の宗派の規定せる正服を着用し、僧侶以外の参列者は羽織袴上下又は「フロックコート」着用の事。

一 参列者は総て靴又は草履の事。

一 徒歩者は総て二列の事。

一 馬車又は人力車用意の分は一列の事。

一 参列者は総て大谷派本山内指定の場所へ同日午後零時三十分参集せらるべき事。

右

明治三十三年七月

釈尊御遺形奉迎事務所

日本大菩提会報告該会本部より左の通信ありたり〔明治33年

8月1日 第八十七号〕

一 日本大菩提会発会式は、明治三十四年四月八日、本部に於て之を挙行し、発会式に関する事項は別に之を定む。

一 覚王殿の起工式は明治三十四年五月十五日妙法院に於て之を挙行し、其の起工式に関する順序は別に之を定む。

右

明治三十三年七月

日本大菩提会本部

教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎航運日乗〔明治33年8月1日 第

八十七号〕（拙稿「日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎」（愛知学院大学教養部紀要）第61巻第1号）に掲載

奉迎使の帰朝〔明治33年8月1日 第八十七号〕

本宗より特派せられたる御遺形奉迎使日置黙仙和尚并に遂行員忽滑谷快天和尚は、各宗諸奉迎使と共に七月十一日無事長崎へ到着致され、各地の歓迎を受け順次御尊輿に奉侍して、同十九日に西京仮奉安所へ着泊致されたり。

奉迎特派員〔明治33年8月1日 第八十七号〕

七月十五日御着輿奉迎の為め特派を命ぜられたる本宗管長御代理北野元峰和尚并に随行員田村顕孝和尚は、大阪市まで出發遊ばされ、同地にて奉迎の為め出張せられたる各宗派管長と共に御参輿

を奉迎し、参列の上十九日西京まで御奉送続いて仮奉安御法会を随喜致され、廿五日帰東復命為成らる。

#### 日置黙仙師〔明治33年11月1日 第九十三号〕

嘗て本宗仏骨奉迎の使命を奉せられたる同師には、帰朝後一日の閑暇無く普く諸方の請に依じて往化せられつゝ、有るが、特に先月二日より山形県下の懇請に依じ小塚仏宗師外三名の随行を従へて、最上地方に巡化せられたり。即ち同五日より最上郡新庄町長泉寺に於て仏骨遙拜式及び三役（戊辰西南日清）戦死者の追弔会を執行し、続て戒会啓建あり。同十一日完成上堂了て、直ちに同地有志者の請に依り、郡会議事堂に於て法話あり。十二日稲舟村如法寺に於て教会法話あり。十三日より京塚多福院戒会啓建了つて、二十日二十一日は山形市羽陽仏教会の爲め、前日は禅学講話、翌日は暹羅紀行談あり。二十三日は米沢市興道会の請に依り、同市議事堂に於て法話せられ至る処、頗る盛会にして教化極まりなく洪益衆民を潤せり。本月五日は遠州掛川町是真会の請により、昼夜二席の法話ありたり。尚ほ本月十六日よりは能本山再建に關し、貫主御代理として三重県下へ巡化の筈なり。

#### 仏教各宗派管長会議〔明治33年12月1日 第九十五号〕

前号に於て、仏教各宗派管長会議に本宗管長代理として弘津説三師出張の旨豫あすけて報じ置きたりしが、今該会の模様並に議決事項の概要を全師より聞き得たるまゝを報道すべし。之れより先き帝

国第十四議會に宗教法案否決せし善後策の爲めに、本年二月中京都妙心寺に各宗派大会を開設し、該会の決議にて天台宗中村勝契、臨濟宗各派代表者瑞岳惟陶、曹洞宗弘津説三、真宗大谷派和田円什、真宗仏光寺派有馬憲文、浄土宗西山派靈群諦全、日蓮宗田村豊亮の七師を委員に撰挙し、宗教制度調査会事務所を東京に開設し、本年八月十五日より九月三十日まで該所に於て該制度調査に従事せしめ、其後十月廿九日より引続き十一月八日まで京都建仁寺に於て、更に再応周密なる調査を爲し、其結果の報告を兼ね進んで制度の審議を爲さん爲め、十一月九日より京都妙心寺に於て仏教各宗派管長会議を開設することゝなりぬ。当日出席管長及び代理者は総數三十五名なりと。今其重なる方々は左の如し。

真宗高田派管長代理日野法雷。融通念仏宗管長代理黒田覺州、永源寺派管長代理伊藤宗昌、曹洞宗管長代理弘津説三、大谷派管長代理和田圓什、西山派管長代理吉良亀峰、東福寺派管長代理林泰嶺、誠照寺派管長二條秀源、東覚寺派管長泉秀明、真言宗管長代理岡本慈航、真言律宗管長代理岩本元隨、建仁寺派管長代理後藤文震、仏興寺派管長代理有馬憲文、大徳寺派管長代理小堀宗長、妙心寺派管長代理前田誠節、大谷派委員大伴秀諦、誠照寺派委員永田正教、妙心寺派委員稲葉元厚、時宗委員河野良心、本妙寺委員泉春慧、天台宗彦阪湛照、天龍寺派高木台嶽、大谷派松岡秀雄、大谷派土屋觀山、妙心寺派委員池田澤州、建仁寺派委員瑞嶽惟陶

の各師にして着席の後、正副議長の撰挙を爲し、真宗誠照寺派管

長二條秀源師、議長に妙心寺派前田誠節師、副議長に当撰せられ、<sup>一〇</sup> 巫て前記七名の調査委員より八月中旬以来前日まで調査に従事したる結果を報告し、併せて該委員諸師の意見として、該制度の調査事業たるや実に重大問題にして調査の度進行するに従て、愈々困難を來たし、十分精細なる調査を為さんとするには、今後一ケ年間の時日を要する旨陳べられ、参考として委員諸師が調査に対する寛書なる一の草案を配附し、其他調査中に発見したる新事実をも併せて陳弁せし後、一同退参したり。翌十日は前日に引続きて審議討論なし。十一日は休会、十二日は前々日の事項を研究なし、種々討議の結果、左項の決議をなしたり。

第一項 政府及貴衆両院議員に対し、今期議會に別紙の理由に因り宗教法案を提出せられざることを希望するの請願書及陳情書を呈すべし。但し右文書の起草及提出の手續は従来の調査委員に全部を委托すること。

前項委員の外本会に於て議長の指命に依り、更に二名の委員を増加す。

第二項 各本山其門末に対し、前項の趣旨を諭示すべし。但し文案は前項委員に依託す。

第三項 総代管長方は従前の通り継続を願ひ、更に増加したる委員選出の二宗派管長方は調査委員に宗教制度調査研究を囑托せらるること。

第四項 宗教法案は明治三十四年九月三十日限り調査の完結を期すること。

但し調査方法は委員に依託し、各宗派は更に対宗教法意見書を作り、同年五月三十日限り委員手許に送附すること。

第五項 応急の手續として別紙調査委員の起草に係る宗教法案に対し、各宗派は意見を付し、本年十二月二十日限り調査委員の手許に送附を為すべし。

十三日には前日の決議事項に就き、種々将来の運動方針上打合を為し、引続き大菩提会会監惣代会議の決議に成立したる要点を本会に提出して、各宗列席諸師の協賛を求むることとし、菩提会々則改正案を調査委員に附托することに決したり。議長は各宗委員中より弘津説三、前田誠節、北周周篤、日野法雷の四師を調査委員に指名し、尚ほ菩提会理事中より三名互撰し、七名の委員を置くこととなせり。其他宗教制度調査に就ては東京に該事務所を置く、西京には該支部を設置することを議決し、全く妙心寺に於ける今回の各宗派管長會議を結了したりといふ。因みに記す。東京にては去月廿五日各委員諸師集合し、第十五議會に於ける宗教法案提出延期請願及び大菩提会事業等の為め協議会を開設し、爾來引続きて該務に従事せられつゝあり。

**釈尊御遺形奉迎**〔明治34年1月1日 第九十七号〕

旧臘十四日、廿日の両度、芝公園第十一号地三番日本大菩提会支部に於て、釈尊御遺形を今春東京へ御奉迎の為め準備委員会を開設し、東京各宗派委員参列諸般協議せられたり。本宗委員としては北野元峰、北越具戒、福田有法の三師、其の任に當らるゝよ

し。

### 釈尊御遺形拝瞻会〔明治34年4月15日 第一〇四号〕

本月八日以来、京都市に於て修行しつゝある釈尊御遺形拝瞻会大  
法要に就き、明十六日越本山貫首猊下御臨場の予定なりしに、猊  
下には御親化上己むを得ざる事情相生し、尚ほ又頃日御法体御微  
恙のよしにて、御臨場御見合となり、当時大坂地方御巡錫中の能  
本山貫首猊下御臨場あらせらる委細は次号に報道すべし。

### 大日本菩提会発会式〔明治34年5月1日 第一〇五号〕

同会発会式は、去十八日午前十時より大仏妙法院仮奉安殿に於て  
挙行さる。会長村田寂順師表白文を朗読し、暹羅公使は同国語を  
以て祝辞を朗読し、前任職北條周篤氏之を翻訳し、その他各派の  
管長高僧の祝文並に仏骨奉迎正使大谷光演師の祝辞代読名誉会員  
総代貴甚之助氏の祝辞あり。理事長小栗憲一氏の事務経過を報告  
し式を終へたるが、此式に列したるは前記人々の外同会重役、各  
地方員、支部長、特派員等出席し渡邊子、京都、奈良両府県知  
事、各高等官、京都市長、名誉職員、京坂各新聞記者等無慮数百  
名なりと。

### 仏舍利拝瞻会〔明治34年5月1日 第一〇五号〕

日本大菩提会は去八日を以て、初日法要を執行せり。当日は天台  
宗及び同真盛派の当番にして、天台座主大僧正坊城皎然師大導師

となり。衆僧五十名を率ゐる同宗派最要の大法要なる法要三昧を修  
し、養源院より奉安殿へ輿に乗じて入場せり。其の行列は先仏、  
青侍、小結に続く大衆、中童子、正童子、持幡童子、衆人、從  
僧、弟子、布衣、空也堂大衆等奏樂につれ練り出し、一時妙法院  
に入り、昇堂宸殿に着座し法要了ると共に、空也堂大衆庭儀の空  
也踊念仏を営み、全九日第二日目より二十八日まで各宗日割順に  
随ひ、厳かに勤修されたり。而して九日目は我曹洞宗の当番に当  
るを以て、総持寺貫首猊下の御出頭にて十六日午前十時より厳修  
遊ばされたるか。其御模様の委しきは別項の宗門彙報にあり。就  
て見られよ。

### 能本山貫首猊下〔明治34年5月1日 第一〇五号〕

西有穆山禪師には去月十六日、京都大仏妙法院に執行致し居ら  
る、釈尊御遺形拝瞻法会に御臨場遊ばされ、本宗当番法会を奉修  
在らせられたり。今其次第を報道せんに、禪師には前日午後二時  
十八分、京都停車場に御到着遊ばされ、拝瞻会本宗委員有澤香  
庵、広内黙咲、古川清林、同事務員山口寿山、東京派出員森道  
本、府下寺院惣代月橋院住職、同地滞在台灣布教師足立普明、市  
内附近各寺院及び市内本宗御用商人等の歓迎を受けさせられ、随  
行長秋野孝道、随行員久我尾順孝外一名を引率して、二ノ宮町正  
面下ル藤本別邸に御投宿遊ばされたり。翌十六日午前十一時、同  
所より設けの馬車に搭せられ、有澤、広内の両委員先導にて二十  
余名の僧侶信徒を伴ひ妙法院式場へ赴かせられ、大菩提会総裁村

田寂順僧正の御饗応にて茶菓淨齋を受けらる。午後一時に至れば、雷鼓三会にて御上殿、献茶湯法語、楞嚴行道にて嚴肅に法会を親修遊ばされたり。当日日本宗寺院の随喜者九十余名にて、京都三号支局よりは取締山崎古嶽氏寺院を引率し、大阪一号支局よりは取締北山絶三氏所轄寺院を誘導して出勤せられ、京都一号二号の支局よりも五十余名上京随喜せられ、各宗交番法会中未曾有の盛会にてありしと、法会了るや各宗管長懇親会開設の予定なりを以て、四五名も出席し居られたれば、禪師には寸暇なきを以て出席致し兼ねる旨を御挨拶して本宗随喜寺院に拝謁仰され、鄭重なる御挨拶を述べさせられ、直ちに宿所へ御立寄りの上、四時三十分御東上遊ばされたり。奉送者は前日より尚ほ多かりしと。

#### 覚王殿建立の催促〔明治35年8月15日 第一三六号〕

暹羅国皇帝より仏骨を分贈せられたる以来、既に二ヶ年を経るも、未だ覚王殿建立に至らず。同帝には時々稲垣公使に向て御下問ある趣きにて、両三日前同公使より真宗各派管長に対し、速に建立の運に尽力ありたき旨依頼ありたりと云ふ。

#### 大菩提会の拡張演説〔明治35年8月15日 第一三六号〕

尾張国愛知郡の牧野村なる真宗説教所にては、去月八日の午後一時より、又西春日井郡中小田井村の臨濟宗東雲寺にては十日の午後一時より、何れも本会の旨趣を拡張して覚王殿の建設を迅速ならしめんが為に大演説会を催せしに、右両所の出席者は早川見

龍、藤井一朗、足立圓靈、加藤嶺梅外数名にて各溢る斗りの熱誠を以て滔々演説せられし為に、頗る信徒の全情を惹きたるのみならず、該地に於ける本会の前途は頗る有望の見込ありと云ふ。

#### 覚王殿建設地問題に就て〔明治35年10月1日 第一三九号〕

八月下旬以来各宗派管長会議を京都に開設したりしが、建設敷地の京都と名古屋との両派に分れたりし為めに一時停会して、委員は両地の比較調査を為し、去月二十五日、更に管長会議を開設せられたり。詳細は次号に報道すべし。本宗よりは管長代理日置黙仙師、委員弘津説三師、全有澤香庵師とも引続き出席、諸般職務に尽力せられつゝあり。因みに記す。暹羅国皇太子殿下には、十一月には御来遊有之旨公電ありしやにて、其筋にては夫々御歓待の準備中なりといふ。

#### 覚王殿建設問題と各宗派管長会議〔明治35年10月15日 第一四〇号〕

本誌前号所報の如く、同問題は建設地が京都と名古屋との二派に岐れ、二週日余の休会を為し、其間に比較調査委員を設け、両所を實際に調査して其結果、本月二日更に各宗派管長会議を開設することとなりしも、両派の運動愈々激烈にして容易に決定すべくもあらず。僅に委員会を開きたるのみなりしも、種々協議の結果、去る十二日、建設地は名古屋に決定したりと。詳細は次号に報道す。这回本宗管長代理としては日置黙仙師、委員としては弘

津説三、有澤香庵、広内黙咲、近藤疎賢等の諸師出席す。尚ほ頃日、新聞紙上に両派の主張説を掲載ありしにより、左に転載することゝなしぬ。

#### ○覚王殿問題京都派の主張

京都派の主領前田誠節師の談に曰く。大菩提会の事業は之を分て二とす。一は即ち覚王殿の建設にして、二は即ち之に伴ふ諸種の事業なり。之に伴ふ諸種の事業とは、其の中の二三を挙げれば各宗の統一的事業にして、即ち仏教大学の如き慈善感化事業の如き是れなり。第一は、全く信仰的施設に属して大聖釈迦仏の徳を報ぜん為め、其の遺形を奉安供養するものなり。而して其の第二の随伴事業に至りては、随伴とは云へども其の実我々が遠く遺形を暹羅に迎へて之を我国に奉じたるもの、其の真意単に遺骨を殿内に安置し、四時の供養、朝夕の読経を以て満足せず。之を一の機会として、従来紛々たる仏教各宗派を統一し、随て統一的事業を起して大に仏日の晃輝を計り、因て世界的仏教たらしめんとするに在り。所謂南北仏教の連絡を通して、区区たる東洋の孤立を一転して、其の範囲を拡大するを以て、寧ろ遺形奉迎の真意と為すなり。然れども、是れ順序としては覚王殿建設の後に來るべき問題にして、先づ差当りては遺形奉安の靈殿を起し、供養礼拝するの場所を定めざる可らず。然るに、京都は諸本山の所在地にして、又仏教の中心地たるを以て朝夕供養礼拝の崇敬を尽すに於て、最も便宜あるは勿論、一方信男女の参拝上より見るも、地方上京の慣例便利は之を京都以外の地に比して、固より同一の論に

あらず。之に因て是を觀るに、遺形奉安の第一着、菩提会事業の第一たる覚王殿建設の地が必ず京都たらざるべからざる理由は今更喋々を待たざる所にして、畢竟名古屋派など中途に飛出たればこそ、或は京都と何れが適当なりや、なご杯比較調査の必要も起りたれ。其れより以前に於ては、覚王殿建設地の京都たる事は不言不語の間に万人の齋敷認識する所にして、京都以外に競争の現はれんことは、実に何人も意外とする所なりしなるべし云々。(京都新聞)

#### ○覚王殿問題名古屋派の主張

名古屋派の主領弘津説三師の談に曰く。我々が名古屋説を主張するに至りたる理由は、ただ一つ。曰く実力問題、これ抑も御遺形を奉迎してより既に三年、此間大菩提会は何事を為しつゝありしか。全国に会員並に寄附金を募ると称し、空数十万以上の負債をこしらへ、種々の失態を出したる外何等見るべきの成績一として之れあるなし。現に本年一月調査せし所にては、会の負債は八万円なりしに、六月には早く既に十万八千円となれり。而して一方、寄附金の募集はと云へば、僅々二千円に満たず。是等は帳簿上明瞭なる事実なるが、斯る有様にては之を奈何んぞ。数十万円の殿堂を建設するの見込みありと云ふを得んや。我々をして到底見込みなしと断言せしむるも亦余儀なき次第なり。是れ独り我国仏教の不面目なるのみならず、暹羅に對する当時の事情より考ふるも、幾分国家の態面にも関する事なり。左ればこそ、先きには外務省通商局長の注意するあり。近くは過日、山座政務局長の通



知を受けたり京都が、以上の如く冷淡極まる態度を座視するに忍びずして起りたるは名古屋派なり。名古屋の仏教有志者は、覺王殿問題の解決は結局實力に待たざるべからざるを思ひ、愛知県下に於ける二十五箇所の期成同盟会事務所に於て、第一期に募集したる収入確実の寄附金額四十九万円余、第二期には更に五十余万円を増加して総額百万円に達せり。此の百万円は、我々の再三調査して確実と認めたるもの決して一時の空言虚声にあらず。而して、万一予定期限内に募集し能はざる時は他の有志者、即ち服部、吉田諸氏が飽迄責任を以て引受けんとの事を誓言せり。所謂名古屋派の熱心實力は此の如し。而して京都側は如何と見るに、名古屋説の勃興に余儀なくせられ、今日漸くにして森田某の二十万円寄附の申込みありたるが、是も最初の間は純然たる寄附なりと明言せるにも拘はらず、頃日に至り、俄に寄附の名義を取消し、一時立替へと云ふ事に訂正せり。而も本人森田某が果して如何程の資力あるものなるかは、我々が親敷調査したる所によれば、遺憾ながら信を置に足らず。要するに覺王殿建設は事実問題なり。空論空議の能くすべきに非ざる上に、京都には現に各宗本山の并立するあり。必ずしも同殿の必要を認めず。況や仏教弘通の本意より云へば、広く地方の信仰を開拓して、遍く辺鄙を利益するに在り。空海が高野を開き、日蓮が身延を相し、承陽大師が永平寺を創立したるが如く、皆此意に外ならず。名古屋は今や四通八達を中心地として、固より辺鄙にあらずと云へども、此地に同殿を建設する事は、蓋し事誼に適せるものにして、且一日も速

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

に此の目的を達する捷徑なり云云。(京都新聞)

#### 覺王殿建設地問題の決定 (明治35年11月1日 第一四一号)

各宗派管長会議に於ける本問題の主点たる京名両派の紛争は、愈其熱度を高め、本紙前号所報の如く、去月十二日は其決勝点に達し、論戦數時間に涉り、又もや小田原的評定を以て日送りを為さんとしたりしも、終に四十番(弘津説三師)は既に交渉に交渉を尽しあるに、猶斯の如く中途にして席を起ち去り、又は欠席を為が如きは頗不徳義なり。議事はドシク進行すべしと述べ、六十番(蕪城賢順師)之に賛成し、無記名投票を以て採決することと為り、三時開票を為したるに、投票總數三十八にして名古屋の三十七票に対し、京都は一票にて、大多數を以て名古屋に決定し、會議は茲に結了したり。京都派の一票は融通念仏宗管長清原亮善師の投票なる由にて、名古屋に投票せしは、左の三十七名なりと。

真言宗長者長宥匡○真言律宗管長西大寺長老佐伯泓澄○天台宗管長代理石堂晃純○天台宗真盛派管長代理小泉智運○真宗木辺派管長代理足利義藏○法相宗管長代理松田弘学○大谷派管長代理井沢勝詮○曹洞宗管長代理日置黙仙○華嚴宗管長代理筒井覺聖○建長寺派管長代理柴崎雄船○西山派管長代理加藤觀海○時宗管長代理足利灌柔○円覚寺派管長代理武田達応○大谷派委員一柳智成○西山派委員靈群諦全○真言宗委員小川光義○天台宗真盛派委員加藤映空○華嚴宗委員雲井春海○曹洞宗委員鈴木雄

峰○同弘津説三○天台宗委員伊達高真○大谷派委員白尾義夫○真言律宗委員植村悟龍○時宗委員河野良心○真言宗委員土宜法龍○曹洞宗委員平野大仙○融通念仏宗委員清原賢静○法相宗委員千早正朝○建長寺派委員糸井達岩○真言宗委員瀧見常○天台宗委員赤松円麟○円覚寺派委員細川義典○曹洞宗委員有澤香庵○西山派委員小松龍真○天台宗委員木村観順○大谷派委員蕪城賢順○大谷派委員木曾琢磨

本問題は、前記の結果にて一瀉千里の勢を以て決定したりしも、京都派は飽迄も該決議を否認し名古屋派に対戦せんと意気込み、已に位置決定後に於ける本問題は茲に再燃の有様となり、本宗管長代理日置黙仙師、委員弘津説三師は是非円満なる協商を為さんとして奔走せられつゝあるよしなるも、本稿小切に察するまでは未だ其好結果を齎し来らざりし。尚本問題に対する両派の衝突論旨の本尊たる決議無効に関し、其新聞の掲載したる両派の弁疏を参考の為に掲ぐることゝす。

### ●京都派の否認理由

京都派が覚王殿問題決定を否認する理由は、元來各宗派会は出席議員八十四名にて成立するものに、過日の決議は三十八名を以て過半数となし、而も名古屋派は開会以前に欠席届を出したる十三名を議員総数外となせしは明白の事実にして、且つ当日議長より議員中に資格消滅者ありしと宣告せしを聞かず、仮令宣告ありたりとするも同会議は同盟宗派を待つて成立する者なれば、単に出

席頭数の多寡に依り、列席宗派の多少を問はざるは、正しく同盟宗派の円満を無視する野心的行動たるや知る可きなり。加之ならず、妄りに管長の行動に倣ひ、自己の代理を設けて他人を出席せしめ、前後の言責を曖昧にし党派頭数の多きを求め、議事規則の不完全に乗じ、有ゆる手段を以て宗派の円満を破壊し、京都派の欠席退席を待て一味の連中のみにて不穩当の決議をなし、尚議長は開会後差出したる欠席届を握り潰す等、悉く不当の処置なりといふにありとか。

### ●名古屋派の主張

京都側が頻りに決議無効を主張するに對し、名古屋側は如何なる意向を有するかと聞くに、同派の主領弘津説三師は曰く、元來京都側の無効説を唱ふる唯一の理由は、決議当日の出席議員数が総数八十四名に對して過半数に満たざると云ふに在るも、其は間違ひなり。何となれば、今回の宗派会に付て最初より公然欠席を届出たるもの及び無届欠席のもの本派本願寺を初め天台寺門派、臨濟永源寺派、真宗出雲寺派其他木辺仏光寺の両派が僅に一名づゝ出席して、他は欠席したる等を合して、都合十三名の議員は当初よりの欠席者にして、是は当然総数八十四名中より控除すべきを以て、残り七十一の正半数は三十五人強となる。然る時は決議当日一名に對する三十七名は、無論過半数にして即ち議事規定の第四条「会議は議員過半数出席するに非ざれば開会する事を得ず」又同第十二条「議案の決議は出席議員過半数に依る」とあるに準じ

たるものにして、此間毫も間然すべき余地を存せず。而して右議事規則は、既往十年來各宗會議の度毎に依用したるものにて、大菩提会々議も之れに依りたるものなれば、此の規則に適應したる決議の有効なるは云ふまでもなし。殊に決議前に新たに九名の委員を選び、調査委員と合して十八名となし、五日間休会して各自意志の疎通を計りたる結果、六ヶ条の報告を造り、且又菩提会の会則をも修正し十分妥協したるにも拘はらず、当日其場に臨みて退席したる杯は徳義上穩当と云ひ難し。若し今日の如く相争ふては到底際限なく、遂には再び外務省の注意を受け、他人の仲裁を待て折合ふに至らば、仏教各宗の面目は全然潰れたるものとなるべく、至尊在天の靈は果して如何ん。我々は飽迄決議の遂行を期すると同時に、成るべく穩和の手段によりて妥協すべく、目下これが為め京都側と交渉中なり事を法庭に訴へんなどは以ての外にして、我々は斯く迄墮落せる事実を世間に発表するを好まざるなり。

●本問題に關する局長の照會文、

暹羅国皇太子殿下、来る十二月御來朝に付、外務省政務局長より覚王殿土地調査委員会へ照會ありしことは伝聞せしが、其全文左の如し

拝啓来る十二月暹羅国皇太子殿下御來朝可被遊に付ては、先年同国国王陛下より御贈与に相成候。釈尊御遺形は速に各宗管長各座下に於て、適當の地所御選定の上御奉安相成、同陛下に對し満足を与へられ候様希望致候。此段得貴意候。敬具

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

九月十六日

外務省 山座政務局長

● 仏教各宗派管長委員御中

正誤。

前号所報各宗派管長會議本宗委員。内。黙。咲。とあるは、鈴木雄峰の誤植につきこゝに正誤す。

大菩提会々々監会〔明治35年11月15日 第一四二号〕

覚王殿建設問題京名兩派の軋轢よりして、去月十二日の決議案も將に水泡に帰せんとしたりしが種々交渉を重ね。去る五日、大菩提会々々監会及各宗派會議は妙法院に於て開会す。議事に先ちて正副議長の選挙を行ひしに、出席総員三十二名に對し、二十七票の多数を以て興聖寺門跡華園澤称師議長に、二十票にて真言宗土宜法龍師副議長に當選して、一時休憩、三時開會、議長は書記をして左の議案を第一より第七迄を朗読せしむ、

一 本年十月各宗派會議に於て決定したる大菩提会の改正会則を承認するの件。(第一号)

一 正副会長の辞任を認容し、更に改選の上三日間内に新旧事務の引継を為すの件。(第二)

一 釈尊御遺形は十一月十五日、名古屋市に奉遷するの件。(第三)

一 御遺形奉遷に關する諸般の事務は、大菩提会新役員に於て担任するの件。(第四)

一 大菩提会本部は諸般の事務を整頓し、御遺形奉遷と共に名古屋

屋市に移転するの件。(第五)

一各宗派に於て門末一般に、本年十一月十五日を以て大菩提会の事業に翼賛すべき旨諭達を發するの件。(第六)

一御遺形奉送迎は、各宗管長以下各宗派当路者等も之に従事するの件。(第七)

第一号議案に付ては、弘津説三師より出席三十二名は過半数にして有効なりやに付て質問あり。番外前田師有効なる旨を答へ、書記は村田、前田正副会長の辞表を朗読し、六番、廿五番、十七番等の間に二三の押問答ありしが、結局六番の説会省略確定議と爲すの發議に続々賛成ありて、之に決し第二号議案に移りて、是亦異議なく確定し、次に第三号議案に移りて三十五番より十五日名古屋に奉遷するに付て、負債は其れ迄に整理の始末付くや。万一御遺形は本部と共に名古屋に移転し後に負債のみ残る如き事ありては迷惑なり云云との質問あり。番外一番及び十七番より決して斯る事なし。一切の事務(負債を含む)は十五日の前日、即ち十四日迄に悉皆整頓せしむべければ安心あれとて、同案も同時可決確定し、他の四、五、六、七号議案とも二三の質問ありたるのみにて一瀉千里の勢ひを以て、悉く原案通り確定したり。此時午後四時、次で二十九番より前正副会長に感謝状を呈すべしとの建議出でたるも、議長は一旦休憩を命じたり。右にて過般来、左して宗教界の一問題として八ヶ問敷かりし仏骨問題も全く名古屋派の希望通りに決定して円満無事に局を結ぶに至りたるは、各宗派の態度至極穩当なりと云ふべし。既に議案は悉皆議了したるに就

き、昨十四日迄に名古屋派の主任者服部小十郎外二氏の責任たる十三万六千余円の会債は悉く現金を支払ひ、又改正会則に據り部長の曹洞、日蓮、真言、天台宗及び大谷派、妙心寺派より各一名選出する事となり、評議員九名は右六宗派より各一名の外、融通念仏、浄土(西山派)、真言、律、法相、華嚴、時宗の各宗派より一名、臨濟(妙心寺を除く)及び黄檗宗より一名、真宗(大谷派を除く)より一名を選出し、理事は以上部長及び評議員の選出なき他の宗派より三名、俗人より三名を出し、会長副会長選挙に就いては、豫て交渉もありしこと、大谷光演師を会長に、曹洞宗日置黙仙師を副会長に選挙し、日置師は直に承諾したるも、大谷師は目下東上中の事なれば、華園澤称、土宜法龍の両師より通知する事とし、仏骨は当分名古屋大谷派別院内へ安置し、大菩提会本部をも同所に設くる事に決したり。尚仏骨送迎の日取は、来る十五日と定めあれども、九州行幸の陛下御還幸の都合により、二三日延期するに至るやも知れずと云ふ、曹洞宗よりの部長は弘津説三師を任命したる由。同宗管長猥下より大菩提会本部へ通牒せられたり。

告示第三十四号 (明治35年12月1日 第一四三号)

全国末派寺院

明治三十三年当局甲第六号ヲ以テ普達セシ 教主釈迦牟尼世尊御遺形ハ、京都市ニ仮奉安ノ処、各宗派協商ノ上本年十一月十五日愛知県名古屋市ニ奉遷シ、同市附近ニ浄園ヲ撰択シ、覚皇殿ヲ建

設スルノ目的ヲ以テ日本大菩提会本部ヲモ同市ニ移シ、直ニ該建築ノ起工ヲ企画セリ。依テハ切ニ此拳ヲ随喜シ、道俗自他均シク丹精ヲ傾瀉シテ布金ノ淨業ヲ植ヘ、永ク白毫ノ恩徳ニ霑被スヘシ。  
右告示ス。

明治三十五年十二月一日

曹洞宗務局総 務 麻時 舌溪  
曹洞宗務局総 務 石川 素童  
曹洞宗務局庶務部長 大仏 輔教

**暹羅皇太子御來遊に就て**〔明治35年12月1日 第一四三号〕

稲垣駐暹公使より頃日、某所に達したる書翰によれば、暹羅国皇太子殿下には愈々来る本月第二週日を以て、我国御到着の御予定にて、我皇室を始め奉り政府に於ても懇篤に待遇あるべきは勿論なるも、殿下には御幼少より専ら英国の教育を受けさせられたることゝて、其御氣質全く英国貴紳の美風を備へさせられ、随ひて我国民の歓迎等に対しては一層御感得あらせらるゝ事に付、我国民一般に於ても充分歓迎の意を表せられんこと希望に堪へず。殊に刻下暹羅国に於ては、親厚なる盟兄国として本邦に信賴するの傾向を呈しつゝあり。此際我国民の殿下に対し、奉る歓迎振如何は暹国宥司の最も注意を怠らざる所なるべく、延ては此国賓歓迎の一事が日暹両国將來の關係に著しき効果あるべきは疑ふべからざる所に付き、此点に留意して一般歓迎方遺憾なき様取計らは

れたしといふに在りて、尚暹羅国皇帝陛下の御名代として皇族御一名は殿下奉迎の爲、巡洋艦マハチャクリ号にて本邦迄御渡航の儀決定し居れりといふ。

**大聖釈尊御遺形名古屋市に奉遷す**〔明治35年12月1日 第一四三号〕

去月五日、京都妙法院内に於ける大菩提会監会及各宗派會議々決の結果、予定の如く去月十五日午前六時三十分、京都妙法院なる仮奉安殿を出て、八時四十分七条発別仕立の汽車にて各宗の管長代理以下多数僧侶供奉して名古屋に向ふこととなり。左れば奉送の爲め花火を打揚ぐるなど其混雑一方ならざりしが、斯く一路滞りなく午後一時三十分、名古屋なる笹島停車場に到着するや、御遺形は一応構内に設けありたる仮殿に奉安し、暫時休憩の上暹羅公使は輦輿の前に、又大谷光演師は其後に供奉し、多数の僧俗更に其前後を圍繞して順路裏門前町なる万松寺の仮殿に入りたり。爾後引続き一週間内は、各宗派交番に御遺形仮奉安の法要を勤修せり。曹洞宗は同十七日、法要当日なるにより午後二時より曹洞宗寺院住職二百名、同宗第三中学校学生、雲納百八十余名参拝し、豊川閣妙嚴寺住職福山黙童師管長代理として大導師となり、遺教経を誦し大法要を営み、法要の前後に於て早川賢龍、近藤疎賢の法話ありたるが、当日は別に同宗の吉祥講員二千余名参拝して堂内立錫の余地なかりし。尚ほ法要の前後に参聴社よりの奏楽ありたり。各宗法要の順序日割は十六日天台宗、十七日曹洞

宗、十八日日蓮宗、十九日は真宗、二十日は浄土宗西山派、二十一日は臨済宗、黄檗宗、二十二日は真言宗各派にて、孰れも午後より各法要を営み頗る盛大なりしといふ。

○福山黙童師 同師は別項報道の如く、大聖釈尊御遺形奉迎並に本宗法要修行等につき本宗管長御代理とし出張せられたり。

#### 日本大菩提会通信 (明治36年2月1日 第一四七号)

愛知県海東郡の津島町は、戸数殆んど三千余戸を有する郡中第一の都会なるが、去月十五日の午後一時よりは同町の瑞泉寺を会場に充て、会員募集の大演説会を催せり。今こゝに其概況を記せば、釈尊御遺形の十一月十五日を以て名古屋市に奉遷されてより以後は、同県に於ける仏教信徒の熱情は頗る昂りし為にや。同日の演説には三里もしくは五里の道路をも遠しとせず。続々聴衆は推掛て、聽て定刻に達する頃には、席場の内外は人を以て充滿せられ、殆んど寸隙の余地をも余さざりし程の群集なりしが、予定の時刻に達するや驚 恵證氏は簡単に開会の辞を述べ、続て高木義答、大野美恵丸の両氏は各一場の演説をなしたる後、大菩提会本部より特に出席されし常在特派使の早川見龍和尚は、満場の拍手に迎えられ徐ろに演壇に現れ、滔々説き出すこと殆んど二時間余に渉れる長演説なりしが、満場斉しく感に打れて、何れも袖に随喜の涙を濺がさるものは無かりしと。最後には本部の会計部長たる中村勝契和尚は、尤も慎重なる態度を以て演壇に上り、大菩提会本部を代表して一場の挨拶をせられし時の如きは、サシにも

広き場の内外は寂寥水を打たる如きの有様にて、其殊勝なる状態は到底筆舌の尽す所には非ざる程にてありし。仍て当日は、即座に申込たる寄附金の額は約五千円に近きに達したるを見て、該地に於ける仏教信徒の気焔の高きと、又その演説会が如何に盛況なりしかを想見するに足ぬべし。

#### 弘津説三師の出張 (明治36年4月15日 第一五二号)

全師は日本大菩提会要務の爲め、去る一月以来名古屋市所在同会本部に出張を命ぜられ、要件打合せ等の都合にて両三回帰局せしも、目下同会委員会の西京に開設せらるゝ為め、本月二日より上洛会務に従事せられつゝありといふ。

#### 覚王殿敷地決定 (明治36年5月1日 第一五三号)

大覚王殿敷地撰定に就ては、去月中京都に於て撰定会議開設の結果、愈々愛知県愛知郡田代村月見坂に決定し、別項の如く日本大菩提会より曹洞宗務局に通牒せられたり。其通牒書の写は左の如し。

肅啓 本月十二日、京都に於て覚王殿敷地選定委員会を開き、弥該敷地は県下愛知郡田代村加藤敬二等の寄附に係る土地月見坂十二万七千坪余に決定し、去十七日発表致候間、此段及御通知候也。

明治三十六年四月十八日

曹洞宗務局御中

日本大菩提会本部

覺王山日暹寺建立許可の通牒（明治36年11月1日 第一六五号）

名古屋市裡門前町日本大菩提会副会長日置黙仙師より、本宗管長森田悟由禪師宛下へ宛。日暹寺建立其筋より允許に相成りたる由。通牒せられたり。又今回稲垣公使暹羅国へ帰任に付、同国宮内大臣へ宛同国皇帝陛下へ上奏文を委託したる由。其文写如左。

日本仏教各宗派管長等謹テ一書ヲ裁シ、大暹羅国皇帝陛下ニ伏奏ス。去ル明治三十三年六月十五日恩頒ヲ忝フセシ。釈迦牟尼仏ノ御遺形并ニ金像仏ヲ奉安ノ為メ、今回尾張国名古屋市附近田代村ノ勝地ヲ撰テ奉安殿ヲ建築スルコトニ決定シ、既ニ日本政府ノ許可ヲ得テ寺号ヲ覺王山日暹寺ト称シ、奉安護持シ、永ク貴国皇帝陛下恩頒ノ慶ヲ不朽ニ伝ヘ以テ、仏教各宗派及ビ信徒等報恩謝徳ノ意ヲ尽サントス。伏シテ願クハ閣下此ノ意ヲ諒シ、貴国皇帝陛下ニ可然御執奏アラントヲ望ム。茲ニ下名等ハ謹テ閣下ニ敬意ヲ表ス。

大日本帝国

明治三十六年十月二十日

仏教各宗派管長連名

暹羅国宮内大臣閣下

摺澤少将と日暹寺本尊仏（明治37年12月1日 第一九一号）

今般名古屋に於て、新に建築せられたる釈尊御遺形奉安殿覺王山日暹寺本尊釈迦牟尼仏の金像は、御遺形奉迎の砌、暹羅皇帝陛下より覺王殿本尊物として賜りたる者なるが、右の聖像は今を去る七百年前、同国がラオス征伐の時獲せるものにして、殆んど千

曹洞宗の「宗報」における仏骨奉迎の記事について

余年前に於ける鑄造の古仏なれば、以来同皇室に於ても一増敵に尊重せられつゝ、有りしと云ふ。然るに今回日暹寺新に成るに当り、紀念として信徒に分与する為め、此れが摸形を鑄造し其の一体を日置黙仙師より稲本某に托し、嘗て師の門に参ぜられたる北海道第七師団參謀長大佐摺澤静夫氏へ贈られけるに、氏は今や方に出征の途に上らんとするに際し、囘らず此の靈像を拝瞻せることは此上無き吉兆と感歎措く能はざる所へ不思議なるかな。其の翌日に至り、忽ち其の筋より少将に昇進の電報到来し併せて第○旅団長として○方面へ出征の命に接せられければ、一同誠に奇異の思に堪へず。是れ偏へに仏徳不思議の感応なるべしと称讚極まり無し。況んや彼の靈像は如来降魔の座相にましませば、氏は弥々以て歓喜の念に堪へず。是れぞ我が向ふ所、必勝期すべく怨敵悉く降伏し、やがて、仏日と共に国輝を宣揚せんこと疑ひ無しと勇ましく出陣せられたりと云ふ。則ち氏より日置老師への礼状左の如し。

（昇進前日出）

稲本帰旭の際、御恵与の仏像正に落手仕候。小生今方に出征の途に就かんとするに臨み、不図も大偉人の姿を拝し、冥加至極に奉存候中、略切角御自重為国家為戦捷特に御尽力奉祈候。早々拝具

十月二十三日

摺澤静夫

日置黙仙老師

稲本氏よりの通信

（前省）摺澤様には其翌二十四日の夕方、其筋の電報にて少将に御昇進第○旅団長として○方面に出発相成る事に御座候。

十月二十九日

稲本安三郎

一金二千五百円

同 六年度

日置黙仙殿

积尊御遺形奉安宝塔建築費寄附金支出ノ件〔大正2年12月15日

第四〇八号〕

积尊御遺形奉安宝塔建築費寄附金支出ノ件、曹洞宗議會ノ協賛ヲ  
経タリ。依テ茲ニ之ヲ発布ス。

大正二年十二月十五日

管 長 森 田 悟 由

総務心得 冲 津 元 機

庶務部長 栗 木 智 堂

教学部長 青 山 物 外

人事部長 有 田 法 宗

財務部長

宗令第七号

积尊御遺形奉安宝塔建築費寄附金支出ノ件

第一条 宗務院ハ、覚王山日暹寺积尊御遺形奉安宝塔建築費ニ金  
一万円ヲ寄附ス。

第二条 前条ノ寄附金ハ大正三年ヨリ向四箇年賦トシ、年々左記  
ノ金額ヲ宗費予算歳出臨時部ニ編入ス。

一金二千五百円 大正三年度

一金二千五百円 同 四年度

一金二千五百円 同 五年度



## 執筆者紹介

堀田 敏 幸 (本学教授…………… フランス語)  
HOTTA Toshiyuki

清 水 義 和 (本学教授…………… 英 語)  
SHIMIZU Yoshikazu

尾 崎 孝 之 (本学教授…………… フランス語)  
OZAKI Takayuki

Daniel DUNKLEY (本学外国人教師…………… 英 語)

小 村 賢 二 (本学教授…………… 統 計 学)  
KOMURA Kenji

川 口 高 風 (本学教授…………… 宗 教 学)  
KAWAGUCHI Kohū

## 教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 福 山 悟 (副会長) ※山 野 明 男

(会計) 高 田 正 義

※石 川 雅 健 糸 井 川 修 北 村 伊 都 子

※澤 田 真 由 美 ※清 水 義 和 ※菅 さ や か

清 忠 師 ※中 村 綾 安 富 眞 澄

山 口 拓 史

※本号編集委員

## 編 集 後 記

今年度最初の号となる『教養部紀要』第62巻第1・2合併号をお届けいたします。今回は論文6編と資料2編からなる合併号となりました。文学、統計学、英語教育、宗教学と様々な研究領域から原稿が寄せられました。ご投稿いただいた皆様、また本誌刊行にあたりご協力いただいた皆様には心より御礼申し上げます。なお、論文の掲載順は第1号への投稿者が先になっております。

(中村、澤田)

# 愛知学院大学教養教育研究会会則

- 第 1 条 本会は愛知学院大学教養教育研究会と称する。
- 第 2 条 本会の事務所は愛知学院大学教養部に置く。
- 第 3 条 本会は大学設立の趣旨に則り、人文科学・社会科学・自然科学・語学・健康総合科学等の、教養教育に関する諸学の研究成果ならびに教育成果の発表を通じ、学問の水準を維持、向上せしめ教育及び社会一般に寄与することを目的とする。
- 第 4 条 本会の会員は次の通りとする。
- (1) 正 会 員 本大学の教養部専任教員とする。
  - (2) 準 会 員 本大学の在學生とする。
  - (3) 賛助会員 本大学の卒業生及び本会の趣旨に賛同し、会長の承認を得た者とする。
- 第 5 条 本会は第 3 条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 機関誌「愛知学院大学論叢教養部紀要」の刊行
  - (2) 研究会、講演会、討論会等の開催
  - (3) その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業
- 第 6 条 「愛知学院大学論叢教養部紀要」は原則として毎年 4 回発行し、会員に配布する。
- 第 7 条 本会は教養教育研究会委員会を置き、委員は次の者で構成する。
- (1) 会 長 1 名
  - (2) 副 会 長 1 名
  - (3) 委 員 12 名
  - (4) 会 計 1 名
- 2 会長は学長これを委嘱する。
  - 3 委員は正会員の互選により、人文科学・社会科学・自然科学・第 1 外国語・第 2 外国語および健康総合科学の各系列より 2 名あて選出する。委員の任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。
  - 4 副会長及び会計は委員の互選により、会長がこれを委嘱する。
- 第 8 条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
- 2 副会長は会長を補佐し、会務を掌る。
  - 3 委員は委員会を構成し、本会の企画運営にあたる。
- 第 9 条 会長は委員会を招集し、その議長となる。
- 第 10 条 会長は本会の会務執行のため、必要あるときは実行委員会を委嘱することがある。
- 第 11 条 会員は毎年度始めにおいて会費を納入する。
- 2 新入会員は入会金を納付するものとする。
- 第 12 条 本会の運営費は、会員の納付する会費、愛知学院大学からの補助金または有志からの寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 13 条 本会の会計は 4 月に始まり、翌年 3 月に終る。
- 第 14 条 本会の会則の改正は正会員の 3 分の 2 以上の賛成をもって成立する。
- 付 則

本会則は、昭和32年4月1日に制定し、即日施行する。

本会則は、昭和53年2月6日に改正し、即日施行する。

本会則は、昭和57年3月24日に改正し、同年4月1日より施行する。

本会則は、昭和58年6月17日に改正し、即日施行する。  
本会則は、昭和63年4月1日に改正し、即日施行する。  
本会則は、平成2年7月6日に改正し、同年4月1日より施行する。  
本会則は、平成8年7月19日に改正し、即日施行する。  
本会則は、平成11年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。  
本会則は、平成20年12月12日に改正し、翌年4月1日より施行する。  
本会則の施行により愛知学院大学一般教育研究会会則を廃止する。

## 愛知学院大学論叢「教養部紀要」投稿規定

1988年4月1日成立・実施

### 〔投稿資格〕

第 一 条 この会誌に投稿する資格をもつ者は、原則として教養教育研究会正会員とする。

### 〔転載の禁止〕

第 二 条 他の雑誌に掲載された論文・資料・翻訳・書評などは、これを採用しない。

### 〔原稿の形式〕

第 三 条 投稿に際しては、次の要領に従って本文、図および表を作成する。

- (1) 原稿は、原則として原稿用紙または電子媒体による入稿とする。(電子媒体による入稿の場合プリントアウトを一部添付する。)
- (2) 原稿の量はおおむね16,000字以内とする。
- (3) 本文の前に、別紙で、次の3項を次の順序で付する。
  - (i) 和文の題目および執筆者名。
  - (ii) 欧文の題目および執筆者名。
  - (iii) (イ) 論文・資料・翻訳・書評などの区別  
(ロ) その論文・資料・翻訳・書評などが属する専門領域名。  
ただし、ここにいう専門領域は、人文・社会・自然・外国語・健康総合科学の5部門に区別する。
  - (iv) 教授・准教授・講師・助教・外国人教師など別
- (4) 原稿の欧文箇所は、すべて活字体で書くか、またはワープロを用いる。
- (5) 図は、白紙または淡青色の方眼紙に墨書し、縮尺を指定する。これに対する文字は鉛筆で入れる。ただし、表はこれらの限りではない。
- (6) 写真に文字または印を入れるときは、トレーシング・ペーパーを重ねてそれに書き入れる。

### 〔原稿の申込み〕

第 四 条 投稿希望者は、教養教育研究会委員会（以下、委員会と称す）の公示する期限までに、委員会の提示する申し込み用紙に氏名を記入する。

ただし、申し込み者が所定の数に達しないか、またはそれを越える場合には、委員会がこれを調整する。

### 〔提出期限〕

第 五 条 投稿は委員会の定める提出期限までにこれを行う。締切り日以後に提出された原稿は掲載されないことがある。

〔原稿組版の制限〕

第 六 条 図版・カラー写真などの掲載により一般の経費より多くかかる場合は、その必要性を各号の編集責任者に申し出て委員会を開催して審議し、承認を得ることとする。なお、承認を得られず掲載を希望する場合、その費用を別途に個人負担とする。

〔原稿修正の制限〕

第 七 条 投稿後の原稿の修正は、原則としてこれを行わないものとする。やむをえない場合は初校において修正し、その範囲は最小限度にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されるときは追加費用を個人負担とすることがある。

〔校 正〕

第 八 条 校正は原則として第3校までとし、本文については執筆者がこれに当たり、表紙・奥付その他については編集委員がこれに当たる。

〔抜き刷り〕

第 九 条 抜き刷りは、論文・資料・翻訳・書評など各1篇につき50部までを無料とする。これを越える分については実費を執筆者の負担とする。50部以上を要する場合には、執筆者はその必要全部数を原稿の表紙に朱記する。

〔掲載論文等の複製権・公衆送信権〕

第 十 条 この会誌に掲載された論文等の電子化および公開に関わる複製権および公衆送信権は、教養教育研究会に属するものとする。

ただし、掲載された論文などの執筆者が他の機関への転載もしくは複製権または公衆送信権の行使を申し出た場合は、正当な理由がない限り、教養教育研究会はこれを拒むことはできない。

付 則

- 一、本規定の改正には、教養教育研究会正会員の3分の2以上の賛成を要する。
- 二、本規定は、1988年4月1日に成立し、即日施行する。
- 三、本規定は、1996年7月19日に改正し、即日施行する。
- 四、本規定は、1999年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
- 五、本規定は、2003年11月21日に改正し、即日施行する。
- 六、本規定は、2005年4月22日に改正し、即日施行する。
- 七、本規定は、2007年11月16日に改正し、即日施行する。

申し合わせ（教養部会 2010.7.16）

- 第一条の「投稿する資格を持つ者」には、以下の非正会員を含む。
  - (1) 正会員との共同執筆による投稿
  - (2) 正会員が推薦する本学教養部の非常勤講師で、本務校をもたない人の投稿
  - (3) 元正会員で、本務校をもたない人の投稿
- 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、担当編集委員が投稿の可否を決定し、投稿希望者に通知する。担当編集委員で判断できない場合には、教養教育研究会委員会を開いて投稿の可否を決定する。
- 投稿原稿の掲載に際しては、(1)の場合の原稿料は1篇分とし、(2)(3)の場合の原稿料は支払われない。また、(1)(2)(3)いずれの場合も抜き刷り50部までは無料とする。
- 投稿者は、第三条の〔原稿の形式〕を厳守し、第四条の〔原稿の申し込み〕の時に委員会の提示する「投稿票」用紙に必要事項を記入のうえ添付して投稿する。
- 投稿された原稿について担当編集委員から検討の申し出があった場合は教養教育研究会委員会を開き、

委員会名において訂正を依頼したり投稿を断ることがある。

- 第六条「図版・カラー写真の掲載」については、紀要作成予算の範囲内と見なされる場合、その採否は紀要編集委員の決議にゆだねるものとする。ただし、予算の範囲を逸脱する、あるいは採否の決議が困難の場合は教養教育研究会委員会を開催して、決定することとする。

(注) 教養教育研究会が本会正会員の著書・論文等について書評を依頼する場合は、原稿料を支払うこととする。

平成26年11月18日 印刷  
平成26年11月28日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢  
教養部紀要第62巻  
第1・2合併号 (通巻第182号)

編集責任者  
福 山 悟

---

発行者 愛知学院大学  
教養教育研究会  
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12  
電話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社 あるむ  
電話 〈052〉 (332) 0861

# THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

## *Humanities & Sciences*

Vol.62 No.1, 2  
(Whole Number 182)

### CONTENTS

#### Articles

- Toshiyuki HOTTA : Beckett, âme du vagabondage ..... ( 1 )
- Yoshikazu SHIMIZU : Haiku Poet · Syunkichi Baba's Maze  
—Matsuo Basho & Samuel Beckett—  
Short Versification's Mystery of & *Blank* in Shuzo Takiguchi ..... ( 21 )
- Yoshikazu SHIMIZU : Maze of Haruki Murakami & Ikuo Kameyama  
On Avant-Garde in the United States and Russia ..... ( 51 )
- Takayuki OZAKI : Essai de lecture d'« Anti-Platon » ..... ( 75 )
- Daniel DUNKLEY : Thirty Years of Task-Based Language Teaching ..... (101)
- Kenji KOMURA : Global Warming 2014 ..... (111)

#### Materials

- Kōhū KAWAGUCHI : On the Sōtō Sect Journal Article Related to Welcoming Buddha's Remains ..... (194)
- Kōhū KAWAGUCHI : Buddhism in Nagoya as Seen in the *Nounin Simpou* (8) ..... (158)

Published  
by

Aichi Gakuin University  
Nagoya, Japan  
2014